

あなたも聖書を理解できます!

愛弟子の回想と手紙：
ヨハネの福音書
ヨハネの手紙第一・第二・第三

ボブ・アトリー
聖書解釈学教授
(聖書解釈)

学習ガイド注釈シリーズ

新約聖書, Vol.4

マーシャル、バइブルレススンズインターナショナル、テキサス州
2011年

目次

著者からの言葉:この注解書はどのようにあなたの役に立つことができるか?	i
聖書を有意義に読むための手引き: 立証可能な真実への個人的探求	iv
注解:	
ヨハネの福音書への導入	1
ヨハネの福音書1章	30
ヨハネの福音書2章	54
ヨハネの福音書3章	72
ヨハネの福音書4章	114
ヨハネの福音書5章	136
ヨハネの福音書6章	154
ヨハネの福音書7章	187
ヨハネの福音書8章	202
ヨハネの福音書9章	219
ヨハネの福音書10章	229
ヨハネの福音書11章	241
ヨハネの福音書12章	257
ヨハネの福音書13章	274
ヨハネの福音書14章	288
ヨハネの福音書15章	311
ヨハネの福音書16章	323
ヨハネの福音書17章	336
ヨハネの福音書18章	350
ヨハネの福音書19章	365
ヨハネの福音書20章	380
ヨハネの福音書21章	392
ヨハネの手紙第一の導入	400
ヨハネの手紙第一1: 1-2: 2	406
ヨハネの手紙第一2: 3-27	418
ヨハネの手紙第一2: 28-3: 24	439
ヨハネの手紙第一4章	464
ヨハネの手紙第一5章	475
ヨハネの手紙第二	494
ヨハネの手紙第三	503
補遺1:ギリシャ語の文法構造の簡単な定義	513

補遺2:原典批評	524
補遺3:用語集	528
補遺4:学説についてのコメント	538

ヨハネの著書 特別なトピックの目次

始まり (<i>Arche</i>)、ヨハネ1: 1	34
主の天使、ヨハネ1: 5	36
信仰・信条・信頼、ヨハネ1: 7	38
イエスの証人、ヨハネ1: 8	40
知る、ヨハネ1: 10	42
肉体 (<i>sarx</i>)、ヨハネ1: 14	44
栄光 (<i>doxa</i>)、ヨハネ1: 14	45
神の慈愛 (<i>hesed</i>)、ヨハネ1: 14	46
旧約聖書における信条、信頼、信仰、そして忠実さ、ヨハネ1: 14	47
モーセの律法についてのパウロの見解、ヨハネ1: 17	52
パリサイ人、ヨハネ1: 24	58
使徒の名前の表、ヨハネ1: 45	65
ナザレ人イエス、ヨハネ1: 45	66
アーメン、ヨハネ1: 51	68
天国、ヨハネ1: 51	69
ワインと強い飲み物、ヨハネ2: 3	74
古代近東地域における重さと容積、ヨハネ2: 7	78
過越の祭、ヨハネ2: 13	82
ヨハネの「信条」の使用、ヨハネ2: 23	86
サンヘドリン、ヨハネ3:1	90
神の御国、ヨハネ3: 3	94
息、風、霊、ヨハネ3: 8	96
神を言い表すのに用いられている擬人化言語、ヨハネ3: 16	99
予め定められた事柄(カルバン主義)対自由意志(アルミニウス説)、ヨハネ 3:16	101
しるし、ヨハネ3: 33	111
人種主義、ヨハネ4: 4	116
旧約聖書の預言、ヨハネ4: 19	122
新約聖書の預言、ヨハネ4: 19	126
父なる神、ヨハネ4: 23	129
メシア、ヨハネ4: 25	130
神の御心、ヨハネ4: 34	132
癒し、ヨハネ5: 14	140
赦されざる罪、ヨハネ5: 21	144

送る (<i>Apostello</i>)、ヨハネ5: 24	145
時、ヨハネ5: 25	146
初期教会の <i>kerygma</i> 、ヨハネ5: 39	150
パレスチナでイエスの日に用いられる硬貨、ヨハネ6: 7	157
12という数、ヨハネ6: 13	159
神の御名、ヨハネ6: 20	161
クリスチャンの安心、ヨハネ6: 37	168
真理、ヨハネ6: 55	175
永遠 (<i>olam</i>)、ヨハネ6: 58	176
昇天、ヨハネ6: 62	179
霊(新約聖書では <i>Pneuma</i>)、ヨハネ6: 63	180
背教、ヨハネ6: 64	182
大胆さ (<i>Parrhesia</i>)、ヨハネ7: 4	189
悪魔、ヨハネ7: 20	193
忍耐の必要、ヨハネ8: 31	210
グノーシス主義、ヨハネ8: 40	214
救いを意味するギリシャ語動詞の時制、ヨハネ9: 7	221
告白、ヨハネ9: 22-23	224
破壊 (<i>Apollumi</i>)、ヨハネ10: 10	232
聖書における聖別、ヨハネ11: 2	243
嘆きの儀式、ヨハネ11: 20	246
聖書の女性たち、ヨハネ11: 28	248
埋葬の実際、ヨハネ11: 44	252
悪人、ヨハネ12: 31	266
天国での戦い、ヨハネ12: 31	268
心、ヨハネ12: 40	271
ヨハネの著書における「戒律」の使用、ヨハネ12: 50	273
紀元1世紀のユダヤ教における過越祭の礼拝の様式、ヨハネ13: 2	277
イスカリオテ、ヨハネ13: 26	283
死人はどこですか、ヨハネ14: 3	291
効果的な祈り、ヨハネ14: 13-14	298
主の御名、ヨハネ14: 13-14	299
イエスと聖霊、ヨハネ14: 16	300
<i>Kosmo</i> (世界)、ヨハネ14: 17	301
その日、ヨハネ14: 20	303
三位一体、ヨハネ14: 26	305

聖霊の御人格、ヨハネ14: 26	307
平和、ヨハネ14: 27	308
火、ヨハネ15: 6	315
輝き、ヨハネ16: 13	328
選び、ヨハネ17: 2	338
一神教、ヨハネ17: 3	339
ヨハネの著書における「真実」、ヨハネ17: 3	341
聖なる、ヨハネ17: 11	344
神学的バランスのための選びおよび予め定められた事柄と必要、ヨハネ18: 2	352
ナザレ人イエス、ヨハネ18: 5	354
近衛兵、ヨハネ18: 28	360
ポンテオ・ピラト、ヨハネ18: 29	360
イエスに従った女性たち、ヨハネ19: 25	373
埋葬用香料、ヨハネ19: 39	378
イエスが復活された後に姿を現わされたこと、ヨハネ20: 16	384
作る(<i>Tupos</i>)、ヨハネ20: 25	388
ヨハネの手紙第一の1章に例えられるヨハネの福音書1章、Iヨハネ1: 1	409
Koinonia、Iヨハネ1: 3	411
キリスト教は共同体、Iヨハネ1: 3	411
ヨハネの著書における「つながり」、Iヨハネ2: 10	424
知る、Iヨハネ2: 13	427
人間の政府、Iヨハネ2: 15	429
この世と来るべき世、Iヨハネ2: 17	432
聖なる方、Iヨハネ2: 20	434
キリストの再来の意味で用いられる用語、Iヨハネ2: 28	441
義、Iヨハネ2: 29	443
新約聖書における人の救いの証拠、Iヨハネ3: 1	447
聖化、Iヨハネ3: 5	451
神の子、Iヨハネ3: 8	453
祈り、限定はないが制限されている、Iヨハネ3: 22	459
クリスチャンは互いに裁きあうべきか、Iヨハネ4: 1	466
「試練」を意味するギリシャ語の用語とその意味、Iヨハネ4: 1	466
福音伝道に対するボブの偏見、Iヨハネ4: 15	472
安心、Iヨハネ5: 13	481
とりなしの祈り、Iヨハネ5: 14	483
死に至る罪とは何か、Iヨハネ5: 16	488

長老、Ⅱヨハネ1節

496

教会 (*Ekklesia*) Ⅲヨハネ6節

507

著者からの言葉: この注解書はどのようにあなたの役に立つことができるのか?

聖書的解釈は、神からのメッセージを理解してそれを私達の時代に適用することで、古代の、神の啓示を受けた(聖書の各書の)著者(の主張)を理解しようとする、合理的で霊的な過程である。

この霊的な過程は不可欠であるが、定義が難しい。それには神への(自分自身の)明け渡しと開放が含まれる。そこには(1)神への(2)神を知ることへの(3)神に仕えることへの飢え渇きがあるに違いない。この過程には祈り、告白、そして生活様式を変えることへの意欲が含まれる。聖霊は解釈の過程に不可欠であるが、誠実に神に従うクリスチャン達の間でなぜ聖書の理解が異なるのかは謎である。

合理的過程は(霊的な過程に比べて)説明がより容易である。私達は原典に忠実で公平でなければならず、個人的なあるいは特定の教派への偏見に影響されてはいけない。私達は皆歴史的に条件づけられている。誰も客観的な、つまり中立的な解釈をしない。この注解書は、私達の偏見を克服する手助けとなるように構成された3つの解釈上の原則を含む、深い合理的過程を紹介している。

第一の原則

第一の原則は、その聖書の書の書かれた時代背景と著者の執筆の特別な歴史的動機に着目することである。原著者にはある目的と伝えるべきメッセージがあった。原典は私達に、古代の、神の啓示を受けた原著者が決して意図しなかったことを伝えることができない。彼(原著者)の意図—私達の歴史的、感情的、文化的、個人的、あるいは特定の教派への要求ではない—が大切である。適用は解釈の不可欠なパートナーであるが、正しい解釈は常に適用に先行してはいけない。各聖書原典は一つの、つまり唯一の意味をもつことは繰り返し強調されなければならない。この意味とは、聖書の原著者が聖霊のお導きを通して自分の生きた時代の人々に伝えたかったことである。この一つの意味は様々な文化や状況に広く適用することができる。これらの適用は原著者の真の意図とつながるに違いない。この理由から、この「学習の手引き」的な注解書は聖書の各書をを紹介することを目的として編集されている。

第二の原則

第二の原則は(聖書の各)書単位を区別することである。聖書の各書は単独の文書である。解釈する者には、一つの真実を他を排除することによって分離する権利はない。従って私達は(聖書の)個々の書単位を解釈する前に聖書の全ての書の(書かれた)目的を理解する努力をしなければならない。(聖書の各書単位の)個々の部分—章、段落、あるいは節—は全ての書単位の意味していないことを意味することはできない。解釈は全ての書単位から演繹的に行なわれるので

はなく、各書単位の個々の部分から帰納的に行なわれなければならない。従って、この「学習の手引き」的な注解書は学習者が段落によって各書単位の構造を理解するのを助けることを目的として編集されている。章と段落とを分け(て考え)ることは神の啓示によってすることではないが、私達が(聖書の[各書の]著者の)考えのまとまりを区別するのを助けてくれる。

段落レベル—文、節、句、あるいは単語のレベルではない—での解釈は聖書の[各書の]著者の意図する意味を理解するのに不可欠である。段落は単独のトピック、つまりテーマ(主題)あるいはトピックセンテンスとしばしば呼ばれる話題に基づく。段落中の各単語、句、節、そして文はこの単独のテーマといくらかは関連がある。それらはテーマ思想を限定し、拡張し、説明し、またはテーマに対して疑問を投げかける。正しい翻訳のために真に不可欠なことは、聖書の各書を構成する個々の書単位を通して段落ごとに原著者の考えを理解することである。この「学習の手引き」的な注解書は学習者が現代英語翻訳との比較によってそれを行うのを助けることを目的として編集されている。これらの(現代英語)翻訳は様々な翻訳シリーズの中から選ばれてきている:

1. 合衆国聖書協会のギリシャ語原典は改訂第4版(UBS⁴)である。この原典は現代の原典研究者達によって(現代英語に)書き換えられている。
2. The New King James Version(NKJV)は、テクトゥス・レセプトゥスとして知られるギリシャ語原典の伝統に基づく逐語訳である。その段落分割は他の翻訳より長い。これらのより長い文単位は学習者が単独のトピックを理解するのを助ける。
3. The New Revised Standard Version(NRSV)は修正逐語訳である。これは下記の2つの現代版(聖書)の中間的な翻訳形態である。その段落分割は個々の主題の区別に極めて有用である。
4. The Today's English Version(TEV)は合衆国聖書協会により出版された dynamic equivalent 訳である。これは、現代英語を読み、あるいは話す人々がギリシャ語原典を理解できるような聖書の翻訳を試みている。しばしば、特に福音の中で、NIVと同様に、主題によるよりはむしろ(聖書の)話し手(語り手)によって段落を分割している。解釈する者の目的からいうと、これは役に立たない。UBS⁴も TEV も同じ団体から出版されているのに段落分割の様式が異なるのは興味深い。
5. The Jerusalem Bible(JB)はフランスカトリック翻訳に基づく dynamic equivalent 訳である。これはヨーロッパ諸国の言語による訳と段落分割の様式を比較するのに非常に有用である。
6. この注解書の編集のために用いた聖書の現代英語訳は 1995 年更新の New American Standard Bible(NASB)である。逐語訳で、聖句を順番に解説している点はこの段落分割の様式に従っている。

第三の原則

第三の原則は、聖書のみことば、つまり聖句が持ちうる可能な最大範囲の意味(セム語領域)

を把握するために様々な訳の聖書を読むことである。しばしばギリシャ語の句や言葉は何通りにも理解されうる。これらの様々な訳によって聖書のみことばや聖句は何通りにも理解され、複数あるギリシャ語原典の区別や説明を助けている。これらは(翻訳の)原則には影響しないが、神の啓示を受けた古代の(聖書の)書き手によって書かれた原典に私達が戻ろうとするのを確実に助けてくれる。

この注解書は学習者に自分の(聖書の)解釈を確認する近道を示す。それは権威的ではなく、むしろ知識を提供して考えることを喚起するようになされる。しばしば、他の可能な解釈は私達が偏狭に、独断的に、そして特定の教派に偏重になりすぎないように助ける。解釈する者は、古代の原典がいかにあいまいかを認識するために、より広い解釈の視野を持つことが必要である。聖書を真実の源であると主張しているクリスチャンの間で(意見の)一致がほとんどみられないのは衝撃的なことである。

これらの原則は私が、自分を強いて古代の原典に格闘させることによって、自分の歴史的生いたちの多くを克服するのを助けてくれている。この注解書があなたを十分に祝福してくれるだろうことを私は希望する。

ボブ・アトリー
東テキサスバプテスト大学
1996年6月27日

聖書を有意義に読むための手引き: 立証可能な真実への個人的探求

私達は真実を知ることができるだろうか？それはどこで見つかるだろうか？私達はそれを論理的に立証できるだろうか？最高の権威はあるのだろうか？私達の人生と私達の生きる世界とを導くことのできる絶対的存在はあるのだろうか？人生に意味はあるのだろうか？私達はなぜここにいるのだろうか？私達はどこに向かっているのだろうか？これらの疑問—全ての理性ある人々が熟考する疑問—は有史以来人間の知性につきまどってきた(伝道者の書 1: 13-18, 3: 9-11)。私は私の人生を支配する中心となるものについて個人的に探究したことを覚えている。主に家族の大多数の証言によれば、私は幼少期にキリストを信じた。大人になるにつれて、私自身と私の生きる世界についての疑問も又深まっていった。単なる文化的・宗教的なありきたりの知識は、本で読んで知ったり実際に体験した出来事に意味を与えなかった。それは混乱、探究、渴望の時であり、また私の生きた非情で厳しい世界に対面したときの絶望感であった。

これらの究極の疑問に対する答えは多くの人々によりなされているが、研究と熟考の後に私は彼らの答えが(1)自分の哲学[個人的信条]、(2)古代の神話、(3)個人的体験、あるいは(4)心理学的投射に基づくことに気付いた。私には、私の世界観、私の人生を支配する中心となるもの、私の生きる理由を確立するために、ある程度の立証、証拠、理性的信念が必要だった。

私はこれらを自らの聖書研究のなかに見出した。私はその信憑性を裏付ける証拠を探し始め、そしてそれが(1)考古学によって確定された、聖書の歴史的信頼性、(2)旧約聖書の預言の信頼性、(3)1600年間にわたってなされた聖書のメッセージの統一性、そして(4)聖書との出会いによって自らの人生が恒久的に変化した人々の個人的証しのなかにあると気付いた。キリスト教は信仰と信条とが一体化した(宗教)体系であり、人間の人生の複雑な疑問を取り扱うことができる。これが与える論理的枠組みだけでなく聖書的信仰の経験的側面も私に喜びの感情と感情の安定をもたらした。

私は、聖句を通して理解した通りに、私の人生を支配する中心はキリストであると自分は気付いていると考えた。それはわくわくする経験であり、感情の解放だった。しかしながら私は、時々同じ教派の複数の教会や(神)学校の間でさえ、この本(注解書)にどれほど多くの異なる解釈がなされ(激しく議論がなされる)かを考え始めたときの衝撃と痛みをまだ覚えている。聖書の啓示と信憑性とを主張することは終りではなく、始まりにすぎない。聖句の中の多くの難解な文章の、それらを絶対視し信憑性を主張する人々によってなされた、様々で互いに対立する解釈を私はどのように立証しあるいは却下すればよいだろうか？(福音主義キリスト教は聖書の信憑性を主張するが、それが持つ意味には同意できない！)

この仕事は私の人生の最終目的となり、また信仰深い巡礼となった。私は、私のキリストへの信仰が私に大きな平安と喜びとをもたらしていることをわかっていた。私の心は、自分の(生きてきた)文化と互いに対立する宗教体系の教条(教義)主義と特定の教派への偏重による傲慢さとの相互関係の中心にある絶対的なものを渴望していた。古代の文献の正しい解釈を目的とする自ら

の研究の中で私は自分自身の歴史的、文化的、特定の教派への偏重による、そして経験に基づく偏見に気付いて驚いた。私はしばしば、自分自身の見識を広めるためだけのために聖書を読んでいたのだ。私は自分自身の(主張の)不安定さや不十分さを克服するなかで、他者に反論するための教義の(情報)源として聖書を利用していったのだ。このことに気付いてどんなに心を痛めたことか！

私は決して完全に客観的にはなれないが、聖書をより有意義に読むことはできる。私は自分の持つ偏見を明らかにして認めることによってなくしていくことができる。私はまだそれらを持ち続けているが、私自身の弱さと向き合い続けている。解釈する人はしばしば聖書をより有意義に読むことにおいて最悪の敵なのだ！

私が聖書研究において提唱している前提を、読者の皆さんと一緒に検証するためにいくつか挙げよう。

I. 前提

- A. 私は聖書が唯一の真の神の唯一の自己啓示であると信じる。従って聖書は、特定の歴史背景の中にいる書き手を通して、元々の書き手でいらっしゃる神の御意志が現れるように翻訳されなければならない。
- B. 私は聖書が一般の人—全ての人々—のために書かれたと信じる！神は御自身を、(私達の持つ)歴史的・文化的背景の範囲内ではっきりと私達に語りかける(ことができる)ように適応させられた。神は真実を隠されない—私達に理解を求めておられるのだ！従って聖書は、私達の今生きている時代の背景ではなく、その書かれた時代の背景を考慮して翻訳されなければならない。聖書は、最初にそれを読み聞きした人々が決して私達に伝えていないことを私達に伝えることができない。聖書は一般の人の心によって理解可能であり、人間の通常のコミュニケーションの形式と技術を利用している。
- C. 私は聖書が首尾一貫したメッセージと目的を持っていると信じる。聖書には難解な、あるいは逆説的な文章はみられないが、それ自体は矛盾していない。従って、聖書を最もよく解釈するのは聖書自体なのだ。
- D. 私は聖書の各文章(預言を含む)が、神の啓示を受けた原著者の意志に基づく一つの、そして唯一の意味を持っていると信じる。私達は決して原著者の意志をわかっているという絶対的な確信を持つことはできないが、それを示す多くの事柄を例示することはできる:
 1. 聖書のメッセージを表現するために選ばれたジャンル(文学様式)
 2. 聖書の記述から明らかとなった、聖書の書かれた時代の背景または特別の事情
 3. 各文章単位および聖書全体の文脈
 4. メッセージ全体に関係する、文章単位の文体デザイン(概要)
 5. メッセージ(の意味)を伝えるために用いられている特別な文法的特徴
 6. メッセージを表現するために選ばれた言葉

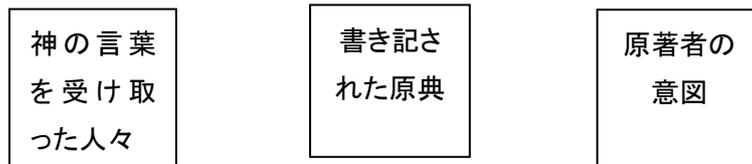
7. 並列段落

これらの分野の各々の研究が私達の文章研究の目的となっている。有意義な聖書の読み方についての方法論を説明する前に、かなり多くの解釈の逸脱の原因となっていて、その結果避けるべきだといえる、今日用いられているいくつかの不適切な方法について述べよう。

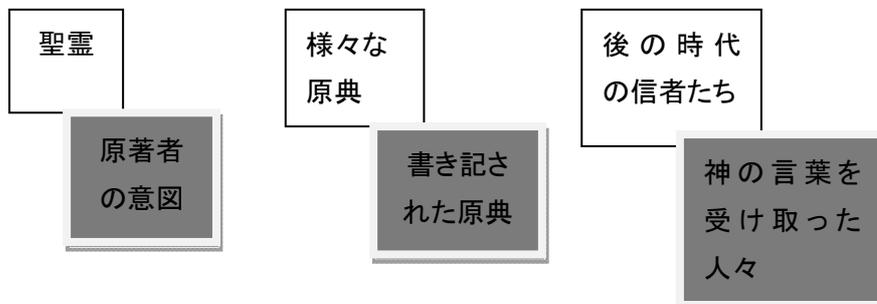
II. 不適切な方法

- A. 聖書の各書の文脈を無視して、各文、節、あるいは語でさえも、真実ではない、原著者の意志とは無関係な内容の文あるいはより長い文を書くために用いること。これはしばしば「文脈偽装」と呼ばれる。
- B. 聖書の各書の歴史的背景を、原典からの裏付けがほとんどまたは全くない、推定上の歴史的背景に置き換えて無視すること。
- C. 聖書の各書の歴史的背景を無視して、主に現代のクリスチャン達の手記(読者の)地元の新聞の朝刊を読むときと同じように聖書を読むこと。
- D. 神の言葉を最初に聞いた人々および原著者の意志とは全く無関係な哲学的あるいは神学的メッセージとして原典を寓話(寓意)[訳者注: たとえ話]的に解釈して、聖書の各書の歴史的背景を無視すること。
- E. 原典のメッセージを、原著者の目的と語られたメッセージとは無関係な、(読者)自身の神学体系、大切にしている教義、あるいは現世的な内容のものに置き換えて無視すること。この現象はしばしば、話し手が自身の権威を示す目的で、聖書を読み始めた後に起こる。これはしばしば「読者応答」(「文脈が私に示す意味」)的解釈と呼ばれる。

人間の書いた文章には少なくとも3つの関連する構成要素がある:



過去には、様々な読解技術が3つの構成要素の1つに集中していた。しかし、聖書特有の啓示を真に言い表すためには、(上記の)図を修正するほうがより適切だろう。



事実(これらの)3つの構成要素は解釈のプロセスに含まれなければならない。立証の目的のために、私の解釈においてははじめの2つの構成要素、つまり原著者の意図と原典に注目する。私はおそらく(今後もずっと)今までに見てきた悪習、つまり(1)原典を寓話(寓意)的あるいは精神的な意味に解釈すること、そして(2)「読者応答」(「文脈が私に示す意味」)的解釈、に反応していただく。悪習は(解釈の)各段階で起こる可能性がある。私達は自身の動機、偏見、技術、そして適用についていつも確認していかなければならない。しかし、もし解釈に範囲や制限や基準がないなら、私達はどのようにそれらを確認すればよいだろうか？ここに、可能な正しい解釈の範囲を制限するいくつかの基準を私に与えてくれる、原著者の意図と原典の文構造がある。

これらの不適切な読解技術に注目した上で、どのようにすれば、ある程度(そうする)根拠があり一貫性を持った、聖書の有意義な読み方と正しい解釈の仕方ができるだろうか？

Ⅲ. 聖書を有意義に読むことのできる方法

この点に関して、私は特定のジャンル(文章の種類)を解釈する独特の技術ではなく、聖書の原典の全てのタイプに対して有効な、一般的な聖書解釈の原則について述べたいと思う。ジャンルに特化した(聖書の)読み方を解説した本としては、Zondervan から出版された、Gordon Fee と Douglas Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* が良い。

私の方法論は主に、4つの個人的な読書のサイクルを通して聖霊に聖書を啓蒙化していただいている読者を対象としている。この方法論では聖霊、聖書の原典、そして読者が第一に重要であり、これらは二回にはされない。また、この方法論は読者が過度に注釈者に影響されるのを防いでいる。私はこのように言われているのをよく聞いている:「聖書は注釈書に多くの光を投げかける。」この言葉は学習参考書(訳者注:ここでは注釈書)をけなすつもりで言われるコメントではなく、むしろそれら(注釈書)を適切なタイミングで用いてほしいという切実な願いをこめたコメントである。

私達は自分達の行う原典自体の解釈について裏付けができなければならない。6つの分野が最低限度それ(原典自体の解釈)を立証している:

1. 原著者の
 - a. 歴史的背景
 - b. 文脈
2. 原著者の選択する
 - a. 文法的構造(統語法)
 - b. 現代語(で)の用法
 - c. ジャンル
3. 適切な
 - a. 関連の並列する文章

b. 原則どうしの関係(逆説)

私達は自分達の行う解釈について理由と論理とを述べ、そして説明できる必要がある。聖書は私達にとって信仰と実践の唯一の源である。悲しいことに、クリスチャンはしばしば、聖書の教えあるいは主張に同意しない。

4つの読書のサイクルは以下に示す解釈上の洞察(見識)を与えることを意図している:

A. 第1の読書サイクル

1. その(聖書の)書をまず一通り読みなさい。そしてその書を他の訳、できれば他の翻訳理論に基づいた訳による本で再び読みなさい。
 - a. 逐語訳(NKJV、NASB、NRSV)
 - b. dynamic equivalent(TEV、NJB)
 - c. 言い換え(リビングバイブル、拡大版聖書)
2. その書全体の(書かれた)主な目的を探求しなさい。その書のテーマを明らかにしなさい。
3. (可能であれば)その書全体の主な目的つまりテーマをはっきりと表現している文章単位、章、段落、あるいは文を抜粋しなさい。
4. その書の主な文学上のジャンル(類型)を明らかにしなさい。
 - a. 旧約聖書
 - (1)ヘブル語の物語
 - (2)ヘブル語の詩(知恵の文学、詩篇)
 - (3)ヘブル語の預言(散文、詩)
 - (4)法典
 - b. 新約聖書
 - (1)物語(福音書、使徒行伝)
 - (2)寓話[たとえ話](福音書)
 - (3)書簡
 - (4)黙示文学

B. 第2の読書のサイクル

1. その書全体を再び読み、主なトピックつまり主題を明らかにしなさい。
2. 主なトピックを要約し、その内容を簡単に短く述べなさい。
3. その書全体の(書かれた)主な目的についての(あなたの)コメントと大体の要約を学習参考書を用いて確認しなさい。

C. 第3の読書のサイクル

1. その書全体を再び読み、その聖書の書自体から歴史的背景と書かれた特殊な状況を明らかにしなさい。

2. その聖書の書に言及されている歴史的な事柄を列記しなさい。
 - a. 著者
 - b. 日付
 - c. 神の言葉を受け取る人々
 - d. その聖書の書が書かれた特別な理由
 - e. 聖書のその書が書かれた目的に関連する文化的背景
 - f. 歴史上の人々と出来事についての参考文献
3. あなたが解釈しようとしている聖書のその書の部分の(内容の理解の)ために、歴史的背景と書かれた特殊な状況についてあなたが要約したもの[(a)で行った]を段落レベルまで拡大させなさい。文章単位を常に明らかにし要約しなさい。これはいくつかの章あるいは段落の形にしなさい。これはあなたが原著者の論理と文章デザインに従うことを可能にする。
4. 要約した歴史的背景を学習参考書を用いて確認しなさい。

D. 第4の読書のサイクル

1. その特別な文章単位の箇所をいくつかの訳で再び読みなさい。
 - a. 逐語訳(NKJV、NASB、NRSV)
 - b. dynamic equivalent(TEV、NJB)
 - c. 言い換え(リビングバイブル、拡大版聖書)
2. 文あるいは文法の構造を探しなさい。
 - a. エペソ 1: 6,12,13 の反復聖句
 - b. ローマ 8: 31 の反復される文法構造
 - c. 互いに対照的な概念たち
3. 以下に示す事柄を列記しなさい。
 - a. 重要な用語
 - b. 見慣れない用語
 - c. 重要な文法構造
 - d. 特に難しい単語、節、そして文
4. 関連のある並列文を探しなさい。
 - a. 以下に示す文献を用いて、最も明確に(聖書のその書の)主題を表している文を探しなさい。
 - (1)「体系的神学」の本
 - (2)参照聖書
 - (3)コンコーダンス
 - b. 主題の中で、ありえる逆説的な対を探しなさい。聖書的真実の多くは論理的な対に表れている。というのは、教派間の衝突の多くが聖書的な(訳者注: 聖書の解釈者間

の)緊張に伴う原典の原文偽装に由来するからだ。聖書の全ての書は神の啓示によって書かれたものなので、私達は解釈において霊的なバランスを保つために神からの完全なメッセージを聖書の中に探し出さなければならない。

c. 同じ書、同じ著者、あるいは同じジャンルの中に並列文を探しなさい。聖書はそれ自身の最良の解釈者である。なぜなら、聖書は一人の著者、つまり聖霊によって書かれているからである。

5. 歴史的背景と聖書のその書が書かれた特殊な状況を学習参考書(以下に示すもの)を用いて確認しなさい。

a. スタディバイブル

b. 聖書百科事典、聖書ハンドブック、聖書辞典

c. 聖書入門書

d. 聖書注解書(この点においてあなたの学習では、過去あるいは現在のあなたの所属する信仰共同体[行っている教会やクリスチャンの仲間・友人のグループなど]に手助けや指導を頼みなさい)

IV. 聖書解釈の応用

この点について、(今までの聖書学習の)応用に話題を移す。今までは聖書原典をその書かれた状況に応じて理解することに時間をかけてきたので、次にそれを生活そして文化に応用していかなければならない。私は(この聖書学習の)聖書的意義を「聖書の原著者が自分の生きた時代の人々に語ったことを理解してその真実を私達の生きる時代に応用すること」と定義する。

応用は原著者の意図の時間的・論理的解釈の後に行なわれなければならない。私達は、聖書のみことばがその書かれた時代の人々に語ったことが何かを知るまでは、それを自分達の生きる時代に応用することはできないのだ！聖書のみことばは、それが決して意味していない意味を持ってはいないのだ！

(第3の読書のサイクルにおいて)あなたがまとめた詳しい要約はあなたのガイドとなってくれるだろう。応用は単語レベルではなく段落レベルで行なわれるべきである。単語は文脈中でのみ意味を持ち、節は文脈中でのみ意味を持ち、文は文脈中でのみ意味を持つ。解釈のプロセスに関わっている、神の啓示を受けた人だけが原著者なのだ。私達はただ、聖霊の啓蒙によって彼の導きに従っているだけである。しかし啓蒙は啓示ではない。「…と主が言われた」と言うためには、私達は原著者の意図を忠実に守らなければならない。応用は、聖書全体の書かれた意図、特定の文章単位、そして段落レベルの(原著者の)考えの発展に特に関係するものでなければならない。

私達の生きる時代の問題を聖書に解釈させてはいけない：聖書に語らせるのだ！このことで私達は原典から原則を導きだすことを求められるだろう。もし原典が原則を裏付けているならこれは正しいことである。(だが)不幸にも多くの場合、その原則は原典の(はっきり述べている)原則ではなく、「私達の(正しいと思っている)」原則なのだ。

聖書を応用するときには、(預言の中の言葉は別として)一つの、そして唯一の意味が特定の聖書原典について有効であることを覚えておくことが大切である。その意味は原著者が自分の生きた時代の人々に危機感あるいは必要を感じて語った意図と関連がある。この一つの意味から多方面への応用が可能である。それらの応用は神の言葉を受け取る人々の必要に基づくものであろうが、しかしそれは原著者の(聖書のみことばを解釈して確信した)意味と関連がなければならない。

V. 解釈の霊的側面

今まで私は解釈と応用に関わる論理的プロセスについて述べてきた。ここでは私は解釈の霊的側面について簡単に述べることにする。以下に示すチェックリストはとて私の役に立っている:

- A. 聖霊の助けを求めて祈りなさい(I コリント 1: 26-2: 16 を参照)。
- B. (自分にも他者にも)分かっている罪からの個人的赦しと清めを求めて祈りなさい(I ヨハネ 1: 9 を参照)
- C. 神を知りたいという、より大きな願いのために祈りなさい(詩篇 19: 7-14、42: 1 以下、119: 1 以下を参照)
- D. どんな新しい見識もすぐあなた自身の生活に応用しなさい。
- E. 謙虚で教えられやすい者でありなさい。

論理的プロセスと聖霊の導きとの間でバランスを保つことはとても難しい。以下に示す引用文は私が両者のバランスを保つのを助けてくれている:

- A. James W. Sire 著 *Scripture Twisting* の 17-18 ページより:

「啓蒙は霊的に選ばれた者の心にだけでなく、神の人々の心にも来る。聖書的キリスト教にはカリスマ的指導者(権威者)階級も、啓蒙家も、(聖書のみことばを)全て正しく解釈できる人々もない。だから、聖霊は特別な知恵の賜物と知識と霊的識別力を下さる一方で、これらの賜物を持つクリスチャンに御自分のお言葉を単に権威的に解釈させようとはなさらない。権威あるものとして存在する聖書を参照するだけではなく、神が特別な能力を与えられた人々にも意見を聞くことによって学び、判断し、そして見分ける(認識あるいは識別する)ことは神の人々一人一人の責任である。要約すると、私が聖書全体について行っている仮定は、聖書は全ての人に対する神の真の啓示であり、その語る全ての事柄は私達にとって最高の権威あることであり、全体的に見て謎はなく、あらゆる文化圏の一般の人々に十分に理解されるべきものである、ということである。」

- B. Bernard Ramm 著 *Protestant Biblical Interpretation* の 75 ページにあるキルケゴールについての記述:

キルケゴールによれば、聖書の文法的、辞書的、歴史的研究は聖書を正しく(有意義に)読むための準備として必要であった。「聖書を神の言葉として読むためには、心で、口に出して、わくわくして、(神への)熱烈な期待をもって、そして神と会話しながら読まなければなら

らない。ぼんやりして、注意を払わず、学者や専門家と同じように聖書を読むことは、聖書を神の言葉として読むことにはならない。ラブレターを読むのと同じように聖書を読めば、それが聖書を神の言葉として読むことになるのである。」

C. H. H. Rowley 著 *The Relevance of the Bible* の 19 ページより:

「完全にではなく、ただ単に知的に理解するだけでは、聖書の持つ価値の全てを自分のものとすることはできない。聖書はそのように理解されることをひどく嫌っている。なぜならそれ(単に知的に理解[するような読み方を]しないこと)が完全な理解に不可欠だからである。そうではなく、完全に理解[するような読み方を]したいのなら、霊的価値を霊的に理解できるような読み方をしなければならない。だから、霊的な理解のためには知的な注意深さ以上の何かが必要である。霊的なことは霊的に見分けられ(認識あるいは識別され)るので、聖書を学習する者には、もし科学的研究を超えて神からのより豊かな恵みを聖書の全ての書から最大限受け取ることを目的とした研究がしたいなら、霊を受け入れようとする態度と、自分が従うべき神を見出そうとする熱意が求められる。」

VI. この注解書の方法

The Study Guide Commentary はあなたの解釈手順を以下に示す方法で助けることができるように編集されている:

- A. 聖書の各書に(それが書かれた)歴史的背景の短い要約を導入する。「第3の読書サイクル」を終えたらこの情報(要約)を確認しなさい。
- B. 各章の冒頭に文脈に関する洞察(見識)を述べる。これは、文章単位がどのように構成されているかをあなたが理解するのを助けてくれるだろう。
- C. いくつかの現代訳聖書を用いて、各章の冒頭あるいは主な文章単位に段落分けをし、見出し(短い説明文)をつける:
 1. 米国聖書協会ギリシャ語原典第4改訂版(UBS⁴)
 2. 1995年改訂 The New American Standard Bible (NASB)
 3. The New King James Version (NKJV)
 4. The New Revised Standard Version (NRSV)
 5. Today's English Version (TEV)
 6. The New Jerusalem Bible (NJB)

段落分けは神の啓示により行うことではない。それは文脈から確認されなければならない。他の翻訳理論や神学的観点に基づく聖書といくつかの現代訳聖書を比較することによって私達は原著者の考えの構成の仕方の予想される形を分析することができる。各段落は一つの大きな真実を含んでいる。これは「トピックセンテンス」あるいは「原典の中心的概念」と呼ばれてきた。この独特の考えは正しい歴史的かつ文法的解釈の鍵である。一つの段落の範囲内で解釈したり、その内容を説教したり教えたりすることは決して

すべきでない！また、各段落はその周囲の段落と関連があるということを覚えておきなさい。このような理由で、(聖書の)書全体の段落レベルでの要約はとても重要なのである。私達は、神の啓示を受けた原著者により語られている主題の論理の流れに従うことができなければならない。

- D. 注解の記述の内容は聖句を順に解釈する方式に従っている。これは私達を原著者の考えに従わせている。注解の記述の内容はいくつかの分野から情報を与えている:
1. 文脈
 2. 歴史的、文化的見識
 3. 文法についての情報
 4. 単語についての研究成果
 5. 関連する並列文
- E. この注解書のトピックのいくつかにおいては、引用される The New American Standard Bible(1995 年改訂)の原文がいくつかの他の現代訳聖書によって補足されるだろう:
1. The New King James Version (NKJV): 「テキストウス・レセプトウス」の原典に従っている。
 2. The New Revised Standard Version (NRSV): The National Council of Churches of the Revised Standard Version 編の逐語訳改訂聖書である。
 3. Today's English Version (TEV): アメリカ合衆国聖書協会編の dynamic equivalent 訳聖書である。
 4. The New Jerusalem Bible (NJB): フランスカトリックの dynamic equivalent 訳に基づく英訳聖書である。
- F. ギリシャ語が読めない人々のために、いくつかの英訳聖書を比較すると原典中の問題を明らかにするのを助けることができる:
1. 数タイプある原典
 2. 単語の別の意味
 3. 文法的に難解な原典と(文章)構造
 4. (意味が)あいまいな原典中の文
- 英訳聖書はこれらの問題を解決できないが、これらの問題が確実に、より詳しくより徹底的に研究されるように促す。
- G. 各章の締めくくりとして、その章の主な解釈上の問題に注目させることを意図した、関連する議論のための問いを与える。

ヨハネの福音書への導入

緒言

- A. マタイの福音書とルカの福音書はイエスの御誕生の記述で始まり、マルコの福音書はイエスの洗礼の記述で始まるが、ヨハネの福音書は天地創造の記述で始まる。
- B. ヨハネの福音書は第一章第一節からナザレのイエスの完全な神性を解説し、この福音書全体を通してこの神性を繰り返しつつ強調している。共観福音書群はこの真理を徹底的に明らかにしている(「救世主の神秘」)。
- C. 明らかにヨハネは共観福音書群の内容を基本的に認めながら彼の福音書を書き進めている。彼は(紀元1世紀後半の)初代教会の要請に応じてイエスの御生涯とお教えを補完して解釈しようとしている。
- D. ヨハネは以下に示す事柄で救世主イエスについて自分なりの記述をしているようだ。
 - 1. 7つの奇跡あるいはしるしとそれらの解釈
 - 2. イエスの目撃証人達との面談あるいは対話
 - 3. 特定の礼拝日と祝祭日
 - a. 安息日
 - b. 過越の祭り(5~6章を参照)
 - c. 仮庵の祭り(7~10章を参照)
 - d. ハヌカ(10: 22-39を参照)
 - 4. 「私は」という発言
 - a. 神の御名(YHWH)に関連がある
 - 1) わたしは神である(4: 26、8: 24と28節、13: 19、18: 5-6)
 - 2) アブラハムが生まれる前からわたしはある(8:54-59)
 - b. 述語と主語を伴って
 - 1) わたしはいのちのパンである(6: 35と41節と48節と51節)
 - 2) わたしは世の光である(8: 12)
 - 3) わたしは羊小屋の戸である(10: 7と9節)
 - 4) わたしは良い羊飼いである(10: 11と14節)
 - 5) わたしはよみがえりであり、いのちである(11: 25)
 - 6) わたしは道であり、真理であり、いのちである(14: 6)
 - 7) わたしは真のぶどうの木である(15: 1と5節)
- E. ヨハネの福音書と他の福音書との違い
 - 1. ヨハネの福音書の書かれた主な目的が神学的であることは事実だが、彼が執筆に用いた歴史と地理はきわめて正確で詳細である。共観福音書群とヨハネの福音書との間の記述内容の不一致の正確な理由は不明である。

- a. ユデアでの初期の伝道活動(神殿の初期の浄化)
 - b. イエスの御生涯の最終週の時系列と日付
 - c. 意図的な神学的再構成
2. ヨハネの福音書と共観福音書群との間の明らかな違いについてこの場で議論する機会を持つ方がよいと思われる。George Eldon Ladd著 *A Theology of the New Testament* からそれらの違いについての議論の見られる箇所を引用させていただく。
- a. 「第4の福音書は共観福音書群とあまりにも異なっているので、問題はまさにその福音書がイエスのお教えを正確に記録しているかどうかということ、あるいは歴史が神学的解釈に包括されるという伝統をクリスチャンの信仰が大きく変えてきたかどうかということであると言わなければならない。」(215ページ)。
 - b. 「最も簡単に思いつく解答はイエスのお教えがヨハネ自身の言葉で表現されていることである。もしこれが正しい解答なら、また我々が第4の福音書をヨハネ自身の言葉で表現されていると結論付けなければならないなら、この重要な問題は次のようなことになる『第4の福音書の神学はどの程度イエスの神学よりはヨハネの神学に近いと言えるのか。イエスの教えはどの程度ヨハネの心に同化され、それがイエス御自身のお教えの正確に表していることよりはヨハネの解釈として我々の知るところとなっているのか。』」(215ページ)。
 - c. LaddはW. D. DaviesとD. Daube共編の *The Background of the New Testament and its Eschatology* 中のW. F. Albrightの論説「パレスチナとヨハネの福音書において最近明らかとなったこと」も引用している。
「ヨハネの福音書と共観福音書群との間にはイエスのお教えについての記述に根本的な違いはない。それらの違いはキリストのお教えの特定の側面、特にエッセネ派の教えに最も似ていると思われるものばかりが目立つという伝統にある。イエスのお教えが歪曲または偽造されてきたこと、または重要な新しい記述が追加されてきたことを示す文献は全くない。我々は初期教会の要請が福音書に記載される記事(イエスの御生涯とお教えの目撃証言)の選択に影響を与えたことを容易に認めているが、初期教会の要請が神学的重要性を発生あるいは発展させたということを裏付ける理由となるものはない。
批判的な新約聖書学者や神学者の最も奇妙な仮定の一つは、イエスのお教えがあまりにも限定されて記述されたために、ヨハネの福音書と共観福音書群との間の明らかな違いは初期信徒の神学者の間の見解の違いによるものに違いない、というものである。偉大な思想家や人物は様々な友人と聞き手によって様々な解釈されるので、見聞きしたことから最も好ましく有用であると思われるものを選び出そうとする。」(170~171ページ)
 - d. そしてこれもGeorge E. Laddの著書からの引用:
「それらの違いは、ヨハネの福音書が神学的であり他の福音書がそうではないということではなく、全ての福音書が異なる意味で神学的であるということである。解釈された歴史は単に時

系列順に並んだ出来事よりも歴史背景の真相をより忠実に表すことがある。もしヨハネの福音書が神学的な解釈による書であれば、それはヨハネが歴史の中で起こったと確信している出来事を解釈した書である。共観福音書の意図することは明らかにイエスの *ipsissima verba* (御言葉自体) の記録でもなくイエスの御生涯に起こった出来事を記した伝記でもない。それらはイエスを描写したものであり、イエスのお教えを要約したものである。マタイとルカは自分達の意のままにマルコの福音書中の記述を並べ換えてイエスのお教えを記すことができた。もしヨハネにマタイとルカよりもそのようにする自由があったなら、それは彼がイエスをより深遠にかつ最終的に描写したいと望んでいたからである。」(221～222ページ)

著者

- A. この福音書には著者名が記されていないが、ヨハネが著者であるという手がかりがある。
1. 著者は目撃証人でもある(19: 35を参照)
 2. 聖句「愛弟子」(PolycratesとIrenaeusはその人物が使徒ヨハネだと言っている)
 3. ゼベダイの子ヨハネの名前は登場しない。
- B. 歴史背景は福音書自体から明らかであるから、著者が誰であるかという問題は解釈において重要な事柄ではない。著者が神の啓示を受けてこの福音書を書いたことを認めることが重要なのだ。
- ヨハネの福音書の著者が誰であるかということと書かれた年代は神の啓示ではなく解釈に影響する。解説者は歴史背景とこの福音書が書かれるようになったきっかけを探し求める。ヨハネの二元論を
1. ユダヤ教における2つの世
 2. Qumranの義の教師
 3. ゾロアスター教
 4. グノーシス思想
 5. イエスの独特な観点
- と比較するべきだろうか。
- C. 初期教会の伝統的な見解は、ゼベダイの息子である使徒ヨハネが人間であり目撃証人であるということである。福音書の執筆について紀元2世紀の外界(使徒達が福音伝道を行った地域)の文献が他の文献と関連しているように思われるので、これは明らかにされなければならない。
1. 仲間の信徒達とエペソ人の長老達がこの年老いた使徒に福音書を書くように励ました(EusebiusがアレクサンドリアのClementの言葉を引用している)。
 2. 仲間の使徒アンドレ(紀元180～200年頃にローマから書き送られたムラトリー断片)
- D. 現代の学者達の中には、福音書の様式や主題についてのいくつかの仮定に基づいて、別の著者を想定している者もある。彼らの多くは紀元2世紀初頭(AD 115以前)にこの福音書が書かれたと想定している。

1. ヨハネの教えを覚えている彼の弟子達(ヨハネの影響を受けた人々)によって書かれた(J. Weiss, B. Lightfoot, C. H. Dodd, O. Cullmann, R. A. Culpepper, C. K. Barrett)
 2. Eusebius(AD 280~339年)により引用されているPapias(紀元70~146年)の意味不明の文章によれば、使徒ヨハネの神学と術語(専門用語)の影響を受けたアジア出身の初期教会の指導者達の集団の一人である「長老ヨハネ」によって書かれた。
- E. ヨハネ自身がこの福音書の執筆における主な参考資料であることの証拠
1. 内的証拠
 - a. 著者はユダヤ教の教えや儀式を知っており、それらの旧約聖書的世界観を紹介した。
 - b. 著者は紀元70年以前のパレスチナとエルサレムの状況を知っていた。
 - c. 著者はイエスの目撃証人であることを主張している。
 - 1) 1: 14
 - 2) 19: 35
 - 3) 21: 24
 - d. 著者は使徒団の一員だった。というのは、彼が
 - 1) 時間と場所についての記述(特に夜の行動について)
 - 2) 数についての記述(2: 6の水がめと21: 11の魚)
 - 3) 人についての記述
に精通していたからである。
 - 4) 著者は出来事の詳細とそれらへの応答の仕方を知っていた
 - 5) 著者は「愛弟子」と呼ばれているようだ
 - a) 13: 23と25節
 - b) 19: 26-27
 - c) 20: 2-5と8節
 - d) 21: 7と20~24節
 - 6) 著者はペトロとともに「内なる輪」(12使徒)の一員であったようだ。
 - a) 13: 24
 - b) 20: 2
 - c) 21: 7
 - 7) ゼベダイの子ヨハネの名はこの福音書に全く見られないが、彼が「内なる輪」(12使徒)の一員であったことから考えると、このことはとても不思議に思われる。
 2. 外的証拠
 - a. この福音書を紹介した人々
 - 1) Polycarpと親交があり、使徒ヨハネを知っていたIrenaeus[紀元120~202年]
(Eusebiusの*Historical Ecclesiasticus* の第5巻20章6~7節を参照)―「主の胸に寄りかかり、またアジアのエフェソスにおいて自身の福音書を書いた、主の弟子

ヨハネ」(*Historical Ecclesiasticus* の第5巻8章4節で引用された *Haeresis* 第3巻1章1節)

2) アレクサンドリアのClement(紀元153~217年) — 「友らに促されて聖霊によって神のもとに移され、霊的な福音書を書いたヨハネ」(Eusebiusの *Historical Ecclesiasticus* の第6巻14章7節)

3) 殉教者ユスティヌス(紀元110~165年) — 自著 *Dialogue with Trypho* の81: 4で

4) Tertullian(紀元145~220年)

b. 最も初期の目撃証人による、ヨハネがこの福音書の著者であるという主張

1) [紀元155年に]Smyrnaの司教であったPolycarp(紀元70~156年、Irenaeusによる記録)

2) PhrygiaのHierapolisの司教であり、使徒ヨハネの弟子であったと言われている Papias(紀元70~146年、ローマから書き送られた反マルシオンの序文と Eusebiusが記録)

F. 著者についての伝統に対して異議を唱えるのに用いられている理由

1. 福音書とグノーシス主義的主題との関係
2. 21章についての内容の明らかな追記
3. 共観福音書群の記述の時系列上の相異
4. ヨハネは自身を「愛弟子」とは言っていないようだ。
5. ヨハネはイエスについての記述において共観福音書群とは異なる語彙やジャンルを用いている。

G. 使徒ヨハネがこの福音書を書いたと仮定するなら、私達はその人物に何を仮定しうるだろうか。

1. 彼はエフェソスからこの福音書を書き送った(Irenaeusは「エフェソスからこの福音書を書き送った」と言っている)
2. 彼は年老いてこの福音書を書いた(Irenaeusは彼がトラヤヌス帝の治世[紀元98~117年]まで生きたと言っている)

書かれた年代

A. 使徒ヨハネがこの福音書を書いたと仮定するなら

1. ローマ帝国の将軍(後に皇帝となった)Titusによってエルサレムが破壊された紀元70年以前
 - a. ヨハネ5: 2「エルサレムの羊の門の近くにはヘブライ語でベテスダと呼ばれる池があり、そこには5つの回廊があった」
 - b. 使徒のグループを示すために初期信徒の称号「弟子」が繰り返し用いられている。
 - c. 後に、死海文書の中に発見され、紀元1世紀の神学的な用語の一部であることが示されたグノーシス主義的記述によって裏付けられた。

- d. 紀元70年のエルサレムの神殿の破壊については述べられていない。
 - e. 有名なアメリカの考古学者W. F. Albrightはこの福音書が紀元70年代あるいは80年代初頭に書かれたと主張している。
2. 後に紀元1世紀中に書かれたとの見解が発表された。
- a. ヨハネの神学の発展
 - b. エルサレムの陥落はその20年くらい前に発生したため述べられていない。
 - c. グノーシス主義的な言い回しと強調をヨハネは用いている。
 - d. 初期教会の伝統
 - 1) Irenaeus
 - 2) Eusebius
- B. 「長老ヨハネ」がこの福音書を書いたと仮定するなら、書かれた年代は紀元2世紀の初頭から中期ということになるだろう。この理論はDionysiusが(文学的理由から)使徒ヨハネがこの福音書を書いたことを認めなかったことで始まった。神学的な理由から使徒ヨハネが黙示録を書いたことを認めなかったEusebiusは、(1)使徒と(2)長老の2つの呼び名で「ヨハネ」が挙げられているPapiasの引用文(*Historical Ecclesiasticus* の第3巻39章5節と6節)中のまさにその箇所と同時に別の「ヨハネ」を見つけたと感じた。

対象

- A. 元々この福音書は小アジアのローマ帝国の属州、特にエフェソスにある諸教会に書き送られた。
- B. ナザレのイエスの御生涯と御人格についてのこの記述があまりにも簡潔でかつ意味深長であるので、この福音書はヘレニズム世界の異邦人信徒達やグノーシス派の人々に好まれるようになった。

書かれた目的

- A. この福音書自体は福音伝道の目的で書かれたと主張している(20: 30-31)。
 - 1. ユダヤ人の読者のために
 - 2. 異邦人読者のために
 - 3. 初期グノーシス主義者の読者のため
- B. この福音書には護教学(弁証論)的な趣旨の記述が見られるようだ。
 - 1. 洗礼者ヨハネの狂信的な追従者達に対して
 - 2. 初期グノーシス主義者の偽教師に対して(序章では特に)。これらのグノーシス主義者は新約聖書の他の書の背景ともなっている。
 - a. エペソ人への手紙
 - b. コロサイへの手紙
 - c. 牧会(霊的指導)的使徒書簡(テモテへの手紙第一、テトスへの手紙、テモテへの手紙第二)

- d. ヨハネの手紙第一(ヨハネの手紙第一はこの福音書の序文的な書簡の役割を果たしているようだ)
- C. 書かれた目的についての20: 31の記述は、救いの表現のために現在時制が一貫して用いられているので、忍耐および伝道の教義を強調するものとして理解されうようだ。この意味でヨハネはヤコブのように、小アジアの諸学派によるパウロの神学(Ⅱペテロ3: 15-16を参照)の過度の強調に対して釣り合いを取ろうとしていたようだ。エフェソスにいたのがパウロではなくヨハネであったと初期教会で伝統的に言われていたことは驚くべきことである(F. F. Bruce著*Peter, Stephen, James and John: Studies in Non-Pauline Christianity* の120~121ページを参照)
- D. 最終章(21章)は初代教会からの特定の質問への答えとなっているようだ。
 - 1. ヨハネは共観福音書群の記述に付け加えを行っている。しかし、彼は、ユデヤでの伝道活動、特にエルサレムでの働きを重点的に述べている。
 - 2. 21章の追記で取り上げられている3つの質問
 - a. ペトロの復活
 - b. ヨハネの長寿
 - c. イエスの再来がまだ起こっていないこと
- E. 解説者の中には、3章(洗礼についての記述)と第6章(聖餐式や主の晩餐についての記述)で完璧な文章表現があるにもかかわらず、ヨハネが宗教儀式自体を意図的に無視したり記録しなかったり議論しなかったりすることによって礼典主義を軽視したと見る者もいる。

ヨハネの福音書の要旨の全体像

- A. 哲学的かつ神学的な序文(1: 1-18)と実用的な結語(21章)
- B. イエスの公的なお働き(2~12章)の中の7つの奇跡のしるしとその解釈
 - 1. カナの婚礼の祝宴でワインを水に変えられたこと(2: 1-11)
 - 2. カファルナウムで王宮の役人の息子を癒されたこと(4: 46-54)
 - 3. エルサレムにあるベセスダと呼ばれている池で足の不自由な人を癒されたこと(5: 1-18)
 - 4. ガリラヤで約5000人に食事を与えられたこと(6: 1-15)
 - 5. ガリラヤ湖の上を歩かれたこと(6: 16-21)
 - 6. エルサレムで生まれつき目が見えない人を癒されたこと(9: 1-41)
 - 7. ベタニアでラザロをよみがえらせたこと(11: 1-57)
- C. イエスの目撃証人との面談と対話
 - 1. 洗礼者ヨハネ(1: 19-34、3: 22-36)
 - 2. 弟子たち
 - a. アンドレとペテロ(1: 35-42)
 - b. ピリポとナタニエル(1: 43-51)
 - 3. ニコデモ(3: 1-21)

4. サマリアの女(4: 1-45)
 5. エルサレムのユダヤ人(5: 10-47)
 6. ガリラヤの群衆(6: 22-66)
 7. ペテロと弟子達(6: 67-71)
 8. イエスの兄弟達(7: 1-13)
 9. エルサレムのユダヤ人(7: 14~8: 59、10: 1-42)
 10. 二階の部屋の弟子(13: 1~17: 26)
 11. ユダヤ人によるイエスの逮捕と尋問(18: 1-27)
 12. ローマでの尋問(18: 28~19: 16)
 13. 復活後の会話、20: 11-29
 - a. マリアと
 - b. 十人の使徒と
 - c. トマスと
 14. 結語でのペテロとの対話、21: 1-25
 15. (7: 53~8: 11、姦通の女の話は元々ヨハネの福音書の一部ではない)
- D. 特別な礼拝日と祝祭日
1. 安息日(5: 9、7: 22、9: 14、19: 31)
 2. 過越の祭(2: 13、6: 4、11: 55、18: 28)
 3. 仮庵の祭(8~9章)
 4. ハヌカ(光の祭り、10: 22を参照)
- E. 「私は『ある』』という発言の文の使用
1. 「私は『神』である」(4: 26、6: 20、8: 24と28節と54~59節、13: 19、18: 5-6と8節)
 2. 「私はいのちのパンである」(6: 35と41節、48節、51節)
 3. 「私は世の光である」(8: 12、9: 5)
 4. 「私は羊の門の戸である」(10: 7と9節)
 5. 「私は善い羊飼いである」(10: 11、14節)
 6. 「私はよみがえりでありいのちである」(11: 25)
 7. 「私は道であり真理でありいのちである」(14: 6)
 8. 「私は真のぶどうの木である」(15: 1と5節)

第一読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)その聖書の書全体を一通り読みなさい。書全体の中心テーマをあなた自身の言葉で述べなさい。

1. 書全体のテーマ
2. 文学(ジャンル)のタイプ

第二読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

その聖書の書全体をもう一度一通り読みなさい。主題を要約し、その主題を一文で表現しなさい。

1. 第一の文章単位の主題
2. 第二の文章単位の主題
3. 第三の文章単位の主題
4. 第四の文章単位の主題
5. (以下同様)

ヨハネの福音書1章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
言葉は肉となった	永遠の言葉	序章	いのちのことば	序章
1: 1~5	1: 1~5	1: 1~5	1: 1~5	1: 1~18
	ヨハネの証言:ま ことの光			
1: 6~13	1: 6~13	1: 6~9	1: 6~9	
		1: 10~13	1: 10~13	
	言葉は肉となった			
1: 14~18	1: 14~18	1: 14~18	1: 14	
			1: 15	
			1: 16~18	
バプテスマのヨハ ネの証し	荒れ野の中の声	ヨハネの証し	バプテスマのヨ ハネのメッセージ	ヨハネの証言
1: 19~28	1: 19~28	1: 19~23	1: 19	1: 19~28
			1: 20	
			1: 21 前	
			1: 21 中	
			1: 21 後	
			1: 22 前	
			1: 22 後	
			1: 23	
		1: 24~28	1: 24~25	
			1: 26~27	
			1: 28	
神の子羊	神の子羊		神の子羊	
1: 29~34	1: 29~34	1: 29~34	1: 29~31	1: 29~34
			1: 32~34	
最初の弟子達	最初の弟子達	イエスの最初 の弟子達の証 言	イエスの最初の 弟子達	最初の弟子達

1: 35~42	1: 35~42	1: 35~42	1: 35~36	1: 35~39
			1: 37~38 前	
			1: 38 後	
			1: 39	
			1: 40~42 前	1: 40~42
			1: 42 後	
ピリポとナタニエルの召し	ピリポとナタニエル		イエスがピリポとナタニエルを召される	
1: 43-51	1: 43~51	1: 43~51	1: 43~45	1: 43~51
			1: 46 前	
			1: 46 後	
			1: 47	
			1: 48 前	
			1: 48 後	
			1: 49	
			1: 50~51	

第三読書サイクル(xix ~xx ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

*神の啓示により行うことではないとはいえ、段落分割は原著者の意図を理解し従うために重要なことである。各現代語訳聖書は第一章を分割し要約している。各訳聖書はトピックを独自の方法で要約している。(聖書の)原文

を読むときにはどの訳の聖書が主題と聖句分割について自分が理解したことと合うかを自分自身に問いなさい。

各章をまず読んで、そしてその主題(段落)を明らかにしなければならない。それから自分が理解したことを現代語訳聖書の間で比較しなさい。原著者の論理と主張に従うことによって彼(原著者)の意図を理解するときのみ私達は本当に聖書を理解できるのである。原著者だけが神の啓示を受けている—読者には(聖書の)メッセージを変えたりあるいは修正する権利はない。聖書の読者には神の啓示の示す真理を自分の(生きている)時代と生活に適用する責任があるのだ。

全ての専門用語と略語の完全な説明は補遺1、2、3、そして4にあることを忘れてはならない。

1～18節の文脈の考察

A. 詩・歌・信条の神学的概要

1. 永遠なるお方で創造主で救世主のキリスト、1～5節(イエスは言葉)
2. キリストについての予言的証言、6～9節と15節(イエスは光)
3. 受肉されたキリストは神でいらっしゃる、10～18節(イエスは神の御子)

B. 1～18節の神学的構造と反復主題

1. イエスはすでに父なる神と一緒におられた(1節前半)
2. イエスは父なる神と親密な関係をお持ちであった(1節中庸、2節、18節後半)
3. イエスは父なる神の御本質を共有されている(1節後半、18節後半)
4. 父なる神の救いと扶養の御手段(12～13節)
5. 受肉、神は人間となられる(9節と14節)
6. 啓示、完全に現わされ理解された神性(18節後半)

C. *logos* (言葉)のヘブライ語的およびギリシャ語的背景

1. ヘブライ語的背景

- a. 天地創造(創世記1: 3と6節と9節と11節と14節と20節と24節と26節と29節)および家父長の祝福(創世記 27: 1以降と49: 1)において語られた言葉の力(イザヤ55: 11、詩篇 33: 6と107: 20および147: 15と18節)
- b. 箴言8: 12-23では「知恵」が神の最初の創造物および全ての創造物の代表者として擬人化されている(詩篇33: 6と聖書外典の「ソロモンの知恵」9: 9を参照)
- c. タルガム(アラム語訳聖書とその注解書)は擬人化的用語と調和しないことを理由に*logos*を聖句「神の言葉」に置き換えている。

2. ギリシャ語的背景

- a. ヘラクレイトス—万物は流転する。人間ではない神と不変の*logos* は相伴い、万物の変化のプロセスを導く
- b. プラトン—人間ではない不変の*logos* がこの惑星(地球)を規則的に動かし、季節を定める。

- c. ストア派—*logos* は「世界の道理」つまり支配者であるが、半分は人間である。
- d. フィロ—フィロは *logos* の概念を「神の御前に人間の魂を置く大祭司」または「人と神との間の橋」あるいは「宇宙の指導者が万物を導くための舵」として擬人化した (*kosmocrator*)。

D. 紀元2世紀に構築されたグノーシス主義的神学・哲学体系の特徴

1. 霊と物質間の存在論的(永遠的)な対立の二元論
2. 物質は悪く頑迷であり霊は善である。
3. グノーシス主義の思想体系では崇高で善なる神と物質を形成しうる下位の神の間に様々な階層に属する天使達(*aeons*)が断定(仮定)されている。解説者の中にはこの下位の神が(マルシオンにそう記されているように)旧約聖書のYHWHであるとも主張する者がいる。
4. 救いは以下に示すものによって来る。
 - a. 人がこれらの様々な階層に属する天使達の間を通して神に出会えるようにする秘密の知識や暗号
 - b. 全人類が秘密の知識を受け取るまでは気付かない、全人類のうちにある神の霊
 - c. この秘密の知識を人類に与える啓示の特別な代理者(キリストの霊)
5. この思想体系はイエスの神性を主張しているが、イエスの真の永久的受肉と救いの中心的立場を否定している。

E. 歴史的背景

1. 1~18節では用語 *logos* を用いたヘブライの思想とギリシャの思想の関連づけが試みられている。
2. グノーシス主義という異端は、ヨハネによる福音書のこの高度に組み立てられた導入部に対する哲学的背景となろうとする思想である。ヨハネの手紙第一はこの福音書への挨拶文的書簡といえるかもしれない。「グノーシス主義」と呼ばれる神学的思想体系は紀元2世紀までは書物によって知られていなかったが、初期グノーシス主義の主題は死海文書やフィロの著書に見られる。
3. 共観福音書群(特にマルコの福音書)にはゴルゴタの丘の磔刑の後までイエスの神性(メシアとしての神秘)が述べられていないが、共観福音書群よりもかなり後に自身の福音書を書いたヨハネはその第1章で完全なる神であり完全なる人間でいらっしゃるお方(人の子。エゼキエル2: 1とダニエル7: 13を参照)というイエスの重要テーマを展開している。

- F. I ヨハネ1: 1の特別なトピック「ヨハネの手紙第一の1章と同一視されるヨハネの福音書1章」を見よ。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 1: 1-5

¹はじめに言(ことば)があった。言は神とともにあった。言は神であった。²言ははじめに神とともに

にあった。³すべてのものは言によって成った。成ったもので言によらずに成ったものはなかった。⁴言の中に命があった。命は人の光であった。⁵光は闇の中に輝いている。闇は光を理解しなかった。

1: 1「初めに」これは創世記1: 1を反映しており、神の受肉を述べたこととして I ヨハネ1: 1でも用いられている。ヨハネの手紙第一はヨハネの福音書のための挨拶文であったのかもしれない。どちらもグノーシス主義を扱っている。1～5節ではイエス・キリストの神性、つまりイエスが創造の前からすでにおられたことが認められている(1: 15、8: 56-59、16: 28、17: 5、II コリント8: 9、ピリピ2章6～7節、コリント1: 17、ヘブル1: 3と10: 5-9を参照)。

新約聖書ではこのように表現されている

1. 墮落によって損なわれない新しい創造(創世記3: 15が人類において成就した)
2. 新しい征服(約束の地)
3. 新しい出エジプト(成就した予言)
4. 新しいモーセ(律法を与える者)
5. 新しいヨシュア(ヘブライ4: 8を参照)
6. 新たな水の奇跡(ヘブライ3～4章を参照)
7. 新しいマナ(ヨハネ6章を参照)

このような表現はさらにその他多くの箇所、特にヘブル人への手紙に見られる。

特別なトピック: *Arche*

用語「領地」はギリシャ語の用語 *arche* であり、何かの「始まり」あるいは「起源」を意味する。

1. 創造された秩序の始まり(ヨハネ 1: 1、I ヨハネ 1: 1、ヘブル 1: 10 を参照)
2. 福音の始まり(マルコ 1: 1、ピリピ 4: 15、II テサロニケ 2: 13、ヘブル 2: 3 を参照)
3. 最初の目撃(ルカ 1: 2 を参照)
4. 初めのしるし[奇跡]まり(ヨハネ 2: 11 を参照)
5. 基本原則(ヘブル 5: 12 を参照)
6. 福音の真理に基づく最初の確信(ヘブル 3: 14 を参照)
7. 始まり(コロサイ 1: 18、黙示録 3: 14 を参照)

この語は「支配」あるいは「権威」の意味で用いられるようになった。

1. 人間の政府の
 - a. ルカ 12: 11
 - b. ルカ 20: 20
 - c. ローマ 13: 3、テトス 3: 1
2. 天使の政府の
 - a. ローマ 8: 38

- b. I コリント 15: 24
- c. エペソ 1: 21、3: 10、6: 12
- d. コロサイ 1: 16、2: 10 と 15 節
- e. ユダ 6 節

これらの偽教師達は地上の権威も天の権威も全て軽視している。彼らは二律背反主義の自由思想家達である。彼らは神と天使と都市政府と教会指導者よりも自身と自身の望みを優先させていた。

「**だった**」(3回登場) これは過去の継続的な存在に注目した未完了時制である(1、2、4、10節を参照)。この時制はLogosがすでに存在していたことを示すために用いられている(8: 57-58、17章5節と24節、II コリント 8: 9、コロサイ1: 17、ヘブル10: 5-7を参照)。これは3、6、14節のアオリスト時制とは対照的である。

「**言(ことば)**」ギリシャ語の用語 *logos* は一つの単語だけではなくメッセージを指す。この文脈ではこの用語は、ギリシャ人が「世界の理由」を言い表すために用い、またヘブライ人が「知恵」と似たものとして用いた称号である。ヨハネは神のことばが人物とメッセージの両方であることを主張するためにこの用語を選んだ。「文脈の洞察」のCを見よ。

「**神とともに**」 「とともに」は“向かい合っ”と云い換えることができる。これは親密な交わりを描写している。これはただお一人であるという神の本質と神の3つの御人格の永遠の現れの問題を指し示している(14: 26の特別なトピック「三位一体」を参照)。新約聖書は、イエスが父なる神とは別のお方でいらっしゃるのに父なる神と一つでいらっしゃるという逆説的事実を主張している。

「**言は神であった**」 この動詞は1節の「である」と同様に未完了時制である。*Theos* には冠詞(主語を特定する冠詞。F. F. Bruce著 *Answers to Questions* の66ページを参照)が付いていないが、*Theos* は強調のためにギリシャ語の成句の最初に配置される。この節と18節はすでに存在しているLogosの完全な神性を強調している(5: 18、8: 58、10: 30、14: 9、17: 11、20: 28、ローマ9: 5、ヘブル1: 8、II ペテロ1: 1を参照)。イエスは完全なる神でいらっしゃるのと同時に完全なる人間でいらっしゃるのだ(Iヨハネ4: 1-3を参照)。イエスは父なる神と同じではいらっしゃるが、持っておられる神としての本質は父なる神と全く同じである。

新約聖書はナザレのイエスの完全な神性を主張しているが、父なる神の明確な御人格を擁護している。父なる神とイエスと聖霊の神としての本質が一つであることはヨハネ1: 1、5: 18、10: 30と34~38節、14: 9-10、20: 28で強調されており、一方でその3人のお方の相違点はヨハネ1: 2と14節と18節、5: 19-23、8: 28、10: 25と29節、14: 11と12節と13節と16節で強調されている。

1: 2 この節は1節と並列しており、紀元前6~5世紀にお生まれになったイエスが常に父なる神とともにおられ、それゆえに神でいらっしゃるという一神教に基づく衝撃的な事実を再度強調している。

1: 3「**すべてのものは言によって成った**」 Logos は父なる神の代理者として目に見えるものと目に

見えないものの両方を創造された(10 節、I コリント 8: 6、コロサイ 1: 16、ヘブル 1: 2 を参照)。これは詩篇 104: 24、箴言 3: 19、8: 12-23 において知恵が果たす役割と似ている(ヘブル語で「知恵」は女性名詞である)。

「成ったもので言によらずに成ったものはなかった」これは、崇高で善なる神と造られたより下位の霊的存在つまりすでに存在しているものとの間の天使階層についてのグノーシス主義者の誤った教えへの反論である(文脈の洞察のDを参照)。

1: 4「言の中に命があった」この節は「命」自体が御子つまり言から来ていることを強調している。ヨハネは用語 *zoe* を復活の命で永遠のいのちである神の命を指す用語として用いている(1: 4、3: 15 と 36 節、4: 14 と 36 節、5: 24 と 26 節と 29 節と 39 節と 40 節、6: 27 と 33 節と 35 節と 40 節と 47 節と 48 節と 51 節と 53 節と 54 節と 63 節と 65 節を参照)。「命」を指す他のギリシャ語の用語 *bios* は地上の生命体を指して用いられた(I ヨハネ 2: 16 を参照)。

「命は人の光であった」ヨハネは神の真理と知識を言い表すときに光を比喻としてよく用いている(ヨハネ 3: 19、8: 12、9: 5、12: 46 を参照)。「命」が全人類のためだったことに注目しよう(多分詩篇 36: 5-9 でも暗示されているはずである)。光と闇は死海文書においても共通の主題であった。ヨハネはしばしば自身を二元論的(対比的)語彙で表現している。

1: 5「光は輝いている」これは現在時制で継続的行為を意味している。イエスは常に存在しておられるが、今やはっきりと世にお姿を現されている(8: 12、9: 5、12: 46 を参照)。旧約聖書では神が実体つまり人間の形で現されるお姿はしばしば主の天使である(創世記 16: 7-13、22: 11-15、31: 11 と 13 節、48: 15-16、出エジプト 3: 2 と 4 節、13: 21、14: 19、士師記 2: 1、6: 22-23、13: 3-22、ゼカリヤ 3: 1-2 を参照)。解説者の中にはこれがすでに受肉された Logos であると主張する者もいる。

特別なトピック: 主の天使

旧約聖書で神が御自身を人間の姿で現されているのは明らかである。三位一体主義者にとっての疑問は三位一体のうちのお方がこの役割を果たされるのかということである。父なる神(YHWH)と聖霊は常に肉体を持っておられないから、これらの人間的なお姿はすでに受肉されたイエスであるといえるようだ。

神の顕現を天使的存在から見分けようとする試みにおいて直面する困難について述べるときに以下のリストが詳細で役に立つ。

1. 天使としての主の天使
 - a. 創世記 24: 7 と 40 節
 - b. 出エジプト 23: 20-23、32: 34
 - c. 民数記 22: 22
 - d. 士師記 5: 23
 - e. II サムエル 24: 16

- f. I コリント 21: 15-30
- g. ゼカリア 1: 12-13
- 2. 神の顕現としての主の天使
 - a. 創世記 16: 7-13、18: 1-19、22: 11-15、31: 11 と 13 節、48: 15-16
 - b. 出エジプト 3: 2 と 4 節、14: 19(13: 21)
 - c. 士師記 2: 15、6: 22-24、13: 3-23
 - d. ホセア 12: 3-4
 - e. ゼカリア 3: 1-5

NASB、NKJV	「闇は光を理解しなかった」
NRSV	「闇は光に勝たなかった」
TEV	「闇は決して光を消すことができなかった」
NJB	「闇は光に優ることができなかった」

この用語 (*katalambano*) の元の意味は「つかみ取る」である。従って、この用語の意味は(1) 圧倒するかのようにつかみ取る[マタイ 16: 18 を参照]または(2) 理解するために把握するである。ヨハネはこの曖昧さを用いてその両方を示唆しているようだ。ヨハネの福音書には二重の意味(例えば 3: 3 の「生まれ変わる」と「天から生まれる」、3: 8 の「風」と「霊」)が特徴として存在する。

この動詞 (*katalambano*) はヨハネの著書にたった2回しか登場しない(8: 3 と 4 節に見られるものは最初ではない)。1: 5 では闇は光を理解つまり光に勝つことはできず、12: 35 で光(イエスと福音)を拒絶する闇は圧倒されることになる。拒絶の結果は混乱であり、受容の結果は礼拝なのだ。

Manfred T. Brauchは自著 *Abusing Scripture* の35ページで人間の状態を特徴付けている。

1. 茫然自失、ルカ15章
2. 心の闇、ヨハネ1: 5
3. 敵意、ローマ5:10
4. 別離、エペソ2: 15-17
5. 神らしさの喪失、ローマ1: 18
6. 神の命からの疎外、エペソ4: 17-18
7. 人間の罪を最もよく要約したものがローマ1: 18~3: 23に見られる。

NASB(改訂版)原典: 1: 6-8

⁶神から遣わされた一人の人がいた。その人の名はヨハネであった。⁷彼は証しをするために来た。光について証しをするために、全ての人が彼によって信じるようになるために来たのである。
⁸彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

1: 6-8 これらの節と15節(特に二重括弧内)はイエスに関する洗礼者ヨハネの証言記録である。

洗礼者ヨハネは最後の旧約聖書の預言者であった。これらの節を詩の形にすることは難しい。序文が詩や韻文であるかどうかについては学者達の間で数多くの議論がある。

洗礼者ヨハネは(彼のメッセージと観点から判断する限りは)最後の旧約聖書であった。彼はマラキ3: 1と4: 5で預言されていた先駆者であった(ヨハネ1: 20-25を参照)。洗礼者ヨハネは登場当初に誤解されていたので使徒ヨハネは6~8節を挿入したと思われる(ルカ3: 15、使徒行伝18: 25、19: 3を参照)。他の福音書の著者達よりも後に自身の福音書を書いたヨハネはこの問題の深刻化を見ていたのだ。

キリストが未完了時制動詞で(すでに存在されているお方と)表現されている一方で洗礼者ヨハネがアオリスト時制動詞(時系列上明らか)と完了時制動詞(継続する結果を伴う歴史的出来事)で表現されていることは興味深い。イエスは常に存在されているのだ。

1: 7「**全ての人**が彼によって信じるようになるために」これは目的節である。ヨハネの福音書は他の全ての福音書(クリスチャン文学の独特なジャンル)と同じように福音伝道のための配布冊子である。これは、世の光でいらっしゃるキリストへの信仰を告白する全ての人々への素晴らしい救いの提示である(12節、ヨハネ3: 16、4: 42、20: 31、I テモテ2: 4、テトス2: 11、II ペテロ3: 9、I ヨハネ2: 1と4: 14を参照)。

1: 7と12節「**信じる**」この動詞はヨハネによる福音書では78回、ヨハネの3つの書簡では24回用いられている。ヨハネの福音書では名詞形で用いられることが全くなく、動詞だけが用いられていることは興味深い。信条は基本的には知的あるいは感情的な応答ではなく、本来は意志に基づく応答である。このギリシャ語の用語は英語では「信条」、「信頼」、「信仰」という3つの用語に訳されている。それは言い換えると「神を歓迎する」(11節を参照)と「神を受け入れる」(12節を参照)ことと同じである。救いは神の恵みとキリストの成し遂げられた御業において無償であるが、受けとられなければならないものである。救いは特権と責任とを伴う契約的關係である。

特別なトピック: 信仰、信条、あるいは信頼 (*pistis* [名詞]、*pisteuo* [動詞] *pistos* [形容詞])

A. これは聖書においてとても重要な用語である(ヘブル 11: 1 と 6 節を参照)。それはイエスの初期の教えの主題である(マルコ 1: 15 を参照)。新たな契約が要求していることが少なくとも2つある: 悔い改めと信仰である(1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節および 20: 21 を参照)。

B. 語源

1. 旧約聖書における用語「信仰」は忠実、忠誠、信頼性を意味し、私達の性質ではなく神の御性質を言い表していた。
2. その語は「確実で安定した」を意味するヘブル語の用語(*emun*、*emunah*)に由来する。信仰を保つことは精神的同意(一連の真理)、道徳的生活(生活様式)、そして主にその人との関係形成(人の歓迎)つまり意志に基づくその人との関係形成(決断)である。

C. 旧約聖書での用法

アブラハムの信仰が未来の救世主へのものではなく、彼に子と子孫が生まれるという神の約束(創世記 12: 2、15: 2-5、17: 4-8、18: 14 を参照)へのものであったことは強調されなければならない。アブラハムは神を信頼することでこの約束に応えた。彼はこの約束にまだ疑いと問題とを持っていた。というのは、この約束の成就(実現)に13年かかったからである。しかし彼の不完全な信仰は神に受け入れられた。神は、たとえからし種ほどの大きさの信仰であっても、それをもって御自分と御自分のなされた約束に応答する、欠陥ある人間とともに働こうとされているのだ。

D. 新約聖書での用法

用語「信じた」はギリシャ語の用語(*pisteuo*)に由来し、これも同様に「信条」、「信仰」、あるいは「信頼」と訳されているようだ。例えば、名詞形はヨハネの福音書の中にはないが、動詞形はしばしば用いられている。ヨハネ 2: 23-25 では、救世主でいらっしゃるナザレのイエスとの群衆の係わりの信憑性は明らかにされていない。用語「信条」のこのような表面的な用い方は他にもヨハネ 8: 31-59 と使徒行伝 8: 13 と 18-24 節に例がある。真の聖書的信仰は最初の応答以上のものである。それは弟子化の過程につながるものでなければならない(マタイ 13: 20-21 と 31-32 を参照)。

E. 前置詞との併用

1. *eis* は「～へ」を意味する。この特有の構造は信徒がイエスに信頼あるいは信仰を置いていることを強調している。
 - a. 神の御名へ(ヨハネ 1: 12、2: 23、3: 18、Iヨハネ 5: 13)
 - b. 神へ(ヨハネ 2: 11、3: 15 と 18 節、4: 39、6: 40、7: 5 と 31 節と 39 節と 48 節、8: 30、9: 36、10: 42、11: 45 と 48 節、17: 37 と 42 節、マタイ 18: 6、使徒行伝 10: 43、ピリピ 1: 29、Iペテロ 1: 8)
 - c. わたしへ(ヨハネ 6: 35、7: 38、11: 25 と 26 節、12: 44 と 46 節、14: 1 と 12 節、16: 9、17: 20)
 - d. 御子へ(ヨハネ 3: 36、9: 35、Iヨハネ 5: 10)
 - e. イエスへ(ヨハネ 12: 11、使徒行伝 19: 4、ガラテヤ 2: 16)
 - f. 光へ(ヨハネ 12: 36)
 - g. 神へ(ヨハネ 14: 1)
2. *en* はヨハネ 3: 15、マルコ 1: 15、使徒行伝 5: 14 では「～の中に」を意味する。
3. *epi* はマタイ 27: 42、使徒行伝 9: 42、11: 17、16: 31、22: 19、ローマ 4: 5 と 24 節、9: 33、10: 11、Iテモテ 1: 16、Iペテロ 2: 6 では「～の中に」あるいは「～の上に」を意味する。
4. ガラテヤ 3: 6、使徒行伝 18: 8 と 27: 25、Iヨハネ 3: 23 と 5: 10 にある、前置詞を伴わない与格
5. *hoti* は「～ということ信じ」の意味を表し、信じる対象の内容を示す。
 - a. イエスは神の聖者である(ヨハネ 6: 69)
 - b. イエスは「わたしはある」というお方である(ヨハネ 8: 24)

- c. イエスは父なる神の内におられ、父なる神はイエスの内におられる(ヨハネ 10: 38)
- d. イエスはメシア(救世主)である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
- e. イエスは神の御子である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
- f. イエスは父なる神によってつかわされた(ヨハネ 11: 42、17: 8 と 21 節)
- g. イエスは父なる神とともにおられる(ヨハネ 14: 10-11)
- h. イエスは父なる神のみもとから来られた(ヨハネ 16: 27)
- i. イエスはご自身を神の契約の名「わたしはある」と名乗られた(ヨハネ 8: 24 と 13: 19)
- j. 私達はイエスとともに生きることになる(ローマ 6: 8)
- k. イエスは死に、そして復活された(I テサロニケ 4: 14)

1: 8 他の福音書の著者達よりもかなり後に自身の福音書を書いた使徒ヨハネは、洗礼者ヨハネの信奉者達がイエスについて聞いたりイエスを受け入れなかったことで彼らの間で増大していた問題を認識していたようだ。

特別なトピック: イエスの目撃証言

名詞(*marturia*)とその動詞(*martureo*)「目撃証人」はヨハネの福音書において重要な用語である。イエスに関する目撃証言は数多くある。

1. 洗礼者ヨハネ(ヨハネ1: 7と8節と15節、3: 26と28節、5: 33を参照)
2. イエス御自身(ヨハネ3: 11、5: 31、8: 13-14を参照)
3. サマリアの女(ヨハネ4: 39を参照)
4. 父なる神(ヨハネ5: 32と34節と37節、8: 18、I ヨハネ5: 9を参照)
5. 聖句(ヨハネ5: 39を参照)
6. ラザロの復活を見に集まった群衆(ヨハネ12: 17を参照)
7. 聖霊(ヨハネ15: 26-27、I ヨハネ5: 10と11節を参照)
8. 弟子たち(ヨハネ15: 27、19: 35、I ヨハネ1: 2、4: 14を参照)
9. 著者自身(ヨハネ21: 24を参照)

NASB(改訂版)原典: 1: 9-13

⁹世に来てすべての人を照らすまことの光があった。¹⁰言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を知らなかった。¹¹言は自身の民のところに来たが、言自身の民は言を受け入れなかった。¹²しかし、自分を受け入れた人には、また自分の名を信じる人には、言は神の子となる権利を与えた。¹³その人は血によってではなく、肉の意志によってではなく、人の意志によってではなく、神によって生まれたのである。

1: 9「まことの光」 これは、単に悪の反対語としての意味だけでなく、本物つまり真実の意味

での「まこと」である。これは紀元1世紀の全ての誤りのキリスト論に関連しているのかもしれない。これはヨハネの著書によく見られる形容詞である(4: 23と37節、6: 32、7: 28、15: 1、17: 3、19: 35、Iヨハネ2: 8と5: 20を参照、黙示録では10回登場)。6: 55の特別なトピック「真理」と14: 17の特別なトピック「世」を見よ。イエスは世の光でいらっしやる(3: 19、8: 12、9: 5、12: 46、Iヨハネ1: 5と7節と2: 8と9節と10節を参照)。信徒はイエスの光を反映させなければならない(ピリピ2: 15を参照)。これは人間と天使の反逆によって形作られた秩序の中にある現実の闇とは厳密に対照的である。

「世に来て」ヨハネはしばしばこの聖句を、イエスが霊的王国である天国を発たれて現実の時空(時間と空間)の王国(6: 14、9: 39、11: 27、12: 46、16: 28を参照)に入られることを述べるために用いている。この節ではこの聖句はイエスの受肉を言っているようだ。これはヨハネの文学によく見られる二元論(つまり上界対下界)の一つである。

NASB	「すべての人を照らす」
NKJV	「すべての人に光を与える」
NRSV	「すべての人を照らす」
TEV	「すべての人々の上に輝く」
NJB	「すべての人に光を与える」

この聖句は2通りに理解されうる。まずギリシャの文化的背景を想定すると、この聖句は全ての人の内にある啓示の光、つまり神の煌めきを指している。これはクエーカー教徒のこの聖句の解釈方法である。しかし、このような概念は決してヨハネの福音書には登場しない。ヨハネにとって「光」は人類の悪を明らかにするものなのである(3: 19-21を参照)。

次に、この聖句は自然の啓示(自然を通して知られる神[詩篇19: 1-5とローマ1: 19-20を参照]または内なる道德観念[ローマ 2: 14-15を参照])ではなく神の啓示および唯一のまことの光なるイエスを通した救いを指していると考えられる。

1: 10「世」ヨハネは3通りの意味で用語 *kosmos* を用いている。

1. 現実の世界(1: 10と11節、11: 9、16: 21、17: 5と24節、21: 25)
2. 全人類(1: 10と29節、3: 16と17、4: 42、6: 33、12: 19と46~47節、18: 20)
3. 神から離れて組織され機能する墮落した人間社会(7: 7、15: 18-19、Iヨハネ 2: 15と3: 1と13節)

この文脈では2. が適している。14: 17の特別なトピックを見よ。

「世は言を知らなかった」墮落した異邦人の国々も興されたユダヤ人の国もイエスを約束されたメシアと認めなかった。用語「知る」は、事実を知性によって認めるという意味以上の親密な関係を意味するヘブル語の熟語を反映している(創世記4: 1とエレミヤ1: 5を参照)。

特別なトピック: 知る(申命記を論理的枠組みとして用いたヘブル語の用語研究)

ヘブル語の用語「知る」(BDB393)は *Qal* の中でいくつかの意味(セム語領域)を持つ。

1. 善悪を理解する—創世記 3: 22、申命記 1: 39、イザヤ 7: 14-15、ヨナ 4: 11
2. 理解によって知る—申命記 9: 2 と 3 節と 6 節、18: 21
3. 経験によって知る—申命記 3: 19、4: 35、8: 2 と 3 節と 5 節、11: 2、20: 20、31: 13、ヨシュア 23 章 14 節
4. 考える—申命記 4: 39、11: 2、29: 16
5. 個人的に知る
 - a. 人—創世記 29: 5、出エジプト 1: 8、申命記 22: 2、33: 9
 - b. 神—申命記 11: 28、13: 2 と 6 節と 13 節、28: 64、29: 26、32: 17
 - c. YHWH—申命記 4: 35 と 39 節、7: 9、29: 6、イザヤ 1: 3、56: 10-11
 - d. 性的に—創世記 4: 1 と 17 節と 25 節、24: 16、38: 26
6. 学んだ技術あるいは知識—イザヤ 29: 11 と 12 節、アモス 5: 16
7. 賢くなる—申命記 29: 4、箴言 1: 2、4: 1、イザヤ 29: 24
8. 神の知識
 - a. モーセの—申命記 34: 10
 - b. イスラエルの—申命記 31: 21 と 27 節と 29 節

1: 11「言は自身の民のところに来たが、言自身の民は言を受け入れなかった」「自身の」は 11 節で二度使用されている。前者の文法形は中性複数形であり、(1)すべての被造物または(2)地理的にはユデアまたはエルサレムを指す。後者の文法形は男性複数形であり、ユダヤ人を指す。

1: 12「しかし、自分を受け入れた人には」これは救いの人間の側の要素を示している(16 節を参照)。人類はキリストの御名によって神が与えてくださる恵みに応答しなければならない(3: 16、ローマ 3: 24、4: 4-5、6: 23、10: 9-13、エペソ 2: 8-9 を参照)。神は確かに権威あるお方であるが、御自身の権威において、墮落した人類と条件付きの契約関係を始められた。墮落した人類は悔い改め、信じ、従い、そして信仰において忍耐しなければならない。

この「受け入れる」という概念は神学的には「告白する」、つまりキリストなるイエスへの信仰を公に宣言することと同じである(マタイ 10: 32、ルカ 12: 8、ヨハネ 9: 22 と 12: 42、I テモテ 6: 12、I ヨハネ 2: 23 と 4: 15 を参照)。救いは受けとられ認められなければならない賜物である。

イエスを受け入れる人々(1: 12)はイエスを送られた父なる神を受け入れる(13: 20、マタイ 10 章 40 節を参照)。救いは三位一体の神との個人的な関係なのだ。

「言は神の子となる権利を与えた」このギリシャ語の用語(*exousia*)は(1)法的権威あるいは(2)権利あるいは特権(5: 27、17: 2、19: 10 と 11 節を参照)を意味していると考えられる。イエスが神の子でいらっしゃることに神がイエスに与えられた使命とを通じて、墮落した人類は今や神を知

り、神を神として、そして父として認めることができるのである。

「神の子となる」新約聖書の著者はキリスト教について述べるために常に家族の比喩を用いた(1)父なる神(2)御子(3)子供たち(4)再び生まれる(5)扶養。キリスト教は家族に似たものであつて物(天国への切符や火災保険証書)ではない。キリストを信じた人々は新たな終末論的「神の人」となるのだ。「お一人の」(14節と3:16を参照)御子(エペソ5:1、Iヨハネ2:29と3:3を参照)がなされたように、子供として私達は父なる神の御性格を反映するべきである。「神の子」は罪人にとっては何と衝撃的な呼び名であろうか(11:52、ローマ8:14と16節と21節、9:8、ピリピ2:15、Iヨハネ3:1と2節と10節と5:2、ホセア1:10[ローマ9:26中で引用]、IIコリント6:18を参照)。

子供を指す2つのギリシャ語の用語の一方が常にイエス(*huios*)を指して用いられ、他方(*teknon*、*tekna*)が信徒を指して用いられていることも興味深い。クリスチャンは神の子供だが、神の御子なるイエスと同じ分類に属してはいない。イエスと神の関係は独特であるが、クリスチャンと神の関係に似ているのだ。

用語「教会」(*ekklesia*)はマルコの福音書、ルカの福音書、あるいはヨハネの福音書には登場しない。それら福音書では聖霊の新しい大規模な個人的または集団的交わりの意味で家族の比喩が用いられている。

「信じる人」これは「信じ続ける人々」を意味する現在形能動態分詞である。この用語の語源的背景は現代的な意味を決めるのに役に立つ。ヘブル語ではこの用語は元々安定した地位にある人を指していた。後にこの用語は比喩的にかげがえのない忠実な信頼のおける人を指して使われるようになった。この用語と同じ意味のギリシャ語の用語は英語では複数の用語群(*faith*、*believe*、*trust*)に翻訳されている。聖書でいう信仰つまり信頼は本来は私達がする何らかの行為ではなく私達が信頼を置く人なのである。ここでの論点は私達の忠実さではなく神の忠実さである。墮落した人類は神が信頼できるお方であることを信頼し、神の忠実さを信じ、神の愛する人を信じるのだ。ここでの論点は人の信仰の豊かさや強さではなく、その信仰の対象に置かれている。1:7と2:23の特別なトピックスを見よ。

「自分の名を」旧約聖書で人名は非常に重要であった。それは人の性格についての希望に満ちた力強い預言あるいは人の性格を言い表したものであった。ある人の名前を信じることはその人を信じて受け入れることである(2:23、3:18、20:31、Iヨハネ5:13を参照)。14:13-14の特別なトピック「主の御名」を見よ。

1:13

NASB、NKJV、NRSV 「その人は血によってではなく、肉の意志によってではなく、人の意志によってではなく、神によって生まれたのである」

TEV 「その人は生まれながらの方法、つまり人間の父親の子供として生まれることによらずに神の子供となったのである」

NJB 「その人は人間の家系からではなく、肉の欲によらず、人の意志によらずに生まれたのである」

初期教会の教父達(Irenaeus、Origen、Tertullian、Ambrose、Jerome、アウグスティヌス)の中にはこの聖句がイエス(単数形)を指すと見た者がいたが、圧倒的多数のギリシャ語原典では複数形を指しており(この語の複数形は新約聖書ではこの箇所だけにみられる。UBS⁴はこの聖句を階級「A」としている)、このことはこの節がイエスを信じる人々(3: 5およびペテロ1: 3と23節を参照)を指していることを意味している。従ってこの聖句は人種的特権でも人間の性的家系(文字通り「血統」)でもなく、神が御子を信じる人々を選び出されること(6: 44と65節を参照)を指している。12節と13節は神の権威と人間の応答の必要との間の契約上の釣り合いを示している。

このギリシャ語の動詞(アオリスト[不定過去]受動態直説法動詞)は強調のためにギリシャ語の文の最後に置かれる。この動詞は2度目の誕生における神の主導的役割を強調している(最後の聖句の一部である「ではなく神の」。6: 44と65節を参照)。

NASB(改訂版)原典: 1: 14-18

¹⁴言は肉となって、わたしたちの間に住まわれた。わたしたちはこの方の栄光を見た。その栄光は父なる神のひとり子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。¹⁵ヨハネはこの方について証しをし、叫んで言った「『私のあとから来られる方は私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのはこの方のことである」。¹⁶わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。¹⁷というのは、律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。¹⁸いまだかつて神を見た者はいない。父なる神のみふところにおられるひとり子なる神、この方が神を説き明かされたのである。

1: 14「言は肉となって」 ギリシャの異教の思想をキリスト教に混入しようとしていたグノーシス派の誤った教義をヨハネは攻撃している。イエスはイマヌエル(イザヤ7: 14を参照)の約束が成就した真の人であり真の神(Iヨハネ4: 1-3を参照)でいらつやつた。神は墮落した人類の間に一人の人として住まわれた(文字通り「御自分の幕屋を張られた」)。ヨハネの福音書中の用語「肉」は決してパウロの他の著書の中と同じように罪の性質を指すことはない。

特別なトピック: 肉(*sarx*)

これは人間の知恵あるいは世界的な標準のことを言っている(Iコリント 1: 20、2: 6と8節、3:18を参照)。パウロは用語「肉」(つまり *sarx*)を自らの著作物の中でいくつかの意味で用いている。

1. 人体(ローマ 2: 28、Iコリント 5: 5と7: 28を参照)
2. 人間の家系(父-子、ローマ 1: 3と4: 1、Iコリント 10: 18を参照)
3. 人類全部(Iコリント 1: 26と29節を参照)
4. 創世記3章の人類の墮落による人間の弱さ(ローマ 6: 19と7: 18を参照)

「わたしたちの間に住まわれた」文字通りこれは「宿られた」である。この表現にはユダヤ人が荒野を放浪していた時期と幕屋に由来する背景(黙示録7: 15、21: 3を参照)。後にユダヤ人はこの荒野での経験をYHWHとイスラエルの民の間の「蜜月期」と呼んだ。神とイスラエルの民の関係がこの時期ほど親密だったことはなかった。この時期にイスラエルの民を導いた特別な神の群衆を指すユダヤの用語は「～に住む」という意味のヘブル語の用語 *Shekinah* である。

「わたしたちはこの方の栄光を見た」旧約聖書の *kabod* (栄光) は今や人となった。つまり受肉した。これは、イエスの御生涯の間の出来事、例えば変容や昇天(使徒の証言。Ⅱペテロ1: 16-17を参照)あるいはYHWHが目に見えないお方であるという概念が今や目に見えるようになり完全に知られるようになったことを述べている。このことは、精神と物質の間の拮抗的關係を強調するグノーシス主義の誤りとは対称的にイエスが人間でいらっしやることを強調するⅠヨハネ1: 1-4と同じことを強調している。

旧約聖書の中に最もよく見られるヘブル語の用語「栄光」(*kabod*、BDB 458)は元々商業用語(一対の天秤を指す)であり、文字通り「重い」という意味である。重いものは貴重品つまり本質的に価値あるものであった。明るさの概念はしばしば神の威厳を表現するためにこの語に追加された(最初にシナイ山上の栄光の *Shekinah* の雲について。終末論的な光を指して用いられている。出エジプト13: 21-22、24: 17、イザヤ4: 5、60: 1-2を参照)。神お一人が価値があり賞賛に値する方である。墮落した人類にとって神はあまりにもまぶしすぎて見ることのできないお方である(出エジプト33: 17-23、イザヤ6: 5を参照)。神はキリストを通してのみ本当の意味で知ることができる(ヨハネ1: 14、18節、コロサイ1: 15、ヘブル1: 3を参照)。

特別なトピック: 栄光(*DOXA*)

「栄光」の聖書的な概念は定義が難しい。信徒達の栄光は、彼らが自分達ではなく神にある福音と栄光を理解することである(エレミヤ 9: 23-24)。

旧約聖書では「栄光」を意味する最も一般的なヘブル語の用語(*kbd*、BDB217)は元々は秤を使うことに関係する商業用語(「重いこと」)(語)であった。重いものは貴重品、つまり本質的に価値があるものであった。しばしば明るさの概念は言葉に付け加えられて神の威厳を表現した(出エジプト 19: 16-18 と 24: 17、イザヤ 60: 1-2 を参照)。神お一人が尊く誉むべき方である。墮落した人類にとって神はあまりにもまぶしすぎて見ることのできない(出エジプト 33: 17-23、イザヤ 6: 5 を参照)。キリストを通してのみ YHWH を本当の意味で知ることができる(エレミヤ 1: 14、マタイ 17: 2、ヘブル 1: 3、ヤコブ 2: 1 を参照)。

用語「栄光」はややあいまいな意味の語である。

1. その語は「神の義」と並列するかもしれない。
2. その語は神の「神聖さ」あるいは「完全性」を言い表しているかもしれない。
3. その語は、神がそれに似せて人類を造られた(創世記 1: 26-27 と 5: 1 と 9: 6 を参照)が、後に意図的な非服従を通して損なわれた(創世記 3: 1-22 を参照)神のお姿を言い表しているか

もしれない。

この語は、出エジプト 16: 7 と 10 節、レビ記 9: 23、民数記 14: 10 で[イスラエルの民が]荒野を放浪していた時代に YHWH が御自分の民にお姿を現わされたときに初めて用いられた。

NASB、NKJV	「その栄光は父なる神のひとり子としての栄光であって」
NRSV	「その栄光は父なる神のひとり子としての栄光であって」
TEV	「その栄光は父なる神のひとり子としてお受けになる栄光であって」
NJB	「その栄光は父なる神のひとり子としての栄光であって」

この用語「ひとり」(*monogenes*) は「独特」つまり「ある種類のものの中のひとつ」という意味である(3: 16と18節、I ヨハネ4: 9、F. F. Bruce著 *Answers to Questions* 24~25節を参照)。ウルガタ聖書はこの用語を「ただひとりの」と訳し、不幸なことに古英語訳聖書はこの訳に従った(ルカ7: 12、8: 42、9: 38、ヘブル11: 17を参照)。この聖句の主題は性的な世代ではなく、単数性と独自性にあるのだ。

「父なる神」旧約聖書には父なる神についての親密で家族的なたとえが見られる。

1. イスラエル国家はしばしばYHWHの「子」と表現されている(ホセア11: 1、マラキ3: 17を参照)。
2. (1より)もっと前には申命記で神を父親とみなすたとえが用いられている(1: 31)。
3. 申命記では32のイスラエルは「神の子供たち」と呼ばれ、神は「あなたの父」と呼ばれた。
4. このたとえは詩篇103: 13で述べられ、詩篇 68: 5で発展している(みなし子の父)。
5. このたとえは預言者にとって一般的であった(イザヤ1: 2、63: 8、子なるイスラエル、父なる神、63: 16、64: 8、エレミヤ3: 4と19節、31: 9を参照)。

イエスはこのたとえをとりあげられ、完全な家族の交わりにまでそれを深められた。そのことは特にヨハネ1: 14と18節、2: 16、3: 35、4: 21と23節、5: 17と18節と19節と20節と21節と22節と23節と26節と36節と37節と43節と45節、6: 27と32節と37節と44節と45節と46節と57節、8: 16と19節と27節と28節と38節と42節と49節と54節、10: 15と17節と18節と25節と29節と30節と32節と36節と37節と38節、11: 41、12: 26と27節と28節と49節と50、13: 1、14: 2と6節と7節と8節と9節と10節と11節と12節と13節と16節と20節と21節と23節と24節と26節と28節と31節、15: 1と8節と9節と10節と15節と16節と23節と24節と26節、16: 3と10節と15節と17節に見られる。

「恵みと真理に満ちていた」この一対の用語には、出エジプト34: 6とネヘミヤ9: 17、詩篇103: 8で用いられその意味を拡張されており、また箴言16: 6で一緒に登場する旧約聖書の用語 *hesed* (契約の愛と忠誠心)と *emeth* (信頼性)が続く。これらの用語はイエスの御性質(17節を参照)を旧約聖書の契約の用語で言い表している。6: 55および17: 3の特別なトピック「真理」を見よ。

特別なトピック: 神の慈愛 (*HESED*)

この用語は広般なセム語領域を網羅する。BDBはこの用語をこのように特徴付けている(338-339)。

A. 人間に関連づけた使い方

1. 仲間の信徒への親切(例えば I サムエル20: 14、II 歴代誌24: 22)
2. 貧しい人々や困っている人々に対する親切(例えばミカ6: 8)
3. 愛情(エレミヤ2: 2、ホセア6: 4を参照)
4. 表情(イザヤ40: 6を参照)

B. 神に関連づけた使い方

1. 契約への忠実さと愛
 - a. 「敵と困難からの救いにおいて」(例えばエレミヤ31: 3、エズラ7: 28、9: 9)
 - b. 「死からいのちを守ることに」(例えばヨブ10: 12、詩篇86: 13)
 - c. 「霊的生活の奨励において」(例えば詩篇119: 41と76節と88節、124節、149節、150節)
 - d. 「罪からの贖いにおいて」(詩篇25: 7、51: 1を参照)
 - e. 「契約を守ることに」(例えば II 歴代誌6: 14、ネヘミヤ1: 5、9: 32)
2. 神の属性を言い表す(例えば出エジプト34: 6、ミカ7: 20)
3. 神の優しさ
 - a. 「豊かな」(例えばネヘミヤ9: 17、詩篇103: 8)
 - b. 「深い」(例えば出エジプト8: 6、申命記5: 10、7: 9)
 - c. 「永遠の」(例えば I 歴代誌16: 34と41節、II 歴代誌5: 13、7: 3と6節、20: 21、エズラ3: 11)
4. 親切な行い(例えば II 歴代誌6: 42、詩篇89: 2、イザヤ55: 3、63: 7、哀歌3: 22)

特別なトピック: 旧約聖書における信条と信頼と信仰と忠実さ(אמון)

I. 緒言

新約聖書にとって大変重要な、この神学的概念は旧約聖書の中においてほどには明確に定義されていないことは言うておく必要がある。それは確かに存在するが、選ばれた重要な段落と人物の中において(のみ)表わされている。

旧約聖書は以下に示すことを融合している。

1. 個人と社会
2. 個人的出会いと契約への従順

信仰は個人的出会いと日常の生活様式である！それは辞書形(つまり語彙の研究)より人で表現したほうがより簡単である。この個人的特徴は以下に示すことに最もよく表現されている。

1. アブラハムとその子孫
2. ダビデとイスラエル

これらの人々は神に出会い、そして彼らの人生は恒久的に変えられた(完璧な人生ではなく継続的な信仰)。神との出会いの後、試練は彼らの信仰の弱さと強さを明らかにしたが、神との親密

な信頼関係はずっと続いたのだ！それは試され製錬されたが、彼らの忠実さと生活様式によって証明されて続いた。

II. 用いられている主な語幹

A. קָנָה (BDB52)

1. 動詞

- a. *Qal* 語幹—支える、養う(Ⅱ列王記 10: 1 と 5 節、エステル 2: 7、非神学的用法)
 - b. *Niphal* 語幹—確定する、確立する、確認する、忠実である、信頼できる
 - (1) 人々の、イザヤ 8: 2 と 53 節、エレミヤ 40: 14
 - (2) 物事の、イザヤ 22: 23
 - (3) 神の、申命記 7: 9 と 12、イザヤ 49: 7、エレミヤ 42: 5
 - c. *Hiphil* 語幹—堅く立つ、信じる、信頼する
 - (1) アブラハムは神を信じた、創世記 15: 6
 - (2) エジプトにいたイスラエルの人々は信じた、出エジプト 4: 31 と 14: 31 (申命記 1: 32 で否定された)
 - (3) イスラエルの人々は、モーセを通して語られた YHWH を信じた、出エジプト 19: 9、詩篇 106: 12 と 24 節
 - (4) アハズは神を信頼しなかった、イザヤ 7: 9
 - (5) それ(彼)を信じる人は誰でも、イザヤ 28: 16
 - (6) 神についての真理を信じる、イザヤ 43: 10-12
2. 名詞(男性形)—忠実さ(つまり申命記 32: 20、イザヤ 25: 1 と 26: 2)
3. 副詞—真に、本当に、確かに、そのように(申命記 27: 15-26、Ⅰ列王記 1: 36、Ⅰ歴代誌 16: 36、イザヤ 65: 16、エレミヤ 11: 5 と 28: 6 を参照)。これは旧・新約聖書中で「アーメン」の礼拝において用いられたものである。

B. קָנָה (BDB54) 女性名詞、堅さ、忠実さ、真理

1. 人々の、イザヤ 10: 20、42: 3、48: 1
2. 神の、出エジプト 34: 6、詩篇 117: 2、イザヤ 38: 18 と 19 節および 61: 8
3. 真理の、申命記 32: 4、Ⅰ列王記 22: 16、詩篇 33: 4 と 98: 3 と 100: 5 と 119: 30、エレミヤ 9: 4 とゼカリヤ 8: 16

C. קָנָה (BDB53) 堅さ、忠実さ、忠誠

1. 手の、出エジプト 17: 12
2. 時間の、イザヤ 33: 6
3. 人々の、エレミヤ 5: 3、7: 28、9: 2
4. 神の、詩篇 40: 11、88: 12、89: 2 と 3 節と 6 節と 9 節、119: 138

III. この旧約聖書の概念のパウロの用い方

A. パウロは、ダマスコへの途上でイエスと個人的に出会ったときに YHWH と旧約聖書につい

て新たに理解したことを基本にしている(使徒行伝 9: 22 と 26 節を参照)。

B. 彼は、語幹 תנח を用いている2つの重要な旧約聖書の御言葉について新たに理解したことを裏付ける旧約聖書の他の御言葉を発見した。

1. 創世記 15: 6—神との個人的出会い(創世記12章)の後にアブラムは従順な信仰生活を送った(創世記12-22章)。パウロはこのことをローマ4章とガラテヤ3章で婉曲的に述べている。
2. イザヤ 28: 16—それを信じる人々(つまり神が試され固定されたすみ石[礎石])は決してこのようにはならないだろう。
 - a. ローマ 9: 33、「恥をかく」つまり「失望する」
 - b. ローマ 10: 11、「恥をかく」つまり「失望する」
3. ハバクク 2: 4—忠実な神を知る人々は忠実に生きるだろう(エレミヤ 7: 28)。パウロはこの御言葉をローマ 1: 17 とガラテヤ 3: 11 で用いている(ヘブル 10: 38 にも注目せよ)。

IV. この旧約聖書の概念のペテロの用い方

A. パウロはこれらを融合した。

1. イザヤ 8: 14— I ペテロ 2: 8(躓きの石)
2. イザヤ 28: 16— I ペテロ 2: 6(すみ石[礎石])
3. 詩篇 111: 22— I ペテロ 2: 7(捨てられた石)

B. 彼はこれらの御言葉をイスラエルを言い表す特有の言葉「選ばれた種族、忠実な司祭、聖なる国家、神御自身の所有される民」に変換した。

1. 申命記 10: 15、イザヤ 43: 21
2. イザヤ 61: 6、66: 21
3. 出エジプト 19: 6、申命記 7: 6

そしてここではそれをキリストにある教会の信仰に対して用いている。

V. この概念のヨハネの用い方

A. 新約聖書におけるその用法

用語「信じた」はギリシャ語の用語 (*pisteuo*) に由来し、これも同様に「信条」、「信仰」、あるいは「信頼」と訳されているようだ。例えば、名詞形はヨハネの福音書の中にはないが、動詞形はしばしば用いられている。ヨハネ 2: 23-25 では、救世主でいらっしゃるナザレのイエスとの群衆の係わりの信憑性は明らかにされていない。用語「信条」のこのような表面的な用い方は他にもヨハネ 8: 31-59 と使徒行伝 8: 13 と 18-24 節に例がある。真の聖書的信仰は最初の応答以上のものである。それは弟子化の過程につながるものでなければならない(マタイ 13: 20-21 と 31-32 を参照)。

B. 前置詞との併用

1. *eis* は「～へ」を意味する。この特有の構造は信徒がイエスに信頼あるいは信仰を置いていることを強調している。

- a. 神の御名へ(ヨハネ 1: 12、2: 23、3: 18、Iヨハネ 5: 13)
 - b. 神へ(ヨハネ 2: 11、3: 15 と 18 節、4: 39、6: 40、7: 5 と 31 節と 39 節と 48 節、8: 30、9: 36、10: 42、11: 45 と 48 節、17: 37 と 42 節、マタイ 18: 6、使徒行伝 10: 43、ピリピ¹ 1: 29、I ペテロ 1: 8)
 - c. わたしへ(ヨハネ 6: 35、7: 38、11: 25 と 26 節、12: 44 と 46 節、14: 1 と 12 節、16: 9、17: 20)
 - d. 御子へ(ヨハネ 3: 36、9: 35、Iヨハネ 5: 10)
 - e. イエスへ(ヨハネ 12: 11、使徒行伝 19: 4、ガラテヤ 2: 16)
 - f. 光へ(ヨハネ 12: 36)
 - g. 神へ(ヨハネ 14: 1)
2. *en* はヨハネ 3: 15、マルコ 1: 15、使徒行伝 5: 14 では「～の中に」を意味する。
 3. *epi* はマタイ 27: 42、使徒行伝 9: 42、11: 17、16: 31、22: 19、ローマ 4: 5 と 24 節、9: 33、10:11、I テモテ 1: 16、I ペテロ 2: 6 では「～の中に」あるいは「～の上に」を意味する。
 4. ガラテヤ 3: 6、使徒行伝 18: 8 と 27: 25、Iヨハネ 3: 23 と 5: 10 にある、前置詞を伴わない与格
 5. *hoti* は「～ということ信じ」の意味を表し、信じる対象の内容を示す。
 - a. イエスは神の聖者である(ヨハネ 6: 69)
 - b. イエスは「わたしはある」というお方である(ヨハネ 8: 24)
 - c. イエスは父なる神の内におられ、父なる神はイエスの内におられる(ヨハネ 10: 38)
 - d. イエスはメシア(救世主)である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
 - e. イエスは神の御子である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
 - f. イエスは父なる神によってつかわされた(ヨハネ 11: 42、17: 8 と 21 節)
 - g. イエスは父なる神とともにおられる(ヨハネ 14: 10-11)
 - h. イエスは父なる神のみもとから来られた(ヨハネ 16: 27)
 - i. イエスはご自身を神の契約の名「わたしはある」と名乗られた(ヨハネ 8: 24 と 13: 19)
 - j. 私達はイエスとともに生きることになる(ローマ 6: 8)
 - k. イエスは死に、そして復活された(I テサロニケ 4: 14)

VI. 結論

聖書的信仰とは人の神のお言葉とお約束への応答である。神が常に(コミュニケーションを)始められる(つまりヨハネ 6: 44 と 45 節)が、この神のコミュニケーションの半分は人の(神のお言葉とお約束への)応答の必要である。

1. 信頼
2. 契約への従順

聖書的信仰とは次に示すことである。

1. 個人的関係(最初の信仰)
2. 聖書的真理の肯定(神の啓示への信仰)

3. それへの適切な従順的応答(日々の信仰)

聖書的信仰は天国への切符あるいは保険ではない。それは個人的関係である。これは被造物、特に人間が神のお姿に似せて造られた(創世記 1: 26-27 を参照) 目的である。ここで議題となるのは「親密さ」である。神は交わりを望んでおられるが、これはある神学的立場からではない！そうではなく、聖なる神との交わりには子供達が「家族」としての特徴(つまり神聖、レビ 19: 2、マタイ 5 章 48 節、I ペテロ 1: 15-16 を参照)を示すことが求められているのだ。墮落(創世記3章を参照)は私達が適切に応答する能力に影響した。だから、神は私達のために働かれ、「新しい心」と「新しい霊」とを私達に下さり、私達が信仰と悔い改めを通して御自分と交わり御自分に従うことができるようにして下さったのである。

上記の3つの事柄は全て重要である。これら3つの事柄は全て維持されなければならない。その目標は(ヘブル語とギリシャ語の意味で)神を知ることと私達の生活に神のご性質を反映させることである。信仰の目標は、いつの日か行くことになる天国ではなく、毎日キリストのようであることなのだ。

人の忠実さは結果(新約聖書)であり神との関係の基礎(旧約聖書)ではない。つまり神の忠実さへの人の信仰であり、神の信頼性への人の信頼である。新約聖書における救い観の核心は、キリストにより示された神の無条件の恵みと慈みに人が最初にそして継続的に応答しなければならないということである。神は愛され、神は遣わされ、神は備えられている。私達は信仰と忠実さをもって応答しなければならないのだ(エペソ 2: 8-9 と 10 節を参照)。

忠実なる神は忠実なる人々に、信仰なき世に御自身を現し、御自分への個人的信仰を彼らにもたらしてほしいと思われているのだ。

1: 15「私より先におられたからである」これはイエスがすでに存在されていることをはっきりと肯定する洗礼者ヨハネの教義である(1: 1、8: 56-59、16: 28、17: 5、II コリント 8: 9、ピリピ 2: 6-7、コロサイ 1: 17、ヘブル 1: 3、10: 5-8 を参照)。イエスがすでに存在されていることと予め定められた預言についての教義は、歴史を超越しながらも歴史の中で働かれる神がおられることを肯定している。この聖書箇所はクリスチャン的つまり聖書的世界観の最高潮といえる聖句である。

この節は解釈が難しいために書記達が原典の明確化と簡素化を試みて多くの変更を行った。Bruce M. Metzger 著 *A Textual Commentary on the Greek New Testament* の 197~198 ページを見よ。

この節はギリシャ語の動詞時制の標準化がいかに難しいかの良い例でもある。これは現在時制で記録された過去の行為である。補遺1を見よ。

1: 16-18 ヨハネの福音書の特徴の1つは著者がどのように歴史的な出来事や対話あるいはイエスのお教えを自身の言葉で書き表しているかということにある。イエスのお言葉と他の人々の言葉とヨハネの言葉を区別することはしばしば不可能である。多くの学者達は16~19節が著者ヨハネの言葉であると主張している(3: 14-21を参照)。

1: 16「満ちあふれる豊かさ」これはギリシャ語の用語 *pleroma* である。グノーシス主義者の偽教師達は崇高なる神とより下位の霊的存在との間の諸天使階層を言い表すためにこの用語を用いた。イエスは神と人との間の唯一の仲介者(つまり真にただお一人の完全なるお方)でいらっしやる(コロサイ 1: 19、2: 9、エペソ 1: 23、4: 13 を参照)。ここでも使徒ヨハネは初期教会の時代のグノーシス主義の現実観を攻撃しているようだ。

NASB、NRSV 「恵みの上にさらに恵みを受けたのである」

NKJV 「恵みの上にさらに恵みを受けたのである」

TEV 「余りあるほどの祝福を受けたのである」

NJB 「余りあるほどの賜物を受けたのである」

解釈上の問題はどのように「恵み」を理解するかということである。「恵み」とは

1. 救いによる、キリストに現れている神の慈み
2. クリスチャンの生活における神の慈み
3. キリストを通じた新しい契約に現れている神の慈み

であろうか。ここでの重要な概念は「恵み」である。神の恵みは驚くほどはっきりとイエスの受肉に現れている。イエスは墮落した人類にとっての神の「そうである」である(Ⅱコリント1: 20を参照)。

1: 17「律法」モーセの律法は悪いものではないが、完全な救いを与えるということに関する限りは予備的で不完全であった(5: 39-47、ガラテヤ3: 23-29、ローマ4章)。ヘブル人への手紙もモーセとイエスの働き(御業)と啓示と契約を対照し比較している。

特別なトピック: モーセの律法についてのパウロの見方

それは良いもので、神から来る(ローマ 7: 12 と 16 節を参照)

- A. それは義への道ではなく、また神に受け入れられる道ではない(それは呪いでさえありうる、ガラテヤ3章を参照)
- B. それは信じる人々への神の御意志でもある。なぜならそれは神が御自身でなさる啓示だからだ(パウロは信じる人々に罪を悟らせるために、あるいは信じる人々を励ますためにしばしば旧約聖書を引用する)。
- C. 信じる人々は旧約聖書から知識を得る(ローマ 4: 23-24、15: 4、Ⅰコリント 10: 6 と 11 節を参照)が、旧約聖書によっては救われない(使徒行伝 15 章、ローマ 4 章、ガラテヤ3章、ヘブル人への手紙を参照)。
- D. それは新しい契約の中で次のような機能を果たす:
 1. 罪深さを示す(ガラテヤ 3: 15-29 を参照)
 2. 救われた人を社会に導く
 3. 道徳上の決断ができるようにクリスチャンを教える

モーセの律法についてのパウロの見方を理解しようとするうえで問題となるのは、呪いと死から祝福と永遠までのこの神学的範囲である。自著 *A Man in Christ* の中で James Stewart はパウロの逆説的思考と著述について述べている：

「あなた(読者)は、自分の用いた用語の意味をできるだけはっきりと決めるための思考体系と原則を自らの内に作り上げていた人を普通に予想しただろう。あなたはその人が、自分の主張する考えの表現法の正確さに主眼を置くことを予想しただろう。あなたはある単語が、あなたが読んでいる本の作者によって一旦ある特別な意味で用いられれば、終始(その本全体で)その意味を持ち続けることを求めるだろう。しかし、このようなことをパウロに求めればあなたは失望することになるだろう。彼の表現法の多くは固定的ではなく流動的である。．．「律法は神聖です」、「内なる人としては私は神の律法を喜んでいます」(ローマ 7: 12 と 22 節を参照)と彼は記すが、それは明らかに、他の箇所でも彼に「キリストは律法の呪いからわたしたちを救いだして下さいました」(ガラテヤ 3: 13 を参照)と言わせているもう一つの *nomos* の特徴である。」(26 ページ)。

「恵み」 これは墮落した人類にとって身に余る(身分不相応な)、つまり受けるに値しない神の愛(エペソ 2: 8 を参照)を指す。この用語「恵み」(*charis*) はパウロの著書では非常に重要であり、ヨハネの福音書ではこの段落でのみ使用されている(1: 14、16 節、17 節を参照)。新約聖書の著書らは神の啓示を受けて自由に独自の語彙や類推や比喻を用いた。

イエスはエレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 22-38 の「新しい契約」を現実のものとされた。

「真理」 これは(1) 忠実さ、あるいは(2) 『真実』対『嘘』(1: 14、8: 32、14: 6 を参照)の意味で用いられている。恵みと真理はともにイエスを通してもたらされることに注意せよ(14 節を参照)。17: 3 の特別なトピックを見よ。

「イエス」 これはヨハネの福音書の序文で最初に用いられている人名で、マリアの息子の名前である。すでに存在しておられる神の御子は今や受肉された神の御子となられたのだ。

1:18「いまだかつて神を見た者はいない」 解説者達の中にはこれが出エジプト 33: 20-23 と矛盾していると言っている。しかし、出エジプト記中のこのヘブライ語の用語は、神ご自身の肉眼による目視ではなく「残光」を意味する。この段落が主張しているのはイエスだけが完全に神を顕しておられるということである(14: 8 以降を参照)。罪深い人間の中でいまだかつて神を見た者はいない(6: 46、I テモテ 6: 16、I ヨハネ 4: 12 と 20 節を参照)。

この節はナザレのイエスだけに顕わされた神の啓示を強調している。イエスには神御自身が完全にそして唯一顕わされている。イエスを知ることは神を知ることである。イエスは父なる神御自身の究極の啓示でいらっしやる。イエスを考慮に入れないで神をはっきりと理解することはできない(コロサイ 1: 15-19、ヘブル 1: 2-3 を参照)。イエスは父なる神を「御覧になり」、そして信徒はイエス(の御生涯、御言葉、御業)を通して父なる神を「見る」のである。イエスは目に見える神の究極の完全なる啓示でいらっしやる(コロサイ 1: 15、ヘブル 1: 3 を参照)。

NASB 「ひとり子なる神」

NKJV 「ひとり子なる御子」

NRSV 「神のひとり子なる御子」

TEV 「ひとり子なる御子」

NJB 「ひとり子なる御子」

1: 14の *monogenes* についての記述を参照しなさい。イエスは完全なる神であり、また完全なる人間でいらっしゃる。1: 1 についての全ての記述を参照しなさい。

この聖書箇所ギリシャ語訳は様々ある。神を意味する *Theos* は古代のギリシア語写本 P⁶⁶、P⁷⁵、B および C 中に見られ、一方「御子」は MSS の A と C³ 中でのみ「神」と置き換わっている。UBS⁴ は「神」をランク B (ほぼ確実) と定めている。用語「御子」はおそらく書記に由来するものであり、ヨハネ 3: 16 と 18 節および I ヨハネ 4: 9 の「ひとり子なる御子」を連想させる (Bruce M. Metzger 著 *Textual Commentary on the Greek New Testament* の 198 ページを参照)。これはイエスの完全な神性の強い肯定なのだ。この節にはイエスの 3 つの称号、つまり (1) ひとり子なる方 (2) 神および (3) 父なる神のみふところにおられる方、が見られるようだ。

Bart D. Ehrmans 著 *The Orthodox Corruption of Scripture* の 78~82 ページには公認書記によってこの原典が意図的に改ざんされた可能性についての興味深い議論がある。

「父なる神のみふところにおられる方」これは 1 節および 2 節の聖句「神とともに」と意味上とてもよく似ている。この聖句は親密な交わりについて述べている。この聖句は (1) 以前からあった、神との交わり (2) 御子イエスが回復された、神との交わり (つまり昇天) を指している。

NASB 「この方が神を説き明かされたのである」

NKJV 「この方が神を公表されたのである」

NRSV、NJB 「神を知らしめた方」

TEV 「この方が神を知らしめたのである」

1: 18 で用いられているこのギリシャ語の用語から英語の用語 *exegesis* (文字通り「導き出す」の意味。アオリスト中間態 [異態] 直説法動詞) が派生したが、その意味は完全な啓示である。イエスの主な御業の 1 つは父なる神を明らかにすることであった (ヨハネ 14: 7-10、ヘブル 1: 2-3 を参照)。イエスを見て知ることは父なる神を見て知る (罪人を愛すること、弱者を助けること、見捨てられた人を受け入れること、子供と女性を受け入れること) なのだ。

このギリシャ語の用語はメッセージや夢または文書を説明あるいは解釈する人々の意味で用いられました。ここでもヨハネは (1 節の *Logos* と同様に) ユダヤ人と異邦人の両方を特定する意味の用語を用いているようだ。ヨハネは自著の序文でユダヤ人とギリシャ人とを関連づけようとしている。この用語の意味は

1. 律法を説明あるいは解釈するユダヤ人
2. 神々を説明あるいは解釈するギリシャ人

であろう。イエスの中に、つまりイエスお一人の中に人類は十分に父なる神を見て理解するのだ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. Logosとその古代の宗教における用法および世俗的・聖書的用法を定義しなさい。
2. なぜイエスの既存の教義は非常に重要なのか。
3. 救いにおける人類側の条件とは何か。人はどのようにイエスを受け入れるのか。
4. なぜ御言葉は肉になる必要があったのか。
5. この段落を要約することはなぜとても困難なのか。
6. イエスを言い表すために用いられている様々な神学的真理を挙げなさい(少なくとも8つ)。
7. なぜ18節は非常に重要なのか。

19～51節の文脈の考察

- A. 洗礼者ヨハネに関するこの段落では初期教会の2つの誤解が取り扱われている。
1. 洗礼者ヨハネの人格について形成され、6～9節と20、21、25節と3: 22-36で議論されている誤解
 2. キリストの御人格に関係し、32～34節で取り扱われている誤解。これと同じグノーシス主義の異端は I ヨハネ1章で同様に批判されている。ヨハネの手紙第一はヨハネの福音書の前置きの手紙であったと思われる。
- B. ヨハネの福音書には洗礼者ヨハネによるイエスの洗礼についての記述がない。教会における諸儀式、特に洗礼式と聖餐式はヨハネの福音書の中のキリストの御生涯についての記述の中に全く見られない。このようにそれらの記述が全く見られない理由は少なくとも2つ考えられる。
1. 初期教会において礼典主義が台頭してきたのでヨハネはキリスト教のこの側面を強調するのを止めざるを得なかった。ヨハネの福音書儀式はではなく関係を重視している。彼は洗礼と主の晩餐という2つの神聖な儀式について議論あるいは記録を全くしていない。予想される可能性の高いことが書かれていなければそれは注目されることになる。
 2. 他の福音書の著者よりも後に自分の福音書を書いたヨハネは自分の福音書のキリストの御生涯についての記述を用いて他の福音書を補った。全ての共観福音書にこれらの儀式が記されているので、ヨハネの福音書には関連する出来事イベントについての追加情報だけが補足されている。その例は実際の晩餐自体ではなく二階部屋で行なわれた会話と出来事(13～17章)と言えるだろう。
- C. この記述ではイエスの御人格に関する洗礼者ヨハネの証言が強調されている。ヨハネはキリ

スト教学の観点から次のように述べている。

1. イエスは神の子羊でいらっしゃる(29節)。これはこと黙示録でのみ用いられるイエスの称号である。
2. イエスはすでにおられる方である(30節)。
3. イエスは聖霊を受けられそして与えられる人である(33節)。
4. イエスは神の御子でいらっしゃる(34節)。

D. イエスの御人格と御業についての真理は

1. 洗礼者ヨハネ
2. アンデレとシモン
3. ビリポとナタナエル

の個人的な証言によって発展した。これは福音書全体に共通する文章技法となる。それにはこれらの人々のイエスについての証言やイエスとの対話が27件含まれている。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 1: 19-23

¹⁹ヨハネの証しはこうである。ユダヤ人たちがエルサレムから祭司たちやレビ人たちをヨハネのもとに遣わして「あなたはどなたですか」と問わせたとき、²⁰彼は告白して否まず「わたしはキリストではない」と公言した。²¹彼らが「それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか」と問うと、彼は「違う」と言った。「では、あの預言者ですか」と問うと、彼は「そうではない」と答えた。²²そこで彼らは言った「あなたはどなたなのですか。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければならぬのでお答え下さい。あなたは御自身を誰だとおっしゃるのですか」。²³彼は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で呼ばれる者の声である」。

1: 19「ユダヤ人たち」ヨハネの福音書ではこれは(1)イエスに敵対していたユデアの人々あるいは(2)ユダヤ教の指導者達のみ(2: 18、5: 10、7: 13、9: 22、12: 42、18: 12、19: 38、20: 19を参照)を指す。学者達の中には軽蔑的に、あるユダヤ人が他のユダヤ人と同じ考え方をすることはありえないと主張する者もいる。しかし、ユダヤ人のキリスト教への反発は紀元90年のヤムニアの評議会の後に激化した。

用語「ユダヤ人」は本来ユダ部族出身のある人に由来する。紀元前922年に十二部族が分かれ出た後、ユダは南部の3つの部族の名前となった。2つのユダヤ人の王国、つまりイスラエルとユダの民は亡命したが、紀元前538年のキュロス王の勅令によって戻ることができたのは主にユダ部族出身のごくわずかな人々であった。その後この用語は、パレスチナに住みやがて地中海世界全体に散らばっていったヤコブの子孫の呼び名となった。

ヨハネの福音書ではこの用語は主に負の意味を持つが、その一般的な用法は2: 6および4: 22に見られる。

「祭司たちとレビ人たち」 洗礼者ヨハネが祭司の子孫(ルカ1: 5以降を参照)でもあったことは明らかである。用語「レビ人たち」がヨハネの福音書で見られるのはここだけである。彼らは神殿の警護をしていた人々だと思われる。これはエルサレムの宗教団体から送り込まれた公的な「捜査官」のグループであった(24節を参照)。祭司とレビ人は通常はサドカイ人であり、律法学者は通常はパリサイ人(24節を参照)であった。これらのグループはどちらも洗礼者ヨハネに質問した。政治的・宗教対抗勢力は協力してイエスとその信者に反発した。

「あなたはどなたですか」 これは8: 25でイエスが受けられた質問と同じである。ヨハネの教えと行為およびイエスの教えと御業に公の指導者達は不快感を示した。なぜなら彼らはヨハネとイエスの言動の中に特定の旧約聖書の終末論的テーマと用語があるのに気付いたからである。従ってこの質問は終わりの時に、つまり新しい世に現われることになる人物へのユダヤ人の期待に関連している。

1: 20「彼は告白して否まず...と公言した」 この発言では、洗礼者ヨハネが期待された約束のメシア(キリスト)であることが強く三回否定されている。「告白」については9: 22-23の特別なトピックを見よ。

「キリスト」 「キリスト」は「油注がれた者」を意味するヘブライ語の用語「*masiah*」をギリシャ語訳した用語である。旧約聖書では油注ぎの概念は神の特別な召しを強調し特別な仕事に備える方法であった。王、祭司、および預言者は油を注がれた。後に「キリスト」は義の新しい世をもたらしてくださることになっている特別な方を指す用語とみなされるようになった。多くの人は洗礼者ヨハネがこの約束されたメシアと考えた(ルカ 3: 15を参照)。なぜなら彼は400年ほど前の旧約聖書の著述家達以来最初の、神の啓示を受けたYHWHの代弁者だったからである。

この観点から私は「メシア」についてのダニエル9: 26での私の見解を付け加えたいと思う。

ダニエル9:26

NASB 「メシア」

NKJV 「メシア」

NRSV 「油注がれた者」

TEV 「神が選ばれた指導者」

NJB 「油注がれた方」

この節の解釈が難しいのは用語「救世主」つまり「油注がれた者」(BDB603)に関連して何通りも意味が考えられるからである。

1. ユダヤ人の王の意味で用いられている(例えば I サムエル2: 10、12: 3)
2. ユダヤ人の司祭の意味で用いられている(例えばレビ4: 3と5節)
3. キュロスの意味で用いられている(イザヤ45: 1を参照)
4. 説1と説2(上述)は詩篇110篇とゼカリヤ4章に統合される。
5. 新しい義の世をもたらすために神が特別に選ばれた、来たるべきダビデの子孫なる王の意

味で用いられている

- a. ユダの家系(創世記 49: 10を参照)
- b. Jesseの家(Ⅱサムエル7章を参照)
- c. 普遍的な統治(詩篇2篇、イザヤ9: 6と11: 1-5、ミカ5: 1-4以降を参照)

私は「油そそがれた者」をナザレのイエスとする説に個人的に興味を持っている。というのは

1. 第2章において第4帝国の間の永遠の王国が紹介されている。
2. 7: 13において永遠の王国をもたらす「人の子」が紹介されている。
3. 9: 24に墮落した世界の歴史の最高潮を指す贖いの聖句がある。
4. 新約聖書においてイエスがダニエル書を引用されている(マタイ24: 15、マルコ13: 14を参照)。

からである。

1: 21『**『それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか』** エリヤは死んだのではなく旋風(つむじ風)に巻き上げられて天国に入った(Ⅱ列王記2: 1を参照)ので、メシアの前に来ることが期待された(マラキ3: 1と4: 5を参照)。洗礼者ヨハネはエリヤを見倣い、エリヤとほぼ同様に活動した(ゼカリヤ13: 4を参照)。

『**『違う』**』 洗礼者ヨハネは自身をエリヤのような終末論を説く役割を果たす者とはみなさなかったが、イエスは御自身をマラキの預言が成就した存在としての役割を果たす人とみなしておられた(マタイ11: 14と17: 12を参照)。

『**『あなたはあの預言者ですか』**』 モーセは自分のような人(彼はその人を「あの預言者」と呼んだ)が自分の後に来るだろうと預言した(申命記18: 15と18節、ヨハネ1: 25と6: 14と7: 40、使徒行伝3: 22-23と7: 37を参照)。この用語は新約聖書において二つの相異なる方法で用いられている(1)メシアとは明らかに異なる終末論的人物の意味で[7: 40-41を参照](2)メシアと同一視される人物の意味で[使徒行伝3: 22を参照]。

1: 23『**『わたしは荒野で呼ばれる者の声である』**』 これはセプトウアギンタ(旧約聖書のギリシャ語訳)中のイザヤ40: 3からの引用であり、マラキ 3: 1中で言い換えられている内容を暗示している。

『**『主の道をまっすぐにせよ』**』 これは奴隷の歌が記されているイザヤ書の文章単位(40~54章)からの引用(イザヤ40:3)である(42: 1-9、49:1-7、50: 4-11、52: 13~53: 12を参照)。それらの聖書箇所は元々イスラエルを指していたが、52:13~53:12ではその聖句は擬人化されている。道をまっすぐにするという概念は王室の訪問の準備のために用いられた。用語「まっすぐ」は用語「義」の語源と関連がある。I ヨハネ2: 29の特別なトピックを見よ。

この段落全体には、洗礼者ヨハネを霊的指導者とみなすいくつかの異端のグループが紀元1世紀に台頭してきたことを理由として使徒ヨハネが洗礼者ヨハネを軽視する神学的意図が言い表わされている。

NASB(改訂版)原典: 1: 24-28

²⁴ 遣わされた人たちはパリサイ派に属していた。²⁵ 彼らはヨハネに尋ねて言った「では、あなたはキリストでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのなら、なぜ洗礼を受けているのですか」。²⁶ ヨハネは彼らに答えて言った「わたしは水で洗礼を受けるが、あなたがたの中にはあなたがたの知らない方がおられる。²⁷ その方はわたしのあとに来られる方で、わたしはその方の履物のひもを解く値うちもない」。²⁸ これらのことは、ヨハネが洗礼を受けていたヨルダン川の向こうのベタニヤでの出来事であった。

1: 24「遣わされた人たちはパリサイ派に属していた」この聖句はあいまいである。それは(1)パリサイ人がヨハネに質問する者達を送った(19節を参照)、あるいは(2)質問する達者はパリサイ人であり、このことは多くの司祭がサドカイ人(9節を参照)であったという事実と照らして考えると異常なことである、ということの意味するようだ。それは19節に登場するグループとは別のグループを指しているようだ。

特別なトピック: パリサイ人

I. この用語は以下に示す語源のうちの1つに由来すると考えられる。

- A. 「分けられる」 この会派はマカベア(マカバイ)家の時代に生まれた(これが最も広く受け入れられている見方である)。
- B. 「分ける」 これは同じヘブル語幹のもう一つの意味である。研究者の中にはそれが解釈者を意味したのだと言う者もいる(Ⅱテモテ 2: 15 を参照)。
- C. 「ペルシア人」 これは同じアラム語幹のもう一つの意味である。パリサイ人の教義の中にはペルシアのゾロアスター教(拝火教)の二元論と多くの共通点を持つものがある。

II. 彼らはマカベア(マカバイ)家の時代に *Hasidim*(敬虔な人々)から派生した。エッセネ派(訳者注: 紀元前2世紀から紀元1世紀末までパレスティナにあったユダヤ教の一派。禁欲と財産共有が特色)のような他の会派のいくつかはアンティオコス4世エピファネス(訳者注: セレウコス朝シリアの王。紀元前 215 年-164 年[在位 175 年-164 年])に対する反ヘレニズム運動から生まれた。パリサイ人は Josephus の *Antiquities of the Jews* の 8.5.1-3 に最初に述べられている。

III. 彼らの主な教義

- A. 来るべきメシア(救世主)への信仰 これは I エノクのような聖書外典的なユダヤ教の黙示文学に影響を受けている。
- B. 日々の生活に生きておられる神 これはサドカイ人とは正反対である。パリサイ人の教義の多くはサドカイ人の教義とは神学的に対称的であった。
- C. 地上での人生に基づく現実志向のその後の人生 これは報いと罰を伴う(ダニエル 12 章 2 節を参照)。
- D. 旧約聖書と口述の伝統の権威 (*Talmud*) 彼らはラビである学者達(保守的な Shammai

と自由主義の Hillel) が解釈し適用している通りに旧約聖書の神のご命令に意識的に従っていた。ラビの解釈は、2つの異なる思想、つまり保守的な考えと自由主義、を持つラビ達の対話に基づいていた。聖句の意味についてのこれらの口頭での議論は最終的に2つの形式、つまりバビロニアのタルムードと未完成のパレスティナのタルムードに書きまとめられた。彼らはモーセがシナイ山上でこれらの口頭による解釈を受けたと信じていた。これらの議論は歴史的にはエズラと「大いなるシナゴグ」(後にサンヘドリンと呼ばれる)の人々によって始められた。

E. 高度に発達した天使論 これには善と悪の霊的存在が関係する。これはペルシアの二元論と聖書外典的なユダヤ教の文学から生まれた。

1: 25『では、あなたはなぜバプテスマを授けているのですか』 改宗のための洗礼は古代ユダヤ教において回心を望む異邦人達にとって規範であったが、洗礼を受けることはユダヤ人自身にとってきわめて異常なことであった(Qumran派のユダヤ人達は自己洗礼を行い、神殿で礼拝しようとする人々は神殿に入る前に沐浴した)。この聖句にはイザヤ52: 15、エゼキエル36: 25、およびゼカリヤ13: 1から暗示されるようなメシアに関する内容が含まれているようだ。

「なら」これは著者の視点から、あるいは著者の文章上の意図に忠実であると思われる第一種条件文である。

「キリストでも、エリヤでも、またあの預言者でもない」 死海文書においてこれらの3人の人物が、エッセネ派の見解による3人の相異なるメシア的人物を表しているのは興味深い。初期教会の指導者達の中に、キリストの再臨の前にエリヤが来ると信じていた者がいたことも興味深い(クリュストモス、Jerome、グレゴリウス、およびアウグスティヌスの著書を参照)。

1: 26「わたしは水で洗礼を授ける」 前置詞「〜で」には「〜によって」という意味もある。選ばれるいかなる意味も「聖霊」に関する33節を言い換えた文と適合するに違いない。

「... が、あなたがたの中には... 方がおられる」 動詞「いる」の時制に関していくつかの文脈上の見解の違いがある。UBS⁴は完了時制を「B」(ほぼ確実)としている。

Bruce M. Metzgerは(自著199ページで)完了時制がヨハネの福音書に特徴的であり、ヘブル語の成句「あなたがたの真中に立っておられる方がおられる」を暗示していると主張している。

1: 27「わたしはその方の履物のひもを解く値うちもない」 これは、自分の主人が家に入るときに主人の履物のひもを解くという奴隷の仕事(奴隷のする仕事の中で最も低級で最も賤しいものと考えられていた)を指している。ラビの説くユダヤ教は、ラビの弟子はラビの履物のひもを解くこと以外の、奴隷が喜んでする全てのことを喜んですべきであると主張した。これには履物を脱がせて指定された保管場所にその履物を持って行くという言葉の意味もある。これは極端な謙虚さの比喩である。

1: 28「ベタニヤ」 欽定訳聖書では「ベタバラ」(MSS^{x2}、C²)の名で登場する。これは欽定訳聖書の翻訳者がこの都市の位置についてのOrigenの誤解(と地名の寓意的な解釈)を信用したことによ

るものであった。正しくは、エルサレムの南東にある都市(11: 18を参照)ではなく、エリコからヨルダン川(の東岸)に沿って移動した所にある都市のベタニヤ(Bethanienパピルス、P⁶⁶)である。

NASB(改訂版)原典: 1: 29-34

²⁹その翌日、ヨハネはイエスが自分の方に来られるのを見て言った「見よ、世の罪を取り除く神の小羊である。³⁰『わたしに優る方がわたしの後に来られる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。³¹ わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れてくださるように、わたしは水で洗礼を授けに来た。』³² ヨハネは証しをして言った「わたしは、霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまるのを見た。³³ わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるようにとわたしをお遣わしになったその方がわたしに言われた『霊が下ってある方の上にとどまるのを見たら、この方が聖霊によって洗礼を授ける方である』。³⁴ わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証しをしたのである」。

1: 29「見よ、神の子羊」 過越の祭りが近づいていた(2: 13を参照)。だからこれは多分エジプトからの救出(つまり救い。出エジプト12章を参照)を象徴する過越の子羊を指すと思われる。ヨハネの福音書でもイエスが亡くなった日は過越の子羊が殺された日(つまり「準備の日」と同じ日とされている。しかし、他の解釈も行われてきた。

1. それはイザヤ53: 7に登場する苦しむしもべを指しているようだ。
2. それは創世記22: 8と13節の茂みに身を捕われた動物を指しているようだ。
3. それは「絶えざるいけにえ」と呼ばれる、神殿での日ごとの捧げ物(出エジプト29: 38-46を参照)を指しているようだ。

直感的にどのように連想しようとも、子羊が送られたのはいけにえとする目的のためであった(マルコ10: 45を参照)。

イエスの犠牲的な死に対するこの強烈な比喩をパウロは決して用いておらず、ヨハネはごく稀にしか用いていない(1: 29と36節および使徒行伝8: 32とI ペテロ1: 19を参照)。相当するギリシャ語の用語は「小さな子羊」(「小さな」と呼ばれるのはその子羊がわずか1歳であり、通常はいけにえの捧げ物とされる年齢であるからである)を意味する。これと別の用語はヨハネ9: 15で、そして黙示録では28回用いられている。

洗礼者ヨハネの比喩的表現にはもう一つの更なる意味がこめられているようだ。聖書外典と黙示文学では「子羊」は勝利の戦士と表現されている。いけにえという側面がありながらも、終わりの時の裁き人としての子羊は元から貴い方でいらっしゃる(黙示録5: 5-6と12~13節を参照)。「世の罪を取り除く」 聖句「取り除く」は「取り除き、そして身に負う」の意味であった。この動詞はレビ記16章の「迷える羊」の概念にとてもよく似ている。世の罪が示されているという事実自体は子羊の御業の普遍的な性質を暗示している(9節、3: 16、4: 42、I テモテ2: 4と4: 10、テトス2: 11、I II ペテロ3: 9、I ヨハネ2: 2と4:14参照)。罪は単数形ではなく複数形であることに注意しよう。イエ

スは世の「罪」の問題を取り扱っておられた。

1: 30「**この方がわたしよりも先におられたからである**」これは強調のための15節の繰り返しである。これもメシアが世の存在する前からおられたこととメシアの神性の強調である(ヨハネ1: 1と15節、8: 58、16: 28、17: 5と24節、Ⅱコリント8: 9、ピリピ2: 6-7、コロサイ1: 17、ヘブル1: 3を参照)。

1: 31「**この方がイスラエルに現れてくださるように**」これはヨハネの著書によく見られる聖句である(2: 11、3:21、7: 4、9: 3、17: 6、21: 14、Ⅰヨハネ1: 2、2: 19と28節、3: 2、5: 8、4: 9を参照)が、共観福音書では稀で、マルコ4: 22にだけ見られる。これはヘブル語の用語「知る」に関する言葉遊びであり、ある人についての事実以上のその人との個人的な交わりについて述べている。洗礼者ヨハネが洗礼を授ける目的は2つあった。ひとつは(神の)人を備えるためであり、もうひとつはメシアを明らかにするためである。

ヨハネの著書ではこの動詞「現れる」(*phaneroo*)の代わりに「顕れる」(*apokalupto*)が用いられているようだ。イエスが神の御人格とメッセージを明らかにされているのは確かなことなのだ。

1: 32-33 ここでは、聖霊が来られてイエスの上にとどまられるのをヨハネが見たという事実が3回強調されている。

1: 32「**霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまるのを**」これはイザヤ書(40~66章)に記されている、メシアを認識するための方法であった(イザヤ42: 1、59: 21、61: 1を参照)。これは、イエスがこの時代以前に聖霊を持っておられなかったことを意味しているのではない。それは神の特別な選びと備えの象徴であった。それは主にイエスではなく洗礼者ヨハネに関する事柄であったのだ。

ユダヤ人には、現在の悪の世と来るべき義の世という2つの世についての世界観があった(Ⅰヨハネ2: 17の特別なトピックを見よ)。新しい世は聖霊の世と呼ばれた。この幻は、この方がメシアであることと新しい世が始まっていることを洗礼者ヨハネに語っていると思われる。

「鳩」これは次のような意図で用いられている。

1. ラビが主張しているように、イスラエルの象徴(ホセア7: 11)として
2. タルガムの中の創世記1: 2にあるように、雌鳥が「卵を抱く」ように聖霊が被造物の上にとどまられることの暗示として
3. フィロが主張しているように、知恵の象徴として
4. 聖霊が降られる様子の比喻として(霊は鳥ではない)

「とどまる」Ⅰヨハネ2: 10の特別なトピック「ヨハネの著書における『絆』」を見よ。

1: 33「**わたしはこの方を知らなかった**」これは洗礼者ヨハネがイエスを全く知らなかったということではなく、メシアなるイエスを知らなかったことを意味する。親戚と同じように、家族の集まりや宗教的な集まりで長年にわたって彼らが会っていたことは確かである。

「**水で洗礼を授けるようにとわたしをお遣わしになったその方がわたしに言われた**」他の旧約聖書の預言者達に対するのと同じように神はヨハネに対して語られた。ヨハネは自分の授ける洗礼で起こるこれらの特別な出来事を通してメシアを知ることになった。

ヨハネの授ける洗礼は宗教的権威を示唆した。エルサレムからの公式訪問団(19~28節を参照)はこの権威の源を知りたがった。洗礼者ヨハネはその権威がイエスであるとした。イエスの授けられる霊の洗礼はヨハネの授ける水の洗礼に優る。イエス御自身の受けられた水による洗礼は霊による洗礼のしるし、つまり新しい世を迎えることとなるのだ。

「この方が聖霊によって洗礼を授ける方である」 I コリント12: 13から考えると、この概念はある人を無条件で神の家族に加えることと関連していると思われる。聖霊は罪を定められ、キリストに哀願され、キリストに洗礼を授けられ、新しい信徒の内にキリストを形造られる(ヨハネ16: 8-13を参照)。I ヨハネ2: 20の特別なトピック「聖なる方」を見よ。

1: 34「わたしはそれを見た。だから、証しをしたのである」 これらはどちらも、完了しつつ継続中の過去の行為を意味する完了形能動態直説法動詞である。これは I ヨハネ1: 1-4ととてもよく似ている。

「この方こそ神の子であると」 一つの疑問は、通常「しもべ」と訳され、LXX中のヘブライ語の用語(「*ebed*」、BDB712)を反映しているギリシャ語の用語 *pais* が「御子」の背景的事情と考えられるかということである。もしそうならイザヤ53章は(1: 29の神の「子羊」と同じように)ダニエル7: 13に代わる旧約聖書中の(御子の)暗示である。イエスは御子でいらっしやると同時にしもべでいらっしやるのだ。イエスは信徒を「しもべ」ではなく「子」に変えられるのだ。

これと同じ呼び名はヨハネ1: 49でナタニエルが用いている。また、マタイ4: 3でサタンが用いている。MSS P⁵と^{κ*}には興味深いギリシャ語原典中の用語の相異が見られ、そこでは「神の子」の代わりに「神の選ばれた方」が用いられている(UBS⁴は「神の子」を「B」に定めている)。聖句「神の子」はヨハネの福音書によく見られる。しかし、原典批判の合理主義に従うなら、最も不自然で異常な言葉遣いは多分原文の通り、原典の数が限られているとはいえ、少なくとも意識の行なわれた可能性がある。Gordon Feeは *The Expositor's Bible Commentary* の序巻中の自分の記事「新約聖書の原典批判」の419~433ページでこの原典中の用語の相異について議論している。

「ヨハネ1: 34で洗礼者ヨハネは『この方こそ神の子である』(KJV、RSV)または『この方こそ神の選ばれた方である』(NEB、JB)と言っているだろうか。現実にはMSの中で、しかも古代の原典の間でさえも表現が分かれている。「御子」は主要なアレキサンドリアの原典(P⁶⁶、P⁷⁵、B、C、Lcop^{bo})およびいくつかのOL(aur、c、fig)ならびに後の時代のシリアの原典の中に見られ、「選ばれた方」はアレクサンドリアのP⁵、^κ、cop^{sa}およびOLのMSSのa、b、e、ff²、そして古代のシリアの原典の中に見られる。

疑問は最終的に内的根拠に基づいて解決されなければならない。写本の過程において生じ得る用語の相異に関してはっきりしていることは一つである。つまり用語の相異は偶発的ではなく意図的であるということである(Bart D. Ehrman著 *The Orthodox Corruption of Scripture* の69~70ページを参照)。しかし紀元2世紀の書記はある種の養子論的キリスト教学を支持するために原典を書き変えたのだろうか、あるいは正統派の書記が養子論を支持するために「選ばれた方」を訳語として採用し、正統な理由からその用語に書き変えたのかもしれないということなのだろうか。

可能性の点からいえば後者である可能性は非常に低い。というのはこの(ヨハネの)福音書の中に養子論者の見解に合わせることを意図した用語「御子」の変更がどこにも見られないからである。

しかし最終決定は聖書解釈を踏まえたものでなければならない。洗礼者ヨハネの言葉がメシアを強調していてキリスト教神学的ではないことはほぼ確実であるので、問題はそれが詩篇2: 7あるいはイザヤ42: 1のような文章のメシア主義を反映しているかどうかということになる。受難あるいは復活祭、そしてヨハネ1: 29の主題である子羊に注目すれば、「選ばれた方」という用語がこの(ヨハネの)福音書の文脈に合っているということは確かに議論の余地がある(431~432ページ)。

NASB(改訂版)原典: 1: 35-42

³⁵その翌日、またヨハネは二人の弟子たちと一緒に立っていた。³⁶そしてイエスが歩いておられるのを見て言った「見よ、神の小羊だ」。³⁷二人の弟子はヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った。³⁸イエスは振り返り、彼らがついてくるのを見て言われた「何を求めているのか」。彼らは言った「ラビ(訳すと『先生』の意味)、どこにお泊まりなのですか」。³⁹イエスは彼らに言われた「来なさい。そうすれば分かる」。そこで彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そして、その日はイエスのもとに泊まった。午後4時頃であったからである。⁴⁰ヨハネの言葉を聞いてイエスについて行った二人のうちの一は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。⁴¹彼はまず自分の兄弟シモンに会って言った「わたしたちはメシア(訳すと『キリスト』の意味)に出会った」。⁴²彼はシモンをイエスのもとに連れて行った。イエスは彼を見て言われた「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケファ(訳すと『ペテロ』)と呼ぶことにする」。

1: 35「二人の弟子たち」 マルコ1: 16-20はこれら2人の弟子の召しに関する別の記述のようだ。イエスとガリラヤ人の弟子たちの出会いがどのくらい前に起こったかは明らかではない。イエスの時代にはラビの常時追従者になる過程で特別な訓練段階があった。これらの手順はラビの教書には詳細に記されているが、この(ヨハネの)福音書には明確に記されていない。登場する2人の弟子達はアンデレ(40節を参照)と使徒ヨハネ(自身の名を自身の福音書中に登場させていない)。

用語「弟子」は(1)学ぶ者と(2)ついてくる者の2つの意味を表すようだ。これは、約束されたユダヤの救世主なるイエス・キリストの信徒につけられた古い名前だった。新約聖書における召しとは単に意思決定することだけでなく(イエス・キリストの)弟子となることである(マタイ13章と28章18~20節を参照)ことに注意することが重要である。キリスト教とは最初の意思決定(悔い改めと信仰)とそれに続く服従と忍耐という進行形の意味決定と忍耐である。キリスト教とは火災保険証書や天国への切符ではなく、イエスとの毎日の主従および友好の関係である。

1: 37「二人の弟子はヨハネがそう言うのを聞いて」 洗礼者ヨハネは自身の背後にイエスを指し示した(3: 30を参照)。

1: 38「ラビ(訳すと『先生』の意味)」これはモーセの律法と口頭伝承(タルムード)の意味と適用方法を解義(釈義。詳しく説明)できる人々を指す、紀元1世紀のユダヤ教における一般的呼称であった。それは文字通り「私の御主人様」であった。使徒ヨハネはこの呼び名を「先生」と同じ意味で用いた(11: 8と28節、13: 13-14、20: 16を参照)。ヨハネが自分の用語を説明していることから(38節と41節と42節を参照)、彼がこの福音書を異邦人に向けて書いていたことがわかる。

「どこにイエスが泊まっておられるかを」これは、教師と生徒の間に独特の絆を築くための慣習的な手順に従っているように思われる。2人の弟子の問いかけは、これら2人の男性が途上でイエスへの質問に費すことができた時間(39節を参照)よりも多くの時間をイエスと過ごしたいと思っていたということの意味する。

用語 *meno* (「とどまる」の意味)は38節と39節に3回見られる。その語は現実の場所あるいは霊的な場所を指しているようだ。用いられている3箇所ではヨハネはこの語でも言葉遊びを意図しているようで、2つの意味が一緒にされており、こうした言葉遊びはヨハネの福音書にはとてもよく見られる(1: 1と5節、3: 3、4: 10-11、12: 32を参照)。この意図的な曖昧さはヨハネの著書の特徴なのだ。

1: 39「午後4時頃であった」それは、ヨハネが(1)午前12時または(2)夜明けに始まるローマ時間あるいは午後6時(たそがれ)に始まるユダヤ時間のどちらを用いたのかは明らかではない。ヨハネ19: 14をマルコ15: 25と比較する限りではヨハネはローマ時間を用いたようだ。しかし、Iヨハネ11: 9を見る限りでは、ヨハネはユダヤ時間を用いたようだ。多分ヨハネは両方を用い分けていたようだ。ここではローマ時間を用いたようで、時刻は上記(2)の午後4時頃であったと思われる。

1: 40「ヨハネの言葉を聞いた二人のうち一人」著者(使徒ヨハネ)は決して自身の福音書に自身の名を記していない(21: 2)。洗礼者ヨハネがこの(イエスが神の子羊でいっしやること)の宣言をするのを聞いた2人の弟子の一人がゼベダイの子ヨハネであったことは確かに疑う余地がないことである(マタイ4: 21、マルコ1: 19)。

1: 41

NASB 「彼はまず自分の兄弟に会った」

NKJV、NRSV 「彼はまず自分の兄弟に会った」

TEV 「すぐに彼は会った」

NJB 「まず最初にアンドレは...した」

翻訳に影響を与える原典中の表現の相異がある。それらの表現の相異とは次のようである。

1. アンドレが最初にしたこと
2. アンドレが最初に会った人
3. アンドレはまず行って話した

「メシア(メシア(訳すと『キリスト』の意味))」 1: 20の解説を見よ。

1: 42「イエスは彼を見た」この用語は「意図的に見ること」を指す。

「ヨハネの子シモン」ペテロの父親の名に関する新約聖書の記述はある混乱を招いている。マタ

イ16: 17でペトロは「ヨナ（'Ionas)の息子」と呼ばれているが、ここでは彼は「ヨハネ（'Ioannes)の息子」と呼ばれている。ヨハネという名はMSSのP⁶⁶、P⁷⁵、^κ、Lに見られる。MSのBにはこれと同じ名が見られるが、綴りの中の「n」は1つだけである（'Ioanes）。ヨナという名はMSSのA、B³、Kおよび後の時代のギリシャ語原典の大半に見られる。この疑問に対する明確な答えはないように思われる。綴りの相異はアラム語から訳された名によく見られる。

Michael Magillは自著 *The New Testament TransLine* の303ページでこのように言っている「『ヨナ』と『ヨハネ』という2つの名があるのは、『シモン』と『シメオン』の場合と同じように、同じヘブライ語の名をギリシャ語に訳す際に綴りの変化が生じたためと思われる」。

「あなたをケファ(訳すと『ペテロ』)と呼ぶことにする」用語「ケファ」は「岩」(*kepa*)を意味するアラム語の用語であり、ギリシャ語に入って *kephas* となった。この名は安定性、強度、そして耐久性のあるものを連想させるようだ。

これはこの(ヨハネの)福音書の著者が異邦人読者の助けとなるようにイエス・キリストの御生涯とお教えを説明した多くの解説のうちの一つである。

後に聖書解釈を意味するようになった2つの術語[専門用語](動詞)がこの章に見られることは興味深い。

1. 釈義、「導き出す」の意味、1: 18で用いられている。
2. 解釈学、「説明する」または「解釈する」あるいは「翻訳する」の意味、1: 42で用いられている。

NASB(改訂版)原典: 1: 43-51

⁴³その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされ、フィリポに出会われた。そこでイエスはフィリポに言われた「わたしに従いなさい」。⁴⁴ フィリポはアンデレとペテロの町ベトサイダの出身であった。⁴⁵ フィリポはナタナエルに出会って言った「わたしたちは、モーセが律法の中に記し、預言者たちも記していた方、ヨセフの子、ナザレのイエスに出会った」。⁴⁶ ナタナエルはフィリポに言った「ナザレから何か良いものが出るだろうか」。フィリポはナタナエルに言った「来て、見なさい」。⁴⁷ イエスはナタナエルが御自分の方に来るのを御覧になって、彼について言われた、「見よ、まことのイスラエル人だ。この人の内には偽りが無い」。⁴⁸ ナタナエルはイエスに言った「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて彼に言われた「フィリポがあなたに話しかける前に、あなたがいちじくの木の下にいるのをわたしは見た」。⁴⁹ ナタナエルはイエスに答えて言った「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。⁵⁰ イエスは答えて彼に言われた「あなたがいちじくの木の下にいるのを見たがわたしが言ったので信じるのか。これらよりもっと大きなことをあなたは見るであろう」。⁵¹ イエスはまた彼に言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るであろう」。

1: 43「その翌日」 ヨハネはこの福音書全体に時系列の指標(1: 29と35節と43節、2: 1等を参照)

を配置している。文脈全体は(1)第1日と思われる日について述べた19節で始まり(2)29節と35節と43節は「その翌日」について述べ(3)2: 1は「第3日」について述べている。

「イエスは．．．に行こうとされ」 共観福音書群に記録されていない、ユデアにおけるイエスの御業の初期をヨハネは記録している。ヨハネの福音書には主にユデア、特にエルサレムにおけるイエスの御業が記されている。しかしここではイエスは多分カナでの結婚式(ヨハネ2章)に出席されるためにガリラヤに行こうと考えておられたようだ。

「わたしに従いなさい」 これは現在形能動態命令法動詞である。これは永久的な弟子となるようにというラビの召しである。ユダヤ人はこの関係を定義する指針を定めていた。

1: 44「フィリポはベトサイダの出身であった」 この都市の名前は「漁師の家」を意味する。この都市はアンデレとペトロの故郷でもあった。

1: 45「ナタナエル」 これは「神が与えられた」という意味のヘブライ語の名前である。ナタナエルはこの名前で共観福音書に登場する。現代の学者はナタナエルが「バルトロマイ」と呼ばれていた使徒だと推定しているが、この説は単なる仮説に過ぎない。

特別なトピック:使徒名の表

	マタイ 10: 2-4	マルコ 3: 16-19	ルカ 6: 14-16	使徒1: 12-18
第一のグループ	シモン(ペテロ) アンデレ(ペテロの兄弟) ヤコブ(ゼベダイの息子) ヨハネ(ヤコブの兄弟)	シモン(ペテロ) ヤコブ(ゼベダイの息子) ヨハネ(ヤコブの兄弟) アンデレ	シモン(ペテロ) アンデレ(ペテロの兄弟) ヤコブ ヨハネ	ペテロ ヨハネ ヤコブ アンデレ
第二グループ	フィリポ バルトロマイ トマス マタイ(徴税人)	フィリポ バルトロマイ マタイ トマス	フィリポ バルトロマイ マタイ トマス	フィリポ トマス バルトロマイ マタイ
第三グループ	ヤコブ(アルパヨの息子) タダイ シモン(カナン人) ユダ(イスカリオテ)	ヤコブ(アルパヨの息子) タダイ シモン(カナン人) ユダ(イスカリオテ)	ヤコブ(アルパヨの息子) シモン(熱心党) ユダ(ヤコブの息子) ユダ(イスカリオテ)	ヤコブ(アルパヨの息子) シモン(熱心党) ユダ(ヤコブの息子)

「律法... 預言者たちも」これはヘブル語の正典の3つの区分、つまり律法と預言者の言葉とそれらが書物になったもの(紀元90年にヤムニアでも議論された)のうちの2つを指す。それは旧約聖書全体を参照するために用いられる用語である。

「ヨセフの子、ナザレのイエス」これはユダヤ人の用法に即して理解されなければならない。その当時イエスはナザレに住んでおられたが、その住んでおられた家の家庭の父親がヨセフと呼ばれていた。これは、ベツレヘムでのイエスの御誕生(ミカ5: 2を参照)も、イエスが処女からお生まれになったこと(イザヤ7: 14を参照)も否定するものではない。以下の特別トピックを見よ。

特別なトピック: ナザレのイエス

新約聖書ではイエスについて述べるためにいくつかの相異なるギリシャ語の用語が用いられている。

A. 新約聖書で用いられている用語

1. ナザレ

ガリラヤの都市(ルカ1: 26、2: 4と39節と51節、4: 16、使徒行伝10: 38を参照)。この都市は同時代の文献には登場せず、後の時代の碑文にその名が見られる。

イエスにとって、ナザレ出身であると言われることはほめ言葉ではなかった(ヨハネ1: 46を参照)。この地の名が含まれる、イエスの十字架上のしるしはユダヤ人の軽蔑のしるしだった。

2. *Nazarenos* -これも地理上の位置を指しているように思われる(ルカ 4: 34、24: 19を参照)

3. *Nazoraïos* -ある都市を指しているように思われるが、ヘブライ語でメシアを意味する用語「(英字表記で)Branch」(*netzer*、イザヤ4: 2、11: 1、53: 2、エレミヤ23: 5、33: 15、ゼカリヤ3: 8、6: 12、新約聖書では黙示録22: 16を参照)についての言葉遊びとも考えられる。ルカはこの用語を18: 37と使徒行伝2: 22、3: 6、4: 10、6: 14、22: 8、24: 5、26: 9でイエスを指して用いている。

4. 上記の3.に関して、「誓いにより聖別された人」という意味の*nazir* が用いられている。

B. 新約聖書以外の歴史的な用法

1. 「ナザレ人」とはユダヤ人(キリストが来られる以前)の異端グループ(アラム語の *nasorayya*)を示す。

2. 「ナザレ人」はユダヤ人の共同体においてキリストの信者達を言い表すために用いられていた用語(使徒行伝24: 5と14節および28: 22の *nosri* を参照)であった。

3. 「ナザレ人」はシリア(アラム)の諸教会の信徒達を示す一般的な用語になった。「クリスチャン」はギリシャの諸教会において信徒達を示すために用いられていた。

4. エルサレム陥落後のある時、パリサイ派はヤムニアにおいて再編成され、シナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)と教会の間の正式な分離を扇動した。キリスト教徒に対するある種の呪いの文言の一例が、*Berakoth* 28b-29aの「18 祝福」に見られる。この書では信徒が「ナザレ人」と呼ばれている。

「ナザレ人と異端が一瞬で消えてしまいますように。これらの者達は生命の本から消され、忠実な者達などと記されるべきではありません。」

5. 殉教者ユスティヌスは自著 *Dialogue* 126: 1 で用語「ナザレ人」を用いた。彼はイザヤ書の中の *netzer* をイエスを指す用語として用いた。

C. 著者の意見

「ヨシュア」にヘブル語でいくつかの異なる綴りがあるように、この用語(ナザレ)が旧約聖書では聞き慣れないものであると知っているにもかかわらず、この用語にとっても多くの綴りがあることに私は驚いている。以下の事柄を理由に私はこの用語の正確な意味を不明なままにしている。

1. メシアを意味する用語(英字表記で)Branch(*netzer*)と類似の用語 *nazir* (誓いにより聖別された人)との密接な関係
2. ガリラヤの負の意味
3. ガリラヤの都市ナザレの(存在等の)同時代の証拠がほとんどあるいは全くない
4. この用語は終末論的な意味で悪魔の口から出たものである(つまり「あなたは私たちを滅ぼすために来たのか」)

この用語群の研究に関する文献で十分な内容を持つものとしては、Colin Brown編 *New International Dictionary of New Testament Theology* 第2巻346ページとRaymond E. Brown著 *Birth* の209～213ページおよび223～225ページを見よ。

1: 46「ナタナエルはフィリポに言った『ナザレから何か良いものが出るだろうか』」明らかにフィリポとナタナエルは旧約聖書の預言、つまりガリラヤの異邦人の町ナザレではなくエルサレムの近くのベツレヘム(ミカ5: 2を参照)からメシアがお出になることになっていることを知っていた。しかしイザヤ9: 1-7はまさにこのことを暗示しているのだ。

1: 47

NASB、NKJV、NRSV 「この人の内には偽りがない」

TEV 「この人の内には誤りがない」

NJB 「この人の内には偽りがない」

これは隠された意図のない実直な人(詩篇 32: 2を参照)、つまり選ばれた人々の真の代表であるイスラエルを意味する。

1: 48「イエスは答えて彼に言われた『フィリポがあなたに話しかける前に、あなたがいちじくの木の下にいるのをわたしは見た』」明らかにイエスは御自分の超自然的な知識(2: 24-25、4: 17-19と29節、6: 61と64節と71節、13: 1と11節と27節と28節、16: 19と30節、18: 4)を用いられて、御自分がメシアでいらっしゃることをしるしをナタナエルにお与えになった。

イエスの神性と人間性がどのように機能したかを理解することは困難である。原典の中にはイエスが「超自然的」力をお使いになったのか、それとも人間の能力をお使いになったのかを明記し

ていないものがある。ここでは「超自然的」能力だと推測されている。

1: 49「ナタナエルはイエスに答えて言った『ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です』」2つの称号に注意しよう。どちらも国家主義的なメシアの意味を持つ。これらの初期教会の時代の弟子たちは紀元1世紀のユダヤの分類法に則ってイエスを理解していた。イエスが復活される後まで、苦しむしもべ(イザヤ53章を参照)としてのイエスの御人格と御業を彼らは完全に理解していなかった。

1: 51

NASB 「まことに、まことに、あなたがたに言う」

NKJV 「はっきりとあなたがたに言う」

NRSV 「まことにあなたがたに言う」

TEV 「まことにあなたがたに言う」

NJB 「まことに、あなたがたに言う」

文字通りこれは「アーメン！アーメン！」である。この用語をイエスが2回続けておっしゃっているのはヨハネの福音書だけであり、25回も登場する。「アーメン」は「堅く立つこと」を意味する信仰(*emeth*)のためのヘブル語の用語の一形態である(1: 14の特別なトピックを見よ)。この用語は旧約聖書では安定性と信頼性の比喩として用いられた。後にこの用語は「信仰」または「忠実さ」と訳されるようになった。しかし、さらに後になってこの用語は肯定の意味で使われるようになった。このようにある文章の冒頭にこの用語を置く手法はイエスの重要性や信じるに値する御言葉やYHWHからの啓示に注目させる独特の方法であった(1: 51、2: 3と5節と11節、5: 19と24節と25節、6: 26と32節と47節と53節、8: 34と51節と58節、10: 1と7節、12: 24、13: 16と20節と21節と38節、14章12節、16: 20と23節、21:18を参照)。

複数形への変化(代名詞と動詞)に注意しなさい。このことはそこ(イエスの周囲)に立っていた全ての人々(十二使徒)についていわれなければならない。

特別なトピック: アーメン

I. 旧約聖書

A. 用語「アーメン」は以下に示すような意味のヘブル語の用語に由来する。

1. 「真実」(*emeth*, BDB49)
2. 「誠実」(*emun*, *emunah*, BDB53)
3. 「信仰」あるいは「忠実」
4. 「信頼」(*dmn*, BDB52)

B. その語源は人の安定した体の姿勢に由来する。その反対は不安定で危なっかしくて(申命記 28: 64-67 と 38: 16、詩篇 40: 2 と 73: 18、エレミヤ 23: 12 を参照)つまづき易い(詩篇 73: 2 を参照)人と言えるだろう。この文字通りの用法から比喩的な派生語として「誠実な」、「真実の」、「忠実な」、「信頼できる」が生まれた(創世記 15: 16、ハバクク 2: 4 を参照)。

C. 特別な用法

1. 柱、Ⅱ列王記 18: 16(Ⅰテモテ 3: 15)
2. 確信、出エジプト 17: 12
3. 堅実、出エジプト 17: 12
4. 安定、イザヤ 33: 6、34: 5-7
5. 真実の、Ⅰ列王記 10: 6 と 17: 24 と 22: 16、箴言 12: 22
6. 確固とした、Ⅱコリント 20: 20、イザヤ 7: 9
7. 信頼できる(トーラ)、詩篇 119: 43 と 142 篇と 151 篇と 168 篇

D. 旧約聖書では他にも2つのヘブル語の用語が活きた信仰を言い表すのに用いられている。

1. *bathach*(BDB105)、信頼
2. *yra*(BDB431)、畏怖、尊敬、崇拜(創世記 22: 12 を参照)

E. 信頼あるいは誠実の概念から、他者に真実、つまり信頼できることを言うために用いる礼拝のための用法が生まれた(申命記 27: 15-26、ネヘミヤ 8: 6、詩篇 41: 13 と 70: 19 と 89: 52 と 106: 48 を参照)。

F. この用語の神学的重要性は人間の誠実さではなく YHWH の誠実さにある(出エジプト記 34 章 6 節、申命記 32: 4、詩篇 108: 4 と 115: 1 と 117: 2 と 138: 2 を参照)。墮落した人間の唯一の希望は YHWH が御自分の立てられた恵みの契約に忠実でいらっしゃることと彼(YHWH)の約束である。YHWH を知る人は彼(YHWH)のようになるはずである(ハバクク 2: 4 を参照)。聖書は御自分のお姿(創世記 1: 26-27 を参照)を人間のうちに回復された神の歴史と記録である。救いによって人間は神との親しい関係を回復する。これが私達が造られた理由である。

II. 新約聖書

- A. 礼拝中の発言の(神に対する)忠実性を主張するために締めくくりの言葉として用語「アーメン」を用いることは新約聖書ではよくあることである(Ⅰコリント 14: 16、Ⅱコリント 1 章 20 節、黙示録 1: 7 と 5: 14 と 7: 12 を参照)。
- B. 祈りあるいは頌栄歌の締めくくりの言葉としてこの用語を用いることは新約聖書ではよくあることである(ローマ 1: 25 と 9: 5 と 11: 36 と 16: 27、ガラテヤ 1: 5 と 6: 18、エペソ 3: 21、ピリピ 4: 20、Ⅱテサロニケ 3: 18、Ⅰテモテ 1: 17 と 6: 16、Ⅱテモテ 4: 18 を参照)。
- C. イエスは重要な発言をなさるときにこの用語を用いられた唯一の方である(ヨハネの福音書ではしばしば2回用いられている; ルカ 4: 24、12: 37、18: 17 と 29 節、21: 32、23: 43 を参照)
- D. この用語は黙示録 3: 14 ではイエスの称号として用いられている(多分イザヤ 65: 16 の YHWH の称号)。
- E. 真実、忠実、誠実、信頼の概念はギリシャ語の用語 *pistos* あるいは *pistis* の中に表現され

ており、英語では「信頼」、「信仰」、「信条」と訳されている。

「あなたがたに、あなたがたは」これらはどちらも複数形である。イエスはそこに立っていた全ての人々に、そしてある意味で全ての人類に呼び掛けておられるのだ。

「天が開け」この聖句は、旧約聖書中に記されている神の顕現に関連がある。

1. エゼキエル、エゼキエル1: 1
2. イエス、マタイ3: 16、マルコ1: 10、ルカ3: 21
3. ステパノ、使徒行伝7: 56
4. コルネリウス、使徒行伝10: 11
5. イエスの再臨、黙示録7: 11

これは、それらが開かれたままであったことを意味する完了形能動態分詞である。用語「天」はヘブル語で複数形なのでここでは複数形である。これは(1)創世記1章に記されている地上の大気、あるいは(2)神の御臨在自体を指しているようだ。

特別なトピック:天

旧約聖書では用語「天」は通常は複数形(*shamayim*、BDB1029)である。この用語はヘブル語では「高さ」を意味する。神は高い所にお住まいである。この概念は神の聖さと普遍性とを反映している。

創世記1: 1では複数形「天と地」は神が(1)この惑星の大気、あるいは(2)現実(霊的および実体的な)の全てを指し示す方法をお造りになったこととして見られている。この根本的な理解から他の原典が天の諸階層例えば「天の天」(詩篇 68: 33を参照)あるいは「天と天の天」(申命記 10章14節、I 列王 8: 27、ネヘミヤ9: 6、詩篇148: 4を参照)を指すものとして引用された。ユダヤ教の指導者達は

1. 2つの天(R. Judah著Hagigah 12章後半)
2. 3つの天(レビの契約2~3章、イザヤの昇天 6~7章、Midrash Tehillimの詩篇114: 1)
3. 5つの天(III Baruch)
4. 7つの天(R. Simon著Lakishのb、II エノク8章、イザヤの昇天9: 7)
5. 10の天(II エノク20: 3後半と22: 1)

があるかもしれないと推測した。

これらは全て、神が実体ある被造物から離れられることと神の普遍性を示すことを意図していた。ラビのユダヤ教において天の最も一般的な数は7であった。A. Cohenは自著*Everyman's Talmud*の30ページでこれは天空と関係があると言っているが、私はそれが完全数である7を指していると思う(創世記1章において、創造の日々のうち7日目に神は休まれた)。

II コリント12: 2でパウロは、神が個人的で大いなる御臨在を示される方法としての「第三の」天(ギリシャ語の*ouranos*)について述べている。パウロは個人的に神に出会ったのだ。

「神の天使たちが昇り降りするのを」これはヤコブのベテルでの経験(創世記28: 10以降を参照)を暗示している。イエスは、神がヤコブの必要の全てを備えると約束なさったように、神は御自分の必要の全てに備えられていたと主張されたのだ。

「人の子」これはイエスが自己選択された呼び名である。それは人間を指すヘブル語の成句であった(詩篇 8: 4とエゼキエル2: 1を参照)。しかしダニエル7: 13で用いられていることから、この用語は神の御性質を表すようになった。ユダヤ教の指導者達がこの用語を用いなかったのも、この用語は国家主義的あるいは軍国主義的な意味を持たなかった。この用語が御自分の御性質の二つの特徴(人間であり神でいらっしゃる。Iヨハネ4: 1-3を参照)を結び合わせるものであったので、イエスはそれを選ばれた。イエスはこの用語を御自身の呼び名として13回も用いられたとヨハネは言っている。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. エルサレムから来た調査団はなぜ洗礼者ヨハネが旧約聖書の3人の人物のうちの1人かどうか尋ねたのか？
2. 19～30節で洗礼者ヨハネがイエスについて語ったキリスト教学的事柄を明らかにしなさい。
3. 弟子の召しについての記述が共観福音書群とヨハネの福音書で大きく異なるのはなぜか
4. これらの人々はイエスについて何を理解したか。彼らがイエスを呼ぶときの称号に注目しなさい(38節)。
5. イエスはご自身を何と呼ばれたか。それはなぜか。

ヨハネの福音書2章

現代訳の段落部門

UBS ⁴	NKJV	NRSV	TEV	NJB
カナの婚礼	葡萄酒になった水	カナの婚礼	カナの婚礼	カナの婚礼
2: 1-11	2: 1-12	2: 1-11	2: 1-3	2: 1-10
			2: 4	
			2: 5	
			2: 6-10	
			2: 11	2: 11-12
2: 12		2: 12	2: 12	
神殿の浄め	イエスが神殿を 浄められる	神殿の浄め		神殿の浄め
2: 13-22	2: 13-22	2: 13-22	2: 13-17	2: 13-22
			2: 18	
			2: 19	
			2: 20	
			2: 21-22	
イエスは全て の人を御存知 である	心を識る人		人間の性質 に関する イエスの知識	エルサレムでのイエス
2: 23-25	2: 23-25	2: 23-25	2: 23-25	2: 23-25

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上に挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落

3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察2: 1-11

- A. イエスは御自分の(この世で)生きられた時代の他の宗教指導者とは大きく異なる方でいらつしやう。イエスは一般の人々と飲食を共にされた。洗礼者ヨハネは荒野出身の私的な人であったのに対してイエスは、一般の人々と交わる公的な人でいらつしやう。
- B. イエスの行なわれた最初のしるしはとても家族的だったのだ。自己義認的な宗教家達に対するイエスのお怒りがイエスの御性質の他の面を反映しているのと同様に、一般の人々への御関心はイエスの御性質の特徴である。伝統や義務的な儀式ではなく人を優先なすることは文化的要請をイエスが重視されていたことではなく問題とされていなかったことを明らかにしている。
- C. これはヨハネがイエスの御性質と御力(2~11章)を明らかにするために記述上用いた7つのしるしのうちの最初のものである。
 1. 水の葡萄酒への変換(2: 1-11)
 2. 少年の癒し(4: 46-54)
 3. 足の不自由な人の癒し(5: 1-18)
 4. 大群衆への食べ物の供与(6: 1-15)
 5. 水上歩行(6: 16-21)
 6. 目の不自由な人の癒し(9: 1-41)
 7. ラザロの復活(11: 1-57)

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 2: 1-11

¹三日目にガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。²イエスも弟子たちもその婚礼に招かれた。³ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに「ぶどう酒がなくなりました」と言つた。⁴イエスは母に言われた「婦人よ、そのことがわたしと何のかかわりがありますか。わたしの時はまだ来ていません」。⁵イエスの母は召し使いたちと言つた「この方があなたがたに言いつけることは何でもして下さい」。⁶そこには、ユダヤ人が清めに用いる、それぞれ二、三メトレスも入る石の水がめが六つ置いてあつた。⁷イエスが召し使いたち「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われたので、彼らは縁のところまで水を満たした。⁸するとイエスは召し使いたちと言われた「さあ、その水をくんで、給仕頭のところまで持って行きなさい」。そこで彼らは持って行つた。⁹給仕頭はぶどう酒に変わった水をなめてみたが、それがどこからきたのか知らなかつたので(しかし水をくんだ召し使いたちは知つていた)花婿を呼んで¹⁰言つた「誰でも初めに良いぶどう酒を出して、酔いがまわつたところに味の劣るものを出すものです。しかし、あなたは良いぶどう酒を今までとつておか

れました」。¹¹イエスはこの最初のしるしをガリラヤのカナで行われ、その栄光を現された。それで弟子たちはイエスを信じた。

2: 1「結婚式があった」村での結婚式は社会的に大きなイベントだった。それにはしばしば村人全体が参加し、数日間続くことがあった。

「カナ」この用語はヨハネの福音書(2: 1と11節、4: 46、21: 2)だけに登場する。この用語について私達が知っていることは

1. ナタナエルの故郷であること
2. イエスが最初に奇跡を行なわれた地であること
3. カペナウムに近いこと

である。

候補に挙がっている地は4箇所ある(ABの第1巻827ページ)

1. アイン・カナ、ナザレから1マイル位北にある
2. カフル・カナ、ナザレから約3マイル北東にある
3. キルベート・カナ、ナザレから約8.5マイル北の丘の上にある
4. アソチス平原上のカナ、Josephusが自著*Life*の86章206ページで挙げている

平原上に位置する地が「カナ」の名に合っていると思われる。「カナ」はヘブライ語で「葦」(つまり杖)を意味するからである。

「イエスの母がそこにいた」明らかにマリアは結婚式の準備を手伝っていた。このことは(1)召し使い達に言いつけていたこと[5節を参照]と(2)飲み物に気を配っていたこと(3節を参照)に見られる。これらの召し使い達は多分親戚あるいは家族の友人であったのだろう。

2: 3「ぶどう酒がなくなりました」客にぶどう酒を出すことはヘブル人にとって義務的習慣であった。このワインは、(1)給仕頭の発言[9~10節]と(2)イエスの(この世で)生きられた時代のユダヤ人の習慣あるいは(3)防腐処理過程や化学添加物の添加がなされなかったことに見られるように、明らかに発酵している。

特別なトピック： アルコールとアルコール依存症に対する聖書の見解

I. 聖書用語

A. 旧約聖書

1. *Yayin* これは「ワイン」を表す一般的用語であり、141回用いられている(BDB406)。この語はヘブル語幹に由来しないのでその語源は明らかではない。この語は常に果実、通常はぶどう、の果汁を発酵させた飲み物を意味する。この語は特に創世記 9: 21、出エジプト記 29: 40、民数記 15: 5と10節で述べられている。
2. *Tirosh* これは「新しいワイン」(BDB440)である。しかし、近東地域の気象条件のために、発酵は果汁を搾った後少なくとも6時間経たなければ始まらなかった。この用語は発酵中のワイ

ンを表している。この語は特に申命記 12: 17 と 18: 4、イザヤ 62: 8-9、ホセア 4: 11 で述べられている。

3. *Asis* ヨエル 1: 5 とイザヤ 46: 26 はそれが明らかにアルコール性の飲み物(BDB779)であることを示している。
4. *Sekar* これは用語「強い飲み物」(BDB1016、イザヤ 5: 1 を参照)である。それには酔いを深めるために何かを加えられる。同じヘブル語幹が用語「酔った人」つまり「大酒飲み」の中で用いられている。

B. 新約聖書

1. *Oinos* ギリシャ語で *Yayin* に相当する語(箴言 20: 1 と 31: 6、イザヤ 28: 7 を参照)
2. *Neos oinos* (新しいワイン) ギリシャ語で *Tirosh* に相当する語(マルコ 2: 22 を参照)
3. *Gleuchos vinos* (甘いワイン) 発酵の初期段階にあるワイン(使徒行伝 2: 13 を参照)

II. 聖書での用法

A. 旧約聖書

1. ワインは神の賜物である(創世記 27: 28、詩篇 104: 14-15、伝道者の書 9: 7、ホセア 2: 8-9、ヨエル 2: 19 と 24 節、アモス 9: 13、ゼカリヤ 10: 7 を参照)。
2. ワインはいけにえの奉げ物である(出エジプト記 29: 40、レビ記 23: 13、民数記 15: 7 と 10 節、28: 14、士師記 9: 13 を参照)。
3. ワインはイスラエルの宴で用いられた(申命記 14: 26 を参照)。
4. ワインは薬として用いられる(Ⅱサムエル 16: 2、箴言 31: 6-7 を参照)。
5. ワインは現実問題となりうる(ノア: 創世記 9: 21、ロト: 創世記 19: 33 と 35 節、サムソン: 士師記 16: 19、ナバル: Ⅰサムエル 25: 36、ウリヤ: Ⅱサムエル 11: 13、アンモン: Ⅱサムエル 13 章 28 節、エラ: Ⅰ列王記 20: 12、統治者達: アモス 6: 6、女性達: アモス4章を参照)。
6. ワインは濫用に対する警告を伴う(箴言 20: 1、23: 20-21 と 29-35、31: 4-5、イザヤ 5: 11 と 22 節、19: 14、28: 7-8、ホセア 4: 11 を参照)。
7. ワインはある集団では禁じられていた(勤務中の祭司: レビ記 10: 9 とエゼキエル 44: 21、ナジール人[訳者注: 禁欲の誓いを立てたヘブル人]: 民数記6章、統治者達: 箴言 31: 4-5 とイザヤ 56: 11-12 とホセア 7: 5 を参照)。
8. ワインは終末論的状况の中で用いられる(アモス 9: 13、ヨエル 3: 18、ゼカリヤ 9: 17 を参照)。

B. 聖書外典

1. ワインを適量飲むことはとても有用である(伝道者の書 31: 27-30)。
2. ユダヤ教の指導者達は「ワインは全ての薬の中で最も大いなるものである。ワインが不足するところでは薬が必要となる」と言っている(BB58b)。
3. ワインを水と混ぜると有害とはならず、味がよくなり、そして人の楽しみを増す(Ⅱマカバイ 15:39)。

C. 新約聖書

1. イエスは水をワインに変えられた(ヨハネ 2: 1-11 を参照)。
2. イエスはワインを用いられた(マタイ 11: 16 と 18-19 節、ルカ 7: 33-34 と 22: 17 以降を参照)。
3. ペテロはペンテコステのときに「新しいワイン」で泥酔することを非難した(使徒行伝 2: 13 を参照)。
4. 薬として用いられたワイン(マルコ 15: 23、ルカ 10: 34、I テモテ 5: 23 を参照)。
5. 指導者達は(ワインの)濫用者となるべきではない。これは全く禁欲的になれという意味ではない(I テモテ 3: 3 と 8 節、テトス 1: 7 と 2: 3、I ペテロ 4: 3 を参照)。
6. 終末論的状况の中で用いられたワイン(マタイ 22: 1 以降、黙示録 19: 9 を参照)。
7. 泥酔は非難される(マタイ 24: 49、ルカ 11: 45 と 21: 34、I コリント 5: 11-13 と 6: 10、ガラテヤ 5: 21、I ペテロ 4: 3、ローマ 13: 1-14 を参照)。

III. 神学的洞察

A. 論理的緊張

1. ワインは神の賜物である。
2. 泥酔は大きな問題である。
3. キリストは私達の模範である(マタイ 15: 1-20、マルコ 7: 1-23、ローマ 14 章、I コリント 8: 7-13 を参照)。

B. 神の定められた境界線を越える傾向

1. 神は全ての良いものの源でいらっしゃる。
2. 人は神の賜物全てを、それらの境界線を越えて利用することにより濫用してきた。

C. 濫用の問題は私達のうちにあり、もののうちにはない。被造物自体には悪はない(ローマ 14: 14 と 20 節を参照)。

IV. 紀元1世紀のユダヤの文化と発酵

- A. 発酵はごく初期、しばしば第1日目に始まる(果汁を搾ってから6時間後)。
- B. (果汁の)表面に泡が出てくると、ユダヤの伝統ではそれを10分の1税として納めるべきワインであると言っている(*Ma aseroth* 1: 7)。
- C. 第1の発酵は1週間で終わる。
- D. 第2の発酵は約40日かかる。この段階でワインは熟成したと考えられ、祭壇への奉げものとしてふさわしいものとなる(*Edhuyyoth* 6: 1)。
- E. 「滓」(熟成沈殿物)があるワインは良いと考えられているが、使用前にはよく濾過(滓を漉し取る)しなければならぬ。
- F. ワインの貯蔵可能な期間は最大3年である。それは「古いワイン」と呼ばれる。通常は発酵後1年経ったワインが最も良いと考えられている。
- G. 過去 100 年以内に滅菌処理や化学物質の添加を行えば、発酵過程を延長することができる。

V. 結論

- A. あなたの経験と神学および聖書解釈がイエスと紀元1世紀のユダヤおよびキリスト教の文化を軽視していないかどうか確認しなさい。それらは明らかに完全な節制(禁欲)主義ではなかった。
- B. 私はアルコールの社会的な使用を擁護していない。しかし、この主題について多くの人は聖書的立場を主張し過ぎており、今や文化的かつ教派偏重主義的偏見に基づいて聖書的義の優位性を主張している。
- C. 私にとっては、ローマ14章とIコリント8~10章は、個人の自由や断罪的な批判ではなく仲間の信徒達への愛と尊敬および私達の文化の中への福音の広まりに基づいて洞察と指針とを提供してくれている。聖書が信仰と実践についての唯一の情報源であるなら、私達は皆この問題を再考しなければならない。
- D. 私達が全てのことにおける節制を神の御心と断定するなら、日常的にワインを飲用するそれらの現代文化(例えばヨーロッパ、イスラエル、アルゼンチン)およびイエスについて私達は何を言えるのか。

2: 4「婦人よ」 英語ではこの言葉は厳しいと思われるが、これはヘブライ語の用語で、尊敬を含めた呼び名(4: 21、8: 10、19: 26、20: 15を参照)であった。

NASB 「そのことがわたしと何のかかわりがありますか」

NKJV 「そのことがわたしと何のかかわりがありますか」

NRSV 「そのことがあなたとわたしに何のかかわりがありますか」

TEV 「わたしに何をすべきか言ってはいけません」

NJB 「あなたはわたしに何をしてほしいのですか」

これは、ヘブル語の用語であり、文字通り「わたしとあなたに何を」(士師記11: 12、IIサムエル16: 10、19: 22、I列王記17: 18、II列王記3: 13、II歴代誌35: 21、マタイ8: 29、マルコ1: 24、5: 7、ルカ4: 34、8: 28、ヨハネ2: 4を参照)。これは多分、イエスにとって御自分の家族との新しい関係の始まりだったのだろう(マタイ12: 46以降とルカ11: 27-28を参照)。

「わたしの時はまだ来ていません」 これは、イエスが御自分に与えられた使命(マルコ10: 45を参照)について御自分で理解しておられたことを示している。ヨハネはこの用語「時間」をいくつかの意味で用いている。

- 1. 時間(1: 39、4: 6と52節と53節、11: 9、16: 21、19: 14、19: 27を参照)
- 2. 終わりの時(4: 21と23節、5: 25と28節を参照)
- 3. イエスの最後の日々(逮捕と裁判と死、2: 4、7: 30、8: 20、12: 23と27節、13: 1、16: 32、17: 1を参照)

2: 5「この方があなたがたに言いつけることは何でもして下さい」 マリアはイエスの御言葉を理解していなかったため、この状況で自分の代わりにイエスがなさることを完全に妨げてしまった。

2: 6

NASB 「ユダヤ人が清めに用いる」

NKJV 「清めのしきたりに従って」

NRSV 「ユダヤ人が清めの儀式に用いる」

TEV 「ユダヤ人の中には清めの儀式についてのきまりごとがあった」

NJB 「ユダヤ人の間で習慣となっていた沐浴に用いられる」

これらの水容器は儀式において足や手や器具などを洗うために用いられた。ヨハネはこの言葉を用いてその状況を異邦人が理解し易いものとした。

2: 6-7 「石の水がめが六つ」 ヨハネの福音書にしばしば見られるように、これは二つの意図を持つしるしだったようだ。

1. 結婚式において新郎新婦を助けるため
2. これはユダヤ教の成就としてのイエスを指し示す究極のしるしだった。この究極の言葉の背景にある、この言葉が究極である理由は次のようなことと思われる。
 - a. 数字「6」は人間の努力の象徴である。
 - b. 客にもっと多くのぶどう酒を出すことではなく、それら六つの水がめに縁までいっぱい水を満たすことをイエスが求められたことは象徴的な意味を持つように思われる。
 - c. 地方の婚礼の宴で出すにはあまりにも多量のぶどう酒
 - d. ぶどう酒は新しい世の豊かさの象徴であった(エレミヤ31: 12、ホセア2: 22、14: 7、ヨエル3: 18、アモス9: 12-14を参照)。

「それぞれ二、三メトレスも入る」 ここで用いられている測量単位はヘブル語の用語 *bath* だった。イエスの(この世で)生きられた時代には三通りの容積の *bath* があったので、その容量は不明だが、この奇跡に多量のぶどう酒がかかわっていることは確かである。

特別なトピック： 古代の近東における重量と容量(度量衡)

商業において用いられた重量や寸法は古代の農業経済において重要であった。聖書にはユダヤ人達が互いの取引において公平であったと記されている(レビ記19: 35-36、申命記25: 13-16、箴言11: 1、16: 11、20: 10を参照)。真の問題は誠実さだけではなく、パレスチナで用いられていた測量の用語と体系が標準化されていないことにあった。当時は二つ一組の重量単位、つまり各々の量に対する「軽さ」と「重さ」の単位があったようだ(*The Interpreter's Dictionary of the Bible* 第4巻831ページを見よ)。また、エジプトの十進法(10に基づく)はメソポタミアの60進法(6に基づく)と組み合わせられていた。

用いられていた「大きさ」と「量」の多くは人体の部位や動物の積荷や農夫の運搬車両に基づいて決められ、どれも標準化されていなかった。そのため、度量衡表は推定に過ぎず、一時的なものであった。重量と寸法を表する最も容易な方法は対比表に載せることである。

I. 最も頻繁に用いられた容量用語

A. 乾燥物の容量

1. ホメル(BDB 330、多分「ロバの積荷」、BDB 331)、例えばレビ記27: 16、ホセア3: 2
2. レテク(あるいはレセク、BDB 547、多分ホセア3: 2で暗示)
3. エファ(BDB 35)、例えば出エジプト記16: 36、レビ19: 36、エゼキエル45: 10-11と13節と24節
4. セア(BDB 684)、例えば創世記18: 6、I サムエル25: 18、I 列王記18: 32、II 列王記7: 1と16節と18節
5. オメル(BDB 771 II、多分「束」[落ちた穀物の束の列]、BDB 771 I)例えば出エジプト記16: 16と22節と36節、レビ記23: 10-15
6. イサロン(BDB 798、エファの「十分の一」、例えば出エジプト記29: 40、レビ記14: 21、民数記15: 4、28: 5と13節
7. クアブ(あるいはカブ、BDB866)、II 列王記6: 25を参照

B. 液体の容量

1. コル(BDB 499)、例えばエゼキエル45: 14(乾燥物の容量を表すのにも用いられる。II 歴代誌2:10、27: 5を参照)
2. バト(BDB 144 II)、例えば I 列王記7: 26と38節、II 歴代誌2: 10、4: 5、イザヤ5: 10、エゼキエル45: 10-11と14節
3. ヒン(BDB 228)、例えば出エジプト記29: 40、レビ記19: 36、エゼキエル45: 24
4. ログ(BDB 528)、レビ記14: 10と12節と15節と21節と24節を参照

C. 表(Roland deVaux著 *Ancient Israel* 第1巻201ページと *Encyclopedia Judaica* 第16巻379ページから抜粋)

ホメル(乾)	=	コル(液体または乾)	1						
エファ(乾)	=	バト(液体)	10	1					
セア(乾)			30	3	1				
ヒン(液体)			60	6	2	1			
オメルまたはイサロン(乾)			100	10	-	-	1		
クアブまたはカブ(乾)			180	18	6	3	-	1	
ログ(液体)			720	72	24	12	-	4	1

II. 最も頻繁に用いられた重量用語

A. 最も一般的な3つの重量はタラントとシェケルとゲラである。

1. 旧約聖書において最大の重量はタラントである。出エジプト記38: 25-26から私達は1タラントが3000シェケル(つまり「総重量」、BDB503)と等しいことを学ぶ。
2. 用語シェケル(BDB 1053、「重量」)はとても頻繁に用いられるので存在していたのは確かだと思われるが、原典では述べられていない。旧約聖書に述べられているシェケルにはいくつかの値がある。

- a. 「商人の通用銀の重さ」(NASBの創世記23: 16)
 - b. 「聖所のシェケル」(NASBの出エジプト記30: 13)
 - c. 「王の重りで」(NASBのⅡサムエル14: 26)、エレファンテパピルスでは「王室の重り」とも呼ばれている
3. ゲラ(BDB 176 II)は1シェケルあたり20に相当する[訳者注:つまり1シェケルが20ゲラに相当する](出エジプト記30: 13、レビ記27: 25、民数記3: 47、18: 16、エゼキエル45: 12を参照)。これらの比率はメソポタミアからエジプトで異なる。イスラエルはカナン(ウガリット)で最も一般的な定量方法に従っている。
4. ミナ(BDB584)は50シェケルおよび60シェケルに相当する。この用語は主に旧約聖書の後半に見られる(エゼキエル45: 12、エズラ2: 69、ネヘミヤ7: 71-72)。エゼキエルは60対1の比率を用い、カナンでは50対1の比率が用いられた。
5. ベカ(BDB132、「半シェケル」、創世記24: 22を参照)は旧約聖書で二回しか用いられておらず(創世記24: 22、出エジプト38: 26を参照)シェケルの2分の1に相当する。その名は「分けること」を意味する。

B. 表

1. モーセ五書に基づく表

タラント	1			
ミナ	60	1		
シェケル	3,000	50	1	
ベカ	6,000	100	2	1
ゲラ	60,000	1,000	20	10

2. エゼキエルに基づく表

タラント	1				
ミナ	60	1			
シェケル	3,600	60	1		
ベカ	7,200	120	2	1	
ゲラ	72,000	1,200	20	10	1

2: 8

NASB 「給仕頭」

NKJV 「宴の責任者」

NRSV 「給仕頭」

TEV 「宴の責任者」

NJB 「宴の責任者」

この人物は(1)宴の責任者であった貴賓あるいは(2)客への給仕の責任者であった召使いだ

ったと思われる。

2: 10 この節の要点は、通常は最良のぶどう酒が最初に出されたということである。客が酔うほど十分に飲んだ後に質の劣るぶどう酒が出された。しかしここでは最良のぶどう酒が最後に出されたのだ。これはユダヤ教における古い契約(古いぶどう酒)とイエスの新しい契約(新しいぶどう酒)の間の対比のようである(ヘブル人への手紙を参照)。イエスが神殿を清められたこと(2章13～25節を参照。明らかにヨハネが神学的な目的のために時系列順に依らずに段落中に置いた話である)はこの真理を象徴していると思われる。

2: 11「イエスはこの最初のしるしを」ヨハネの福音書は7つのしるしとその解釈で構成されている。この段落に登場するしるしは最初のものである。1: 1の特別なトピック「Arche」を見よ。

「その栄光を現された。それで弟子たちはイエスを信じた」イエスの栄光(1: 31の動詞に関する記述を参照)が現れること(1: 14の特別なトピックを参照)が奇跡の目的であった。この奇跡は、他の多くのものと同じように、まずイエスの弟子達に示されたようだ。これは弟子達が最初に信仰を抱いたときのことではなく、イエスの御人格と御業の理解が続いていたことを述べている。しるしはメシアの真の御人格と御業を明らかにしている。その時までには何が起きたのかを客が知っていたかどうかは明らかではない。

NASB(改訂版)原典: 2: 12

¹²この後、イエスは母と兄弟たちと弟子たちと一緒にカペナウムに下って行かれ、そこに数日間滞在された。

2: 12「カペナウム」ナザレの人々の不信仰(ルカ4: 16-30を参照)を御覧になった後、この地はイエスのガリラヤでの伝道活動の本拠地になった(マタイ4: 13、マルコ1: 21、2: 1、ルカ4: 23と31節、ヨハネ2: 12、4: 46-47を参照)。このことには、カナでのこの奇跡に関して言えば、イエスが御自分の家族に対してなされた働きが特に見られる。

2: 13-25の文脈の洞察

A. イエスが神殿を清められた回数については新約聖書の研究者の間で多くの議論がなされてきた。使徒ヨハネはイエスのお働きのごく初期にあった神殿の清めを記しているが、共観福音書群(マタイ21: 12、マルコ11: 15、ルカ19: 45)にはイエスの御生涯の最後の週にあった神殿の清めが記されている。この2通りの記述の違いをもとに考えると、神殿の清め方は一通りではなく2通りあると思われる。

しかし、ヨハネの福音書が神学的な目的のためにイエスの御業で構成されたであろうことは確かである(ヨハネは自分の福音書の第1章からイエスの完全な神性を主張している)。各福音書の著者には神の啓示の下でイエスの御業とお教えを選択し適応し編集し要約する自由があった。私は、イエスのお言葉にさらに言葉を付け加えたり、架空の出来事を捏造する

自由が彼らにあったとは信じていない。福音書が現代の伝記とは異なり、特定の読者を対象とした福音伝道のための冊子であることを覚えておかなければならない。福音書の中の記述は年代順に並んでおらず、また記されているのはイエスのお言葉自体ではない(どちらかといえば要約である)。このことは、それら記されているイエスのお言葉が不正確であるということの意味するものではない。東洋文学は様々な文化的要請に基づいて書かれる傾向が西洋文学よりも高かった。Gordon FeeとDouglas Stuart共著の*How to Read The Bible For All Its Worth*の127~148ページを見よ。

- B. 神殿の清めは、ヨハネの福音書における、イエスが最初にユダヤ人国家(への福音伝道)に取り組み始めたことの神学的目的全てに適合する。このことは3章のイエスとニコデモ(正統なユダヤ教徒)の議論に見られる。しかし、4章でイエスは福音伝道の対象をサマリア人の女性をはじめとして他集団(ユダヤ教分派の異端グループにも)に広げ始められた。

NASB(改訂版)原典: 2: 13-22

¹³ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上って行かれた。¹⁴そして、神殿の中で牛や羊や鳩を売っている者たちや座って両替をしている者たちを御覧になった。¹⁵イエスは縄で鞭をお作りになり、羊や牛を全て神殿から追い出され、両替人の金をまき散らされ、その台を倒され、¹⁶鳩を売っている者たちには「これらのものをここから運び出さない。わたしの父の家を商売の家としてはならない」と言われた。¹⁷弟子たちは「あなたの家を思う熱意がわたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。¹⁸ユダヤ人たちはイエスに言った「こんなことをするからには、あなたはどんなしるしをわたしたちに見せるのですか」。¹⁹イエスは答えて言われた「この神殿を壊してみなさい。三日のうちに建て直してみせよう」。²⁰そこでユダヤ人たちは言った「この神殿を建てるのに四十六年もかかっています。それなのに、あなたは三日のうちに建て直すというのですか」。²¹しかし、イエスは御自分の体を神殿と言われたのである。²²イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出し、聖書とイエスの語られた御言葉とを信じた。

2: 13「過ぎ越しの祭り」この毎年恒例の祭りは出エジプト記12章と申命記16: 1-6に記されている。この祭りは私達がイエスのお働きの時期を知る唯一の手がかりである。共観福音書はイエスのお働きの時期が1年間だけであったと示唆している(なぜなら一年分の過ぎ越しの祭りだけが記されているからである)。しかしヨハネは3年分の過ぎ越しの祭り、つまり(1)2: 13と23節(2)6: 4(3)11章55節、12: 1、13: 1、18: 28と39節、19: 14、について述べている。5: 1には4年目と思われる過ぎ越しの祭りの記述もある。私達には実際のイエスの公的なお働きのどのくらい続いたのかわからないが、ヨハネの福音書は、それが少なくとも三年間、おそらく4年間、または5年間であったと示唆している。

ヨハネは自身の福音書の構成にユダヤ人の祭りを入れている(過越の祭りと仮庵の祭りとハヌ

力の祭り。Richard N. Longenecker著 *Biblical Exegesis in the Apostolic Period*、第2版、135～139ページを参照)。

特別なトピック: 過ぎ越しの祭り

I. 緒言

- A. エジプト人の裁きとイスラエルの救出というこの神の御業はYHWHの愛およびイスラエル国家(特に預言者達のための)の確立のための試金石である。
- B. エジプト脱出は、創世記15: 12-21でYHWHがアブラハムになされた約束の特別な成就である。過越の祭りはイスラエルのエジプト脱出を記念する祭りである。
- C. これはYHWHがモーセを通してエジプトにもたらされた10の災いの最後のもので、最も蔓延し(地理的に、エジプトとゴセンに)壊滅的であった(人間と家畜の初子が殺された)。

II. この用語自体(BDB820、KB947)

- A. 名詞形の意味は不明である。
「災い」と関連がある。従って「一撃を食わせる」(出エジプト11: 1。YHWHの天使が人間と家畜の初子を打った)の意味を持つ。
- B. 動詞の意味
 1. 「足を引きずって歩く」(IIサムエル4: 4を参照)。「印の付いた家を飛び越す」の意味で用いられている(出エジプト12: 13と23節と27節、BDB619、一般的語源)。
 2. 「踊る」(I列王記18: 21を参照)
 3. アッカド語「なだめる」
 4. エジプト語(A. 1を見よ)
 5. イザヤ31: 5の並列動詞、「...に守りを立てる」(REBの出エジプト記12: 13を参照)
 6. 初期教会の時代に一般的だった、「苦しむ」を意味するヘブル語の用語 *pasah* とギリシャ語の用語 *pascho* の間の音遊び
- C. 歴史的先例と考えられる事柄
 1. 新しい年のために羊飼いが捧げた生贄
 2. 悪を追い払うために、ベドウィンが春の牧草地にテントを移動する際に捧げた生贄と、行った共同の食事
 3. 遊牧民から悪を追い払うために捧げられた生贄
- D. この用語自体の意味だけでなくその起源をも明らかにすることが難しい理由は、過越の祭りの様々な特徴の大多数が他の古代の儀式にも見られることにある。
 1. 春に行なわれること
 2. 名詞形の語源が明らかでないこと
 3. 夜警との関連
 4. 血液の使用

5. 天使と悪魔の比喩的表現
6. 特別な食事
7. 農業に関する事柄(種を入れないパン)
8. 司祭が参加せず、祭壇がなく、地域限定の祭りであること

Ⅲ. この行事

- A. この行事自体は、出エジプト記11～12章に記されている。
- B. この毎年恒例の祭りは出エジプト記12章に記されており、除酵祭(種なしのパンの祭り)と合わせて8日間にわたって行なわれた。
 1. 元々これは地域の行事だった(出エジプト記12: 21-23、申命記4: 5、民数記9章を参照)
 - a. 司祭が参加しない
 - b. 特別な祭壇がない
 - c. 血液が特別に用いられない
 2. 中央の神殿で行なわれる行事となった。
 3. 地域で捧げられていた生贄(死の天使が通り過ぎたことを記念する子羊の血)と中央の聖域で行なわれていた収穫祭とを合わせて考えると、この祭りが行なわれたのはアビブ(またはニサン)の月(訳者注: 捕囚後のヘブル人の暦の第一の月)の14日と15～21日頃であることが明らかとなった。
- C. 人間と家畜の全ての初子を所有する象徴的存在とそれら初子の贖いについては出エジプト記13章に記されている。

Ⅳ. その祭りの歴史的目撃記録

- A. エジプトで祝われた最初の過ぎ越しの祭り、出エジプト記12章
- B. ホレブ(シナイ)山で祝われた過ぎ越しの祭り、民数記9章
- C. カナン(ギルガル)で祝われた最初の過越の祭り、ヨシュア5: 10-12
- D. ソロモンが神殿に献身した時代の過ぎ越しの祭り、I 列王記9: 25とII 歴代誌8: 12(多分、しかし特別な記述はない)
- E. ヒゼキヤの治世の過ぎ越しの祭り、II 歴代誌30章
- F. ヨシヤが改革を行った時期の過ぎ越しの祭り、II 列王記23: 21-23、II 歴代誌35: 1-18
- G. II 列王記23: 22とII 歴代誌35: 18にある、イスラエルがこの毎年恒例の祭りをを行うことを怠ったという記述に注意

Ⅴ. 意義

- A. これは必ず行なわなければならない毎年恒例の3つの祭りの日(出エジプト23: 14-17、34: 22-24、申命記16: 16を参照)のひとつである。
 1. 過ぎ越しの祭りと種なしパンの祭り
 2. 七週の祭り
 3. Boothsの祭り

- B. 申命記でモーセは過ぎ越しの祭りが(他の二つの祭りと同じように)中央の聖域において行われるのが見られる日が来るだろうと予示した。
- C. イエスは、パンとぶどう酒を象徴とする新しい契約を明らかにするために、毎年恒例の過ぎ越しの食事(または前日の食事)の機会を用いられたが、子羊は用いられなかった。
 - 1. 共同の食事
 - 2. 贖いの生贄
 - 3. 後の世代へ受け継がれてゆく意義

「イエスはエルサレムに上って行かれた」ユダヤ人は常に地理的または地形的な意味でよりも神学的な意味でエルサレムについて語った。

2: 14「**神殿の内**」ヘロデ大王(紀元前37~4年にパレスチナを支配していたイドマヤ人)の寺院は7つの相異なる庭に分けられていた。外庭は異邦人の庭で、生贄を捧げたり特別な捧げ物をしたい人々に応対するために商人達が自分達の店を構えていた。

「**牛や羊や鳩を**」長旅をして神殿にきた人々は生贄にふさわしい動物を買う必要があった。しかし、大祭司の一派はこれらの店を支配し、動物の値段として法外な価格を課した。また、人々が自分で動物を連れてきた場合に、司祭がそれらの動物を身体的欠陥を理由に生贄にふさわしくないと断っていたことも知られている。だから神殿に生贄を捧げにきた人々はこれらの販売元から生贄にするための動物を買わなければならなかった。

「**両替をしている者たち**」これらの人々が必要としていたことは2通りに説明されている(1)神殿ではシェケルだけが通用硬貨であった。ユダヤのシェケルは長い間鑄造されていなかったの、イエスの時代にはティル産の(ティルで鑄造された)シェケルだけが神殿で通用していた(2)ローマ皇帝の像を刻印したコインは使用が許されていなかった。もちろん、この時代には入場料があったのだ。

2: 15「**イエスは縄で鞭をお作りになり、羊や牛を全て神殿から追い出された**」イエスのお怒りはこの記述に明らかに見られる。YHWHが御存知の場所ではもはや崇拜と啓示の場ではなかったのだ。怒り自体は罪ではないのだ。エペソ4: 26のパウロの発言は多分このイエスの御行為に関連している。物事の中には私達を怒らせるようなものがある。

2: 16「**これらのものをここから運び出さない**」これは強調のアオリスト能動態命令法動詞であり、「ここからこれらのものを外に出さない」という意味を持つ。

「**わたしの父の家を商売の家としてはならない**」これは、通常はすでに進行中の行為を止めることを意味する、否定冠詞を伴う現在形命令法動詞である。他の福音書(マタイ21: 13、マルコ11章17節、ルカ7: 46)はこの点に関してイザヤ56: 7とエレミヤ7: 11を引用している。しかし、ヨハネの福音書にはこれらの旧約聖書の予言は記されていない。これはゼカリヤ14: 21のメシアの予言を暗示しているのかもしれない。

2: 17「**弟子たちは思い出した**」この記述は、イエスの御業と聖霊のお助けの中にさえこれらの人々

がそのすぐ後にイエスの御業の霊的真理を見たことを暗示している(22節、12: 16、14: 26を参照)。

「...と書いてあることを」これは文字通り「書かれているのを」という意味の完了形受動態の迂言(婉曲)表現である。それは旧約聖書の神の啓示(6: 31と45節、10: 34、12: 14、20: 30を参照)を肯定する特徴的な方法だった。これはLXXの詩篇69: 9からの引用である。この詩篇の一節は、詩篇22篇のように、イエスが十字架にかかられたことに符合する。神に対して抱かれていた熱意と捧げられていた真の崇拝によってイエスは死を迎えられるが、それは神の御心であった(イザヤ53: 4と10節、ルカ22: 22、使徒行伝2: 23、3: 18、4: 28を参照)。

2: 18

NASB 「こんなことをするからには、あなたはどんなしるしをわたしたちに見せるのですか」

NKJV 「こんなことをするからには、あなたはどんなしるしをわたしたちに見せるのですか」

NRSV 「こうするからには、あなたはどんなしるしをわたしたちに見せるつもりですか」

TEV 「こんなことをする権利があるからには、あなたはどんな奇跡をわたしたちに見せるのですか」

NJB 「こんなことをするからには、あなたはどんなしるしをわたしたちに見せるのですか」

これはユダヤ人がイエスに関して抱いてきた中心的な疑問だった。パリサイ人はイエスの御力が悪魔から来ていると主張した(8: 48-49と52節、10:20を参照)。彼らはメシアが特定の方法で特定の事柄を行われることを期待していた。イエスがこれらの特別な御業を行なわれないうちに彼らはイエスに疑念を抱き始めた(ルカ20: 2、マルコ11: 28を参照)が、これは洗礼者ヨハネの場合も同じだった。

2: 19「この神殿を壊してみなさい。三日のうちに建て直してみせよう」 14節と15節にある、神殿を意味するギリシャ語の用語(*hieron*)は神殿のある区域を指し、19~21にある用語*naos*は神殿内部の聖域自体を指す。この記述については多くの議論がなされてきた。明らかにマタイ26: 60以降とマルコ14: 57-59と使徒行伝6:14ではこの記述はイエスが十字架にかかられたことと復活を指している。しかし、この文脈ではこの記述は、神殿自体がTitusによって紀元70年に破壊されたこと(マタイ24: 1-2を参照)とも何らかの形で関連しているに違いない。これら2つの記述は、古代ユダヤ教ではなくご自身に焦点を当てた新たな霊的礼拝をイエスが始められた(4: 21-24を参照)という真実と関連している。ここでもヨハネは用語を2つの意味で用いているのだ。

2: 20「この神殿を建てるのに四十六年もかかっています」 ヘロデ大王は自分がイドマヤ人であったので、ユダヤ人を懐柔しようと試みるために第二の神殿(ゼルババルの時代からあった。ハガイ書を参照)を拡張および改築した。Josephusによればその神殿拡張と改築は紀元前20年あるいは19年に始まった。このことが正しければ、それはこの特別な出来事が紀元27~28年に起こったことを意味する。この神殿の拡張・改築工事が紀元64年まで続いたことも知られている。この神殿はユダヤ人にとって大きな希望となっていた(エレミヤ7章を参照)。この神殿は、新しい神殿でいらっしゃるイエス御自身に取って代わられることになる。1:14でイエスは幕屋と描写されたが、ここ

では神殿と描写されているのだ。ナザレ出身の大工について何と衝撃的な比喻であろうか。神と人類は今やイエスによって出会い、交わりを持ったのだ。

2: 21「しかし、イエスは御自分の体を神殿と言われたのである」 イエスがこれらの言葉を語られたとき、弟子たちはこのことに気付いていなかった(17節を参照)。イエスがこれらの言葉を語られた数十年後にヨハネがそれらを書き記していることを思い出そう。

イエスは御自分が来られた理由を御存知だった。少なくとも3つの目的があると思われる。

1. 神を顕されるため
2. 真の人間を形造られるため
3. 御自分の人生をの多くの人々のための身代りとして与えられるため

この節が述べているのはこの最後の(3つ目の)目的である(マルコ10: 45、ヨハネ12: 23と27節、13: 1-3、17: 1を参照)。

2: 22「弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出した」 しばしばイエスの御言葉と御業は、それら自体のためというよりは弟子達の利益のためにあった。この当時、弟子達はそれら(イエスの御言葉と御業)をいつでも理解していたわけではなかった。

「弟子たちは聖書を信じた」 この聖句自体はどの御言葉かについて述べていないが、多分詩篇16: 10がイエスの暗示されている復活の記述だと思われる(使徒行伝2: 25-32、13: 33-35を参照)。この同じ聖句(および神学的概念つまり復活)はヨハネ20: 9で述べられている。

NASB(改訂版)原典: 2: 23-25

²³イエスが過ぎ越しの祭の間にエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスのなさったしるしを見てイエスの御名を信じた。²⁴しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。全ての人々を知っておられ、²⁵人間について誰からも証してもらう必要がなかったからである。イエス御自身は何が人々の心の中にあるかを知っておられたのである。

2: 23「多くの人々がイエスの御名を信じた」 用語「信じた」はギリシャ語の用語(*pisteo*)に由来し、「信条」、「信仰」、「信頼」とも訳される。この名詞形はヨハネの福音書の中には見られないが、動詞形はしばしば用いられている。この文脈では、群衆がナザレのイエスをメシアと認めたことの信憑性については明らかではない。用語「信じる」のこの見せかけの用法の他の例はヨハネ8章31~59節と使徒行伝8: 13および18~24節に見られる。真の聖書的信仰は信じ始めたときの応答以上のものである。その後には弟子化(マタイ13: 20-22と31~32節を参照)の過程が続かなければならない。

明らかにこれらの見せかけの信徒はイエスのなさった奇跡(2: 11と7: 31を参照)に引きつけられていた。彼らの目的はイエスの御人格と御業を認めることだった。しかし、イエスの力強い御業を見て抱いた信仰は決して十分ではなく、忍耐を伴う信仰(4: 38と20: 29を参照)が必要とされることを覚えておかなければならない。信仰の目的はイエス御自身でなければならない。奇跡は自動的

に神のしるしとはならない(マタイ24: 24、黙示録13: 13、16: 14、19: 20を参照)。イエスの御業は人々が御自身によって信仰を持つように導くことを意図したものであった。しばしば人々はイエスのなさったしるしを見たが、信じることを拒んだ(6: 27、11: 47、12: 37を参照)。

特別なトピック: 動詞「信じる」(名詞形は稀である)のヨハネの用法

ヨハネは主に「信じる」を前置詞と組み合わせて用いている。

1. *eis* は「～に」という意味である。この独特の構造は信徒に信頼つまり信仰をイエスに置くことを強調している。
 - a. イエスの御名に(ヨハネ1: 12、2: 23、3: 18、Iヨハネ5: 13)
 - b. イエスに(ヨハネ2: 11、3: 15と18節、4: 39、6: 40、7: 5と31節と39節と48節、8: 30、9: 36、10: 42、11:45と48節、12: 37と42節)
 - c. わたし(イエス)に(ヨハネ6: 35、7: 38、11: 25と26節、12: 44と46節、14: 1と12節、16: 9、17: 20)
 - d. イエスを送られた方に(ヨハネ6: 28-29)
 - e. 御子に(ヨハネ3: 36、9: 35、Iヨハネ5: 10)
 - f. イエスに(ヨハネ12: 11)
 - g. 光に(ヨハネ12: 36)
 - h. 神に(ヨハネ12: 44、14: 1)
2. ヨハネ3: 15にあるように、*ev* は「～の中に」という意味である(マルコ1: 15)
3. 前置詞の付かない与格(ヨハネ4: 50、ヨハネ3: 23と5: 10)
4. *hoti* は「～を信じる」という意味で、信じるべきものの内容を示す。例えば
 - a. イエスは「神の聖なる方」でいらっしゃる(6: 69)
 - b. イエスは「わたしはある」でいらっしゃる(8: 24)
 - c. イエスが父なる神の内におられ、父なる神がイエスの内におられる(10: 38)
 - d. イエスはキリストでいらっしゃる(11: 27、20: 31)
 - e. イエスは神の御子でいらっしゃる(11:27、20:31)
 - f. イエスは父なる神によって送られた(11: 42、17: 8と21節)
 - g. イエスは父なる神とともにおられる方でいらっしゃる(14: 10-11)
 - h. イエスは父なる神の御許から来られた(16: 27と30節)
 - i. イエスは御自分を父なる神の契約の名「わたしはある」であると明言された(8: 24、13: 19)聖書の信仰は人とメッセージの両方にあるのだ。それは服従と愛と忍耐によって証明される。

2: 24-25 これはギリシャ語では一つの文である。重要な用語「ゆだねる」(文字通り「信じる」を否定する未完了能動態直説法動詞)はこの文脈ではイエスの御業とお気持ちを言い表すために用いられている。それは信仰告白あるいは感情的な応答よりもはるかに多くのことを意味する。この

一節はまた、イエスが人間の心の移り変わりやその内にある悪について持つておられた知識(神の知識を反映している。創世記6: 11-12と13節および詩篇14: 1-3を参照)を主張している。3章でニコデモはこの段落について詳しく述べている。いわゆる「宗教家」でさえも自身の努力や知識や地位や関係によって神に受け入れられることはできなかった。義は、イエスを信じること、つまり信仰、言い換えれば信頼を通してはじめてもたらされる(ローマ1: 16- 17と4章を参照)。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜイエスは水をぶどう酒に変えられたのか。それは何を象徴するのか。
2. イエスの時代の婚礼における習慣について説明しなさい。
3. あなたはヘロデ王の神殿の見取り図を描けますか。あなたは買い手と売り手がいたと思われる場所を示すことはできますか。
4. なぜ共観福音書群はこの最初の神殿の清めを記していないのか。
5. イエスはヘロデの神殿の破壊を予測されていたのか。
6. 「信頼」、「信条」、「信仰」と訳されるギリシャ語の用語を定義し説明しなさい。

ヨハネの福音書3章

現代訳の段落部門

UBS ⁴	NKJV	NRSV	TEV	NJB
イエスとニコデモ	新しく生まれる	イエスとユダヤ教の指導者	イエスとニコデモ	ニコデモとの会話
3: 1-15	3: 1-21	3: 1-10	3: 1-2	3: 1-8
			3: 3	
			3: 4	
			3: 5-8	
			3: 9	3: 9-21
			3: 10-13	
		3: 11-15		
			3: 14-17	
3: 16-21				
		3:16		
		3: 17-21		
			3: 18-21	
イエスと洗礼者ヨハネ	洗礼者ヨハネがキリストをたたえる	ヨハネのさらなる証言	イエスとヨハネ	ヨハネがキリストを初めて目撃する
3: 22-30	3: 22-36	3: 22-24	3: 22-24	3: 22-24
		3: 25-30	3: 25-26	3: 25-36
			3: 27-30	
天から来られる方			天から来られる方	
3: 31-36		3: 31-36	3: 31-36	

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題

を上に挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 3: 1-3

¹さて、パリサイ派の一人でニコデモという名のユダヤ人の指導者がいた。²ある夜、この人がイエスのもとにきて言った「ラビ、わたしたちはあなたが神から来られた教師であることを知っております。神が共におられるのでなければ、あなたがなさるようなこのようなしるしをだれにも行うことはできないからです」。³ イエスは彼に答えて言われた「まことに、まことに、あなたに言うておく。人は新たに生れなければ神の国を見ることはできない」。

3: 1「パリサイ派」 この政治的かつ宗教的な団体の起源はマカバイ[マカベア]家(訳者注:ユダヤの祭司一家。紀元前163~142年に王としてパレスティナを統治)の統治時代に遡る。この名は「分けられた者たち」という意味であると思われる。彼らは誠実であり、献身的に神の律法を口述伝承(タルムード)の中に定義しそして説明し続けた。今もそうであるが、彼らの中には真の契約の民(ニコデモ、アリマタヤのヨセフ)もいれば、自己義認(独善)的で律法主義的で他者を裁く「見せかけの」契約の民(イザヤ6: 9-10と29: 13を参照)もいた。重要なのは心なのだ。「新しい契約」(エレミヤ31: 31-34)で重要とされているのは内的動機(つまり新しい心、新しい精神、心に書かれた律法)である。常にそうであるが、人の行いは不十分であることが明らかにされてきている。申命記10: 16と30: 6の心の割礼は、服従と感謝の生活に表れる個人的な信頼および信仰の比喻なのだ。

宗教的な保守主義と自由主義は醜い事柄だといえるかもしれない。神学は愛と信仰から生まれなければならない。1: 24の特別なトピック「パリサイ人」を見よ。

「ニコデモ」パレスチナ在住のユダヤ人が、「民の征服者」(7: 50と19: 39を参照)を意味するただ一つのギリシャ語名(ピリポとアンデレがそうであるように。1: 40と43)を持つのは驚くべきことである。

NASB、NKJV 「ユダヤ人の指導者」

NRSV、NJB 「ユダヤ人の指導者」

TEV 「ユダヤ人の指導者」

この文脈では、これはサンヘドリン、つまりエルサレム在住のユダヤ人の70人高等評議会のメ

ンバー(他の文脈では地域のシナゴーク[礼拝堂]の指導者を意味する場合もある)を指す専門用語である。その権限はわずかにローマ人によって制限されていたが、それでもユダヤ人にとって大きな象徴的重要性があった。下記の特別なトピックを見よ。

ヨハネはニコデモを紀元1世紀の正統ユダヤ教の代表者として描写しているようだ。自分達が霊によってこの世に生まれたと思う人々は再び人生を始め(生まれ)なければならないと言われていた。神の国における人の市民権を決めるのは規則(神の掟さえも。コロサイ2: 16-23参照)への固執でもなく、また人種的背景[生い立ち](8: 31-59を参照)でもなく、イエスを信じる信仰である。神に受け入れられるための扉を開くのは人の誠実さでもなく、人の宗教への固執でもなく、キリストにある神の賜物である。イエスが神から遣わされた教師でいらっしやることをニコデモが知っていたのは、そのことが真実であるとはいえ、十分ではなかった。イエスがメシアでいらっしやることを個人的に、排他的に、そして究極的に信じることは墮落した人類の唯一の希望なのだ(1: 12を参照)。

特別なトピック: サンヘドリン

I. 情報源

- A. 新約聖書自体
- B. Flavius Josephus著 *Antiquities of the Jews*
- C. タルムードのミシュナ編(つまり論文「サンヘドリン」)

不運にも新約聖書とJosephusの著書にはラビの著書とは異なる内容が記されている。というのは両書(新約聖書とJosephusの著書)が、エルサレムに2組のサンヘドリンがあって、一方は大祭司の統率する司祭団(つまりサドカイ人)が行政と司法を担うグループで、もう一方はパリサイ人と律法学者が統率し宗教および伝統的な問題を担当するグループだと主張しているように思われるからである。しかし、ラビの著書は紀元200年代に書かれたものであり、ローマ帝国の将軍Titusによる紀元70年のエルサレム陥落後の文化的状況を反映している。ユダヤ人はヤムニアと呼ばれる都市で自分達の宗教生活を立て直し、後に(紀元118年に)ガリラヤに移住した。

II. 用語

この司法機関の特定に関する問題には既知の別名が関係している。エルサレムのユダヤ人共同体内の司法機関を言い表すために用いられた用語がいくつかある。

A. *Gerousia*

「元老院」または「評議会」を意味する。これはペルシャ時代末期に用いられた最古の用語である(Josephus著 *Antiquities of the Jews* 12巻3章3節と *II Maccabees* 11:27を参照)。ルカは使徒行伝5: 21でこの用語を「サンヘドリン」とともに用いている。これはギリシャ語を話す読者にこの用語を説明する方法だったのかもしれない(*I Maccabees* 12: 35を参照)。

B. *Synedrion*

「サンヘドリン」を意味する。これは *syn* (〜と一緒に) と *hedra* (席) の複合語である。驚くべきことにこの用語はアラム語で用いられているが、ギリシャ語での用語を反映している。マカベア(マカバイ)家の統治時代の終わりまでにこの用語はエルサレムのユダヤ人最高評議会を指す用語として受け入れられるようになった(マタイ26: 59、マルコ15: 1、ルカ22: 66、ヨハネ11: 47、使徒行伝5: 27を参照)。同じ用語がエルサレム外の地域司法評議会で用いられるときに問題が生じる(マタイ5: 22と10: 17を参照)

C. *Presbyterion*

「長老評議会」を意味する(ルカ22: 66を参照)。これは旧約聖書では部族の指導者を指す用語であるが、後にエルサレムの最高評議会を指すようになった(使徒行伝22: 5を参照)。

D. *Boule*

Josephusはこの用語「評議会」をいくつかの司法機関、例えば(1)ローマの元老院(2)ローマの地方評議会(3)エルサレムのユダヤ人最高評議会(4)地方のユダヤ人評議会を指す用語として用いた(彼の著書 *Wars* 2巻16章2節と5巻4章2節。新約聖書では用いられていない)。この用語の一形態 (*bouleutes*。「評議員」を意味する。マルコ15: 43とルカ11: 50を参照)によって、アリマタヤのヨセフはサンヘドリンの一員として記されている。

III. 発展の歴史

バビロン捕囚からの帰還後の時代に大礼拝堂(タルガムの雅歌6: 1を参照)を最初に始めたのはエズラだといわれており、後にその大礼拝堂がイエスのこの世で生きておられた時代のサンヘドリンとなったようだ。

A. ミシュナ(タルムード)はエルサレムに2つの大きな評議会があったと記している(サンヘドリン7: 1を参照)。

1. 一方は70人(または71人)で構成される(サンヘドリン1: 6にも、モーセが最初のサンヘドリン[民数記11章]を始めたと記されている。民数記11: 16-25を参照)。
2. もう一方は23人で構成される(しかしこれは地方の礼拝堂内の評議会を指していると思われる)。
3. ユダヤの学者達の中にはエルサレムに3つの23人サンヘドリンがあったと信じている者がいる。3つのサンヘドリンを統合すると2人の指導者を含む71人で構成される大サンヘドリン (*Nasi* と *Av Bet Din*)となる。
 - a. 祭司(サドカイ人)を指導者とするもの
 - b. 律法学者(パリサイ人)を指導者とするもの
 - c. 貴族(長老)を指導者とするもの

B. バビロン捕囚からの帰還後の時代には、帰還したダビデの子孫はゼルバベルであり、帰還したアロンの子孫はヨシュアだった。ゼルバベルの死後、ダビデの子孫は途絶え、司法権は祭司(I マカバイ12: 6を参照)と地方の長老(ネヘミヤ2: 16と5: 7を参照)が独占した。

- C. 司法的決定におけるこの祭司の役割は、ヘレニズム時代に書かれたDiodorus40巻3章4～5節に記されている。
- D. 行政府におけるこの祭司の役割はセレウコス王朝(訳者注:シリアなどの南西アジア地域を治めたマケドニアの王国。紀元前312～64年)時代に続いた。Josephusは自著 *Antiquities* の12巻138～142章でAntiochus三世(大王)[紀元前223～187年存命]の名を引用している。
- E. Josephus著 *Antiquities* 13巻10章5～6節と13巻15章5節によれば、この祭司の権力はマカベア(マカバイ)家の統治時代に続いた。
- F. ローマ帝国時代、シリア総督ガビニウス(紀元前57～55年在任)は5つの地域「サンヘドリン」(Josephus著 *Antiquities* 14巻5章4節と *Wars* 1巻8章5節を参照)を定めたが、これは後に(紀元前47年に)ローマ帝国政府によって法的に無効とされた。
- G. サンヘドリンはヘロデ王と政治的に対立していた(*Antiquities* 14巻9章3～5節を参照)。紀元前37年にヘロデ王はその報復として高等評議会の評議員の大半を殺害した(Josephus著 *Antiquities* 14巻9章4節と15巻1章2節を参照)。
- H. Josephusによれば(*Antiquities* 20巻200章と251章を参照)、ローマ帝国の代官の統治(紀元6～66年)下にサンヘドリンは再び絶大な権力と影響力を得た(マルコ 14: 55を参照)。新約聖書にはサンヘドリンが大祭司団の指導権の下に司法権を施行した3つの裁判が記されている。
1. イエスの裁判(マルコ14: 53～15: 1、ヨハネ18: 12-23と28～32節を参照)
 2. ペトロとヨハネの裁判(使徒行伝4: 3-6を参照)
 3. パウロの裁判(使徒行伝22: 25-30を参照)
- I. ユダヤ人が紀元66年に反乱を起こした後、ローマ人は紀元70年にユダヤ人社会とエルサレムを破壊した。パリサイ人がヤムニアで最高司法評議会(*Beth Din*)の主導の下にユダヤ人に宗教的(しかし市民的あるいは政治的ではない)生活を取り戻させようと試みたが、サンヘドリンは永久的に解散してしまった。

IV. 構成員

- A. エルサレムの高等評議会が聖書中で最初に登場するのはⅡ歴代誌19: 8-11である。その評議会は(1)レビ人(2)祭司(3)族長(つまり長老。Ⅰマカバイ14: 20、Ⅱマカバイ4: 44を参照)で構成された。
- B. マカベア(マカバイ)家の統治時代にそのエルサレムの高等評議会は(1)サドカイ人の祭司の一族と(2)地方貴族(Ⅰマカバイ7: 33、11: 23、14: 28を参照)によって独占された。この時代のより後の時期に「律法学者」(モーセの後継者である法律家達。通常はパリサイ人)が加入したが、これは明らかにAlexander Jannaeusの妻サロメ(紀元前76～67年に評議員として在任)の意向によるものであった。彼女はまた、パリサイ人を優勢的なグループにしたと言われている(Josephus著 *Wars of the Jews* 1巻5章2節を参照)。

C. イエスがこの世で生きておられた時代まで、評議会は

1. 大祭司の一族
2. 地方の裕福な一族の人々
3. 律法学者(ルカ19: 47を参照)

で構成されていた。

V. 参考文献

- A. *Dictionary of Jesus and the Gospels*, IVP刊、728～732ページ
- B. *The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible*, 第5巻268～273ページ
- C. *The New Schaff-Herzog Encyclopedia of Religious Knowledge*, 第10巻203～204ページ
- D. *The Interpreter's Dictionary of the Bible*, 第4巻214～218ページ
- E. *Encyclopedia Judaica*, 第14巻836～839ページ

3: 2「ある夜」 ラビによれば、夜は邪魔が入らないので律法を学ぶのに最適な時間であった。多分ニコデモはイエスに姿を見られなくなかったのが夜にイエスのところに来たのだろう。

ヨハネの著書の中で解釈者がどれくらいの頻度で二つの意味を推定すべきかは常に疑問となる。ヨハネの福音書の特徴は光と闇の反復的な対比である(NET聖書の1898 ページの#7 snを参照)。

「ラビ」 ヨハネの福音書ではこれは「先生」を意味する(1: 38, 4: 31, マルコ9: 5, 11: 21を参照)。ユダヤの指導者達を悩ませたことの一つは、イエスがラビの神学校の一つに出席しておられなかったことであった。イエスはナザレの地域礼拝堂での学びの後にタルムードを学ばれなかったのだ。

「あなたは神から来られました」 この句は強調のために文頭に配置される。これは多分申命記 18: 15と18節の預言を暗示しているのだろう。ニコデモはイエスの御業と御言葉の力を認めたが、これはニコデモが神に霊的に義とされたことを意味しなかった。

「神が共におられるのでなければ」 これは潜在的な(起こりうる)現実を意味する第3種条件文である。

3: 3, 5, 11 「まことに、まことに、」 これは文字通り「アーメン、アーメン」である。この用語は「信仰」を意味する旧約聖書の用語に由来する。この用語は語幹「固定する」つまり「確定する」に由来する。イエスは重要なことをおっしゃる前にこの用語を用いられた。この用語はまた真理を表す発言を肯定するために用いられた。同じ言葉を重ねて(2回)言うことはヨハネの福音書に独特なことである。これらの用語「アーメン」の2回の繰り返しはイエスとニコデモとの間の対話の各場面に登場する。1: 51の特別なトピック「アーメン」を見よ。

3: 3「人は...しなければ」 これも3: 2にニコデモの発言のような第三種条件文である。

NASB, NKJV, TEV 「新たに生まれる」

NRSV, NJB 「もう一度生まれる」

これはアオリスト受動態仮定法動詞である。この用語(another)の意味は

1. 「実際に二度生まれる」
 2. 「最初からもう一度生まれる」(使徒行伝26: 4を参照)
 3. 「もう一度生まれる」この意味はこの文脈に適合する(3: 7と31節、19: 11を参照)
- であると思われる。

これは多分、ヨハネが2つの意味(二重の意味)を持つ用語を用いたもう一つの例であり、どちらの意味も正しい(BauerとArndtとGengrichとDanker共著*A Greek-English Lexicon of the New Testament* の77ページを参照)。4節から明らかなように、ニコデモは上記1の意味でこの用語を理解した。パウロがこの用語を養子縁組の意味で用いたのと同じように、ヨハネとペトロ(I ペテロ 1: 23を参照)は救いについてこの家族の比喩を用いた。ここで主に述べられていることは、父なる神が私達の父となってくださるということである(1: 13を参照)。救いは神の賜物であり御業である(1: 12-13、ローマ3: 21-24、6: 23、エペソ2: 8-9を参照)。

「...を見ることはできない」この慣用句は5節の「入ることはできません」と並立する。

「神の国」この聖句はヨハネの福音書で2回しか用いられていない(5節を参照)。これは共観福音書において重要な聖句である。イエスが最初と最後になされた説教およびたとえ話の大半はこの話題を取り扱っている。ここではこの聖句は人の心の中における神の御統治を指しているのだ。ヨハネがこの聖句を2回しか用いていない(また、イエスのなされたたとえ話は全く記していない)ことは驚くべきことである。以下の特別なトピックを見よ。ヨハネの福音書において「永遠の命」は重要な用語であり比喩である。

この聖句はイエスの教えの終末論的(終わりの時の)主張に関連している。この「もうすでに来ているが、まだ来っていない」という神学的逆説は、2つの世、つまり現行の悪の世とメシアが始められることになっている来るべき義の世という2つの世についてのユダヤの概念に関連している。聖霊に力づけられた(旧約聖書の士師のような)ただ一人の軍事的指導者をユダヤ人は待ち望んでいた。イエスが世に2回来られたことで2つの世は重ね合わせて考えられるようになった。ベツレヘムでのイエスの受肉(御誕生)によって神の国は人間の歴史に突然登場した。しかし、黙示録19章に記されている軍事的征服者としてではなく、苦難のしもべとして(イザヤ53章を参照)、そして謙虚な指導者として(ゼカリヤ9: 9を参照)イエスは来られた。だから、神の国は始められたが(マタイ3: 2、4: 17、10: 7、11: 12、12: 28、マルコ1: 15、ルカ 9: 2と11節、11: 20、21: 31-32を参照)まだ完成されていない(マタイ6: 10、16: 28、26: 64を参照)。

信徒はこれら2つの世の間の緊張の中に住んでいる。信徒は復活の命を持っているが、まだ現実には死んでいない。信徒は罪の力から解放されているが、まだ罪を犯し続けている。信徒は「もうすでに来ているが、まだ来っていない」という終末論的緊張の中に住んでいるのだ。

ヨハネの福音書に見られる「もうすでに来ているが、まだ来っていない」という緊張の説明としては Frank Stagg 著 *New Testament Theology* が分かりやすくよい。

「ヨハネの福音書は未来の出来事を強調し(14: 3と18節後半と28節、16: 16と22節)、イエスの復活と「終わりの日の」最終審判について明言している(5: 28後半、6: 39後半と44節と54節、11: 24、

12: 48)。しかし、この第4の福音書全体を通して、永遠の命と裁きと復活は現在において現実である(3: 18後半、4: 23、5: 25、6: 54、11: 23以降、12: 28と31節、13: 31後半、14: 17、17: 26)。(311ページ)。

特別なトピック: 神の御国

旧約聖書では YHWH はイスラエルの王(I サムエル 8: 7、詩篇 10: 16、24: 7-9、29: 10、44: 4、89: 18、95: 3、イザヤ 43: 15、44: 4 と 6 節を参照)および理想の王としてのメシア[救世主](詩篇 2: 6、イザヤ 9: 6-7、11: 1-5 を参照)と考えられている。イエスがベツレヘムにお生れになった(紀元前6~4世紀)ことで神の御国は新しい力と救い(新しい契約、エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 27-36 を参照)とともに人類の歴史の中に登場した。洗礼者ヨハネは御国が近づいていることを宣言した(マタイ 3: 2、マルコ 1: 15 を参照)。イエスは御国が御自身と御自分のお教えの中にあることをはっきりと教えられた(マタイ 4: 17 と 23 節、9: 35、10: 7、11: 11-12、12: 28、16: 19、マルコ 12: 34、ルカ 10: 9 と 11 節、11: 20、12: 31-32、16: 16、17: 21 を参照)。しかし御国は未来でもある(マタイ 16: 28、24: 14、26: 29、マルコ 9: 1、ルカ 21: 31、22: 16 と 18 節を参照)。

マルコの福音書とルカの福音書の中の共観福音書的な同一箇所の記事の中には聖句「神の御国」が見られる。イエスのお教えのこの共通のトピックは人の心の中の神の御臨在であり、それはいつの日か全地で完成されることになっている。これはマタイ 6: 10 のイエスの祈りに反映されている。マタイはユダヤ人への手紙の中で神の御名を用いない聖句(天の御国)を好んで用いたが、マルコとルカは異邦人への手紙の中で一般的に神の御名を用いた。

これは共観福音書群の中でとても重要な聖句である。イエスの最初と最後の説教と語られた寓話(たとえ話)の大半ではこのトピックが取り扱われている。ここではそれは人の心の中の神の御臨在のことである。驚くべきことにヨハネはこの聖句をたった2回しか(自著中のイエスの寓話の中では全く)用いていない。ヨハネの福音書の中では「永遠の命」が重要な比喩である。

この聖句に関連する緊張はキリストがこの世に2回来られることによって起こっている。旧約聖書は主に神のメシア(救世主)の来られること—天の軍勢を伴われ、裁きのために、栄光に満ちて来られること—を記しているが、新約聖書はイエスが最初(1度目)に、イザヤ 53 章に記されているような苦しみのしもべとして、またゼカリヤ 9: 9 に記されているような謙遜な王として来られたことを示している。ユダヤの2つの世、つまり悪の世と新しい義の世とは重複している。イエスは今は信徒の心の中に臨在されているが、いつの日かその御臨在は全ての被造物に及ぶことになっている。イエスは旧約聖書の預言通りに来られることになっている。信徒は神の御国の「すでに」対「まだ」の中に生きている(Gordon D. Fee と Douglas Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth* の 131~134 ページを参照)。

NASB(改訂版)原典: 3: 4-8

⁴ニコデモはイエスに言った「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょうか。もう一度母親

の胎に入って生まれることができましょうか」。⁵イエスは答えて言われた「まことに、まことに、あなたに言うておく。人は水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。⁶肉から生まれた者は肉であり、霊から生まれた者は霊である。『あなたがたは新しく生まれなければならない』とわたしがあなたに言ったことに驚いてはいけない。⁸風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれた者も皆それと同じである」。

3: 5「人は水と御霊によって生まれなければ」これはもう一つの第3種条件文である。実体と霊（霊は無冠詞）あるいは地上のものと天のもの間には（ヨハネの著書には典型的なことであるが）対比が見られるようだ。

この対比は6節に暗示されている。

「水」の意味については以下のような理論が提唱されている。

1. ラビは男性の精液の意味で用いている。
2. 子供が産まれるときに用いられる水
3. 洗礼者ヨハネの授ける洗礼では悔い改めを象徴する(1: 26と3: 23を参照)
4. 旧約聖書では聖霊による散水の儀式を意味する(エゼキエル36: 25-27を参照)
5. 信徒の洗礼(ニコデモはそのように理解していなかったと思われるが、ユスティヌスとイレネウスが初めて述べた)

文脈中では第3の理論、つまり洗礼者ヨハネが水で授ける洗礼とメシアが聖霊によって受けられる洗礼についてのヨハネの発言が最も明らかな意味を表すに違いない。誕生はこの文脈中では比喩的であるので、私達はこの用語についてのニコデモの誤解を解釈の中心に置いてはならない。したがって理論1は不適切である。後に信徒の洗礼を指すようになる事柄としてニコデモはイエスの御言葉を理解していなかったかもしれないが、使徒ヨハネはしばしば自身の神学をイエスの歴史的な御言葉に差し狭んでいる(14~21節を参照)。理論2はヨハネの説く天上と天下、つまり神の王国と地上の王国の二元論に適合するようだ。これらの用語の定義においてはそれらが対照的か(理論1あるいは理論2)または相補的か(理論4)をはっきりさせなければならない。

D. A. Carsonは自著 *Exegetical Fallacies* で、どちらの用語も一度の誕生、つまりエゼキエル36章25~27節に記された終末論的な誕生を指し、エレミヤ31: 31-34に記された「新しい契約」を言い表すという別の理論について述べている(42ページ)。

F. F. Bruceも自著 *Answers to Questions* で、イエスの御言葉の背後に暗示されている旧約聖書の箇所としてエゼキエル書を挙げている。ラビの称号を持つ有名な教師であるニコデモも受けなければならない改宗洗礼をもその聖書箇所は指していたようだ(67ページ)。

「神の国」ある古代ギリシア語写本(MS_B)と多くの教父達の著書には、マタイの福音書によく見られる聖句「天の御国」が見受けられる。しかし、聖句「神の御国」は3節(ヨハネの福音書ではこの聖句は3節と5節にのみ見られる)に見られる。ヨハネの福音書では(マルコの福音書とルカの

福音書がそうであるように)異邦人に向けて書かれたので、ユダヤ人が神の御名について用いた婉曲表現が用いられていない。

3: 6 これも、ヨハネの福音書ではとても一般的な垂直的二元論(天上対天下)である(11節を参照)。

3: 7 「あなたがた. . . あなた」最初の「あなたがた」は複数形で、全人類に適用される一般的な原則を指しているが、2番目の「あなた」は単数形で、ニコデモを指している(11節に単数形と複数形についての同じ言葉遊びが見られる)。

私達は、自分達の人種的な系統(4: 12と8: 53を参照)に依り頼むユダヤ人の傾向に基づいてこの用語を解釈しがちである。ヨハネの福音書は紀元1世紀の終わり頃に書かれたので、明らかにグノーシス主義に、そしてユダヤ人の人種的な傲慢さに遭遇した使徒ヨハネの経験が文中に表れている。

「. . . しなければならない」ギリシャ語の動詞 *dei* (文字通り「. . . する必要がある」[BAGD172]、現在形能動態直説法動詞)は3章(7節と14節と30節)で3回用いられている。この動詞は、前進しようという神の御計画のために起こらなければならない事柄(4: 24、9: 4、10: 16、12: 34、20: 9を参照)を言い表している。

3: 8 ここには、どちらも「風」、「息」、そして「霊」を意味するヘブル語(とアラム語)の用語(*ruach*)とギリシャ語の用語(*pneuma*)の間の言葉遊びがある。ここで重要なことは、聖霊がそうでいらっしやるように、風が自由だということである。人は風を見ることができないが、その影響を受けている。それは聖霊についても同じことがいえる。人類の救いを司っているのは風ではなく聖霊である(エゼキエル37章を参照)。5~7節もこれと同じ真理を反映していると思われる。救いは聖霊の御介入(6: 44と65節を参照)と信仰および悔い改めによる個人の応答(1:12および3: 16と18節を参照)の組み合わせである。

ヨハネの福音書の独特な論点は聖霊の御人格と御業である(14: 17と25~26節および16: 7-15を参照)。使徒ヨハネは新しい義の世を神の御霊の世と見ている。

福音を聞いて、あるいは見て信じる人と信じない人がいるのはなぜかという謎を8節は強調している。聖霊に触れられない限り誰も信じることができない(1: 13および6: 44と65節を参照)と使徒ヨハネは主張している。この節はその神学を強調している。しかし、契約的な応答という質問(つまり神のお申し出を人間が受け入れること)では、聖霊が全ての人に触れられることは仮定されているに過ぎない。信じることを拒む人がいることは不義という大きな謎(つまり墮落の結果としての自己中心化)である。年をとるにつれて、私は自分の聖書をより深く研究し、神の人々を導く機会が増え、人生における「謎」についての著書が多くなった。私達は皆、人間の反乱という濃い霧(I コリント13: 12)の中に住んでいるのだ。そのことを説明あるいは他の言葉で言い換えることができるということ、つまり組織神学を展開することは、キリストの御名によって神を信頼することほど重要ではない。ヨブは決して「なぜか」とは言われなかったのだ。

特別なトピック： 息、風、霊

ヘブル語の用語 *ruach* (BDB924) とギリシャ語の用語 *pneuma* は「霊」、「息」、あるいは「風」(ヨハネ3: 5と8節を参照) を意味していると思われる。聖霊はしばしば、創造(創世記1: 2、ヨブ26: 13、詩篇104: 30を参照) と関連がある。旧約聖書には神と聖霊との関係が明確に定義されていない。ヨブ28: 26-28と詩篇104: 24と箴言3: 19および8: 22-23で神は万物の創造のために知恵(女性名詞) を用いられた。新約聖書ではイエスは創造における神の代理人(ヨハネ1: 1-3、I コリント8: 6、コリント1: 15-17、ヘブル1: 2-3を参照) といわれている。贖いにおけるのと同様に、創造においても神の3つの御人格の全てが関与している。創世記1章自体はいかなる二次的な事柄も強調していない。

NASB(改訂版)原典： 3: 9-15

⁹ニコデモはイエスに言った「どうしてこのようなことがあり得ましょうか」。¹⁰イエスは答えてニコデモに言われた「あなたはイスラエルの教師でありながら、このようなことが分からないのか。¹¹まことに、まことに、あなたに言う。わたしたちは自分の知っていることを語り、また自分の見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受けいれない。¹²わたしが地上のことを話してもあなたがたが信じないなら、天上のことを話しても、どうしてそれを信じるだろうか。¹³天から降ってきた者、すなわち人の子の他には、天に上った者はだれもない。¹⁴モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。¹⁵それは、人の子を信じる者が皆、永遠の命を得るためである」。

3:9-10 ニコデモは(1)ユダヤ教の改宗の洗礼と(2)洗礼者ヨハネの説教に基づいて、イエスの用いられた象徴的な用語を理解すべきだった。

これは人間の知識の意図的な軽視だったのかもしれない。ニコデモのような人、つまりユダヤ人の支配者でさえも精神的な事柄を完全には理解していなかった。ヨハネの福音書は、初期グノーシス主義、つまり救いの手段として人間の知識を強調する異端思想と戦うために書かれた。イエスただお一人が全てのものを照らす真の光(19節を参照) でいらっしやって、ただ単に優れた方でいらっしやるのではない。

3:11「わたしたちは自分の知っていることを語り」これらの複数形の代名詞は、イエスと使徒ヨハネ(11節を参照)あるいはイエスと父なる神を指しているが、どちらもこの文脈に適している(12節)。福音は推測ではなく神の啓示である。

「あなたがたはわたしたちの証しを受けいれない」使徒ヨハネはしばしば、「受け入れる」あるいは「受ける」を意味する用語 (*lambano*) とその前置詞との複合語を神学的な意味で用いている。

1. イエスを受けること
 - a. 否定的な意味で(1: 11、3: 11と32節、5: 43と47節)
 - b. 積極的な意味で(1: 12、3: 11と33節、5: 43、13: 20)

2. 霊を受けること
 - a. 否定的な意味で(14: 17)
 - b. 積極的な意味で(7: 39)
3. イエスの御言葉を受けること
 - a. 否定的な意味で(12: 48)
 - b. 積極的な意味で(17: 8)

1: 8の特別なトピック「イエスの証人」を見よ。

3:12 「～なら. . . ～ても」最初の節は、著者の観点あるいは彼の文学的意図に忠実であると仮定された第一種条件文である。二番目の節は起こる可能性のある行為を意味する第三種条件文である。

「あなたがた」この代名詞と動詞は複数形である。イエスのところに来たとき、ニコデモは(神)学生や他のパリサイ人と一緒にいたのかもしれない。従ってこれは、7節および11節にあるような、全てのユダヤ人未信者に対する一般的な発言だった(ニコデモはグループの代表者だった)可能性がある。

3:13 この節には、父なる神がイエスを真で完全で直接的なただ一人のお方として啓示されていることを裏付ける使徒ヨハネの意図がある(1: 1-14を参照)。これはヨハネの福音書に展開された垂直的二元論、つまり天対地、現実的なもの対霊的なもの、ニコデモの起源対イエスの起源(1: 51、6: 33と38節と41節と50節と51節と58節と62節を参照)についての理論のもう一つの例である。この節は三位一体の神の永遠の第二の御人格(でいらっしゃるイエス)の(1)神性(2)世の存在する前からの御存在(3)受肉を主張している(三位一体の神については14: 26の特別なトピックを見よ。

「人の子は」これはイエスの自称であり、紀元1世紀のユダヤ教では国家主義的な、または軍事的な、あるいはメシア的な意味は持っていなかった。この用語はエゼキエル2: 1と詩篇8: 4(これらの聖書箇所では「人間」を意味する)およびダニエル7: 13(この聖書箇所では「神性」を意味する)に由来する。この用語は、完全なる神でいらっしゃるとともに完全なる人間でもいらっしゃるというイエスの御人格の逆説の組み合わせである(Iヨハネ4: 1-3を参照)。

3: 14-21 イエスとニコデモの会話がどこで止み、その後のイエスと使徒ヨハネの(御)言葉がどこから始まったかをはっきりと知ることは難しい。共観福音書に記されているのは公共の場でのイエスのお教えのお働きであり、ヨハネの福音書に記されているのはイエスの弟子達との個人的なお働きであると思われる。14～21節は次のように要約することができる。

1. 14～15節はイエスに関連している
2. 16～17節は父なる神に関連している
3. 18～21節は人類に関連している

これらの発言のそれぞれがイエスの御言葉なのか、それとも使徒ヨハネの言葉かなのどうかはそれらの発言の真理に影響しないことを覚えておこう。

3: 14 「モーセが蛇を上げたように」 これは、イスラエルの民が荒野を放浪していた時期に経験し

た裁きについて述べた民数記21: 4-9を指している。そこでの真理は、人類は神の御言葉を完全に理解していなくても信頼し従わなければならないということである。神はイスラエルの民に、ただ信じるだけで蛇に刺されても命が助かる方法を備えられた。この信仰はイスラエルの民が神の御言葉とお約束に従うことによって証しされた(民数記21: 8を参照)。

「**上げられる**」このギリシャ語の用語(8: 28、12: 32と34節を参照)はしばしば「高く上げられる」(使徒行伝2: 33、5:31、ピリピ2: 9)と訳されたので、使徒ヨハネが2つの意味(二重の意味、1: 5、3: 3と8節を参照)で用いたもう一つの用語となっている。神の御言葉を信じた人々を神が、ヘビにかまれたことによる死から救い出すことを約束され、その人々が青銅の蛇を見ることになったように、神の御言葉(十字架上で上げられるお方キリストについての福音)を信じてイエスを信頼する人々は悪という名の蛇(悪魔、罪)にかまれることによる死から救い出され(救われ)ることになる(12: 31-32を参照)。

3: 15-18 「... する者が皆」(15節)「... する者がひとりも... ないで」(16節)「... する者は」(18節) 神の愛は全人類への招待状である(イザヤ55: 1-3、エゼキエル18: 23と32節、ヨハネ1章29節、3: 16、6: 33と51節、IIコリント5: 19、I テモテ2: 4、4:10、テトス2: 11、II ペテロ3:9、I ヨハネ2: 2と4: 14を参照)。救いは普遍的に申し出られるが、その受け入れは普遍的ではないのだ。

3: 15「信じる」これは現在形能動態分詞である。信仰は持続的な信頼である。1: 12の解説と1: 7および2: 23の特別なトピックを見よ。

「**人の子を**」これはイエスについての事実(神学的真理)だけでなくイエスとの個人的な関係も指す。救いは(1)信じるべきメッセージ(2)受け入れられ従われるべき人物(3)その[(2)の]人物のような生き方である。

ここでの文法形式は珍しい。これは、ヨハネの福音書ではここにだけ見られる、前置詞 *en* を伴う代名詞であり、通常は前置詞として *eis* が用いられる。この文法形式は「永遠の命を持つだろう」という表現と関連しているようだと思われ(単に考えて差し支えないと思われる(Harold Greenleeの著書 *The New Testament in Basic English* を参照))。

3: 15,16「永遠の命」このギリシャ語の用語(*zoe*)は質と量を指す(5: 24を参照)。マタイ25: 46にはこれと同じ用語が永遠の別離の意味で用いられている。ヨハネの福音書では *zoe* (主に5章と6章で33回用いられている)は通常(現実の命を指して用いられる動詞。4: 50と51節と53節を参照)は復活、終末論的な命、新しい世での命、あるいは神ご自身の命を指す。

ヨハネの福音書は福音書群の中でも使徒ヨハネが「永遠の命」を強調している点で独特である。それは使徒ヨハネの説く福音の主題と目標である(3: 15、4: 36、5: 39、6: 54と68節、10: 28、12: 25、17: 2と3節を参照)。

NASB(改訂版)原典: 3: 16-21

¹⁶神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世につかわされたのは、世をさばくため

はなく、御子によって、この世が救われるためである。¹⁸彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。¹⁹そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。²⁰悪を行う者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。²¹しかし、真理を行う者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということが、明らかにされるためである。

3: 16「神は... ほどに～を愛された」16～17節は主に父なる神の愛について述べている。神を言い表す全ての用語は擬人的であることに注意しよう。私達の世、私達の感情、そして私達の歴史観を言い表す用語を用いて、私達は永遠の聖なる唯一の霊的な存在(神)を言い表すように試みなければならない。

特別なトピック: 一人の人間として表現された神(擬人的言葉)

I. この種の言葉は旧約聖書ではとても一般的である(数例を挙げる)。

A. 肉体の構成要素

1. 両目—創世記 1: 4 と 31 節、6: 8、出エジプト 33: 17、民数記 14: 14、申命記 11: 12、ゼカリヤ 4: 10
2. 両手—出エジプト 15: 17、民数記 11: 23、申命記 2: 15
3. 腕—出エジプト 6: 6、15: 16、民数記 11: 23、申命記 4: 34、5: 15
4. 両耳—民数記 11: 18、I サムエル 8: 21、II 列王記 19: 16、詩篇 5: 1、10: 17、18: 6
5. 顔—出エジプト 32: 30、33: 11、民数記 6: 25、申命記 34: 10、詩篇 114: 7
6. 指—出エジプト 8: 19、31: 18、申命記 9: 10、詩篇 8: 3
7. 声—創世記 3: 8 と 10 節、出エジプト 15: 26、19: 19、申命記 26: 17、27: 10
8. 足—出エジプト 24: 10、エゼキエル 43: 7
9. 人間の姿—出エジプト 24: 9-11、詩篇 47 篇、イザヤ 6: 1、エゼキエル 1: 26
10. 主の天使—創世記 16: 7-13、22: 11-15、31: 11 と 13 節、48: 15-16、出エジプト 3: 4、13-21 節、14: 19、士師記 2: 1、6: 22-23、13: 3-22

B. 身体行為

1. 創造の過程における宣言—創世記 1: 3、6 節、9 節、11 節、14 節、20 節、24 節、26 節
2. エデンの中を歩く(つまり足音を立てる)—創世記 3: 8、18: 33、ハバクク 3: 15
3. ノアの箱舟の扉を閉める—創世記 7: 16
4. 生贄の香りを嗅ぐ—創世記 8: 21、レビ 26: 31、アモス 5: 21
5. 天から降(くだ)る—創世記 11: 5、18: 21、出エジプト 3: 8、19: 11 と 18 節と 20 節
6. モーセを葬る—申命記 34: 6

C. 人間的感情(数例を挙げる)

1. 後悔または悔い改め—創世記 6: 6 と 7 節、出エジプト 32: 14、士師記 2: 18、I サムエル 15: 29 と 35 節、アモス 7: 3 と 6 節
 2. 怒り—出エジプト 4: 14、15: 7、民数記 11: 10、12: 9、22: 22、25: 3 と 4 節、32: 10 と 13 節と 14 節、申命記 6: 5、7: 4、29: 20
 3. 嫉妬—出エジプト 20: 5、34: 14、申命記 4: 24、5: 9、6: 15、32: 16 と 21 節、ヨシュア 24: 19
 4. 嫌悪または憎悪—レビ 20: 23、26: 30、申命記 32: 19
- D. 家族に関連する用語(数例を挙げる)
1. 父
 - a. イスラエルの—出エジプト 4: 22、申命記 14: 1、39: 5
 - b. 王の—II サムエル 7: 11-16、詩篇 2: 7
 - c. 父親らしい行為の比喩—申命記 1: 31、8: 5、32: 1、詩篇 27: 10、箴言 3: 12、エレミヤ 3: 4 と 22 節、31: 20、ホセア 11: 1-4、マラキ 3: 17
 2. 親—ホセア 11: 1-4
 3. 母—詩篇 27: 10(育児中の母親との類似)、イザヤ 49: 15、66: 9-13
 4. 若い忠実な愛人—ホセア 1~3 章

II. この種の言葉を用いる理由

- A. それは神が御自身を人類に現されるために必要である。男性としての神のとても普遍的な概念は擬人化である。なぜなら神は霊でいらっしゃるからだ。
- B. 神は人間の生活の最も意味深い場面を取り上げて、墮落した人類(父、母、親、愛人)に御自身を現されるために用いられる。
- C. 必要なことであるとはいえ、神はいかなる現実の形態をも限定してとることを望んではおられない(出エジプト20章、申命記5章を参照)。
- D. 究極の擬人化はイエスの受肉なのだ。神は実体を持たれ、触れることができるようになった(Iヨハネ 1: 1-3を参照)。神のメッセージは神の御言葉となった(Iヨハネ 1: 1-18を参照)。

「だから」これは文字通り「このようにして」である。これは感情ではなく方法を表現している。神は御自分の子を人類の身代わりとして死ぬものとして世に与える、つまり世に送ることによって御自分の愛を示された。

「世」この節も、グノーシス主義における霊(神)と物質の二元論を否定した。ギリシャ人には物質を悪とみなす傾向があったが、使徒ヨハネはそうは考えなかった。神は世と人類の両方を愛されているのだ。

「ひとり子」これは「独特の、つまり数ある中の一つ」という意味であって、神に他に子がいないという意味ではない。単に、イエスのような子が他にいないという意味なのである。

「御子を信じる者がひとりも. . . ないで」ここでは「神の尊厳」と「人間の自由意志」が相互に排他

的ではないことが示されている。それらは両方とも真実なのだ。神は常に応答を始められ、御計画を示されるが、契約によって御自分と人類の関係を造られる。人類は神のお申し出と条件に応答し続けなければならないのだ。

特別なトピック: 予定された運命(カルビン主義)対人間の自由意志(アルミニウス主義)

自分達の信じてきた西洋(アメリカ)的個人主義あるいは福音伝道への熱意に私達は注意しなければならない。また、アウグスティヌスとペレギウスとの、あるいはカルヴァンとアルミニウスとの間の歴史的・神学的な論争に注目しすぎることも私達は避けなければならない。

「滅びない」これは滅びる者もいるということの意味する。信仰によってイエスに応答しない者は滅びることになるのだ。

3: 17「世をさばくため」ヨハネの福音書には、イエスが裁き主ではなく救い主として来られたことを主張する段落がある一方で、イエスが裁き主として来られたことを主張する段落もある。このことについてはいくつかの神学的な見解がある。

1. 神は被造物に対するのと同じようにイエスに裁きを与えられ、名誉のしるしとしての贖いを与えられた。
2. 当初イエスは人々を裁くためではなく救うために来られたが、イエスを拒んだことによって人々は自身を裁くことになった。
3. 王の王として、そして裁き主としてイエスは世に再来されることになっている。

3: 18 神は人々を地獄へ送られない。人々が自身を地獄へ送るのだ。信仰にも不信仰にも継続する結果がある。

3: 19-21「人々は光よりもやみの方を愛した」福音を聞いた多くの人々がそれを拒むのは知的あるいは文化的な理由ではなく主に道徳的な理由からである。光が指しているのはキリストおよび神の愛と人類の必要とキリストの備えと必要とされる応答についてのキリストのメッセージである。

「そのさばきというのは」裁きは、救いと同じように、現在において現実であり、また未来において成就することになっている事柄でもある。信徒の生活は喜びと血みどろの闘争であり、連敗後の勝利であり、救いの保証があるとともに忍耐についての警告が続くのだ。

3: 21「真理を行う」永遠の命には目に見える特徴がある。人はキリストによらなければ真の意味で神に遭遇し聖霊によって満たされて以前とは異なる者となることはできない。行いでは救いを得することはできないが、救いの証拠にはなる。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければ

ばならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 聖句「再び生まれる」の意味は何か。
2. 5節の「水」は何を指していると思うか。それはなぜか。
3. 「信じる」(救いの信仰)は何と関連しているか。
4. ヨハネ3: 16は人類に対するイエスの愛についての一節か、それとも父なる神に対するイエスの愛についての一節か。
5. カルヴァン主義はどのようにヨハネ3: 16に関連しているか。
6. 「滅びる」とは消滅を意味しているのか？
7. 「光」を定義しなさい。

22～36節の文脈の洞察

- A. ヨハネの福音書における、イエス・キリストの完全な神性の強調は、対話と個人的出会いを通じて、福音書の冒頭から続いている。この章でもその形式が続いている。
- B. 紀元1世紀の終わり頃に自身の福音書を書いた使徒ヨハネは、共観福音書が書かれた頃から生じていた問題のいくつかを取り挙げている。その問題の一つの解決には明らかに洗礼者ヨハネに関連する初期の異端を取り扱わなければならない。洗礼者ヨハネが自身をナザレのイエスに劣る者であると認め、メシアとしてのイエスの御役割を主張している点が重要である。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 3: 22-24

²²こののち、イエスは弟子たちとユデアの地に行き、彼らと一緒にそこに滞在して洗礼を授けておられた。²³ヨハネもサリムに近いアイノンで洗礼を授けていた。そこには水がたくさんあったからである。人々がぞくぞくとやってきて洗礼を受けていた。²⁴そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられていなかった。

3: 22「ユデアの地に行き」 ユデアとガリラヤの両方でのこの初期のお働きは共観福音書群には述べられていない。共観福音書群は時系列に沿ったキリストの伝記ではないのだ。

「彼らと一緒にそこに滞在して」 イエスは群衆に説教をされたが、御自分の弟子とだけ対話された。イエスは弟子達に御自身を明かされたのだ。

「洗礼を授けておられた」 ここで述べられている洗礼は信徒の洗礼ではなく、悔い改めと霊的な

感受性を象徴する洗礼である。

3: 23「ヨハネもサリムに近いアイノンで洗礼を授けていた」このサイトの場所は不明である。正確な位置がどこであれ、イエスはユデアで働かれ、洗礼者ヨハネはイエスの働かれていた場所からわずかに北で働いていた。

3: 24「そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられていなかった」なぜこの時系列上の事実がこの時点に加えられているのかは明らかではないが、それはキリストの御生涯についての記述を共観福音書群とヨハネの福音書で一致させるためであるという説もある。

NASB(改訂版)原典： 3: 25-30

²⁵ところが、ヨハネの弟子たちの一部とユダヤ人との間に浄めのことで議論が起った。²⁶そこで彼らはヨハネのところにきて言った「ラビ、御覧下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒におられたことがあります、あなたがあかしをしておられたあの方が洗礼を授けておられ、皆がその方のところへ出かけています」。²⁷ヨハネは答えて言った「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。²⁸『わたしはキリストではなく、その方よりも先に遣わされた者である』』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。²⁹花嫁を持つ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。³⁰彼は栄えなければならず、わたしは衰えなければならぬ。

3: 25「ヨハネの弟子たちの一部とユダヤ人で議論が起こった」「議論」は「論争」あるいは「対決」を意味する強烈な用語である。洗礼者ヨハネの弟子達がこの議論を扇動したのかもしれない。

NASB、NKJV、NRSV、NJB 「浄めについて」

TEV 「洗礼の儀式の問題」

洗礼者ヨハネの弟子達は多分、ユダヤ教の洗礼の伝統に関して師の授けるとイエスの授けておられた洗礼との関係を議論していたのだろう。

文脈中にこの特定の議論の内容が述べられていないことは、洗礼者ヨハネがナザレのイエスの優位性についての証人であったというもう一つの事実を強調している。

3: 26「御覧下さい。あなたがあかしをしておられたあの方が洗礼を授けておられ、皆がその方のところへ出かけています」洗礼者ヨハネの弟子達は神の子羊についてのヨハネの初期の証しを覚えていたので、明らかにイエスの成功に少し嫉妬していた。イエスもあらゆる争いの霊に敏感でいらつやつた。

3: 27「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない」これは、霊的な物事の間には争いがないことを非常に率直に肯定した発言である。信徒の持ち物は全て神の恵みによって与えられている。各信者の救いもまた神の恵みによって与えられているのだ。全ての信者自身がイエスにとって神からの賜物であるともいえる。

3: 28「わたしはキリストではない」洗礼者ヨハネは、1: 20で彼自身が述べているように、自分は

メシアではなくイエスの先駆者であることを特に断言している。

3: 29「花嫁を持つ者は花婿である」 クリスマスの結婚は現代において契約関係を最もよく言い表す例かもしれない。

「こうして、この喜びはわたしに満ち足りている」 争いの霊を持つ代わりに、洗礼者ヨハネは明らかに自身の立場を認め、イエスにあって喜んだ。

3: 30「彼は栄えなければならず、わたしは衰えなければならない」 それは、イエスのより大きくより重要な働きのみならず先駆者としての自分の立場をヨハネが理解したことの強い肯定である。

NASB(改訂版)原典： 3: 31-36

³¹上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。³²彼はその見たところ、聞いたところをあかししているが、だれもそのあかしを受けいれない。³³しかし、そのあかしを受けいれる者は、神がまことであるしるしを、たしかに認めたのである。³⁴神がおつかわしになった方は、神の言葉を語られる。神は聖霊を限りなく賜うからである。³⁵父なる神は御子を愛され、万物をその手にお与えになった。³⁶御子を信じる者は永遠の命を持つ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。

3: 31-36 これらの聖句が

1. 洗礼者ヨハネの継続的な言葉での肯定
2. イエスの御言葉
3. 使徒ヨハネの言葉

であるかどうかについては解説者の間で多くの議論がなされている。

3:31「上から来る者」 メシアを指して用いられる2つの称号は、メシアが世の存在する以前からおられ、完全な神性をお持ちであること、そして受肉と神から与えられた使命を強調している。

「上から... 上から」 この節の前半は、イエスの神性と世の存在する以前からおられること、そして天国から来られたことを暗示している。この節の後半はイエスが神の被造物の上におられることを断言している。

「地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る」 イエスの証しは、いかなる地上の預言者や説教師のものよりもはるかに大きい。

3: 32「彼はその見たところ、聞いたところをあかししている」 イエスは、神の究極の啓示でいらっしやるので、父なる神との個人的な御経験と御自身の神性について語られる。

「だれもそのあかしを受けいれない」 この聖句は、直前後の文脈だけではなく全体として、ユダヤ教を指す。

3: 33「... する者」 これは全人類に対する神の普遍的な無限の愛を示している。神の福音を妨げる障壁はない。人は悔い改めて信じなければならないが、救いのお申し出は全ての人に開か

れている。

「**そのあかしを受けいれる**」これは、神が救ってくださると信じることは初めの決心であるばかりでなく弟子としての生活を始めることでもあることを示している。

「**神がまことであるしるしを、たしかに認めただのである**」キリストに自らの個人的な信頼を置くとき、信徒は神の御自身と世と人類と御子についてのメッセージが真であると認める。ただお一人の真の神を究極的に顕されているのでイエスは真実でいらっしやるのだ。

特別なトピック： しるし

しるしは古代において真実や所有権や安全や保護、あるいは神が賜物を下さる約束という現実のしるしを示す方法だったようだ。このしるしの目的は、神の怒りが及ばないように神の民を識別することである。サタンのしるしは、神の怒りの対象となる神の民を識別するためのものである。

3: 34「神がおつかわしになった方は、神の言葉を語られる」 イエスの権威は神から来る。神はイエスを世に送られた。イエスは聖霊に満ちた方でいらっしやる。

「**神は聖霊を限りなく賜うからである**」聖霊に満たされた預言者はいない。従って、イエスは預言者に優る方であり、神の完全な啓示でいらっしやる。

3: 35「父なる神は御子を愛され」 神と信徒の関係は神のメシアへの愛に見出される。

「**万物をその手にお与えになった**」これは他者に対する権力や権威を意味するヘブル語の慣用語である。

「**御子を信じる者は永遠の命を持つ。御子に従わない者は、命にあずかることがない**」いかに誠実あるいは感情的なものであったとしても、信条は一度の決心以上のものである。これは、イエスを知ることなくしては父なる神を知ることができないことを断言している。救いは御子イエスとの継続的な関係を通してのみもたらされる。福音とは私達が受け入れる人物と真理だけではなく、私達の生きる人生でもあるのだ。

「**...ばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである**」「信条」、「服従」、「怒り」は未来に成就することになっている、現在に存在している現実である。これは、神の国が「すでに来ていること」と「まだ来ていないこと」の間に存在する緊張と同じものである。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. イエスの初期のメッセージは洗礼者ヨハネのものとのように似ているか。
2. この洗礼は信徒の洗礼と同じか。
3. なぜ洗礼者ヨハネの言葉はヨハネの福音書の冒頭の数章で非常に強調されているのか。
4. 著者である使徒ヨハネが洗礼者ヨハネとイエスとの関係を言い表すのに用いている対比の数と種類を挙げなさい。
5. 33節にある用語「受け入れる」は36節にある用語「信じる」とどのように関連しているか。36節にある用語「従わない」はこの議論とどのように関連しているか。
6. 31～36節で述べられている、人々がナザレのイエスを救いの唯一の希望として信頼すべき理由の数を挙げなさい。
7. 36節にある用語「怒り」が現在時制の動詞である理由を説明しなさい。

ヨハネの福音書4章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～54 節の文脈の洞察

A. 第3章と第4章には意図的な構造がある。

1. 宗教家の男性(ニコデモ)対「のけ者」の女性(井戸端にいた女性)
2. エルサレム発祥のユダヤ教(正教)対サマリアのユダヤ教(異端)

B. イエスの御人格と御業についての真理は

1. 井戸端にいた女性との対話(1～26節)
2. 弟子達との対話(27～28節);
3. 村人の証言(39～42節)
4. ガリラヤの人々による受け入れ(43～45節)
5. 病気に対するイエスの御力のしるしと奇跡(46～54節)

によってさらに展開されている。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 4: 1-6

¹イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、また洗礼を授けておられるということ、パリサイ人たちが聞き、それを主が知られたとき、²(しかし、イエス御みずからが洗礼をお授けになったのではなく、その弟子たちが授けていた)³ユデアを去って、またガリラヤへ行かれた。⁴しかし、イエスは

サマリヤを通過して行かなければならなかった。⁵そこで、イエスはサマリヤのスカルという町に行かれた。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが、⁶そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時刻は第六の時頃であった。

4: 1「主」 ここでヨハネは同じ文で一人の人物を指して「主」と「イエス」を用いている。

「イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、また洗礼を授けておられるということを知り」 御自分の弟子達と洗礼者ヨハネの弟子達がパリサイ人の扇動によって緊張状態になっていることをお感じになったので、イエスはこの地域を去られた。

4: 2「イエス御みずからが洗礼をお授けになったのではなく」 明らかにイエスは御自分のお働きの初めに洗礼を授けられていたが、後にそうされなくなった。

4: 4「イエスはサマリヤを通過して行かなければならなかった」 神がこの道をイエスが通るようにされたのには目的がある。それはユデアからガリラヤに行く最短のルートであった。ガリラヤからユデアに向かうときにユダヤ人は通常このルートを用いたが、ユデアのユダヤ人はサマリア人を嫌っており、自分達とは宗教的に半分しか共通点がないという理由からサマリア人が自分達の土地を通過することを心よく思っていなかった。

特別なトピック: 人種主義

I. 導入

- A. これは堕落した人類による、彼らの社会の実情の普遍的表現である。これは、他者に依存しようとする人類のエゴ(わがまま)である。人種主義はあらゆる点で現代の現象であると言える。また、国家主義(つまり部族[民族]主義)はそれよりも古い表現である。
- B. 国家主義はバベルの塔で始まり(創世記11章)、元々はいわゆる人種の始祖となった(創世記10章)ノアの3人の息子達に関連がある。しかし聖句から、人類がひとつの源(始祖)から出たことは明らかである(創世記1~3章と使徒行伝 17: 24-26 を参照)。
- C. 人種主義は数多い偏見のひとつに過ぎない。その他の偏見としては(1)学歴自慢(2)社会的・経済的傲慢(3)自己正当化的な宗教的律法尊重主義(4)原理主義的な政治協力主義、などがある。

II. 聖書中の資料

A. 旧約聖書

- 1. 創世記 1: 27 人類、つまり男性と女性は神のお姿に似せて造られたので、その点で彼らは特別である。それはまた個人の価値と尊厳も表している(ヨハネ 3:16 を参照)。
- 2. 創世記 1: 11-25 ここでは成句「その種類に応じて」が10回も用いられている。これは人種差別を支持するために用いられてきた。しかし文脈から、これが人間ではなく動植物について述べていることは明らかである。

3. 創世記 9: 18-27 これは人種的優越性を支持するために用いられてきた。神がカナンを呪われなかったことを覚えておかなければならない。彼の父ノアは泥酔し昏睡した状態から目覚めた後に彼を呪った。聖書には神が確かにこの神名濫用を見過ごされカナンを呪われたという記述は全くない。神がそうされたときでさえ、このことは黒色人種に影響を及ぼさなかった。カナンはパレスティナに住む人々の父であった。そしてエジプトの壁画は彼らが黒人ではなかったことを示している。

4. ヨシュア 9: 23 これはある人種が他の人種に仕える宿命にあることを示すために用いられてきた。しかし文脈によれば、ギベオン人はユダヤ人と同人種である。

5. エズラ 9-10 章とネヘミヤ 13 章 これは人種的意味で用いられてきた。しかし文脈によれば、結婚は人種(の違い)ではなく宗教的理由によって禁止された(彼らはノアと同じ息子から出た。創世記 10 章)。

B. 新約聖書

1. 福音書

a. イエスはユダヤ人とサマリア人との憎しみを何度も挙げられ、人種的な憎しみがふさわしくないことを示された。

(1) 良きサマリア人のたとえ話(ルカ 10: 25-37)

(2) 井戸端の女(ヨハネ 4: 4)

(3) とても感謝している重い皮膚病の人(ルカ 17: 7-19)

b. 福音は全ての人のためのものである。

(1) ヨハネ 3: 16

(2) ルカ 24: 46-47

(3) ヘブル 2: 9

(4) 黙示録 14: 6

c. 天の御国には全ての人がいるであろう。

(1) ルカ 13: 29

(2) 黙示録 5 章

2. 使徒行伝

a. 使徒行伝 10 章は神の普遍的愛と福音の普遍的メッセージをはっきりと述べている。

b. ペテロは使徒行伝 11 章で自分の行動を非難されたが、この問題は使徒行伝 15 章のエルサレムの集会が行なわれるまでは解決されなかった。紀元 1 世紀にはユダヤ人と異邦人との対立はとても激しかった。

3. パウロの手紙

a. キリストのうちには妨げがない。

(1) ガラテヤ 3: 26-28

(2) エペソ 2: 11-22

(3)コロサイ 3: 11

b. 神は人に対してえこひいきをなさない。

(1)ローマ 2: 11

(2)エペソ 6: 9

4. ペテロの手紙とヤコブの手紙

a. 神は人に対してえこひいきをなさない。I ペテロ 1: 17

b. 神は分け隔てをなさないのので、御自分の人々に対してもえこひいきをなさない。ヤコブ 2: 1

5. ヨハネの手紙

信者の責任についての力強い発言のひとつは I ヨハネ 4: 20 に見られる。

Ⅲ. 結論

A. 人種主義はそれ自体があらゆる種への偏見であるので、神の子供には全くふさわしくない。ここに、1964年にニューメキシコ州グロリエタで開催されたクリスチャンいのち委員会のフォーラムでのヘンリー・バーネットのスピーチの引用を挙げる。

「人種主義は遺伝する。なぜならそれは非科学的であることは言うまでもなく、非聖書的で非クリスチャン的であるからだ。」

B. この問題はクリスチャンに、自らのキリストに似た愛と赦しと失なわれた世界への理解を示す機会を与える。クリスチャンがこれを拒むと自らの未熟さをさらすことになり、悪いものが信者の信仰と確信と成長を遅らせる機会を与えることになる。それはまた、キリストのもとに来る失なわれた人々にとっての妨げとなりうるだろう。

C. 私に何ができるだろうか？(クリスチャンいのち委員会配布用冊子「人種関係」からの抜粋)

個人レベルで

人種に関する問題の解決におけるあなた自身の責任を受け入れなさい。

祈り、聖書の学び、他人種の人々との交わりを通して、あなたの生活からの人種差別の撤廃に努めなさい。

人種についてのあなたの信念、特に人種差別の気持ちを起こさせる考え方に同調しないという決意を表明しなさい。

家族生活で:

他人種の人々への態度作りが家族に及ぼす影響の重大性を認識しなさい。

子供達と親達が人種問題について家庭外で聞いたことを話し合うことによって、クリスチャン的な態度作りを試みなさい。

親達は他人種の人々へのクリスチャン的な態度の模範を示すように注意すべきである。

人種の家系間の家族の友好的関係を作る機会を持つように試みなさい。

教会で:

人種に関する聖書的真理を説教あるいは教えることによって、教会は社会全体に模範を示す良い場所となりえます。

新約聖書に登場する教会に人種的な障壁が見られなかった(エペソ 2: 11-12 とガラテヤ 3 章 26-29 節)のと同様に、礼拝、交わり、教会を通した奉仕は全ての人に開放されていることをはっきりと認識しなさい。

日々の生活で:

職場で全ての人種差別が克服されるように援助しなさい。

権利と機会の平等を守るあらゆる種類の共同体組織を通して活動しなさい。そのとき、非難の対象は人ではなく人種問題であるということを覚えておきなさい。その目的は理解を促すことであり、気まずさを生むことではありません。

賢明だと思えるなら、一般の公教育機関内に交わりの場を設けるためと人種関係の向上のための特別な行動のために、有識者で特別委員会を結成しなさい。

立法府とその構成議員達が、人種的正義を全うし、政治的圧力による偏見の助長に反対する法律を制定できるように助ける。

差別的な内容のない法律の制定に努めている官吏を推挙する。

暴力を避け、法律に敬意を払い、法構造が差別を助長する人々にとって人種差別の道具とならないように、クリスチャン市民としてできることは全てしなさい。

全ての人々との関係においてキリストのご精神とお心を模範としなさい。

「サマリアを通過して」 紀元前8世紀からサマリア人とユダヤ人の間には大きな憎悪があった。紀元前722年に、サマリアを首都とする北部の十部族はアッシリアの捕虜となりメディアに強制送還され、他の囚われた人々はパレスチナ北部に移住させられた。長い年月の後、これらの異教徒は残りのイスラエルの民と相互に結婚した。ユダヤ人はサマリア人を自分達とは宗教的に半分しか共通点がない異端とみなしていた。

4: 5「イエスはサマリヤのスカルという町に行かれた。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあった」 スカルはシケムとも呼ばれることがある。

4:6「そこにヤコブの井戸があった」 この井戸は湧き水(泉)ではなく、雨水が溜められた場所であった。

「イエスは旅の疲れを覚えて」 明らかにここにはイエスの人間的な御性質が見られる。しかしイエスは人を愛せないほどには疲れておられなかった。

「それは、第六の時頃であった」 ユダヤ人の一日は午前6時から始まる(ローマ人の時間では正午)。従って、一日のうちで最も暑い時刻である正午にイエスは井戸端に来られたことになる。

NASB(改訂版)原典: 4: 7-14

⁷一人のサマリヤの女が水を汲みに来たので、イエスはこの女に「水を飲ませて下さい」と言われた。⁸弟子たちが食物を買いに町に行っていたからである。⁹すると、サマリヤの女はイエスに言った「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに飲ませてくれとおっしゃるの

ですか」(ユダヤ人はサマリア人と交際していなかったからである)¹⁰イエスは答えて言われた「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたなら、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。¹¹女はイエスに言った「主よ、あなたは汲む物をお持ちにならず、その上、井戸は深いのです。その生ける水をどこから手に入れるのですか」。¹²あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも偉い方なのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」。¹³イエスは女に答えて言われた「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう」。¹⁴しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも渴くことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が湧き上がるであろう」。

4: 7「一人のサマリアの女が来た」 村の中での自分の社会的地位が理由でこの女性はいつもとは異なる時間に遠方の井戸に一人で来た。

「『水を飲ませて下さい』」 この言葉には何らかの切迫感が感じられる。

4: 9「『あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリアの女のわたしに飲ませてくれとおっしゃるのですか』」 ユダヤ人には、サマリア人が使うのと同じ手桶から飲むことさえ許されなかった。イエスは2つの文化の壁、つまり(1)サマリア人に話しかけること(2)公共の場で女性に話しかけること、を無視されていた。

4: 10「もし...なら」 ここでいう「賜物」とは、永遠の生命を与える神(参照:3:16)の贈り物としてのイエスを指す。ここでは、キリストと聖霊に顕わされた、神の過分な身に余る恵みが強調されている。

「生ける水」 イエスは用語「生ける水」を「霊的生活」と同義語として用いられた。しかし、このサマリア人の女性は、井戸に溜まった雨水の対極にある、川の流れる水のことをイエスがおっしゃっているとと思った。

4: 11「主よ」 ここで、このサマリア人の女性は会話の相手の男性の呼び名として礼儀正しい呼称(先生)を用いても差し支えなかったが、直前の会話でその男性がイエスだと気付いたので、完全な神性を持つ方に対する神学的な呼称(主)を用いた。

4: 12「あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも偉い方なのですか」 サマリア人の女性は、彼女自身のヤコブからエフライムとマナセを経るサマリア人の家系の偉大さを主張していた。驚くべきことは、イエスの優位性が御自身の主張されていた通りのものだったということである。ここでの会話には、さげすまれし者達(サマリア人と女性)への神の、つまりイエスの愛、そしてイエスがユダヤ教や人種的誇りに優る方でいらっしゃることが示されている。

4: 13-14「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも渴くことがない」 これは多分メシア的な意味がこめられたお言葉だろう。

4: 14「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が湧き上がるであろう」 砂漠の人々にとって水は生命と神の備えの象徴であった。

NASB(改訂版)原典: 4: 15-26

¹⁵女はイエスに言った「主よ、わたしが渴くことがなく、また、ここに汲みにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」。¹⁶イエスは女に言われた「あなたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」。¹⁷女は答えて言った「わたしには夫はおりません」。¹⁸イエスは女に言われた「夫がないと言ったのは、もっともだ。あなたには五人の夫がいたが、今あなたと一緒に暮らしているのはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」。¹⁹女はイエスに言った「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます」。²⁰わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。²¹イエスは女に言われた「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。²²あなたがたは自の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからである。²³しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。今がそうである。父はこのような礼拝をする者たちを求めておられるからである。²⁴神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。²⁵女はイエスに言った「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られたなら、わたしたちに一切のことを知らせして下さい」。²⁶イエスは女に言われた「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。

4: 15 このサマリア人の女性は、ニコデモと同じように、まさに現実的な(文字通りの)レベルでしかイエスを理解していなかった。このことはイエスの弟子たちについても珍しくなかった。

4: 18「あなたには5人の夫がいた」 イエスは現実の世界から霊的な世界に女性をいざなうために超自然的な知識を用いられた。

4: 19「わたしはあなたを預言者と見ます」 このサマリア人の女性はまだメシアを理解するに至っていなかった。彼女は神と自分との関係という大きな問題を賛辞を用いて避けようとしていた。

特別なトピック: 旧約聖書の預言

I. 導入

A. 緒言

1. 信徒の共同体は預言の解釈方法については同意していない。何世紀にもわたって他の事実が正当な立場として立てられてきたが、これについてはそのようなことはなされていない。

2. 旧約聖書の預言にはいくつかのはっきりと定義された時期がある。

a. 先王時代

(1) 預言者と呼ばれた人々

(a) アブラハム 創世記 20: 7

(b) モーセ 民数記 12: 6-8、申命記 18: 15 と 34: 10

- (c)アロン 出エジプト 7: 1(モーセの代弁者)
- (d)ミリアム 出エジプト 15: 20
- (e)メダドとエルダド 民数記 11: 24-30
- (f)デボラ 士師記 4: 4
- (g)無名の人 士師記 6: 7-10
- (h)サムエル Iサムエル 3: 20
- (2)一団とみなされた預言者達 申命記 13: 1-5、18: 20-22
- (3)預言者団体 Iサムエル 10: 5-13、19: 20、I列王記 20: 35と41節、22章
6節と10-13節、II列王記 2: 3と7節、4: 1と38節、5: 22、6: 1など
- (4)預言者と呼ばれたメシア 申命記 18: 15-18
- b. 書記のいない時代の王(王についての記述)
 - (1)ガド Iサムエル 22: 5、IIサムエル 24: 11、I歴代誌 29: 29
 - (2)ナタン IIサムエル 7: 2、12: 25、I列王記 1: 22
 - (3)アヒヤ I列王記 11: 29
 - (4)イエフ I列王記 16: 1と7節と12節
 - (5)無名の人 I列王記 18: 4と13節、20: 13と22節
 - (6)エリヤ I列王記 18章~II列王記2章
 - (7)ミカヤ I列王記 22章
 - (8)エリシャ II列王記 2: 8と13節
- c. 古代の書記であった預言者達(国と王についての記述) イザヤ書~マラキ書
(ダニエル書を除く)

II. 聖書中の用語

1. *Ro'eh* 「預言者」の意味。Iサムエル 9: 9。この用語自体は用語 *nabi* に取って代わられている。*Ro'eh* は一般的な用語「見る」に由来する。この人は神の道と御計画を理解し、ある事柄についての神の御意志を確かめる際の相談役を務めた。
2. *Hozeh* 「預言者」の意味。Iサムエル 24: 11。この用語は元々 *Ro'eh* の同意語である。この用語はより一般的ではない用語「見る」に由来する。この分詞形は預言者(つまり「見る」)を指す用語として最も頻繁に用いられている。
3. *Nabi'* 「預言者」の意味。「呼びかける」の意味のアッカド語の動詞 *Nabu* と「宣言する」の意味のアラビア語の動詞 *Naba'a* と同じ語源を持つ用語である。この用語は旧約聖書の中では預言者を指す最も一般的な用語である。この用語は300回以上用いられている。この用語の正確な語源は明らかではないが、現在は「呼びかける」が最も確からしい候補であるようだ。おそらく最高の知見は、アロンを通したモーセとファラオの関係について YHWH がなされた表現(出エジプト 4: 10-16、7: 1、申命記 5: 5を参照)に由来するだろう。預言者は神が御自分の民に語られるお言葉を取り次ぐ人である(アモス 3: 8、エレミヤ 1: 7)

と17節、エゼキエル3:4を参照)。

4. I 歴代誌29:29では(上記の)3つの用語は全て預言者の職名を指して用いられている。つまりサムエルには *Ro'eh*、ナタンには *Nabi'*、ガドには *Hozeh* が用いられている。
5. 聖句 *'ish ha- 'elohim*、つまり「神の人」もより広い意味で神の代弁者を指す用語である。この用語は旧約聖書の中で預言者の意味で何と76回も用いられている。
6. 用語「預言者」はギリシャ語を語源とする。この用語は(1)「~の前に」あるいは「~のために」という意味の *pro* と(2)「語る」という意味の *phemi* に由来する。

II. 預言の定義

- A. 用語「預言者」は英語においてよりもヘブル語においてより広いセム語域に属する。ヨシュア書から列王記まで(ルツ記を除く)をユダヤ人は「前任の預言者達」の書としている。アブラハム(創世記20:7、詩篇105:5)とモーセ(申命記18:18)は預言者とされている(ミリアムも、出エジプト15:20)。だから、英語の推定上の定義には注意が必要なのだ。
- B. 「預言主義は神の関心と目的と関与という意味のみを受け入れた歴史理解として正当に定義されうる」*Interpreter's Dictionary of the Bible* 第3巻 896 ページ
- A. 「預言者は思想家(哲学者)でも組織神学者でもなく、神の御言葉を神の民に伝えて現在を再構築することにより未来を形造る、神の契約の仲介者である」*Encyclopedia Judaica* 第13巻 1152 ページ

III. 預言の目的

- A. 預言は神が御自分の民に呼び掛けられる手段であり、民の置かれている現在の状況における導きと神が民の生活と世の出来事を神が支配されているという希望を与える。民へのメッセージは根本的に団体単位でなされる。それは神が御自分の民を叱責され、励まされ、信仰と悔い改めを生みだされ、御自分の民に御自身と御自分の計画について告知されることを意味する。それらによって神の民は神の契約に忠実であり続ける。しばしばそれが神に選ばれた代弁者を明らかにするというところにこのことは付け加えられなければならない(申命記13:1-3、18:20-22)。これは究極的に解釈すればメシアについて述べているようだ。
- A. しばしば預言者は自分の生きた時代の歴史的つまり神学的危機を取り上げてこれを終末論的な記述に投射した。この終末論的な世界観と、神の選びと契約上の約束はイスラエルに特有のものである。
- B. 預言者の職権は神の御意志を知る方法としての高位聖職者の職権と調和し(エレミヤ18:18)、またそれを侵害することもあった。ウリムとチュミムは神の代弁者からの口述のメッセージを超越する。また、預言者の職権はマラキの死後にイスラエルで絶えていたようだ。それは(マラキの死後)400年後の洗礼者ヨハネの登場により復活する。新約聖書でいう「預言」の賜物がどのように旧約聖書でいう「預言」の賜物と関連しているかは明らかではない。新約聖書の預言者達(使徒行伝11:27-28、13:1、14:29と32節と

37 節、15: 32、I コリント 12: 10 と 28-29 節、エペソ 4: 11) は新しい契約つまり御言葉を公開するのではなく、契約における神の御意志を予言する。

- C. 預言は本質的に排他的つまり主要な予言ではない。予言は預言者が自らの職権とメッセージを確かなものにするひとつの方法ではあるが、次に述べることは覚えておかなければならない「旧約聖書の預言の少なくとも2%はメシアに関することである。その少なくとも5%は新しい契約の時代について特記している。その少なくとも1%はこれから起こることになっている出来事に関することである。」(Fee と Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth* の 166 ページを参照)。
- D. 預言者は民に対する神の代表者であるが、司祭は神に対する民の代表者である。これは一般的に言われていることである。神に質問をしたハバククのような例外がある。
- E. 預言者達を理解することが難しい理由の一つは私達が彼らの書の構成について知らないからである。彼らの書の内容は時系列順に構成されていない。また、主題に沿って順に並んでいるように見えるが、必ずしも予想通りではない。歴史的背景や時系列あるいは神命の間の区別はしばしばはっきりとは明記されていないことがある。これらの預言書は(1)一通りの見解をもって読み通すこと(2)トピック毎の要約(3)各神命の中心的真理つまり著者の意図を明らかにすること、が難しい。

IV. 預言の特徴

- A. 旧約聖書には「預言」と「預言者」の概念に発展が見られるようだ。初期のイスラエルにおいては預言者の交流が盛んであり、それはエリヤつまりエリシャのような指導力のあるカリスマ的指導者によって導かれていた。聖句「預言者の子ら」はこの集団を指して用いられた(II 列王記2章)。それらの預言者達は恍惚の一団と呼ばれた(I サムエル 10: 10-13、19: 18-24)。
- B. しかし、このような時代は早くも過ぎ去り、預言者達が個人で活動する時代となった。(真偽含めて)預言者達の中には王とみなされて宮殿に住む者もあった(ガドとナタン)。また、独立して、イスラエルの社会内のいずれの地位にもあてはまらない立場で活動する者もあった(アモス)。彼らの中には男性も女性もいた(II 列王記 22: 14)。
- C. その当時の預言者はしばしば、人類の即座の応答を条件として未来についての明言を行った。その当時の預言者の仕事はしばしば、神が御自分の造られたものについて立てておられる、人類の応答に影響されない普遍的な計画を明らかにすることであった。この普遍的な終末論的計画は古代近東の預言者達の間に特有のものである。預言と契約への忠実さは預言者のメッセージの2つの論点である(Fee と Stuart の著書の 150 ページを参照)。このことは預言者達が主に論点をもとに結びつけていることを意味している。彼らは通常、排他的にではなく国民に呼びかけていた。
- B. 預言の大半は口頭でなされた。それらは後に、未発見の近東の文献の主題と時系列あるいはその他の文章様式によって結び合わされた。口述であるので記されたものほどには構成されていない。このため預言者達の書はそのまま読みこなすことも、特別な歴史的背景

なしに理解することも困難である。

- C. 預言者達は自分のメッセージを伝えるためにいくつかの機会を利用する。
 - 1. 法廷—神は御自分の民を法廷に導かれるが、しばしばそれは YHWH が不忠実さを理由に御自分の妻(イスラエル)を拒絶される離婚訴訟の場である(ホセア4章、ミカ6章)。
 - 2. 葬儀—この種のメッセージの特別な韻律とそれに特徴的な「悲痛」はメッセージの形式を特別なものになっている。
 - 3. 契約上の祝福の公言—契約の条件的本質が強調され、未来の出来事が良いことも悪いこともどちらも述べられる。

V. 預言の解釈に有用な指針

- A. 各神命の歴史的背景と文脈を考慮することによって、原著者(編集者)である預言者の意図を見出さない。通常それには、神がモーセに与えられた契約をある意味で破るイスラエルが関係している。
- B. 神命のごく一部ではなく全体を読んで解釈し、内容に沿って要約しなさい。その神命が周囲の神命とどのように関係しているかを見なさい。預言の書全体の要約を試みなさい。
- C. 原典自体の中の何かが比喩的な用法を示すまでは原文の文字通りの解釈を確信しなさい。それから比喩的な表現を文章化しなさい。
- D. 歴史的背景と同じ内容を言い換えた文をもとにして象徴的な行為を分析しなさい。この古代近東の文献が西洋あるいは現代の文献とは異なることを覚えておきなさい。
- E. 預言を注意深く取り扱いなさい。
 - 1. それらの預言は原著者の生きた時代には受け入れられなかったのか。
 - 2. それらの預言はイスラエルの歴史の中で結局成就したのか。
 - 3. それらの預言は未来の出来事でもあるのか。
 - 4. それらの預言は現在成就しているのか、そして未来に成就することになっているのか。
 - 5. 上記の疑問の答えを現代の文献の著者達にはなく聖書の著者達に求めなさい。
- F. 特別な関連事項
 - 1. 預言は条件付きの応答によって意味を持つのか。
 - 2. 預言が語られる対象ははっきりしているのか(それはなぜか)。
 - 3. 預言が全ての人に成就する聖書的あるいは歴史的可能性はあるか。
 - 4. 靈感によって新約聖書を記した人々は、旧約聖書の中にある、私達にとって未知の多くの箇所に見出すことができた。彼らは予型論つまり言葉遊びを用いたようだ。私達は靈感を受けていないのでこのような方法は避けた方がよい。

VI. 有用な書籍

- A. Carl E. Amending と W. Ward Basque 共著 *A Guide to Biblical Prophecy*
- B. Gordon D. Fee と Douglas Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth*
- C. Edward J. Young 著 *My Servants and Prophets*

D. D. Brent Sandy 著 *Plowshares and Pruning Hooks : Rethinking the Language of Biblical Prophecy and Apocalyptic*

E. *New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis* 第4巻 1067~1078
ページ

特別なトピック: 新約聖書の預言

- I. 新約聖書の預言は旧約聖書の預言(BDB611)とは異なり、ラビによれば YHWH からの靈感による啓示の意味を持つ(使徒行伝 3: 18 と 21 節、ローマ 16: 26 を参照)。預言者だけが御言葉を書くことができた。
 - A. モーセは預言者と呼ばれた(申命記 18: 15-21 を参照)。
 - B. 歴史書群(ヨシュア記~列王記[ルツ記を除く])は「前期預言書」と呼ばれた(使徒行伝 3 章 24 節を参照)。
 - C. 預言者達は神からの情報源としての高位聖職者の地位を侵害した(イザヤ書~マラキ書)。
 - D. ヘブル語の正典の第2章は「預言者」である(マタイ 5: 17、22: 40、ルカ 16: 16、24: 25 と 27 節、ローマ 3: 21 を参照)。
- II. 新約聖書ではこの概念はいくつかの異なる用途に用いられる。
 - A. 旧約聖書の預言者達と、神の靈感を受けて彼らが語るメッセージについて述べるため(マタイ 2: 23、5: 12、11: 13、13: 14、ローマ 1: 2 を参照)
 - B. 団体にというよりは個人に対して語られるメッセージについて述べるため(旧約聖書の預言者達は主にイスラエルに語りかけた)
 - C. 神の王国を宣べ伝える人(マタイ 13: 57、21: 11 と 46 節、ルカ 4: 24、7: 16、13: 33、24: 19 を参照)としての洗礼者ヨハネ(マタイ 11: 9、14: 5、21: 26、ルカ 1: 76 を参照)とイエスについて述べるため。また、イエスは預言者達より偉大な方であるといわれた(マタイ 11: 9、12: 41、ルカ 7: 26 を参照)
 - D. 新約聖書のその他の預言者達
 1. ルカの福音書に記されたイエスの幼少期(マリアの回想)
 - a. エリサベツ(ルカ 1: 41-42 を参照)
 - b. ザカリア(ルカ 1: 67-79 を参照)
 - c. シメオン(ルカ 2: 25-35 を参照)
 - d. アンナ(ルカ 2: 36 を参照)
 2. 皮肉な預言(カヤパ、ヨハネ 11: 51 を参照)
 - E. 福音を宣べ伝える人について述べるため(I コリント 12: 28-29 とエペソ 4: 11 の宣教の賜物のリスト)
 - F. 教会の中で用いられ続けている賜物について述べるため(マタイ 23: 34、使徒行伝 13 章 1 節と 15: 32、ローマ 12: 6、I コリント 12: 10 と 28-29 節、13: 2、エペソ 4: 11 を参照)。時々

この概念は女性を指すことがある(ルカ 2: 36、使徒行伝 2: 17、21: 9、I コリント 11: 4-5 を参照)。

G. ヨハネの黙示録について述べるため(黙示録 1: 3、22: 7 と 10 節と 18 節と 19 節を参照)

III. 新約聖書の預言者達

A. 彼らは旧約聖書の預言者達が受けたような神の靈感による啓示(つまり御言葉)を受けていない。聖句「信仰」が使徒行伝 6: 7、13: 8、14: 22、ガラテヤ 1: 23、3: 23、6: 10、ピリピ 1 章 27 節、ユダ 3 節と 20 節に用いられているのでこのように言うことができる。

この概念はユダ 3 節の聖句「聖なる者たちに一度与えられた信仰」から明らかである。この「一度(与えられた)」信仰とはキリスト教の真理、教義、概念、そして世界観に基づく教えである。この一度与えられたという強調は新約聖書の執筆について神学的に限定された靈感の聖書的基礎であり、後の時代に書かれた、啓示書とみなされている書についてはなされていない。新約聖書には不明瞭で不明確な灰色領域が多いが、信徒は信仰と実践に必要とされる全てのことが十分にはっきりと新約聖書に載っていることを信仰によって確信する。この概念はいわゆる「啓示の三角形」の中に表現されている。

1. 神は時間—空間の歴史の中に御自身を現わされている(啓示)
2. 神は御自分の御業の記録と説明のために特定の人物を書記として選ばれている(靈感)
3. 人類の心を開き、これらの書を厳密にではなく救いと有意義なクリスチャン生活を送るのに十分な程度に理解させるために神は御自身の霊を下さっている(啓蒙)。この概念の要点は靈感が御言葉の書き手に限られるということである。御言葉以上に権威ある書やビジョンや啓示はない。聖書正典は閉じられたまま開かれ(て読まれ)ることはない。御言葉には私達が神に適切に応答するのに必要な全ての真理がある。この真理は聖書の著者が認めることと敬虔で神の御心にかなう生き方をしている信徒の認めていないことの対立に最もよく見られる。現代の書き手や語り手における神のお導きのレベルは御言葉の書き手におけるそれと同程度ではない。

B. ある意味で新約聖書の預言者は旧約聖書の預言者に似ている。

1. 未来の出来事の預言(パウロ、使徒行伝 27: 22: アガバス、使徒行伝 11: 27-28、21: 10-11: その他の無名の預言者達、使徒行伝 20: 23 を参照)
2. 裁きを下す(パウロ、使徒行伝 13: 11、28: 25-28 を参照)
3. 出来事を生き生きと描写する象徴的行為(アガバス、21: 10-11 を参照)

C. 彼らは時々預言的に福音の真理を語る(使徒行伝 11: 27-28、20: 23、21: 10-11 を参照)が、これは主要な論点ではない。コリント人への第一の手紙における預言は根本的には福音を言い広めることである(14: 24 と 39 節を参照)。

D. 彼らは各々の新しい環境や文化や時代への神の真理の実際の適用の仕方を示すことを霊に代わって行う人々である(I コリント 14: 3 を参照)。

E. 彼らはパウロの開拓した初期教会において活動し（I コリント 11: 4-5、12: 28 と 29 節、13: 29、14: 1 と 3 節と 4 節と 5 節と 6 節と 22 節と 24 節と 29 節と 31 節と 32 節と 37 節と 39 節、エペソ 2: 20、3: 5、4: 11、I テサロニケ 5: 20 を参照）、*Didache*（紀元1世紀末あるいは2世紀に書かれた。日付[月日]不詳）と北アフリカで2・3世紀に書かれた Montanism の中に登場する。

IV. 新しい契約の賜物はもう与えられないのか

- A. この疑問に答えることは難しい。この問題は賜物の（与えられた）目的をはっきりさせることによって明らかにすることができる。その賜物は初めての福音宣教の成果を確かなものとするためのものなのか、それとも教会がそれ自体と失なわれた世のために働くために用い続けている方法なのか。
- B. この疑問の答えは教会の歴史の中に見出せるのか、それとも新約聖書自体の中に見出せるのか。霊的な賜物が一時的なものであることは新約聖書には示されていない。I コリント 13: 8-13 を用いてこの問題を解明しようとするれば御言葉を書いた著者の意図を侵害することになり、そのことは愛以外の全てが失なわれるであろうことを明言している。
- C. 教会の歴史ではなく新約聖書に権威があるので信徒は賜物が与えられ続けていると確信しなければならないと私は言いたい。しかし、文化が解釈に影響を与えていると私は信じている。とてもよく知られている文化的事柄はもはや役に立たない（聖なる接吻、女性用の頭の覆い、家庭礼拝など）。文化が聖句に影響を与えるなら、教会の歴史も同じではないのか。
- D. これはまさしく厳密な答えを出せない疑問である。信徒の中には「（神の賜物の授与は）終わった」と主張する者もいれば「終わっていない」と主張する者もいる。この問題では、多くの解釈上の問題と同様に、信徒の心が重要である。新約聖書は不明瞭で文化的である。その困難さによって、どの聖句が文化あるいは歴史に影響を受けているか、そしてどの聖句が時代や文化によらず普遍的であるか（Fee と Stuart 共著の *How to Read the Bible For All Its Worth* の 14～19 ページと 69～77 ページを参照）をはっきりさせることができる。ここではローマ 14: 1～15: 13 と I コリント 8～10 章に見られるような自由と責任の議論が重要である。私達がこの疑問にどのように答えるかは2つの意味で重要である。
1. 信徒は皆、自分の持つ信仰によって歩まなければならない。神は私達の心と意志を見られる。
 2. 信徒は皆、他の信徒達が彼らの持つ信仰によって歩むのを認めなければならない。自他の聖書的結びつきの内には忍耐がなければならない。神は御自分がなさると同じように私達が互いに愛し合うことを望んでおられる。
- E. この話題のまとめとして言えることは、キリスト教は信仰と愛の生活であり、完璧な神学ではないということである。私達の他者との関係に影響する神との関係は詳細な情報あるいは信条の完全さよりも重要である。

4: 20「わたしたちの先祖」これはアブラハムとヤコブを指す。

「この山で礼拝した」これは、神(YHWH)が崇拝されるべき場所についての神学的論争を指す。ユダヤ人はモリア山を強調し、サマリア人はゲルジム山を強調した。どちらの山にもそれぞれの民族の建てた神殿がある。

4: 21「あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」これはこのサマリア人の女性にとっても、またイエスの弟子達にとっても衝撃的なお言葉だったに違いない。

4: 22「救いはユダヤ人から来るからである」これはメシアがどこから来られるかということの断定である。

4: 23「しかし、... 時が来る。今がそうである」イエスが御自分の生涯の間だけでなく亡くなった後にも永遠の命の賜物をもたらされたことは明らかである。イエスは新しい世を御自分が始められたことをはっきりと主張されている。聖霊の世とメシアの世は始まっているのだ。

「父」イエスが神のひとり子と呼ばれることを除いては、新約聖書において神が「父」と呼ばれることは非常に珍しい。

特別なトピック: 父なる神

旧約聖書は父なる神について親密な家族の比喻を導入している。

1. イスラエルの国家はしばしば「YHWHの息子」と言い表されている(ホセア 11: 1、マラキ 3: 17を参照)。
2. さらに前では申命記で父なる神について類似の語が用いられている(1: 31)。
3. 申命記32章ではイスラエルは「彼の子供達」と呼ばれ、神は「あなたの父」と呼ばれている。
4. この類似性は詩篇 103: 13 で述べられ、詩篇 68: 5 でさらにはっきりしている(孤児達の父)
5. それは預言者達の間で一般的であった(イザヤ 1: 2 と 63: 8、63: 16、64: 8[父なる神の息子イスラエル]、エレミヤ 3: 4 と 19 節、31: 9 を参照)。

イエスはアラム語を話されたが、このことは多くの場所で「お父様」がギリシャ語の *Pater* として見られることがアラム語の *Abba* に影響しているかもしれないことを意味している(14: 36 を参照)。この家族用語「父ちゃん」あるいは「パパ」はイエスの父なる神との親密さを反映しており、イエスがこのことを弟子達に明らかにされていることも私達自身の父なる神との親密さを強めている。この用語「お父様」は YHWH を意味する語として旧約聖書の中で控えめに用いられているが、イエスはこの語をしばしば、そして普遍的に用いられている。これは信徒にとって、キリストを介した神との新しい関係の主な啓示である(マタイ 6: 9 を参照)。

「父はこのような礼拝をする者たちを求めておられるからである」神は失われた人を積極的に求められている。

4: 25「メシアが来られる」用語「メシア」はヨハネの福音書にも新約聖書にも2回しか登場しない。

特別なトピック：メシア

この用語は、ユダヤの王でありユダヤの司祭であり、特別な目的のために来られる神、つまり新しい義の世をもたらすために来られるダビデの家系出身の王でいらっしゃるイエスを指す。

「その方が来られたなら、わたしたちに一切のことを知らせて下さるでしょう」これはサマリア人がメシアを待ち望んでいたこと、そして神の完全さを顕わすために来られるメシアをサマリア人が見たことを示している。

4: 26「あなたと話をしているこのわたしが、それである」これはイエスの神性の簡潔であからさまな断定である。

NASB(改訂版)原典： 4: 27-30

²⁷そのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが一人の女と話しておられるのを見て不思議に思ったが、しかし「何を求めておられますか」とも「何を彼女と話しておられるのですか」とも尋ねる者は一人もなかった。²⁸この女は水がめをそのままそこに置いて町に行き、人々に言った²⁹「わたしのしたことを何もかも言い当てた人がいます。さあ、見に来て御覧なさい。もしかしたらこの人がキリストかも知れません」。³⁰人々は町を出て、ぞくぞくとイエスのところへ行った。

4: 27「イエスが一人の女と話しておられるのを見て不思議に思った」文化的にこれは正統派ユダヤ教徒のすることではなかった。

「しかし『何を求めておられますか』とも『何を彼女と話しておられるのですか』とも尋ねる者は一人もなかった」これは使徒ヨハネの目撃証言である。彼はこの衝撃的な事件をよく覚えていたに違いない。

4: 28「この女は水がめをそのままそこに置いて」これは、証しするために村に急いで戻るこのサマリア人の女性の興奮している様子を示した、とても美しい目撃証言であり歴史的な記録である。

4: 29「もしかしたらこの人がキリストかも知れません」このサマリア人の女性は、一緒に井戸端で話していた男性がイエスだと本当に信じていたようだ。

NASB(改訂版)原典： 4: 31-38

³¹その間に弟子たちはイエスに「ラビ、召しあがってください」と勧めた。³²ところがイエスは言われた「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。³³そこで弟子たちは互いに言った「だれかが何か食べるものを持ってきてさしあげたのだろうか」。³⁴イエスは彼らに言われた「わたしの食物というのは、わたしをつかわされた方のみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」。³⁵あなたがたは『刈入れ時が来るまでには、まだ四ヶ月ある』と言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目を上げて畑を見なさい。もう色づいて刈入れを待っている。³⁶刈る者は報酬を受けて永遠の命に至る実を集めている。蒔く者も刈る者も共に喜ぶためである。³⁷そこで、『一

人が蒔き、一人が刈り取る』ということわざが本当のことになる。³⁸わたしはあなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかったものを刈り取らせた。他の人々が労苦し、あなたがたは彼らの労苦の実にあずかっているのである」。

4: 32 イエスは福音伝道と啓示のお働きのただ中におられた。

4: 34「わたしの食物というのは、わたしをつかわされた方のみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」父なる神がイエスに与えられた使命とは、父なる神を顕わし、父なる神の御業を行うことであった。信徒も贖いの目的のために父なる神の代表として失われた世に送られたのである。

特別なトピック: 神の御心 (Thelema)

ヨハネの福音書

- イエスは神の御心を行うために来られた (4: 34、5: 30、6: 38 を参照)
 - 父なる神から御子を頂いた人々全てを終りの日によみがえらせるために (6: 39 を参照)
- 御子を信じる人々全て (6: 29 と 40 節を参照)
- 神の御心を行うことに関する祈りに応えられた (9: 31 と I ヨハネ 5: 14 を参照)

共観福音書群

- 神の御心を行うことは重要である (マタイ 7: 21 を参照)
- 神の御心を行うことで人はイエスの兄弟姉妹となる (マタイ 12: 50、マルコ 3: 35 を参照)
- 誰も滅びないことが神の御心である (マタイ 18: 14、I テモテ 2: 4、II ペテロ 3:9 を参照)
- カルバリーはイエスに対する父なる神の御心であった (マタイ 26: 42、ルカ 22: 42 を参照)

パウロの書簡群

- 全ての信者の成熟度と働き (ローマ 12: 1-2 を参照)
- この悪い世から救い出された信者達 (ガラテヤ 1: 4 を参照)
- 神の御心は救いの御計画であった (エペソ 1: 5 と 9 節と 11 節を参照)
- 聖霊に満たされた人生を体験し、また過ごす信者達 (エペソ 5: 17-18 を参照)
- 神の知識に満たされた信者達 (コロサイ 1: 9 を参照)
- 完全で完成なものとされた信者達 (コロサイ 4: 12 を参照)
- 聖別された信者達 (I テサロニケ 4: 3 を参照)
- 全てのものに感謝する信者達 (I テサロニケ 5: 18 を参照)

ペテロの書簡群

—義を行い(つまり世の権威に従い)愚かな者達を黙らせ、福音伝道の機会をつくりだす信者達(I ペテロ 2: 15 を参照)

—苦しむ信者達(I ペテロ 3: 17 と 4: 19 を参照)

—自己中心的ではない生活を送る信者達(I ペテロ 4: 2 を参照)

ヨハネの書簡群

—永遠に生き続ける信者達(I ヨハネ 2: 17 を参照)

—応えられた祈りに忠実に生きる信者達(I ヨハネ 5: 14 を参照)

4: 35『刈入れ時が来るまでには、まだ四ヶ月ある』 復活後だけでなくイエスの御生涯の間にも人々はイエスへの信仰によって救われた。

4: 36-38「一人が蒔き、一人が刈る」 これらの節は多分預言者や洗礼者ヨハネの働きを指しているのだろう。

NASB(改訂版)原典: 4: 39-42

³⁹この町からきた多くのサマリア人は「この人は、わたしのしたことを何もかも言い当てた」と証した女の言葉によってイエスを信じた。⁴⁰そこでサマリア人たちはイエスのもとに来て、自分たちのところに滞在していただきたいと願ったので、イエスはそこに二日滞在された。⁴¹そして、なお多くの人がイエスの御言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った「わたしたちが信じるのは、あなたが話してくれたからではない。自分自身で聞いて、この人こそまことに世の救い主であることが分かったからである」。

4: 39「多くのサマリア人は... イエスを信じた」 イエスはイスラエルの失われた羊のところに來られたが、イエスの説かれる福音は、サマリア人もシロフェニキアの女達もローマの兵士達も含めて、全人類のためのものであった。

「証した女の言葉によって」 この節は個人の証しの重要性を示している。

4: 42「世の救い主」 これは全人類に対する神の愛の普遍性を示している。ユダヤ人はイエスを拒んだが、サマリア人はすぐに、そして容易にイエスを受け入れた。

NASB(改訂版)原典: 4: 43-45

⁴³二日後に、イエスはそこを去ってガリラヤへ行かれた。⁴⁴イエスは御自分ではっきりと「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」と言われたからである。⁴⁵イエスがガリラヤに着かれると、ガリラヤの人々はイエスを歓迎した。それは、彼らも祭りに行っていたので、その祭のときにイエスがエルサレムでなされたことを全て見ていたからである。

4: 44 ガリラヤの人々はイエスを「受け入れた」といわれているが、彼らの多くは後にイエスを拒ん

でいる。

4: 45「ガリラヤの人々はイエスを歓迎した」 以前にエルサレムで過ぎ越しの祭が行なわれたときに、ガリラヤの人々はすでにイエスのお教えと奇跡を経験していた。これは、彼らがイエスを神の救い主として少なくともある程度は信じたことを意味する。

NASB(改訂版)原典： 4: 46-54

46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこはイエスが以前に水をぶどう酒に変えられた所である。さて、病気をしている息子を持つある役人がカペナウムにいた。⁴⁷ユダヤからガリラヤにイエスが来ておられることを聞いて、この人はイエスのみもとに来て、息子を治していただきたいと願った。その息子が死にかかっていたからである。⁴⁸そこでイエスは彼に言われた「あなたがたはしるしと奇跡とを見ない限り決して信じないだろう」。⁴⁹その役人はイエスに言った「主よ、どうか息子が死なないうちにおいで下さい」。⁵⁰イエスは彼に言われた「お帰りなさい。あなたの息子は助かるのだ」。彼はイエスが自分に言われた御言葉を信じて帰って行った。⁵¹彼が下って行く途中、彼の僕たちが彼に出会い、彼の息子が助かったことを告げた。⁵²そこで、彼は僕たちに、その治り始めた時刻を尋ねてみた。すると僕たちは彼に言った「昨日の第七の時に熱が引きました」。⁵³それが、イエスが「あなたの息子は助かるのだ」と言われたのと同じ時刻であったことをこの息子の父は知った。そして彼自身もその家族全員も信じた。⁵⁴これは、イエスがユダヤからガリラヤにきてなされた第二のしるしである。

4: 46「役人」 これは、ヘロデ王の家族に仕える、政府の役人であった。

4: 48「『あなたがたはしるしと奇跡とを見ない限り決して信じないだろう』」 ユダヤ人はしるしを求めていた。しかし、このヘロデ王の僕はしるしを見る前に信じた。

4: 50 この人(役人)の信仰は、イエスの約束を見ずに信じたことに表れている。

4: 53「彼自身もその家族全員も信じた」 これは、一人の人の信念が家族全員に影響を与えた、多くの記述のうちの最初のものである。それは家族全員が個人的に自分自身でイエスを受け入れたということを意味する。私達の生活の中で重要な他者が私達の選択に影響を及ぼすこともまた事実である。

4: 54 公共の場所での最初のしるしはカナでの婚礼だった。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを

意図している。

1. なぜイエスはユデアの地域を去られたのか。
2. 使徒ヨハネはローマ人の時間とユダヤ人の時間のどちらを用いているか。
3. イエスとサマリア人の女性との対話はなぜ重要なのか。
4. 20節は現代の教派間の関係にどのように影響するか。
5. 26節に見られる、イエスの驚くべき御言葉を説明しなさい。
6. ガリラヤの人々は真の信仰を表したか。

ヨハネの福音書5章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 5: 1-9前半

¹この後、ユダヤ人の祭があったので、イエスはエルサレムに上られた。²エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。³その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが大勢いて体を横たえていた。⁴[彼らは水の動くのを待っていたのである。それは、時々主の御使がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時に真っ先にはいる者はどんな病気にかかっているか、いやされたからである。]⁵そこに三十八年の間病気をわずらっている人がいた。⁶イエスはその人が横になっているのを御覧になり、また長い間わずらっていたのを知られて、その人に「よくなりたいのか」と言われた。⁷この病の人はイエスに答えた「主よ、水が動く時にわたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしが池に来ると、他の人が先に降りて行くのです」。⁸イエスは彼に言われた「起きて、あなたの床を取り上げ、歩きなさい」。⁹すると、この人はすぐにいやされ、床を取り上げて歩いて行った。

5: 1「祭」 ユダヤ人の男性ができればそれら全てに参加する義務があった毎年恒例の3つの祭の日があった。それらは過越の祭と五旬節と仮庵の祭であった。

「イエスはエルサレムに上られた」 エルサレムは7つの丘の上に建てられたので周辺の土地より高い所にあった。エルサレムは神殿だったので大地より高い所にあり地球の中心(へそ)だった。

5: 2「羊の門」 この「群れの門」はエルサレムの壁の北東部にあった(ネヘミヤ3: 1と32節、12: 39を参照)。

「ヘブル語でベテスダと呼ばれる池」 イエスがこの世におられた時代には、パレスチナのユダヤ人はヘブル語ではなくアラム語を話していた。ヨハネの福音書で「ヘブル語」とはアラム語を意味する。

5: 8「『起きて、あなたの床を取り上げ、歩きなさい』」 床は貧しい人々が眠るために用いた布のクッションだった。これらの病気の人々や手足の不自由な人々や体に麻痺のある人々にとって、床は日中の座布団の役割を果たした。

NASB(改訂版)原典: 5: 9後半-18

⁹後その日は安息日であった。¹⁰そこでユダヤ人たちはそのいやされた人に言った「今日は安息日だ。床を取り上げて歩くことは許されていない」。¹¹彼は答えた「わたしをいやして下さった方が『床を取り上げて歩きなさい』とわたしに言われました」。¹²彼らは彼に尋ねた「『床を取り上げて歩け』と言った人はだれか」。¹³しかし、このいやされた人はその人がだれであるか知らなかった。群衆がその場にいたので、イエスはそっと出て行かれたからである。¹⁴その後、イエスは宮でその人を見かけられ、彼に言われた「御覧、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何か悪いことがあなたの身に起こるかも知れないからだ」。¹⁵その人は出て行って、自分をいやしたのはイエスであったとユダヤ人たちに告げた。¹⁶このためユダヤ人たちは、安息日にこのようなことをしたと言ってイエスを責めた。¹⁷イエスは彼らに答えて言われた「わたしの父は今も働いておられる。だからわたしも働くのである」。¹⁸このためにユダヤ人たちはますますイエスを殺そうと計るようになった。それは、イエスが安息日を破られたばかりではなく、神を御自分の父と呼ばれて御自分を神と等しいものとされたからである。

5: 9後半「その日は安息日であった」 ユダヤ人の指導者達は癒された人のことで喜ぶどころか、安息日に関する口述伝承をイエスが破られたことに腹を立てた。

5:13 「イエスはそっと出て行かれた」 イエスのお姿はこの世におられた時代の一般のユダヤ人と似ていた。だから容易に群衆の中に紛れ込んで行かれた。

5:14「もう罪を犯してはいけない」 紀元1世紀のユダヤ人の神学者達は病気を罪に関連した事柄と見ていた。イエスはこの人の霊的生活も取り扱われた。私達の行いは私達の心と信仰に大きく影響する。聖書信仰は客観的であるとともに主観的である。つまり信条であり行いである。現代の教会では現実的な癒しが強調されている。確かに癒すのは神でいらっしゃる。しかし神の癒しは生活様式と優先順位の霊的変化をもたらすべきものである。

特別なトピック: 癒しの神の御計画は全ての世代のためのものなのか

癒しは全ての世代に行なわれるものであるが、イエスの御生涯の間には著しい増加が見られ

た。この増加はイエスの再来の直前に再び見られることになっている。

5: 15「その人は出て行って、．．．とユダヤ人たちに告げた」 この人がユダヤ人の権力者達に、自分をいやしたのはイエスであったと知らせた正確な動機は明らかではない。

5: 16「安息日にこのようなことをしたと言ってイエスを責めた」 これは安息日におけるイエスの最初(または最後)の癒しではなかった。

「『わたしの父は今も働いておられる。だからわたしも働くのである』」 イエスは、父なる神が安息日に善を行うことをおやめにならないので、神の御子なる御自分もそれに従っているのだと述べておられる。これは、本当の意味で、父なる神と御自分の関係をイエスが理解しておられたことをはっきりと示している。全ての行いは究極的にはただお一人の真の神の御業なのである。

NASB(改訂版)原典： 5: 19-23

¹⁹そこでイエスは彼らに答えて言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。²⁰なぜなら、父は子を愛して、御自分からなさることは、すべて子にお示しになるからである。そして、それよりもなお大きなわざをお示しになるであろう。あなたがたがそれによって不思議に思うためである。²¹すなわち、死んだ人を父が起して命をお与えになるように、子もまたそのみこころにかなう人々に命を与えるであろう。²²父はだれをもさばかれない。さばきのことは全て子にゆだねられたからである。²³それは、全ての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。

5: 19「子は．．自分からは何もすることができない」 これは、イエスが完全に神でいらっしゃることに、つまり分かれた明確な(神の)御人格を持たれた、永遠に神性を顕わされている方でいらっしゃることを示しているようだ。

「父のなさることを見てする以外に」 人類は父なる神を見たことがないが、御子は父なる神の詳細で個人的な現在の情報を与えて下さっている。

「父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである」 イエスの御業とお教えに人類は目に見えない神をはっきりと見るのである。

5: 20「．．よりもなお大きなわざ」 文脈中ではこれは死者の復活と裁きの遂行を指す。

「あなたがたがそれによって不思議に思うためである」 この目的節は、イエスが奇跡を行なわれる目的はユダヤ人が神のひとり子を信じるようにすることであることをはっきりと示している。

5: 21「死んだ人を父が起して．．ように、子もまた」 イエスは新しい世での命を実際に具現化した永遠のいのちをお与えになる。

「．．ように、子もまたそのみこころにかなう人々に命を与えるであろう」 文脈中では、これはイエスへの信仰が命をもたらすことを主張している。福音を聞いた人々の中に信じない人々がいる

のはそれらの人々に「許されない罪」と「死に至る罪」があるからである。

特別なトピック: 「許されない罪」の解釈のための聖書解釈の手順

1. 福音書群がユダヤ人の事情を反映していることを思い出す。
2. マルコ3: 22-30 の文脈に注目する。
3. 称号「人の子」が「人の子ら」に変わっている言い換え文の類似点を比較する。

5: 22 キリストにある神の愛は、拒まれるときに神の怒りになるのだ。

5: 23「子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない」神の息子を知らない者は神を知ることができない。逆にいえば父なる神をほめたたえない者は御子をほめたたえることができないのだ。

NASB(改訂版)原典: 5: 24-29

²⁴まことに、まことに、あなたがたに言う。わたしの言葉を聞いてわたしをつかわされた方を信じる者は永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。²⁵まことに、まことに、あなたがたに言う。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今がそうである。そして聞く者たちは生きるであろう。²⁶それは、父がご自分のうちに命をお持ちになっていると同じように、子にもまた御自分のうちに命を持つことをお許しになったからである。²⁷そして子は人の子でいらっしゃるから、子にさばきを行う権威をお与えになった。²⁸このことは驚くに及ばない。墓の中にいる者たちが皆、神の子の声を聞き、²⁹善を行った者たちが命を受けるためによみがえり、悪を行った者たちがさばきを受けるためによみがえってくる時が来るであろう。

5: 24「わたしの言葉を聞いてわたしをつかわされた方を信じる者は永遠の命を受け」これは、御子への信仰が父なる神への信仰となることの強調である。

特別なトピック: 送る (*Apostello*)

これは「送る」という意味の一般的なギリシャ語の単語 (*Apostello*) である。この用語にはいくつかの神学的な用法がある。

1. ユダヤ教の指導者達はこの用語を、英単語の "ambassador (大使)" のような、ある人の公的な代理人として召喚されてつかわされる人の意味で用いている (II コリント 5: 20 を参照)。
2. この用語は福音書群ではしばしば、父なる神によってつかわされたイエス・キリストの意味で用いられている。ヨハネの福音書では救世主の意味に解釈されている (マタイ 10: 40 と 15: 24、マルコ 9: 37、ルカ 9: 48、そして特にヨハネ 4: 34、5: 24 と 30 節と 36 節と 37 節と 38 節、6: 29 と 38 節と 39 節と 40 節と 57 節、7: 29、8: 42、10: 36、11: 42、17: 3 と 8 節と 18 節と 21 節と 23 節と 25 節、20 章 21 節を参照)。この用語は信徒達のところにつかわされたイエスの意味で用いられている

(17章 18節と20:21を参照)。

3. 新約聖書では弟子達の意味で用いられている。

a. 元々の12人の弟子達(マルコ6:30、ルカ6:13、使徒行伝1:21-22を参照)

b. 使徒の助手達とその同僚達

(1)バルナバ(使徒行伝14:4と14節を参照)

(2)アンドロニコとユニアス(KJVではユニア、ローマ16:7を参照)

(3)アポロ(Ⅰコリント4:6-9を参照)

(4)主イエスの兄弟ヤコブ(ガラテヤ1:19を参照)

(5)シルワノとテモテ(Ⅰテサロニケ2:6を参照)

(6)多分テス(Ⅱコリント8:23を参照)

(7)多分エパフロデイト(ピリピ2:25を参照)

c. 教会に与え続けられている賜物(Ⅰコリント12:28-29とエペソ4:11を参照)

4. パウロは自分へのこの呼び名を自らの記した手紙の大半の中で、キリストの代理者として神から自分に与えられた権威を主張するために用いている(ローマ1:1、Ⅰコリント1:1、Ⅱコリント1:1、ガラテヤ1:1、エペソ1:1、コロサイ1:1、Ⅰテモテ1:1、Ⅱテモテ1:1、テス1:1を参照)

「死から命に移っているのである」 神の国は今存在しているが、(この世では)未来に実現することになっている。それは永遠の命も同じである。

5:25「... 時が来る。今がそうである」 人がイエスを今どのように取り扱うかは未来にその人に何が起るかを決める。救いと裁きは現在の現実であり、また未来に実現することになっている。

特別なトピック： 時間

用語「時間」は福音書群で時間の基準、試練の比喻、イエスが御自分のお働きを始められることの比喻、裁きの日の比喻、イエスの情熱の比喻として用いられている。

「死んだ者が神の子の声を聞く時」 神の御子としてのイエスの地位は、性的な世代や時間の流れではなく神との親密な関係を反映している。

5:26「父がご自分のうちに命をお持ちになっていると同じように、... からである」 イエスは父なる神が御自分に同じ独特な御力をお与えになることを主張されているのだ。

「子にもまた御自分のうちに命を持つことをお許しになった」これはイエスの神性の強い肯定である。

5:27 イエスが正しい裁きを行うことができになるのは、イエスが完全な神でいらっしゃるのと同時に完全な人間でいらっしゃるからである。

5:28「このことは驚くに及ばない」 これらのユダヤ人指導者達がイエスの以前の御言葉に衝撃を受けたように、彼らはイエスの次の御言葉にも大きな衝撃を受けただろう。

「墓の中にいる者たちが皆、神の子の声を聞き」これは再臨されるときメシアの叫びを反映していると思われる。これは御子の普遍的な裁きと権威、つまり終りの時の終末論的出来事を主張している。

5: 29 聖書には悪人と義人の両方の復活が記されている。これは行いに基づく裁きではなく、信徒の生活様式に基づく裁きを指している。

NASB(改訂版)原典: 5: 30

³⁰わたしは自分からは何もすることができない。聞いた通りにさばくのである。そして、わたしのさばきは正しい。それは、わたし自身の意志でするのではなく、わたしをつかわされた方のみこころを求めているからである。

5: 30 受肉された神のロゴスでいらっしゃるイエスは父なる神に服従され、父なる神に従順だった。これは御子が父なる神に劣っていらっしゃることを意味するのではなく、三位一体の神が3つの相異なる御人格、つまり父と御子と聖霊の間で贖いの御業を委任しておられることを意味する。

NASB(改訂版)原典: 5: 31-47

³¹もしわたしが自分自身について証しをするならば、わたしの証しは本当ではない。³²わたしについて証しをなさる方は他におられ、そしてその方がなさる証しが本当であることをわたしは知っている。³³あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわしたが、そのとき彼は真理について証しをした。³⁴わたしは人からあかしを受けないが、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。³⁵ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたはしばらくの間その光を喜び楽しもうとした。³⁶しかし、わたしにはヨハネのあかしよりももっと力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えになったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父がわたしをつかわされたことを証している。³⁷また、わたしをつかわされた父もご自分でわたしについてあかしをされた。あなたがたはまだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない。³⁸また、神がつかわされた者を信じないから、神の御言葉はあなたがたのうちにとどまっていない。³⁹あなたがたは聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書はわたしについてあかしをするものである。⁴⁰しかも、あなたがたは命を得るためにわたしのもとに来ようもしない。⁴¹わたしは人から栄光を受けることはしない。⁴²しかし、あなたがたのうちには神を愛する愛がないことを知っている。⁴³わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし他の人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるのであろう。⁴⁴互いに栄光を受けながら、ただ一人の神からの栄光を求めようもしないあなたがたは、どうして信じることができようか。⁴⁵わたしがあなたがたのことを父に訴えると考えるはいけない。あなたがたを訴える者は、あなたがたが頼みとしているモーセその人である。⁴⁶もしあなたがたがモーセを信じたなら、わたしをも信じたであらう。モーセはわたしについて書いたのである。⁴⁷しかし、モーセの書いたものを信じないなら、どうして

わたしの言葉を信じるだろうか。

5: 32「わたしについて証しをなさる方は他におられ」これは父なる神を指す。

5: 33「あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわした」これは洗礼者ヨハネを指す。

5: 35「ヨハネは. . . あかりであった」これも光、ここでは洗礼者ヨハネの準備的メッセージの強調である。

5: 36「今わたしがしているこのわざが、父がわたしをつかわされたことを証している」イエスの御業は、メシアに関する旧約聖書の預言の成就であった。イエスのお教えの力、生活様式の義、思いやり、そして強力な奇跡は、イエスとはどなたか、イエスはどこから来られたか、どなたがイエスを送られたか、についてははっきりとした証しとなった。

5: 37「あなたがたはまだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない」神の御言葉と個人的な礼拝の経験を通して神を知るべきであるのに、ユダヤ人が本当に神を全く知らなかったことをイエスは主張されている。旧約聖書では神(のお姿)を見ることが死をもたらすと考えられていた。YHWH に対面して話をしたのはモーセだけであり、そのときの対話でさえも雲の覆いを介してのものであった。

5: 38「神の御言葉はあなたがたのうちにとどまっていない」神の言葉(ロゴス)は受け入れられなければならない、一度受け入れられれば受け手のうちにとどまらなければならない。イエスは神の完全な啓示でいらっしやる。救いは神との継続的な関係と福音の真理の肯定によって確かめられる。

5: 39「あなたがたは聖書の中に永遠の命があると思って調べている」ここにユダヤ人の指導者達にとっての悲劇がある。彼らは聖書を持ち、読み、学び、記憶したが、聖書の御言葉が指し示す人物を見逃したのだ。聖霊なしには聖書の御言葉は意味を持たないのだ。真の人生は神との個人的で従順な信仰の関係を通じてのみもたらされる。

「この聖書はわたしについてあかしをするものである」イエスは御自身を旧約聖書の成就であり最終目標であるとはっきりと見なされた。

特別なトピック: 初期教会の *kerygma*

- A. 旧約聖書の中でなされた神の約束は今や救世主イエスが来られたことで成就している(使徒行伝 2: 30、3: 19と24節、10: 43、26: 6-7、22節、ローマ 1: 2-4、I テモテ 3: 16、ヘブル 1章 1-2節、I ペテロ 1: 10-12、II ペテロ 1: 18-19)。
- B. イエスは洗礼を受けられた際に神によってメシアとして聖別された(使徒行伝 10: 38)。
- C. イエスは洗礼を受けられた後にガリラヤでの伝道の働きを始められた(使徒行伝 10: 37)。
- D. イエスの伝道のお働きは神の御力によって善を行い力強い業を行うことであった(マルコ 10章 45節、使徒行伝 2: 22、10: 38)。
- E. メシアは神の永遠の目的によって十字架に架かれた(マルコ 10: 45、ヨハネ 3: 16、使徒行伝

2: 23、3: 13-15、4: 11、10: 39、26: 23、ローマ 8: 34、I コリント 1: 17-18、15: 3、ガラテヤ 1 章 4 節、ヘブル 1: 3、I ペテロ 1: 2 と 19 節、I ヨハネ 4: 10)。

- F. イエスは死者の中からよみがえられて弟子達にお姿を現された(使徒行伝 2: 24、31-32 節、3 章 15 節と 26 節、10: 40-41、17: 31、26: 23、ローマ 8: 34、10: 9、I コリント 15: 4-7、12 節以降、I テサロニケ 1: 10、I テモテ 3: 16、I ペテロ 1: 2、3: 18 と 21 節)。
- G. イエスは神によって高く上げられて「主」の名を与えられた(使徒行伝 2: 25-29、33-36 節、3: 13、10: 36、ローマ 8: 34、10: 9、I テモテ 3: 16、ヘブル 1: 3、I ペテロ 3: 22)。
- H. 私達が神との新しい交わりを始められるようにイエスは聖霊を下さった(使徒行伝 1: 8、2 章 14-18 節、38-39 節、10: 44-47、I ペテロ 1: 12)。
- I. イエスは裁きと万物の回復のために再来されることになっている(使徒行伝 3: 20-21、10 章 42 節、17: 31、I コリント 15: 20-28、I テサロニケ 1: 10)。
- J. 御言葉を聞く者は皆悔い改めて洗礼を受けるべきである(使徒行伝 2: 21 と 38 節、3: 19、10: 43 と 47-48 節、17: 30、26: 20、ローマ 1: 17、10: 9、I ペテロ 3: 21)。

これら一連の事柄は初期教会の主な公告であるが、新約聖書の著者達は自らの説教の中でその一部を省いたり他の特別な事柄を強調したりした。マルコの福音書は全体的に *kerygma* の使徒ペテロの解釈に厳密に従っている。伝統的にマルコは自らの福音書の執筆の際にペテロのローマでの説教を取り入れたと考えられている。マタイとルカはマルコの福音書の基本構造に従っている。

5: 41-44 これらの節は、ユダヤ人の宗教指導者達が仲間からの賞賛を喜んでいたという事実を反映しているようだ。彼らはラビとして任命され続けることで栄光を受けていたが、霊的盲目のために彼らは、自分達の中心におられる、全ての教師のうちで最も偉大なる方を見逃していた。これは紀元1世紀のラビ主導のユダヤ教に対するイエスの強い軽蔑の一つである。

5: 43「あなたがたはわたしを受けいれない」 信仰は神を信頼する決心から始まる。これによって、教義に成熟することとキリストのような生活を送ることによって最高潮に達する、弟子としての神との個人的関係が始まる。

5: 45-47 イエスは、モーセの著書が御自身を明らかにしていることを主張されている。

5: 46,47「もし...なら」 ユダヤ人の指導者達は本当に、モーセの著書だけでなく、イエスが終わりの日に自分達を裁かれることになっていることをも信じなかった。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを

助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜ4節は現代訳聖書で省略されているのか。
2. なぜイエスはこの人を特別に癒されたのか。
3. この人の癒しにこの人の側の信仰は関与したのか。現実の癒しは霊的な癒しを意味しているか。
4. この人の病気はこの人の個人的な罪に関連していたのか。全ての病気は個人的な罪に関連しているか。
5. なぜユダヤ人はイエスを殺そうとしたのか。
6. イエスに適用される、旧約聖書における神のお役割を挙げなさい。
7. 永遠の命は現在の現実か、それとも未来の希望か。
8. 終わりの時の裁きは行いに基づいているか、それとも信仰に基づいているか。それはなぜか。

ヨハネの福音書6章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

ヨハネ 6:1-71の文脈の洞察

このヨハネの福音の聴衆がユダヤ人であったこと、そして彼らの文化的背景に、モーセを超える存在でいらっしゃるメシアへのラビの期待(30~31節を参照)があったことを覚えておかなければならない。イエスの通常ではない御言葉(60~62節と66節を参照)には群衆の偽メシアへの期待(14~15節を参照)を打ち消す意味があった。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 6: 1-14

¹その後、イエスはガリラヤ湖(ティベリウス湖)の向こう岸へ渡られた。²大勢の群衆がイエスについてきた。病人たちになさっていたしるしを見たからである。³イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座られた。⁴ユダヤ人の祭である過越の祭が近づいていた。⁵イエスは目を上げられ、大勢の群衆が御自分の方に集まって来るのを御覧になって、ピリポに言われた「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。⁶これはピリポをためそうとして言われたのであって、御自分ではなさろうとすることをよく御承知であった。⁷ピリポはイエスに答えた「二百デナリのパンがあっても、各々が少しずつ食べたとしても足りないでしょう」。⁸弟子たちの一人、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った⁹「ここに、大麦のパン五つと魚二ひきとを持っている子供がおります。しかし、こんなに大勢の人の前では、それが何になりましょう」。¹⁰イエスは「人々を座らせなさ

い」と言われた。その場所には草が多かった。そこに座った男性の数は五千人ほどであった。¹¹そこでイエスはパンを取られ、感謝されてから、座っている人々に分け与えられ、また魚をも同じようにして彼らの望むだけ与えられた。¹²人々が十分に食べた後、イエスは弟子たちに言われた「少しでも無駄にならないようにパンくずの余りを集めなさい」。¹³そこで弟子たちが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは十二のかごにいっぱいになった。¹⁴人々はイエスのなさったこのしるしを見て「本当にこの人こそ世に来たるべき預言者である」と言った。

6: 3 イエスは御自分の声を投影するために、水や丘の側面で起こる自然な増幅を用いられた。イエスが「座られた」という事実は、これが弟子達との公的なお教えの場だったことを示している。

6: 7「二百デナリの」 1デナリは当時の労働者と兵士の一日の賃金だった。これは1年の賃金のほぼ3分の2に相当すると思われる。

特別なトピック: イエスの時代にパレスチナで使用されていた硬貨

I. 銅貨

- A. ケルマ -低価値
- B. カルコス -低価値
- C. アサリオン -デナリウスの約16分の1の価値があるローマの銅貨
- D. コドラント -デナリウスの64分の1に相当するローマの銅貨
- E. レプトン -デナリウスの約128分の1の価値があるユダヤの銅貨
- F. クアドランス、ファルティング -低価値のローマの銅貨

II. 銀貨

- A. アルグロス(「銀貨」) -銅貨や青銅の硬貨よりもはるかに価値のある硬貨
- B. デナリウス -1日の労働賃金としての価値のあるローマの銀貨
- C. ドラクメ -デナリウスと同等の価値のあるギリシャの銀貨
- D. ディードラクモン -ユダヤの硬貨シエケルの半分と同価の2ドラクマ
- E. スタテル -約4デナリの価値がある銀貨

III. 金貨 - クルソス(「金貨」) -最も価値のある硬貨

IV. 金属の重さを表す一般的な用語

- A. ムナ - ラテン語のミナ。100デナリと同価
- B. タラント - ギリシャの重量単位
 - 1. 6000デナリに相当する銀
 - 2. 18万デナリに相当する金
- C. シエケル - 旧約聖書に登場するユダヤの銀の重量単位
 - 1. ピム - 3分の2シエケル
 - 2. ベカ - 2分の1シエケル

3. ゲラ - 20分の1シェケル

より大きな単位

1. マネ - 50シェケル

2. キカル - 3,000シェケル

6: 8-9「シモン・ペテロの兄弟アンデレ」この文脈には、イエスの御力と御人格へのアンデレの純粋な信仰と信頼が鮮やかに見られる。

6: 9「大麦のパン」これは最も安価で最も望ましくないパンと考えられていた。それは貧しい人の食べ物だった。イエスは高価な食べ物を提供するために御自分の力を用いられなかったのだ。

6: 10「人々を座らせなさい」この文化の人々は通常、床に座ったり足の低いU字型のテーブルに横たわったりして食事をした。

「その場所には草が多かった」これは使徒の目撃証言である。

「そこに座った男性の数は五千人ほどであった」明らかにその日にその場にいた人の数はもっと多かったはずである。5000はキリのよい数字であり、成人男性の数を指していて、女性や子供の数は含まれていない。しかし、その場にどのくらいの女性と子供がいたかは明らかではない。

6: 11「イエスはパンを取られ、感謝されてから、座っている人々に分け与えられ、また魚をも同じようにして彼らの望むだけ与えられた」食べ物の量が増えるという奇跡はイエスの御手で起こったに違いない。ユダヤ人のメシアへの希望の概念ではこの出来事は、モーセがマナを備えたようにイエスが食べ物を備えられたという、期待されたしるしであると考えられている。

6:13「そこで弟子たちが集めると... 十二のかごにいっぱいになった」用語「12」の象徴的な重要性を明らかにすることは難しい。それはイスラエルの種族の数あるいはこのときイエスの12人の弟子がそれぞれ1つずつ持ったかごの総数を指す用語として解釈されてきた。

特別なトピック: 数字の12

12は常に組織された事物を象徴する数として用いられてきた。

A. 聖書以外での用法

1. 黄道の十二宮
2. 1年の12ヶ月

B. 旧約聖書での用法

1. ヤコブの息子達の人数(ユダヤ人の部族の数)
2. 反映している事物
 - a. 出エジプト記24: 4の祭壇の12本の柱
 - b. 出エジプト記28: 21の大祭司の胸当て(部族の数を表す)上の12個の宝石
 - c. レビ記24: 5の幕屋の聖所内の12個のパン
 - d. 民数記13章のカナンに送られた12人のスパイ(各部族から一人選出)

- e. 民数記17: 17のコーラの反逆における12本の杖(部族の標準)
- f. ヨシュア記4: 3と9節と20節のヨシュアの12の石
- g. I列王記4: 7のソロモンの政権下の12の行政区
- h. I列王記18: 31でエリヤがYHWHにささげた祭壇の12個の石

C. 新約聖書での用法

1. 選ばれた12使徒
2. マタイ14: 20の12個のパン籠(各使徒が1つずつ用いた)
3. マタイ19: 28のイエスの弟子達の座る12の王座(イスラエルの12部族を指す)
4. マタイ26: 53のイエスを救い出す天使達の12の軍団
5. 黙示録での象徴的事物
 - a. 4: 4の24の王座の24人の長老
 - b. 7: 4および14: 1と3節の144000(12x12000)
 - c. 12: 1の女の冠の上の12の星
 - d. 21: 12の12の門。12人の天使達は12部族を反映している。
 - e. 21: 14の、12使徒の名が刻まれた、新しいエルサレムの12個の礎石
 - f. 21: 16の12000スタジア(新しい都市、つまり新しいエルサレムの規模)
 - g. 21: 17の144 キュビトの壁
 - h. 21: 21の12の真珠の門
 - i. 22: 2の、12種類の果実をつける、新しいエルサレムの木(各月に1回ずつ結実)

6:14「預言者」 群衆はイエスの御力を認めましたが、(神が与えられた)イエスの使命とするしの本質を誤解した。

NASB(改訂版)原典: 6:15

¹⁵人々が来て御自分を捕えて王にしようとしているとお知りになって、イエスはお一人でまた山に退かれた。

6: 15 群衆は、食べ物を用意するというイエスのメシア的な奇跡に興奮していた。

NASB(改訂版)原典: 6: 16-21

¹⁶さて、夕方になり、弟子たちは海辺に下って、¹⁷舟に乗って、向こう岸のカペナウムに行こうと海を渡り始めた。すでに暗くなっていたのに、イエスはまた彼らのところにおいでにならなかった。¹⁸強い風が吹いてきて、海は荒れ始めた。¹⁹三、四里ほど漕ぎ出したとき、イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、弟子たちは恐れた。²⁰するとイエスは彼らに言われた「わたしたち。恐れることはない」。²¹そこで弟子たちは喜んでイエスを舟にお迎えした。すると舟はすぐに、彼ら

が行こうとしていた地に着いた。

6: 17「カペナウム」 御自分の故郷ナザレの人々の不信仰のために、イエスはガリラヤでの御自分の伝道活動の拠点をこの町とされていた。

6: 19「三、四里ほど漕ぎ出した」 イエスが水の上をお歩きになって自分達の方に来られたとき、弟子達は湖を約半分ほど渡ったところであった。

「弟子たちは恐れた」 これらの弟子達はまだ地上(この世)での判断基準でイエスを見ていた。これらの「しるし」の総合的重要性のために、弟子達はイエスがどなたなのかを考え直すことを余儀なくされた。

6: 20「わたしだ」 これは文字通り、旧約聖書の神、つまりYHWHの契約の御名を反映する「私はある」(*ego eimi*)である。イエスは目に見える「私はある」であり、神の完全な自己啓示であり、受肉した神のロゴス(言葉)であり、まことの神のひとり子でいらっしゃる。

特別なトピック: 神の御名

A. *EI*

1. 多くの学者達がそれをアッカド語の語幹の「強いこと」あるいは「力強いこと」に由来すると信じているにもかかわらず、神に対する一般的な古代の呼び名である用語の本来の意味ははっきりしていない(創世記 17: 1、民数記 23: 19、申命記 7: 21、詩篇 50: 1 を参照)。
2. カナンのパンテオンでは崇高なる神は *EI* である(Ras Shamra 原典)。
3. 聖書では *EI* は通常は他の用語と混用されない。これらの組み合わせは神を特徴づける方法となった。
 - a. *EI-Elyon* (最も崇高なる神)、創世記 14: 18-22、申命記 32: 8、イザヤ 14: 14
 - b. *EI-Roi* («見ておられる神」あるいは「ご自身を現わされる神」)、創世記 16: 13
 - c. *EI-Shaddai* («万能の神」あるいは「憐れみ深い神」または「山の神」)、創世記 17: 1、35: 11、43: 14、49: 25、出エジプト 6: 3
 - d. *EI-Olam* (永遠におられる神)、創世記 21: 33。この用語はⅡサムエル 7: 13 と 16 節におけるダビデ王に対する神の約束と神学的に関連がある。
 - e. *EI-Berit* («契約の神」)、士師記 9: 46
4. *EI* は以下の用語群と同一視されている。
 - a. 詩篇 85: 8 とイザヤ 42: 5 における YHWH
 - b. 創世記 46: 3 における *Elohim*。ヨブ 5: 8 では「私は *EI* であり、あなたの父の *Elohim* である」。
 - c. 創世記 49: 25 における *Shaddai*
 - d. 出エジプト 34: 14、申命記 4: 24、5: 9、6: 15 における「嫉妬」
 - e. 申命記 4: 31 とネヘミヤ 9: 31 における「あわれみ」。申命記 7: 9、32: 4 における「忠実さ」。
 - f. 申命記 7: 21、10: 17 とネヘミヤ 1: 5、9: 32 とダニエル 9: 4 における「偉大で畏れ多い」

- g. I サムエル 2: 3 における「知識」
 - h. II サムエル 22: 33 における「私の力強い避け所」
 - i. II サムエル 22: 48 における「私の復讐者」
 - j. イザヤ 5: 16 における「聖なる方」
 - k. イザヤ 10: 21 における「力」
 - l. イザヤ 12: 2 における「私の救い」
 - m. エレミヤ 32: 18 における「偉大で力強い」
 - n. エレミヤ 51: 56 における「報い」
5. 旧約聖書に登場する神の主な名前の全ての組み合わせはヨシュア 22: 22 に見られる (*El*, *Elohim*, *YHWH*, 以下同様)。

B. *Elyon*

1. その本来の意味は「崇高な」、「高貴な」、「高く上げられた」である(創世記 40: 17、I 列王記 9: 8、II 列王記 18: 17、ネヘミヤ 3: 25、エレミヤ 20: 2 と 36: 10、詩篇 18: 13 を参照)
2. それは神の他のいくつかの呼び名と同じ意味で用いられる。
 - a. *Elohim* —詩篇 47: 1-2、73: 11、107: 11
 - b. *YHWH* —創世記 14: 22、II サムエル 22: 14
 - c. *El-Shaddai* —詩篇 91: 1 と 9 節
 - d. *El* —民数記 24: 16
 - e. *Elah* —ダニエル 2~6 章とエズラ 4~7 章でしばしば用いられ、ダニエル 3: 26、4: 2、5: 18 と 21 節に登場する *illair* (アラム語で「崇高なる」神を意味する用語) と関連がある。
3. それはしばしばイスラエル以外の民によって用いられる。
 - a. メルキゼデク、創世記 14: 18-22
 - b. バラム、民数記 24: 16
 - c. モーセ、申命記 32: 8 における国々についての発言
 - d. 新約聖書のルカの福音書: 異教徒に対する記述。ギリシャ語の相当語 *Hupsistos* を用いている(1: 32、35 節、76 節、6: 35、8: 28、使徒行伝 7: 48、16: 17 を参照)。

C. 主に詩の中で用いられる *Elohim*(複数形)、*Eloah*(単数形)

1. この用語は旧約聖書以外では見られない。
2. この語はイスラエルの神あるいは国々の神々を言い表すことができる(出エジプト 12: 12 と 20: 3 を参照)。アブラハムの家族は多くの神々を信じていた(ヨシュア 24: 2 を参照)。
3. 申命記 32: 8(LXX)、詩篇 8: 5、ヨブ 1: 6 と 38: 7 に見られるように、用語 *elohim* は他の霊的存在(天使、悪魔)を言い表す場合にも用いられる。それは士師(訳者注: 古代イスラエルの裁判官・行政官)を言い表すこともある(出エジプト 21: 6 と詩篇 82: 6 を参照)。
4. 聖書ではそれは神の最初の呼び名である(創世記 1: 1 を参照)。創世記 2: 4 で *YHWH* と一緒になるまではそれは排他的に用いられる。それは本来は(神学的に)、この惑星上の全て

の生命を造り、維持され、与えられる方である神を言い表している(詩篇 104 篇を参照)。それは *El* と同意(義)語である(申命記 32: 15-19 を参照)。神の名の変化を別にすれば、詩篇 14 篇の *elohim* がちょうど詩篇 53 篇の YHWH と似ているのと同様に、それは YHWH とも並立できる。

5. 複数形でしかも他の神々を言い表すのにも用いられるにもかかわらず、この用語はしばしばイスラエルの神を言い表す。しかし通常は多神教的用法であることを表すために単数形の動詞を必要とする。
6. この用語はイスラエル以外の民の言葉の中に神の名前として見出される。
 - a. メルキゼデク、創世記 14: 18-22
 - b. バラム、民数記 24: 2
 - c. モーセ、国々についての発言、申命記 32: 8
7. イスラエルの多神教的な神の一般名が複数形なのは奇妙なことだ！ 確実性はないが、ここにいくつかの理論がある。
 - a. ヘブル語には多くの複数形があり、しばしば強調の目的で用いられる。「王の複数形」と呼ばれる、後の時代のヘブル語の文法の特徴はこれと密接に関連があり、そこでは複数形が概念を強調するために用いられている。
 - b. この語は、神が天で会われそして支配しておられる天使の集団を言い表しているかもしれない(I 列王記 22: 19-23、ヨブ 1: 6、詩篇 82: 1 と 89: 5 と 7 節を参照)。
 - c. この語が新約聖書にある三位一体の神の啓示を反映しているとみなすことも可能である。創世記 1: 1 では神は創造される。創世記 1: 2 では聖霊が満ちた状態となられ、そして新約聖書によればイエスは父なる神の代理者として創造の業をなさる方である(ヨハネ 1: 3 と 10 節、ローマ 11: 36、I コリント 8: 6、コロサイ 1: 15、ヘブル 1: 2 と 2: 10 を参照)。

D. YHWH

1. これは、契約をなさる神、つまり救い主でいらっしゃる神を反映する名前である！ 人間は契約を破るが、神はご自分のお言葉と(なされた)約束と契約に忠実でいらっしゃる(詩篇 103 篇を参照)。

この名前は創世記 2: 4 で初めて *Elohim* とともに登場した。創世記 1~2 章には創造についての記述は 2 度はないが、2 つのことが強調されている: (1) 宇宙(実体的)の創造主でいらっしゃる神、そして(2) 人間を特別に創造された神。創世記 2: 4 は人類の特権的地位と目的および罪の問題とその特別な地位に関連する反逆についての特別な啓示で始まる。
2. 創世記 4: 26 には「人間達が主の名(YHWH)を呼び始めた」と記されている。しかし、出エジプト 6: 3 によれば初期の契約の民(家父長達とその家族達)は神を *El-Shaddai* としてのみ知っていた。YHWH という名前は出エジプト 3: 13-16、特に 14 節にただ一度だけ説明されている。しかし、モーセの著書はしばしば(聖句中の)言葉を語源的にはなく一般的な言葉

の原則で解釈している(創世記 17: 5、27: 36、29: 13-35 を参照)。この名前の意味についてのいくつかの理論がある(IDB の第2巻 409~411 ページより抜粋)。

- a. アラビア語幹「熱烈な愛を示す」に由来。
- b. アラビア語幹「吹く」(嵐の神でいらっしやる神)に由来。
- c. ウガリット語(カナン語)幹「話す」に由来。
- d. フェニキア碑文によれば、「維持する人」あるいは「設立する人」を意味する使役動詞の分詞
- e. ヘブル語の *Qal* 形「いる人」あるいは「存在する人」(未来の意味では「いるだろう人」)に由来。
- f. ヘブル語の *Hiphil* 形「存在させる人」に由来。
- g. 「唯一生き続けている神」を意味するヘブル語幹「生きる」(例えば創世記 3: 20)に由来。
- h. 出エジプト 3: 13-16 の文脈中で完了の意味で用いられている未完了形動詞。「私は以前にあったものであり続けるだろう」あるいは「私はいつもあり続けてきたものであり続けるだろう」(J. Wash Watts 著 *A Survey of Syntax in the Old Testament* 67 ページを参照)

YHWH という名前の完全な形はしばしば略語あるいは可能な限り本来の形で表現される。

- (1) *Yah*(例えば Hallelu-yah)
- (2) *Yahu*(名前。例えば Isaiah)
- (3) *Yo*(名前。例えば Joel)

3. 後の時代のユダヤ教ではこの契約の名はとても神聖に(ヤハウエの四子音文字: [訳者注]ヘブル語で「神」を示す4字。YHWH などと翻字される)なったので、ユダヤ人は出エジプト 20: 7 と申命記 5: 11 と 6: 13 の命令に違反しないようにするためにその名を口にすることを恐れた。

そこで彼らはその名のかわりに「所有者」、「主人」、「夫」、「主」を意味するヘブル語の用語 *adon* あるいは *adonai* (私の主)を使った。旧約聖書の原文を読んでいるときに文中に YHWH が出てくると彼らはそれを「主」(を意味するヘブル語の用語 *adon* あるいは *adonai*)と発音した。これが、英訳聖書において YHWH が Lord と表記される理由である。

4. *EI*と同様に、しばしば YHWH はイスラエルの契約の神のあるご性質を強調するために他の用語と一緒に用いられる。多くの可能な組み合わせの中から数例をここに挙げた。
 - a. *YHWH - Yireh*(YHWH は備えられるだろう)、創世記 22: 14
 - b. *YHWH - Rophekha*(YHWH はあなたの癒し主)、出エジプト 15: 26
 - c. *YHWH - Nissi*(YHWH は私の旗)、出エジプト 17: 15
 - d. *YHWH - Meqaddishkem*(YHWH あなたを聖別される方)、出エジプト 31: 13
 - e. *YHWH - Shalom*(YHWH は平和)、士師記 6: 24
 - f. *YHWH - Sabaoth*(万軍の YHWH)、I サムエル 1: 3 と 11 節、4: 4、15: 2、しばしば預言者達の中で

- g. *YHWH - Ro 'I* (YHWH は私の羊飼ひ)、詩篇 23: 1
- h. *YHWH - Sidqenu* (YHWH は私達の義)、エレミヤ 23: 6
- i. *YHWH - Shammah* (YHWH はおられる)、エゼキエル 48: 35

NASB(改訂版)原典: 6: 22-25

²²その翌日、海の向こう岸に立っていた群衆は、そこに小舟が一そうしかなく、またイエスは弟子たちと一緒に小舟にお乗りにならず、ただ弟子たちだけが船出したのを見た。²³しかし、数艘の小舟がティベリアからきて、主が感謝されたのち分け与えられたパンを人々が食べた場所に近づいた。²⁴そこで群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知って、それらの小舟に乗り、イエスをたずねてカペナウムに行った。²⁵そして、海の向こう岸でイエスに出会って言った「ラビ、ここにいつおいでになったのですか」。

6: 23「ティベリア」この町は紀元22年にヘロデ・アンティパスの命令で建てられ、彼が自分の王国の首都とした。

NASB(改訂版)原典: 6: 26-34

²⁶イエスは群衆に答えて言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがたがわたしをたずねているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満ち足りたからである。²⁷朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働きなさい。これは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神が人の子にそれをゆだねられたからである」。²⁸そこで彼らはイエスに言った「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」。²⁹イエスは彼らに答えて言われた「神がつかわされた者を信じること、これが神のわざである」。³⁰彼らはイエスに言った「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか。どんなことをして下さいますか」。³¹わたしたちの先祖は荒野でマナを食べました。それは『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」。³²そこでイエスは彼らに言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。天からのパンをあなたがたに与えたのはモーセではない。天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである。³³神のパンは天から下ってきて、この世に命を与えるものである」。³⁴彼らはイエスに言った「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」。

6: 26「パンを食べて満ち足りたからである」彼らの動機は霊的な永遠のものではなく、現実的で即時的なものであった。

6: 28「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」これは紀元1世紀のユダヤ教の中心的な宗教問題だった。ユダヤ人の宗教家は(1)自分の家系(2)モーセの律法を口述伝承(タルムード)によって解釈された通りに行うこと、に基づいて、神の前に義とされると推定し

た。

6: 29「神がつかわされた者を信じること」 人の信仰の中心は人の誠実さや告白や熱意ではなく、イエス・キリストでなければならない。この一節が直接に指しているのは、イエス・キリストについての正統的の神学や望ましい宗教的な儀式あるいは倫理的な生活でもなく、イエス・キリストとの個人的な関係にある。

6: 30-33 この群衆が、5000人が食べ物によって養なわれたという奇跡的の出来事に参加していたことを忘れてはならない。彼らはすでに自分達に示されたしるしを見ていたのだ。ラビ主導のユダヤ教では、旧訳聖書にあるような、天からマナを下さるという御業をメシアが繰り返されるだろうと考えられた。

6: 32 イエスはユダヤ人の伝統的な神学について述べられた。

6: 33「神のパンは天から下ってきて」 これは、イエスが世の存在する前からおられるという、神の起源を示している。これはまた、天から来た「マナ」についての言葉遊びであり、イエスがまことの命のパンでいらっしやるのだということを主張している。これは文字通り「神のパンは天から下って来られる方である」ということである。

「この世に命を与える」 これはイエスが来られた目的である。その目標は「新しい命」、「永遠の命」、「新しい世の命」であり、失われた反抗の世に、つまりいくつかの特別なグループ(ユダヤ人、異邦人、選ばれた人々、選ばれなかった人々、保守的な人々、自由主義者)にではなく全ての人々に与えられる「命という名の神の御心」である。

6: 34「主よ」 群衆はイエスやイエスの御言葉を理解できなかった。彼らはイエスをメシアと見なかったのだ。

「そのパンをいつもわたしたちに下さい」 これらのユダヤ人も、イエスの言われた霊的な比喻を理解しなかった。

NASB(改訂版)原典: 6: 35-40

³⁵イエスは彼らに言われた「わたしは命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。³⁶しかし、あなたがたに言ったように、あなたがたはわたしを見たのに信じようとはしない。³⁷父がわたしに与えて下さる者は皆、わたしに来るであろう。そして、わたしに来る者をわたしは決して拒みはしない。³⁸わたしが天から下ってきたのは、自分のころのままを行うためではなく、わたしをつかわされた方のみころを行うためである。³⁹わたしをつかわされた方のみころは、その方がわたしに与えて下さった者をわたしが一人も失わずに終わりの日によみがえらせることである。⁴⁰わたしの父のみころは、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。

6: 35「わたしは生命のパンである」 これは、(罪からの)新たな脱出をもたらす、マナと新たな律法を与えてくださる方であるメシアへのユダヤ人の期待と関連している。

「わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」 信徒がイエスのみもとに来ることと信じることは一時的な決心ではなく、交わりと友好と服従の生活様式を始めることである。

「飢える．．．渴く」 飢えと渴きはしばしば霊的な現実を言い表すために用いられた。

6: 37「父がわたしに与えて下さる者は皆、わたしに来るであろう」 この文は主に神の主権(統治権)を強調している。予定運命は救われた者についての教義であるが、救われていない者にとっては障壁ではない。この教義を読み解く鍵は永遠の掟ではなく神の愛と恵みである。神がイエスに与えられる全ての人もイエスに「来る」ことに注意しよう。神は常に主導されるが、人間はそれに応答しなければならない。

「わたしに来る者をわたしは決して拒みはしない」 これは、神がキリストを通して御自身のみもとに全ての人を召され歓迎されるという真理を強調している。

特別なトピック: 信徒の確信

信徒の確信とは(1)聖書の真理(2)信徒の信仰の経験、そして(3)生活様式である。必要とされる、信徒の契約上の応答とは、(1)初めの、そして継続的な悔い改めと信仰(2)救いの目標がキリストらしい者になることであることを覚えておくこと(3)確信が生活習慣によって確認されることを覚えておくこと(4)確信が生きた信仰と忍耐によって確認されることを覚えておくこと、である。

6: 38「わたしが天から下ってきたのは」 これはイエスの受肉と天国での起源を指す。

「自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされた方のみこころを行うためである」 これはイエスの父なる神への従順を強調している。

6: 39「その方がわたしに与えて下さった者をわたしが一人も失わずに」 これは、信徒の確信の源である、神が示されている御力の大きいなる約束である。イエスは、父なる神が御自分に与えられた人を誰一人失われることはなく、終わりの日に父なる神が御自分に与えられる全ての人をよみがえらされる。ここに(1)選びと(2)忍耐の神の約束がある。

「終わりの日によみがえらせることである」 これは、信徒の復活の日であり、信じない者の裁きの日を指す。

6: 40「わたしの父のみこころは、．．．である」 これは28節の質問「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」に対するイエスのお答えである。

「子を見る者が皆」 この「見る」は1回限りの出来事ではなく、進行中の行為である。用語「見る」は、何かを理解する、つまり知るために「集中的に見つめる」という意味である。

「子を信じる」 救いは信条や正しい神学や道徳的な生活様式ではなく、主に個人的な関係であることを思い出そう。ここでは人の信仰の強さではなく対象が強調されている。神の主権と人類の自由意志は、聖書の契約の2つの特徴を形成するものとなる。

NASB(改訂版)原典: 6: 41-51

⁴¹ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下ってきたパンである」と言われたので、イエスについてつぶやき始めた。⁴²彼らは言った「これはヨセフの子イエスではないか。わたしたちはその父母を知っているではないか。わたしは天から下ってきたと、どうして今言うのか」。⁴³イエスは彼らに答えて言われた「互いにつぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴わたしをつかわされた父がわたしを引き寄せて下さらなければ、だれもわたしに来ることはできない。わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう。⁴⁵預言者の書に『彼らはみな神に教えられるであろう』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆わたしに来るのである。⁴⁶神から出た者のほかには誰も父を見た者はいない。その者だけが父を見たのである。⁴⁷まことに、まことに、あなたがたに言う。信じる者には永遠の命がある。⁴⁸わたしは命のパンである。⁴⁹あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。⁵¹わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は永遠に生きるであろう。わたしが与えるパンは世の命のために与えるわたしのからだである」。

6: 41「ユダヤ人たちはつぶやき始めた」 荒野を放浪していた時期のイスラエルの民も、自分達に食べ物を備えた神の代表者であるモーセを拒んだ。

6: 42 これは、御自身についてのイエスの御言葉をユダヤ人が理解したことを示している。

6: 44「わたしをつかわされた父がわたしを引き寄せて下さらなければ、だれもわたしに来ることはできない」 神は常に主導される。全ての霊的な決定は人類の宗教性の結果ではなく、聖霊を慕い求めたことの結果である。神の主権と人間の応答の義務は神の御心と慈みに密接に関連している。

6: 45「父から聞いて学んだ者は皆わたしに来るのである」 神を知っていると言い張る一方でイエスを拒むことは不可能である。

6: 46「神から出た者のほかには誰も父を見た者はいない」 御自身を通してのみ、人は本当に神を理解し知ることができるということをイエスはおっしゃっている。モーセでさえも本当の意味でYHWHを見ることは決してなかった。

6: 47 この節はイエスの全人類に対する無償の救いのお申し出の要約である。イエスは神の唯一の真の啓示で神への唯一の真の扉でいらっしゃる。このことはアダムの全ての息子や娘にとって真である。

6: 50 この節は、31～35節と同じように、現実のパン(マナ)と天のパン(イエス)という、パンの意味についての言葉遊びである。ある人は現実の人生を生き、それを続けるが、その命は繰り返してはならず、最終的に死ぬことを避けることはできない。しかし、他の人は永遠の命を生き、それを続けるが、その命は受け入れられ育まれて、霊的な死を即時停止させる。

6:51「私は生きているパンです」 これは、御自分の御人格に注意を向けさせるためのイエスの文学的技法だった。救いは啓示と同じように、究極的には人である。

「世の命のために与えるわたしのからだである」これは、食べ物を与えられるのではなく、イエス御自身が私達の必要の中心であることを強調する比喻である。

NASB(改訂版)原典: 6: 52-59

⁵²そこでユダヤたちは互いに論じて言った「この人がどのようにして自分の体をわたしたちに与えて食べさせることができようか」。⁵³イエスは彼らに言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。⁵⁴わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には永遠の命があり、わたしはその者を終わりの日によみがえらせるであろう。⁵⁵わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物である。⁵⁶わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしのうちにあり、わたしもまたその者のうちにある。⁵⁷生ける父がわたしをつかわされ、またわたしが父によって生きているように、わたしの肉を食べる者もわたしによって生きるであろう。⁵⁸天から下ってきたパンは、それを先祖たちが食べて死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者はいつまでも生きるであろう」。⁵⁹これらのことはイエスがカペナウムの会堂で教えておられたときに言われたことである。

6: 53-57 これは、人は自分から意図的にイエスに応答し、応答し続けなければならないという事実を裏付けているようだ。

6: 54「肉... 血液」これは、「心臓」のように、ユダヤ人が人体全体を比喩的に表現する方法である。

6: 55「まことの食べ物... まことの飲み物」これは、用語「真実」と「真理」の使徒ヨハネの特徴的用法である。

特別なトピック: ヨハネの著書における「真理」

ある意味で使徒ヨハネは、*logos* と同じように、*aletheia* (真理)のヘブル語の背景とギリシャ語の背景とを組み合わせている。*emeth* (BDB 53)はヘブル語では「真である」あるいは「信頼できる」ということを示すが、ギリシャ語ではプラトンの現実対非現実、つまり天上対地上の対比と関連していた。これは使徒ヨハネの二元論に適合する。神が御子に御自身を明らかにされたことを表現するのにこの用語は用いられている(例えばヨハネ1: 14と17節の「イエスは恵みと真理に満ちた方でいらっしゃる」)。

6: 56「... する者はわたしのうちにあり、わたしもまたその者のうちにある」これは聖なる者の忍耐を強調している。真の応答は継続的な応答によって証明される。人は信仰を始めるだけでなく終わらせなければならない。

6:58 これは、旧・新約聖書のモーセとイエスの比較である。

「先祖たちが食べて死んでしまった」これも、家系あるいはモーセの律法(トーラ)を通して救いを

否定することの神学的な表現であるようだ。

「永遠」以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 永遠('OLAM)

ヘブライ語の用語 *'olam* はその語源が明らかではないが、いくつかの意味で用いられている。

1. 古代の事物

人々、場所、神、物事、時間

2. 将来の時間

人の人生、王の誇張、継続的な存在(地と天)、神の御臨在、契約、神とダビデとの特別な契約、神の救世主、神の律法、神の約束、アブラハムの子孫と約束の地、契約の祭り、永遠に終わりのないこと、

6: 59 イエスは御自分が世におられた時代のユダヤ教を実践された。イエスは会堂の学校で学ばれ、会堂で礼拝され、会堂で教えられた。イエスは律法の全てを成就された。

NASB(改訂版)原典: 6: 60-65

⁶⁰弟子たちのうちの多くの者はこれを聞いて言った「これはひどい言葉だ。誰がそんなことを聞いておられようか」。 ⁶¹しかしイエスは弟子たちがそのことでつぶやいているのにお気づきになり、彼らに言われた「このことがあなたがたのつまずきになるのか。 ⁶²もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。 ⁶³人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり命である。 ⁶⁴しかし、あなたがたの中には信じない者がいる」。イエスは初めから、誰が信じないか、また、誰が御自分を裏切るかを知っておられたのである。 ⁶⁵そしてイエスは言われた「それだから、父が与えて下さった者でなければわたしに来ることはできないと言ったのである」。

6: 62 イエスの死と復活と昇天および聖霊が来られた後、イエスのお教えと御業の多くは弟子達にとって意味を持つようになった。

「前にいた所に上る」これはイエスが「天から下って来られる」ことを強調している。これはイエスが世の始まる前から父なる神と天におられ、天で父なる神と親密な交わりをされていることを述べている。

特別なトピック: 昇天

イエスが天に上って戻られたことを述べるために数多くのギリシャ語の用語が用いられている。

例えば *analambanō*、*epairō*、*analēpsis*、*diistēmi*、*anabainō*。

6: 63 この節は古い契約と新しい契約との対比、つまりモーセとイエスとの対比と関連があるようだ。

特別なトピック: 新約聖書における霊(PNEUMA)

「霊」を意味するギリシャ語の用語は新約聖書ではいくつかの意味で用いられている。

1. 三位一体の神
2. 人間の生命力
3. 霊的な領域(霊的存在、霊の識別、霊的事物、霊的賜物、聖霊の靈感、霊的体)
4. 現実的領域(風、呼吸)
5. 世の態度、人間の思考過程

6: 64 裏切り者の弟子とはイスカリオテのユダである。信仰のレベルに関わる謎は確かにある。

特別なトピック: 背信(aphistemi)

このギリシャ語の用語 *aphistemi* は幅広い意味を持つセム語族の用語である。しかし、英語におけるその用語「apostacy」はこの用語から派生したのに、その用法は現代の読者によって偏ったものとなっている。常に言われていることではあるが、重要なことは予め定められている定義ではなく文脈である。

この語は「～から」つまり「遠方から」を意味する前置詞 *apo* と「座る」、「立つ」、あるいは「固定する」を意味する *histemi* の複合語である。以下に示す(非神学的な)用法に注意せよ。

1. 物理的に引き離す
 - a. 神殿から、ルカ 2: 37
 - b. 家から、マルコ 13: 34
 - c. 人から、マルコ 12: 12 と 14: 15、使徒行伝 5: 38
 - d. 全てのものから、マタイ 19: 27 と 29 節
2. 政治的に引き離す、使徒行伝 5: 37
3. 関係を引き離す、使徒行伝 5: 38、15: 38、19: 9、22: 29
4. 法的に引き離す(離婚)、申命記 24: 1 と 3 節(LXX)と新約聖書のマタイ 5: 31 と 19: 7、マルコ 10: 4、I コリント 7: 11
5. 負債を返済する、マタイ 18: 24
6. 去ることで無関心を示す、マタイ 4: 20 と 22: 27、ヨハネ 4: 28 と 16: 32
7. 去らないことで関心を示す、ヨハネ 8: 29 と 14: 18
8. 受け入れる、許す、マタイ 13: 30 と 19: 14、マルコ 14: 6、ルカ 13: 8

神学的にはこの動詞にも幅広い用法がある。

1. 罪を帳消しにする、免除する、赦す、出エジプト 32: 32(LXX)、民数記 14: 19、ヨブ 42: 10 と

2. 新約聖書のマタイ 6: 12 と14～15節、マルコ 11: 25-26
3. 罪から離れる、Ⅱテモテ 2: 19
4. 以下に示す事柄を避けることによって無視する
 - a. 律法、マタイ 23: 23、使徒行伝 21: 21
 - b. 信仰、エゼキエル 20: 8(LXX)、ルカ 8: 13、Ⅱテサロニケ 2: 3、Ⅰテモテ 4: 1、ヘブル 2: 13

現代の信徒は、新約聖書の著者達がそれについて決して考えることのなかった多くの神学的疑問を持っている。これらの疑問の一つは、信仰から忠実さを切り離す現代の傾向と関連があるようだ。

聖書には、神の人々と関係して事件に巻き込まれる人物が登場する。

I. 旧約聖書

- A. 12(10)人のスパイの報告を聞いた人々、民数記 14 章(ヘブル 3: 16-19 を参照)
- B. コラ、民数記 16 章
- C. エリの息子、Ⅰサムエル2章と4章
- D. サウル、Ⅰサムエル 11-31 章
- E. 偽預言者達(例)
 1. 申命記 13: 1-5、18: 19-22(偽預言者の識別方法)
 2. エレミヤ28章
 3. エゼキエル 13: 1-7
- F. 偽の女預言者達
 1. エゼキエル 13: 17
 2. ネヘミヤ 6: 14
- G. イスラエルの悪い指導者達
 1. エレミヤ 5: 30-31、8: 1-2、23: 1-4
 2. エゼキエル 22: 23-31
 3. ミカ 3: 5-12

Ⅱ. 新約聖書

A. このギリシャ語の用語は文字通り *apostasize* である。旧・新約聖書はどちらも、イエス・キリストが再び来られる前には悪く誤った教えが世に広まると明言している(マタイ 24: 24、マルコ 13 章 22 節、使徒行伝 20: 29 と 30 節、Ⅱテサロニケ 2: 9-12、Ⅱテモテ 4: 4 を参照)。このギリシャ語の用語は、マタイ13章とマルコ4章とルカ8章に見られる土壌の例え話にあるイエスのお言葉を反映しているようだ。これらの偽教師達は明らかにクリスチャンではないが、元々は信徒であった(使徒行伝 20: 29-30、Ⅰヨハネ 2: 19 を参照)。しかし、彼らは未熟な信徒を誘惑し捕えることができた(ヘブル 3: 12 を参照)。

ここでの神学的疑問は、偽教師達も信徒かということである。これに答えるのは難しい。なぜなら彼らは地域教会の偽教師達であったからである(Ⅰヨハネ 2: 18-19 を参照)。私達の神学的つまり

特定の宗派の伝統はしばしば、聖書の特定の御言葉を引用せずにこの疑問に答える(個人的な偏見でつくりあげた証拠を示すために御言葉の中から自説に合わない一節を除外するという方法を除く)。

B. あからさまな信仰

1. ユダ、ヨハネ 17: 12
2. 大シモン、使徒行伝8章
3. マタイ 7: 13-23 に登場する人々
4. マタイ13章とマルコ4章とルカ8章に登場する人々
5. ヨハネ 8: 31-59 のユダヤ人
6. アレクサンドロとヒメナイ、I テモテ 1: 19-20
7. I テモテ 6: 21 の人々
8. ヒメナイとフィルト、II テモテ 2: 16-18
9. デマス、II テモテ 4: 10
10. 偽教師、II ペテロ 2: 19-22、ユダ 12-19 節
11. 反キリスト、I ヨハネ 2: 18-19

C. 実りのない信仰

1. I コリント 3: 10-15
2. II ペテロ 1: 8-11

私達がこれらの聖句について考えることは稀である。なぜなら私達の組織神学(カルヴァン主義、アルミニウス主義など)では応答が義務とされているからである。どうか私に偏見を持たないでいただきたい。というのは、この話題を持ちだしたのは私だからである。私の関心は正しい聖書解釈の順序にある。私達は聖書に語ってもらい、そしてその語られたことを既存の神学に組み入れようとしてはいけない。これは苦痛で衝撃的なことである。というのは、私達の神学の多くは特定の宗派(の教義)に偏っており、文化的で関係(親、友人、牧師)志向であり、聖書的ではないからである。(自分は)神の人々の中にいる(と思いこんでいる)人々の一部は、実は神の人々の中にはいないのだということが(このことから)分かる(例えばローマ 9: 6)。

6: 65 墮落した人類は自力で神を求めようとしない。

NASB(改訂版)原典: 6: 66-71

⁶⁶そのため、多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった。⁶⁷そこでイエスは十二弟子に言われた「あなたがたも去ろうとするのか」。⁶⁸シモン・ペテロが答えた「主よ、わたしたちは誰のところに行きましょう。永遠の命の言葉を持っておられるのはあなたです。⁶⁹わたしたちはあなたが神の聖者でいらっしゃることを信じ、また知るようになりました」。⁷⁰イエスは彼らに答えて言われた「あなたがた十二人を選んだのはわたしではなかったか。だが、あなたがたのうち

の一人は悪魔である」。⁷¹これはイスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二弟子の一人でありながらイエスを裏切ろうとしていた。

6:68「シモン・ペテロが答えた」 ペトロは十二弟子の代弁者である。これはペトロが十二弟子の指導者と見なされていたことを意味してはいない。

「永遠の命の言葉を持っておられるのはあなたです」 キリスト教は(1)メッセージに含まれる真理と(2)イエスという人物に表現された真理である。福音はメッセージであり人である。

6:70「あなたがた十二人を選んだのはわたしではなかったか」 これも神が弟子達を選ばれたことの強調である。神の選びと人間の意志の間には聖書的緊張が残るに違いない。それらは契約の関係の両側面である。

「だが、あなたがたのうちの一人は悪魔である」 イエスはユダが何をしようとしていたのか御存知だった。ユダは許されない罪の究極の例である。彼は長年イエスの福音を見聞きし、イエスと一緒にいた後、イエスを拒んだ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ヨハネ6章は主の晩餐の議論か。それはなぜか。
2. イエスが「わたしは命のパンである」と言われたときに主張されていたことは何か。
3. なぜイエスはこの群衆にそのような驚くべき発言をされたのか。

ヨハネの福音書7章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～52 節の文脈の洞察

仮庵の祭りは主に収穫物の感謝祭だった。これはエジプト脱出の経験を思い出す時でもあった。それは今の暦の9月末あるいは10月初めに相当するTishriの月の15日に行われた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 7: 1-9

¹その後、イエスはガリラヤを歩いておられた。ユダヤ人たちが御自分を殺そうとしていたので、ユデアを歩こうとはされなかったからである。²ユダヤ人の祭であるブースの祭が近づいていた。³そこでイエスの兄弟たちはイエスに言った「あなたがしているわざを弟子たちにも見せるために、ここを去ってユデアに行きなさい。⁴自分を公に表そうと思っている人で、隠れて仕事をするものはありません。あなたがこれらのことをするからには、自分をはっきりと世にあらわしなさい」。⁵こう言ったのは、兄弟たちもイエスを信じていなかったからである。⁶そこでイエスは彼らに言われた「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。⁷世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。世の行いの悪いことをわたしが証しているからである。⁸あなたがたは祭りに行きなさい。わたしはこの祭には行かない。わたしの時はまだ来ていないからである」。⁹彼らにこう言って、イエスはガリラヤにとどまっておられた。

7: 2「ユダヤ人の祭であるブースの祭」これは仮庵の祭りとも呼ばれていた。収穫の間、村人は野の小さな隠れ家に住み、エジプト脱出の経験をしたユダヤ人を思い起こした。

7: 3「イエスの兄弟たち」イエスの兄弟達は明らかにイエスの動機、方法、または目的を理解していなかった。

「ここを去ってユデアに行きなさい」これは、ガリラヤを去ってエルサレムへと旅をする巡礼者の毎年恒例の団体を指す。

7: 4「公に」以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 大胆さ(*Parresia*)

このギリシャ語の用語は「全ての」(*pan*)と「演説」(*rhexis*)との複合語である。演説におけるこの自由つまり大胆さはしばしば反発や拒絶のただ中における大胆さを意味した。

ヨハネの著作物においては(13回使用)この語はしばしば公告を意味する(ヨハネ 7: 4 およびパウロの著作物のコロサイ 2: 15 を参照)。しかし、時々この語は単に「ありのままに(はっきりと)」という意味を示すことがある。

使徒行伝においては使徒達はイエスについてのメッセージを、イエスが父なる神と神の御計画とお約束についてお話しになったのと同じように(大胆に)語った(使徒行伝 2: 29、4: 13 と 29 節と 31 節、9: 27-28、13: 46、14: 3、18: 26、19: 8、26: 26、28: 31 を参照)。パウロも大胆に福音を語ることができるように(エペソ 6: 19、I テサロニケ 2: 2 を参照)、また福音に生きることができるように(ピリピ 1: 20 を参照)祈り求めている。

パウロのキリストにある終末論的な希望はこの現況の悪い世に福音を宣べ伝える大胆さと自信とを彼に与えた(II コリント 3: 11-12 を参照)。イエスも自信を持っておられたのでイエスの従者達の行動は適切なものとなった(II コリント 7: 4 を参照)。

この用語にはもうひとつの特徴がある。ヘブル人への手紙ではこの用語は、神に近づいて話しかけることにおけるキリストにある大胆さの意味だけに用いられている(ヘブル 3: 6、4: 16、10: 19 と 35 節を参照)。信徒は御子を通じて父なる神に完全に受け入れられ親密な関係へと招かれているのだ。

この用語は新約聖書の中で幾通りにも用いられている。

1. 自信、大胆さ、確信
 - a. 人に関して(使徒行伝 2: 29、4: 13 と 31 節、II コリント 3: 12、エペソ 6: 19 を参照)
 - b. 神に関して(I ヨハネ 2: 28、3: 21、4: 12、5: 14、ヘブル 3: 6、4: 16、10: 19 を参照)
2. あからさまに、率直に、はっきりと語る(マルコ 8: 32、ヨハネ 7: 13、10: 24、11: 14、16: 25、使徒行伝 28: 31 を参照)
3. 公的に語る(ヨハネ 7: 26、11: 54、18: 20 を参照)
4. 関連する語形(*parrhesiazomai*)は困難な環境のただ中で大胆に説教するという意味で用いられている(使徒行伝 18: 26、19: 8、エペソ 6: 20、I テサロニケ 2: 2 を参照)。

この文脈中ではこの用語は終末論的な自信について述べている。信徒達はキリストの再来を恐れない。彼らはキリストにつながっており、またキリストのような生活をしているので、自信に満ちた熱い気持ちでキリストの再来を歓迎するのである。

「自分をはっきりと世にあらわしなさい」 イエスが世の反抗と罪を明らかにされたので、世はイエスを受け入れようとも共感しようともせず、敵意を示していた。イエスが御自身を明らかにされる方法についてのイエスの兄弟達の考え方(奇跡)はイエスのお考え(十字架)と非常に異なっていた。

7: 5「こう言ったのは、兄弟たちもイエスを信じていなかったからである」 同じ家庭でイエスと育ったとすれば、イエスをメシアとして受け入れることは非常に難しかったに違いない。イエスは御自分の異父兄弟姉妹を気にかけておられた。復活後に彼らにお姿を現わされた目的の一つは、彼らに御自身を明らかにされることだった。彼らは信じるようになったのだ。ヤコブはエルサレムの教会の指導者になった。ヤコブとユダは新約聖書の正典に含まれる書を書いた。

NASB(改訂版)原典: 7: 10-13

¹⁰しかし、御自分の兄弟たちが祭に行った後で、イエスも人目に立たないようにひそかに行かれた。
¹¹ユダヤ人たちが祭の最中に「あの人はどこにいるのか」と言ってイエスを捜していたからである。
¹²群衆の中にイエスについていろいろとうわさが立った。ある人々は「あの人はよい人だ」と言い、他の人々は「いや、あの人は群衆を惑わしている」と言った。¹³しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスのことを公に口にする者はいなかった。

7: 11「ユダヤ人たち」 ここでは4つのグループのいずれかを指すと思われる。

1. イエスの兄弟達
2. ユダヤ人の宗教指導者
3. 「群衆」 これは仮庵の祭りの場に向かう巡礼者を指す。
4. 「エルサレムの人々」 サンヘドリンとそのイエスを殺す計画を知っていた地元の人々

7: 12「群衆の中にイエスについていろいろとうわさが立った」 これは福音が各群衆にどのように影響するかの典型である。それは様々な霊的能力や人類の理解のレベルを示す。

7: 13「ユダヤ人」 この群集は全てユダヤ人だった。これは明らかに、使徒ヨハネがこの用語をエルサレムの宗教指導者を指して特別に用いていることを示している。

NASB(改訂版)原典: 7: 14-18

¹⁴祭も半ばになってから、イエスは宮に上って教え始められた。¹⁵するとユダヤ人たちは驚いて言った「この人は学んだこともないのに、どうして律法の知識を持っているのだろう」。¹⁶そこでイエスは彼らに答えて言われた「わたしの教えはわたし自身の教えではなく、わたしをつかわされた方

の教えである。¹⁷神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでもこの教えが神からのものか、それともわたし自身から出たものか分かるであろう。¹⁸自分から出たことを語る者は自分の栄光を求めるが、自分をつかわされた方の栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りが無い」。

7: 14「祭も半ばになってから」 イエスがこの時まで待たれた正確な理由は明らかではないが、この間に巡礼者や町の人々はイエスとイエスのお働きを議論していたと推測される。また、この間にユダヤ人の宗教指導者達も公然と自分達の敵意を明らかにしていた。

「教える」 イエスは、被造物である人類に神の真理を与えるために教えられた。啓示には常に知らせることと改革することが意図された。それには生活様式における優先順位の変化に伴う決断が求められた。真理は全てを変えるのだ。

7: 15「この人は学んだこともないのに、どうして律法の知識を持っているのだろう」 これは単に、イエスが公立のラビの学校の一つで学ばれず、また有名なラビの一人の弟子ではいらっしやらなかったことを意味する。「この人」という用語が用いられていることには軽蔑の意味がこもっている。イエスの教えはしばしば内容と形式で聞き手を驚かせた。他のラビは互いの言葉を引用したが、イエスは神の御言葉を引用された。

7: 16 ここでもイエスは父なる神への服従だけでなく、父なる神の独特な知識に注目された。彼ら(ユダヤ人)には地上の教師がいたが、イエスには天の教師(父なる神)がおられた。

7: 18 イエスは、墮落した人類とは対照的な御自身の独自性を主張されている。イエスは御自身の栄光を求められなかった。イエスは父なる神の栄光を求められた。イエスは真実な方でいらっしやる。イエスは罪のない方でいらっしやる。

「その人の内には偽りが無い」 イエスは御自身の罪のために死ぬ必要がなかったので、私達の身代わりに死なれた。

NASB(改訂版)原典: 7: 19-24

¹⁹「モーセはあなたがたに律法を与えたではないか。それなのにあなたがたの内にはその律法を行う者がひとりもない。あなたがたはなぜわたしを殺そうとするのか」。²⁰群衆は答えた「あなたは悪霊に取りつかれている。誰があなたを殺そうとするものか」。²¹イエスは彼らに答えて言われた「わたしが一つのわざをすると、あなたがたは皆それを見て驚いている」。²²モーセはあなたがたに割礼を命じたので(これはモーセから始まったことではなく、先祖たちから始まったことである)あなたがたは安息日にも人に割礼を施している。²³もし、モーセの律法が破られないように安息日であっても割礼を受けるのなら、わたしが安息日に人の全身を丈夫にしてやったからといって、どうしてそんなに怒るのか。²⁴うわべで人をさばかないで正しいさばきをしなさい」。

7: 19「それなのにあなたがたの内にはその律法を行う者がひとりもない」 これは、エルサレム

で参加を義務付けられていた祭りに出ているこれらのユダヤ人にとって衝撃的な発言だったに違いない。モーセの律法は計画殺人をはっきりと禁止しているが、これはまさしく指導者達が計画していたことである。地元の人々は、この計画を知っていたが、止めさせようとはせず、文句を言おうとさえしなかった。

7:20「あなたは悪霊に取りつかれている」 イエスに出会った全ての人にとって、イエスが霊的な力をお持ちであることは明らかである。ユダヤ人の指導者達はイエスが行なわれた「しるし」や「奇跡」を否定することができなかったので、イエスの御力がサタンや悪魔から来たものだとは決めつけた。

特別なトピック: 悪魔(不浄の霊)

- A. 古代の人々は精霊を信仰していた。彼らは自然の力や動物や天然物に人格があると考え、生命を人類とこれらの霊的存在との相互作用を介して説明した。
- B. この擬人化は多神教となった。その教えでは通常、悪魔は個々の人間の生活に影響を与える下位の神々または半神であった。
- C. 旧約聖書はその厳密な一神教のゆえに、下位の神々や天使や悪魔を主題として議論していない。旧約聖書は異教の国々の偽りの神々について述べ、それらのいくつかの名を挙げている。しかし、旧約聖書には二元論つまりYHWHから独立した天使のような存在は述べられていない。サタンはYHWHのしもべであり、独立つまり自立した敵である。
- D. ユダヤ教はバビロン捕囚の間に発展した。それは、ゾロアスター教というペルシャの擬人化二元論に神学的影響を受けた。このことによって、バビロン捕囚後に発展したユダヤ教はYHWH と御自分の天使達およびサタンとその天使つまり悪魔との間の擬人化二元論となった。
- E. 新約聖書、特に福音書は、人類とYHWH に敵対する悪の霊的存在について主張している。それらは神の御心と掟と王国に敵対している。

イエスは、「不浄の霊」や「悪霊」とも呼ばれるこれらの悪魔的存在と対決され、人間からこれらを追放された。イエスは病気と悪魔とははっきりと区別された。イエスはこれらの悪霊を認識し追放されるために御力と霊的洞察力を発揮された。
- F. 悪は現実であり、悪は人格を持ち、悪は存在する。その起源もその目的も明らかにされない。聖書はその現実を主張し、積極的にその影響力に反対する。現実には究極の二元性はない。神は完全な支配をなさる。悪は敗北し、裁かれ、被造物から取り除かれることになる。
- G. 神の人々は悪に抵抗しなければならない。彼らは悪に支配されることはないが、誘惑されることがある。その影響は普遍的だが消される。信徒はキリストの勝利の中を歩く必要があるのだ。

7:23「わたしが安息日に人の全身を丈夫にしてやったからといって、どうしてそんなに怒るのか」
これは5: 1-9に記された癒しと祭の間に行われた記録のない癒しを指す。

NASB(改訂版)原典: 7: 25-31

²⁵さて、エルサレムのある人々が言った「この人は彼らが殺そうと思っている者ではないか。²⁶見よ、彼は公然と語っているのに、人々はこれに対して何も言わない。役人たちはこの人がキリストであることを本当は知っているのではなからうか。²⁷わたしたちはこの人がどこから来たのか知っている。しかし、キリストが現れる時には、この人がどこから来るのか知っている者は一人もいない」。
²⁸イエスは宮の内で教えながら叫んで言われた「あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこからきたかも知っている。しかし、わたしは自分からきたのではない。わたしをつかわされた方は真実であるが、あなたがたはその方を知らない。²⁹わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとからきた者で、その方がわたしをつかわされたからである」。³⁰そこで人々はイエスを捕えようと計ったが、誰一人手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。³¹しかし、群衆の中の多くの者がイエスを信じて言った「キリストが来ても、この人が行ったよりも多くのしるしを行うだろうか」。

7: 27「わたしたちはこの人がどこから来たのか知っている。しかし、キリストが現れる時には、この人がどこから来るのか知っている者は一人もいない」 これはマラキ3: 1の「メシアは神殿に突然お姿を現わされるだろう」に基づく、メシアについてのラビの伝説を指す。

7: 28 人々はイエスがガリラヤから来られたと思っているが、本当は天から来られたのだ。「わたしをつかわされた方は真実である」 父なる神は真実でいらっしゃるが、御子もそうでいらっしゃる。

7: 29「わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとからきた者で、その方がわたしをつかわされたからである」 このイエスの御言葉をユダヤ人の指導者は神への冒瀆と見なし、イエスを殺す必要性を確信した。

7: 31「しかし、群衆の中の多くの者がイエスを信じて言った」 これは、たとえ彼らがイエスのメシアとしての御業を大きく誤解していたとしても、イエスへの真の信仰である。

NASB(改訂版)原典: 7: 32-36

³²群衆がイエスについてこのようなうわさをしているのをパリサイ人たちは聞いた。そこで、祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスを捕えようとして下役たちを遣わした。³³イエスは言われた「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて、それから、わたしを遣わされた方のみもとに行く」。
³⁴あなたがたはわたしを捜すであろうが、見つけることはできない。そしてわたしのいるところに、あなたがたは来ることができない」。³⁵そこでユダヤ人たちは互いに言った「わたしたちが見つけることができないというのは、どこへ行こうとしているのだろうか。ギリシャ人の中に離散している人

たちのところにも行って、ギリシャ人を教えようというのだろうか。³⁶また、『あなたがたはわたしを捜すであろうが、見つけることはできない。そしてわたしのいるところに、あなたがたは来ることができない』と言うのはどういう意味だろうか」。

7: 32「祭司長たちとパリサイ人たち」これはサンヘドリンのメンバーを指す。このグループには唯一人の大祭司がいたが、ローマ帝国に支配された時代からその役職はいくつかの裕福なユダヤ人の一家に買収され、家族のメンバー間で受け継がれるような、政治的に魅力のあるものになっていった。

「イエスを捕えようとして下役たちを遣わした」これは、レビ人が務めたであろう「神殿警察」を指す。彼らの権限は神殿のある地域自体の外側に限られていた。

7: 33「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて」御自分が誰か、御自分に何がいつ起ころうとしているかをイエスは知っておられた。

「わたしを遣わされた方のみもとに行く」これは、イエスの果たされる贖いの使命の結論的出来事、つまり磔刑、復活、昇天、そして世の始まる前からおられた方としての栄光の回復を指す。

7: 35-36 仮庵の祭りの間に70頭の雄牛が世の国々のために提供されていた。ユダヤ人は異邦人のために祈り、彼らに光をもたらすことを義務づけられた。これは、この発言の文化的背景を反映しているのかもしれない。ここで用語「ギリシャ人」は「異邦人」の意味で用いられている。

NASB(改訂版)原典： 7: 37-39

³⁷祭の終わりの大いなる日に、イエスは立って叫んで言われた「誰でも渇く者は、わたしのところに来て飲むがよい。³⁸わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その内から生ける水が川となって流れ出るであろう」。³⁹これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったからである。

7: 37「祭の終わりの大いなる日に」この祭が7日間行われたか、あるいは8日間行われたかどうかは不明である。明らかに、イエスの世におられた時代には8日間の祭だった。その最終日には、他の7日間とは異なり、シロアムの池から水が汲まれて祭壇の基部に注がれることはなかった。

7: 38「聖書に書いてあるとおり」ここでは、農業的祝福の新しい世の約束された水は、新しい契約の内的性質の比喩に変わっている。聖霊は心と精神の内ですきたものとなられる。

「その内から生ける水が川となって流れ出るであろう」イエスは御自身を生ける水と呼ばれている。今この文脈では、それはイエスに従う人々に生ける水を与え、また造り出される聖霊である。これは、信徒の内にキリストを形造られる聖霊の御業と同時に行われる。

NASB(改訂版)原典： 7: 40-44

⁴⁰群衆のある者はこれらの言葉を聞いて「この方は確かにあの預言者である」と言い、⁴¹その他の者たちは「この方はキリストである」と言い、また別のある人々は「まさか、キリストはガリラヤからは出てこないだろう。⁴²キリストはダビデの子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると聖書に書いてあるではないか」と言った。⁴³こうして、群衆の間にイエスのことで分裂が生じた。⁴⁴彼らのうちのある人々はイエスを捕えようと思ったが、誰一人イエスに手をかける者はなかった。

7: 40「この方は確かにあの預言者である」 彼らはイエスの御力を認めたが、イエスの御人格と御業を誤解した。

7: 41「その他の者たちは『この方はキリストである』と言い」 これは用語「キリスト」が「油注がれた者」を意味するヘブル語「メシア」と同等であることを示している。旧約聖書では王と司祭と預言者は神の召しと備えのしるしとして油を注がれた。

7: 43 イエスとイエスのメッセージは常に分裂を引き起こした。聴衆の中には霊的な耳を持っている者もいれば持っていない者もいた。

NASB(改訂版)原典： 7: 45-52

⁴⁵さて、下役たちが祭司長たちやパリサイ人たちのところに帰ってきたので、彼らは下役たちに言った「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」。⁴⁶下役たちは答えた「この人の語るように語った者は、これまでにいませんでした」。⁴⁷パリサイ人たちは彼らに答えた「あなたがたまでがだまされているのではないか。⁴⁸役人たちやパリサイ人たちの中で、一人でも彼を信じた者があつたらうか。⁴⁹律法を知らないこの群衆はのろわれている」。⁵⁰彼らのうちのひとりで、以前にイエスに会いに来たことのあるニコデモが彼らに言った⁵¹「わたしたちの律法によれば、まずその人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではないか」。⁵²彼らは答えて言った「あなたもガリラヤの出なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者が出るものではないことが分かるだろう」。

7: 46「この人の語るように語った者は、これまでにいませんでした」 これは非常に驚くべき証言である。

7: 48「役人たちやパリサイ人たちの中で、一人でも彼を信じた者があつたらうか」 用語「役人」はサンヘドリンを指す。ここでは、通常は互いにとても敵対的だったがイエスに対向するため団結したサドカイ人やパリサイ人を指している。

7: 49「律法を知らないこの群衆はのろわれている」 これは、口述伝承の全てを実行しないために宗教指導者達に見下された「土地の人々」を指す。

7: 52「あなたもガリラヤの出なのか」 これはイエスに対するサンヘドリンの感情的な反発を示している。

「よく調べてみなさい」「よく調べる」とはユダヤ教において「聖書を研究する」という意味を持って

いた。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 7章のイエスの御言葉の祭りに関する背景とは何か。
2. 「仮庵の祭り」の目的を述べ、説明しなさい。
3. 宗教指導者達はなぜイエスに敵対したのか。
4. この章でイエスについて述べた様々なグループを挙げなさい。

ヨハネの福音書8章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

7: 53~8: 11の文脈の洞察

- A. ヨハネ7: 53~8: 11は元々ヨハネの福音書の一部ではなかった。
- B. この記述はイエスの御生涯からの本物の言い伝えであると思われる。しかし、福音書の著者達が記さないことに決めた、イエスの御生涯に関する多くの記述がある。それは、神の啓示を受けた福音書の著者達自身についての記述である。後の時代の書記達には、神の啓示を受けた原著者が含めなかったイエスの御生涯に関する記述を、たとえそれが本物であっても、含める権限がなかった。原著者だけが、聖霊のお導きの下でイエスの御業や御言葉を選択・編集・適用する洞察力を持っていた。この一節は原著者が含めなかった、つまり神の啓示によって書かれたものではないので、私達の聖書には含まれるべきではないのだ。
- D. 私はこの一節がヨハネの自筆によるものであるとは、また神の啓示によって書かれたものであるとは信じていないので、この一節については解説しないことに決めた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 8: 12-20

¹²イエスはまた人々に語って言われた「わたしは世の光である。わたしに従う者は闇の内を歩くことがなく、命の光を持つであろう」。¹³するとパリサイ人たちがイエスに言った「あなたは自分のことを証している。あなたの証しは真実ではない」。¹⁴イエスは彼らに答えて言われた「たとえわたし

が自分のことを証しても、わたしの証は真実である。わたしは自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのかを知っているからである。しかし、あなたがたはわたしがどこから来てどこへ行くのかを知らない。¹⁵あなたがたは肉によって人をさばくが、わたしは誰もさばかない。¹⁶しかし、たとえわたしがさばくとしても、わたしのさばきは正しい。わたしは一人ではなく、わたしを遣わされた方がわたしと一緒にられるからである。¹⁷あなたがたの律法には、二人による証は真実だと書いてある。¹⁸わたし自身のことを証するのはわたしであるし、わたしを遣わされた父もわたしのことを証して下さるのである。¹⁹すると彼らはイエスに言った「あなたの父はどこにいるのか」。イエスは答えて言われた「あなたがたはわたしもわたしの父も知らない。もしあなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたであろう」。²⁰イエスは宮の内で教えておられた時にこれらの御言葉を宝物庫のそばで語られたのであるが、イエスの時がまだ来ていなかったため、誰も捕える者がなかった。

8: 12「イエスはまた人々に語って言われた」 仮庵の祭りが終わった後もイエスは神殿の境内にとどまられて、ユダヤ人の指導者たちに説教と証しをなさったようだ。

しかし、祭りの最中にイエスが水の儀式(シロアムの池から水を汲んで祭壇に供える儀式)によって御自身を明らかにされたように、この段落ではイエスは祭りの点灯式によって御自身を明らかにされている。

「私は光である」 仮庵の祭りの間の女の庭での巨大な燭台の点灯は明らかにイエスの御言葉の背景となっている。1: 4と8節の光のメシア的な意味と特別な記述は、神殿での儀式を(比喩的に)用いられてイエスが御自身の真の起源を明らかにしていることと一致する。

「世の」 この用語はイエス・キリストの福音の普遍性を示している。

「わたしに従う者」 キリスト教の中心は主に信条や神学ではなく、神との個人的な関係と弟子らしい生活様式であることを覚えておかなければならない。

「命の光」 イエスは神の命を持っておられ、御自分に従う者、つまり神が御自分に与えられた人々にそれを与えられる。

8: 13「あなたの証しは真実ではない」 ユダヤ人はイエスの証しの法的専門性を主張していた。イエスはユダヤ人のこのような非難に対して以前から反論され、いくつかの証しをされていた。この文脈では父なる神がイエスの証しをなさっているのだ。

8: 15「わたしは誰もさばかない」 イエスは裁くためではなく命を与えるために来られた。イエスが来られるという事実そのものによって、イエスを拒む者は裁かれる。

8: 16-18 イエスは父なる神と御自身が一体でいらっしゃることをはっきりと主張されている。

8: 16「わたしを遣わされた方」 イエスは決して孤独ではいらっしゃらない。十字架を除いて、父なる神はいつもイエスと共にられる。交わりの喜びと完成は救いの本質である。創造の目的は、神が御自身との交わりの相手を持たれるためだった。だから神はその交わりの相手を御自身のお姿に似せて造られたのだ。この交わりの欠如は罪の罰である。その回復はイエスのお働きの目

標なのだ。

8: 19「あなたの父はどこにいるのか」 ユダヤ人達はまだ実体的で表面的なレベルでしかイエスを理解していなかった。その先入観と高慢な心は真理に閉じ込められた。

8: 20「イエスは宮の内で教えておられた時にこれらの御言葉を宝物庫のそばで語られた」 宝物庫は独立した建物ではなかった。ラビの伝統によれば宝物庫は13個のトランペット形の容器で各々特定の目的を持っており、女の庭にあって、仮庵の祭りの最中には巨大な燭台が点灯していた。

NASB(改訂版)原典： 8: 21-30

²¹さて、イエスはまた彼らに言われた「わたしは去って行く。あなたがたはわたしを捜し求めるだろうが、自分の罪のうちに死ぬであろう。わたしの行く所には、あなたがたは来ることができない」。²²そこでユダヤ人たちは言った『わたしの行く所には、あなたがたは来ることができない』と言ったのは、この人は自殺でもしようとするつもりなのか」。²³イエスは彼らに言われた「あなたがたは下から出た者だが、わたしは上から来た者である。あなたがたはこの世の者であるが、わたしはこの世の者ではない。²⁴だからわたしは『あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろう』と言ったのである。わたしがそのような者であることをあなたがたが信じないなら、罪のうちに死ぬことになるからである」。²⁵そこで彼らはイエスに言った「あなたはどのような方なのですか」。イエスは彼らに言われた「わたしがどういう者であるかは、初めからあなたがたに言っているのではないか。²⁶あなたがたについてわたしの言うべきことやさばくべきことがたくさんある。しかし、わたしを遣わされた方は真実である。わたしはその方から聞いたことを世に語るのである」。²⁷彼らはイエスが父について話しておられたことを悟らなかつた。²⁸そこでイエスは言われた「あなたがたが人の子を上げた後に、わたしがそのような者であること、そして、わたしが自分からは何もせず、ただ父が教えて下さったままを話していたことが、初めて分かってくるであろう。²⁹わたしを遣わされた方はわたしと共におられる。その方はわたしを一人で置き去りになさることはない。わたしがいつもその方のみこころにかなうことをしているからである」。³⁰これらのことを語られたところ、多くの人々がイエスを信じた。

8: 21「自分の罪のうちに死ぬであろう」 これは文字通り「あなたがたの内に罪があれば、あなたがたは死ぬことになるだろう」という意味である。これは主に、ユダヤ人達がイエスをキリストとして受け入れることを拒んだことを指す。これはまさに許されない罪である。ユダヤ人の指導者達は、イエスの御言葉やしるしという大いなる光の中でイエスを拒んでいた。

8: 23「あなたがたはこの世の者である」 世は邪悪な者の力の下にある。

8: 24「わたしがそのような者であることをあなたがたが信じないなら」 これは、御自身の神性をイエスが御自分で理解しておられることを最も力強く述べた文の1つである。

8: 25「あなたはどのような方なのですか」 ユダヤ人の指導者達は冒涇まがいの非難のための法

的根拠を探している。彼らはイエスを殺したいのだ。彼らはイエスを懲らしめるための材料を探している。

イエスは使徒ヨハネにはっきりと御自身を明らかにされている。イエスの御言葉と御業は明らかにイエスの権威を示している。

8: 28 五旬節の後まで、弟子達はイエスについて完全に理解していなかった。聖霊は、霊的な目と耳を持っていた全ての人に目ざましい御力を持って来られたのだ。

8: 29「その方はわたしを一人で置き去りになさることはない」 イエスは父なる神との交わりによって御力を得られた。その交わりが十字架上で壊れたことがイエスにとって非常に辛いことだったのはこのためである。

NASB(改訂版)原典: 8: 31-33

³¹イエスは御自分を信じたユダヤ人たちに言われた「わたしの言葉にうちにとどまるなら、あなたがたは本当にわたしの弟子である。³²また、あなたがたは真理を知るであろう。そして、真理はあなたがたを自由にするであろう」。³³彼らはイエスに言った「わたしたちはアブラハムの子孫であつて、人の奴隷になったことは一度もありません。どうして『あなたがたは自由になるであろう』と言われるのですか」。

8: 31「わたしの言葉にうちにとどまるなら」 これは、福音伝道の宣言に欠けている要素である。御言葉は信じられ、従われ、とどまるべきである。

特別なトピック: 忍耐の必要

クリスチャンの生活に関連する聖書的原則は説明が難しい。というのは、それが典型的な東洋の弁証法的ペア(会話上の2人組)の中に表現されているからである。このペアは互いに正反対の考えを持っているようだが、しかしどちらも聖書的である。西洋のクリスチャンは一つの真理を選び取ってそれと正反対の真理を無視あるいは軽視する傾向がある。説明しよう。

- A. 救いはキリストを信頼するという最初の決心か、それとも一生涯キリストの弟子であり続けるという約束か?
- B. 救いは主なる神からの恵みによる選びか、それとも神の恵みに対する人類の信仰と悔い改めによる応答か?
- C. 救いは一度受け取れば失うことのできないものなのか、それとも(失なわないために)継続的努力を必要とするものなのか?

忍耐の問題は教会の歴史全般にわたって議論を呼んでいる。問題は新約聖書の中の明らかに相反する段落群に始まる。

A. 確信についての聖句

- 1. イエスのお言葉(ヨハネ 6: 37 と 10: 28-29)

2. パウロの発言(ローマ 8: 35-39、エペソ 1: 13 および 2: 5 と 8-9 節、ピリピ 1: 6 と 2: 13、
Ⅱテサロニケ 3: 3、Ⅱテモテ 1: 12 と 4: 18)

3. ペテロの発言(Ⅰペテロ 1: 4-5)

B. 忍耐の必要についての聖句

1. イエスのお言葉(マタイ 10: 22 および 13: 1-9 と 24-30 節ならびに 24: 13、マルコ 13: 13、
ヨハネ 8: 31 と 15: 4-10、黙示録 2: 7 と 17 節と 26 節および 3: 5 と 12 節ならびに 21: 7)

2. パウロの発言(ローマ 11: 22、Ⅰコリント 15: 2、Ⅱコリント 13: 5、ガラテヤ 1: 6 と 3: 4 と 5: 4
と 6: 9、ピリピ 2: 12 と 3: 18-20、コロサイ 1: 23)

3. ヘブル人への手紙の著者の発言(2: 1、3: 6 と 14 節、4: 14、6: 11)

4. ヨハネの発言(Ⅰヨハネ 2: 6、Ⅱヨハネ9章)

5. 父なる神のお言葉(黙示録 21: 7)

聖書的な救いは主なる三位一体の神の愛と慈みと恵みからもたらされる。霊を受けなければ誰も救われることはできない(ヨハネ 6: 44 と 45 節を参照)。まず神が来られて救いの御業を始められるが、人類には信仰と悔い改めによる応答が求められる。神は契約の関係のもとに人類とともに働かれる。それには特権と責任があるのだ！

救いは全ての人に与えられる。イエスの死は墮落した被造物の罪の問題を取り扱っている。神は一つの道を備えられ、御自身のお姿に造られた全ての人に、御自身の愛とイエスを与えられたことに対して応答してほしいと思っておられる。

もしあなたが非カルヴァン主義的観点からこの主題についてさらに書籍を読みたいと思うなら、次に挙げる書を読むことを勧める。

1. Dale Moody 著 *The Word of Truth*, Eerdmans 社刊、1981 年(348~365 ページ)

2. Howard Marshall 著 *Kept by the Power of God*, Bethany Fellowship 編、1969 年

3. Robert Shank 著 *Life in the Son*, Westcott 社刊、1961 年

この分野において聖書は2つの異なる問題を挙げている:(1)無益で自己中心的な生活を送る自由を確信すること(2)伝道活動と個人的な罪(の問題)と格闘している人々を助長すること。問題は偽の(伝道)グループが偽のメッセージを受け取って、聖書中の限られた御言葉に基づく神学体系を組み立てていることなのである。確信あるメッセージを渴望しているクリスチャンもいれば、重要な警告を必要とするクリスチャンもいるのだ！あなたはどちらのグループに属するのか？

8: 32「あなたがたは真理を知るであろう」この節の「知る」は蓄積された人間の知識を指しているのではない。ここでいう「真理」はイエス・キリストの福音と御人格である。

「あなたがたを自由にするであろう」信徒は律法主義や儀式(形式)主義や行い重視の考え方や人間の信仰心から自由である。

8: 33「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことは一度もありません」人種的誇りの有り様は驚くべきものである。

NASB(改訂版)原典： 8: 34-38

³⁴イエスは彼らに答えて言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。罪を犯す者は皆罪の奴隷である。³⁵奴隷はいつまでも家にいない。子はいつまでもいる。³⁶だから、子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由な者となるのである。³⁷わたしはあなたがたがアブラハムの子孫であることを知っている。それなのにあなたがたはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉があなたがたの内にとどまっていなかったからである。³⁸わたしはわたしの父のもとで見たことを語っているが、あなたがたは自分の父から聞いたことを行っている」。

8: 34「罪を犯す者は皆罪の奴隷である」 前節32節の聖句「あなたがたを自由にする」を、33節が示しているように彼らが誤解したので、イエスは32節の聖句の背後にある霊的な現実には彼らを導こうとされた。罪を犯し続けることは人が真理(イエス)を「知らない」という証拠である。

8: 35 この節は34節ではなく36節に直接関連している。ラビ主導のユダヤ教徒のあがめるモーセではなくイエスが真の「(神の)子」である。無限のルールや儀式を行うことではなく、イエスへの信仰だけが人を自由にすることができる。

NASB(改訂版)原典： 8: 39-47

³⁹彼らはイエスに答えて言った「わたしたちの父はアブラハムです」。イエスは彼らに言われた「アブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい。⁴⁰ところが今、神から聞いた真理をあなたがたに語ってきたこのわたしをあなたがたは殺そうとしている。このようなことをアブラハムはしなかった。⁴¹あなたがたは自分たちの父のわざを行っているのである」。彼らはイエスに言った「わたしたちは不品行の結果うまれた者ではありません。わたしたちには一人の父がいます。それは神です」。⁴²イエスは彼らに言われた「神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわたしを愛するはずである。わたしは神から出た者であり、神から来ている者であるからだ。わたしは自分から来たのではなく、神からつかわされたのである。⁴³どうしてあなたがたはわたしの話すことが分からないのか。それはあなたがたがわたしの言葉を悟ることができないからである。⁴⁴あなたがたは自分たちの父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の望む通りのことを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼の内には真理がないからである。彼が偽りを言うときはいつも自分の本音を吐いているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。⁴⁵しかし、わたしが真理を語っているので、あなたがたはわたしを信じない。⁴⁶あなたがたのうち、誰がわたしに罪があると責めることができるのか。わたしが真理を語っているなら、なぜあなたがたはわたしを信じないのか。⁴⁷神から来た者は神の言葉に聞き従うが、あなたがたが聞き従わないのは、神から来た者でないからである」。

8: 39「わたしたちの父はアブラハムです」 イエスは彼らがアブラハムの実の子孫であることを認められたが、彼らがサタンの家族の特性を持っていることを指摘された。ユダヤ人を神の前に義と

したのは人種的なアイデンティティーではなく個人的な信仰の関係であった。

8: 40 イエスは御自身をYHWHの代表者でありYHWHと同じ神としての本質を持つ方としてだけでなく真の人間として理解された。この御主張は、靈的事物と現実的事物の間の永遠の二元論を主張するグノーシス主義者の偽教師達に対する反論であった。

特別なトピック： グノーシス主義

- A. このコロサイの異端について私達を知ることの大半は紀元2世紀のグノーシス主義についての書に由来している。しかし、その始まりと言える概念はすでに紀元1世紀にあった(死海文書)。
- B. コロサイにおいて問題となった異端思想とは、キリスト教と初期グノーシス主義とユダヤ教の律法主義の混合思想であった。
- C. コロサイにおいて問題となった異端思想の中には、紀元2世紀にバレンティヌスが提唱したグノーシス主義およびコリントにおいて発展したグノーシス主義の教義をもとにしたものもあった。
 - 1. 物質と靈はともに永遠である(存在論的二元論)。物質は悪で、靈は善である。靈なる神は悪なる物質の形成に直接関与できない。
 - 2. 神と物質の間にはエマナチオン(*eons*、つまり天使階層)が存在する。最下位の天使は旧約聖書に登場する YHWH であり、宇宙(*kosmos*)を形成する。
 - 3. イエスは YHWH と同様にエマナチオンであるが、より大きく、より真の神に近い。上記の教義の中にはイエスを最高位の天使としながらも神よりは下位で、受肉した神(ヨハネ 1 章 14 節を参照)ではありえないとしている。物質は悪なので、イエスは人間の体を持つはずはなく、神であるはずだ。イエスは人間の姿で現れたが、実は靈である。(Iヨハネ 1: 1-3 と 4: 1-6 を参照)。
 - 4. 救いはイエスへの信仰および特定の人々にのみ知られている特別な知識を通して得られる。知識(暗号)は天球を通過するのに必要である。ユダヤ教の律法主義も神のもとに行くのに必要である。
- D. グノーシス主義者の偽教師達は2つの相反する倫理体系を主張した。
 - 1. ある人々にとっては生活様式は救いと全く無関係である。彼らにとって救いと靈性とは天使階層(*eons*)を通過するのに必要な秘密の知識(暗号)に内包される。
 - 2. (1. とは)他の人々にとっては生活様式は救いに不可欠である。この書で偽教師達は真の靈性の現れとして禁欲的な生活様式を強調している(2: 16-23 を参照)。
- E. 参考文献としては James M. Robinson と Richard Smith 共著 *The Nag Hammadi Library* がよい。

8: 41「わたしたちは不品行の結果うまれた者ではありません」 ユダヤ人はイエスが完全な純血

のユダヤ人ではなく非嫡出子であることを主張していたようだ。

「わたしたちには一人の父がいます」これらのユダヤ人の指導者たちは神の唯一性と、モーセの律法に従うことによって神との正しい関係を持つことができることを断定した。イエスは世に来られたときに神と一つでいらっしやることを主張された。イエスは、律法を行うのではなく神への個人的な信仰によって神との正しい関係を持つことができると主張した。

8: 43 これは霊的感受性と理解を指す。彼らは霊的な耳を持っていなかった。

8: 46「あなたがたのうち、誰がわたしに罪があると責めることができるのか」文脈中ではこれは偽りの証言を指す。サタンはいるが、イエスは真実を語られる。

NASB(改訂版)原典： 8: 48-59

⁴⁸ユダヤ人たちはイエスに答えて言った「あなたはサマリア人で悪霊に取りつかれていると、わたしたちが言うのは当然ではないか」。⁴⁹イエスは答えて言われた「わたしは悪霊に取りつかれているのではなくてわたしの父を重んじているのだが、あなたがたはわたしを軽んじている。⁵⁰わたしは自分の栄光を求めてはいない。それを求め、またさばかれる方がおられる。⁵¹まことに、まことに、あなたがたに言う。もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう」。⁵²ユダヤ人たちはイエスに言った「あなたが悪霊に取りつかれていることが今わかった。アブラハムは死に、預言者たちも死んでいる。それなのにあなたは『わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろう』と言う」。⁵³あなたはわたしたちの父アブラハムより偉いのか。彼も死に、預言者たちも死んだではないか。あなたは一体自分を誰と思っているのか」。⁵⁴イエスは答えられた「わたしが自分に栄光を帰するなら、わたしの栄光は虚しいものである。わたしに栄光を与えられる方はわたしの父であって、あなたがたが自分の神だと言っているのはその方のことである」。⁵⁵あなたがたはその方を知らないが、わたしはその方を知っている。わたしが神を知らないと言うならば、あなたがたと同じような偽り者であろう。しかし、わたしはその方を知っていて、その御言葉を守っている」。⁵⁶あなたがたの父アブラハムはわたしの日を見ることができると喜び、そしてそれを見て喜んだ」。⁵⁷そこでユダヤ人たちはイエスに言った「あなたはまだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」。⁵⁸イエスは彼らに言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。アブラハムの生まれる前からわたしはある」。⁵⁹そこで彼らは石を拾って、イエスに投げつけようとした。しかしイエスは御身を隠されて、宮から出て行かれた。

8: 48「あなたはサマリア人であり悪霊に取りつかれている」真の文脈上の意味は、ギリシャ語で「悪魔のかしら」を意味する用語「サマリア人」に訳されるアラム語の用語を反映していると思われる。イエスはアラム語を話された。イエスがサマリア人だと言ったり悪霊に取りつかれていると言うことは、人がイエスの御言葉を聞き入れたリイエスのメッセージに応答しないようにする方法であった。

8: 49 人は御子を信じなければ父なる神を信じることはできない。人は御子を重んじなければ

父なる神を知ることはできない。2つの相異なる御人格に分かれておられるが、お2人は1つでいらっしゃる。

8: 51「彼は死を見ることはないだろう」これは強い二重否定である。これは明らかに肉体的な死ではなく霊的な死を意味する。これは死の恐怖をも指す。死は、神の最高の被造物について神の御心に反することである。

8: 52 これは彼らがイエスの御言葉を誤解したことを示している。彼らはイエスの御言葉がアブラハムや預言者の現実の生涯に関連すると解釈した。

8: 56「あなたの父アブラハム」これは驚くべき発言である。イエスは御自身と「ユダヤ人」や「律法」や「神殿」や家父長アブラハムとの間に距離を置かれた。ここには明らかに古い契約の違反が見られる。

「あなたがたの父アブラハムはわたしの日を見ることのできることを喜び、そしてそれを見て喜んだ」ユダヤ民族の父は大きな喜びをもってメシアの世を楽しみにしていたが、その子孫は信じることと喜びを拒んだ。

8: 58「アブラハムの生まれる前からわたしはある」これはユダヤ人にとっては神への冒瀆であるとみなされたので、ユダヤ人達はイエスに石を投げつけようとした。御自分が世の始まる前からおられる神であるとイエスが言われたことを彼らは全く理解しなかった。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ヨハネ7: 53～8: 11は元々ヨハネの福音書の一部なのか。それはなぜか。
2. イエスの御言葉「わたしは世界の光である」の背景は何か。
3. なぜパリサイ人はイエスにとっても対抗的だったのか。
4. 30節の用語「信じる」の用法を以下の文脈を参照しながら説明しなさい。

ヨハネの福音書9章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～41節の文脈の洞察

目の見えない人の癒しはイエスのお働きの中でとても頻繁に述べられている奇跡であり、メシアのしるしであった。この癒しの重要性は直前の文脈の「わたしは世の光である」というイエスのお言葉に見られる。ユダヤ人はしるしを望んだが、実際に見たのはわずかだった。YHWHだけが人の目を開くことができになるのだ。この章には、人の肉体的盲目とパリサイ人の霊的盲目というたとえ話が述べられている。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 9: 1-12

¹イエスが道を通っておられるとき、生まれつき目の見えない人を見られた。²弟子たちはイエスに尋ねて言った「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、誰が罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。³イエスは答えて言われた「この人が罪を犯したのでもなく、この人の両親が罪を犯したのでもない。神のわざがこの人の上に現れるためである。⁴わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを昼の間にしなければならぬ。夜が来ると誰も働けなくなる。⁵わたしは、この世にいる間は世の光である」。⁶イエスはそう言われて、地につばを吐かれ、そのつばで泥をつくられ、その泥を生まれつき目の見えない人の目に塗って言われた「シロアム(『遣わされた者』の意味)の池に行って洗いなさい」。そこでその人は行って洗った。そして見えるようになった

て帰って行った。⁸近所の人々や、彼が元は乞食であったのを見知っていた人々が言った「この人は以前に座って乞食をしていた者ではないか」。⁹ある人々は「その者だ」と言い、他の人々は「いや、ただあの者に似ているだけだ」と言った。しかしその人は「わたしがその者です」と言った。¹⁰そこで人々はその人に言った「では、お前の目はどうして開いたのか」。¹¹その人は答えた「イエスという方が泥をつくってわたしの目に塗り『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。それで行って洗うと見えるようになりました」。¹²人々はその人に言った「その者はどこにいるのか」。その人は「知りません」と答えた。

9: 2「弟子たち」これはユデアの弟子あるいは十二弟子を指す。

「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」これには古代ユダヤ教の背景がある。

9: 3 この、2節の弟子達弟子達の質問に対するイエスのお答えにはいくつかの真理が暗示されている。罪と病気は自ら関連を持つものではないということと、神は問題を通してしばしば祝福を与えられるということである。

9: 4「わたしたち...私」これらの代名詞は、イエスが世の光でいらっしゃるという神学的立場を反映しているようだ。

「夜が来ている」5節と比較するとこれは明らかに以下の物事の比喩である。

1. 来たるべき裁きの日
2. 神の祝福の終わり
3. イエスキリストの拒絶と磔刑

9: 5「この世にいる間は」これはイエスの受肉の時期、つまりベツレヘムからカルバリー（オリーブ山）までの御生涯を指しているようだ。イエスがここにおられた時間は限られていた。

「わたしは世の光である」イエスを「世の光」にたとえることは旧約聖書におけるメシアの暗示を反映しているのかもしれない。

9: 6「つばで泥をつくれ」唾液を付けることはユダヤ人家庭における医学療法だった。これは安息日には用いることを許されなかった。受け入れられ期待されたこの治療法を用いて、イエスはこの生まれつき目の見えない人の信仰を励まされるだけでなく、意図的にパリサイ人の伝統や掟に挑戦されたのだ。

9: 7「シロアムの池」この池は仮庵の祭りの儀式で用いられた。

「『遣わされた者』の意味」用語「遣わされた」は、エルサレムの街の城壁の外にあったギホンの泉からこの池に水が注がれていたという事実に関連していた。ラビはこの用語「遣わされた」をメシアを意味するものとみなした。

「洗った」これはこの生まれつき目の見えない人の信仰による行為だった。彼はイエスの御言葉の通りに行ったのだ。しかしこれはまだ「救いの信仰」ではなかった。それは成長中の信仰だったのだ。

特別なトピック: 救いの意味で用いられるギリシャ語の動詞時制

救いは産物ではなく関係である。それは人がキリストを信頼したときに終わるのではなく、始まったばかりなのだ。それは火災保険の証書でも天国行きの切符でもなく、キリストらしさを増してゆく生活なのだ。夫婦は一緒に暮らす時間が長いほど互いに似始めるというアメリカの格言(ことわざ)がある。これが救いの最終目的なのだ。

完了した行為としての救い(アオリスト)

使徒行伝 15: 11
ローマ 8: 24
Ⅱテモテ 1: 9
テトス 3: 5
ローマ 13: 11(未来指向のアオリストと結合)

存在状態としての救い(完了形)

エペソ 2: 5 と 8 節

継続中の過程としての救い(現在形)

I コリント 1: 18、15: 2
Ⅱコリント 2: 15
I ペテロ 3: 21

未来に完結する出来事としての救い(動詞時制および文脈では未来形)

ローマ 5: 9 と 10 節、10: 9 と 13 節
I コリント 3: 15、5: 5
ピリピ 1: 28
I テサロニケ 5: 8-9
ヘブル 1: 14、9: 28
I ペテロ 1: 5 と 9 節

従って、救いは最初の信じる決意に始まる(ヨハネ 1: 12、3: 16、ローマ 10: 9-13を参照)が、これは生活様式における信仰の過程に現れなければならず(ローマ 8: 29、ガラテヤ 3: 19、エペソ 1: 4、2章10節を参照)、いつの日か完成を見ることになっている(Iヨハネ 3: 2を参照)。この最後に述べられている事柄は称賛(栄光ある者としてたたえられること)と呼ばれる。これは次のように表現されうる。

1. 最初の称賛—義認(罪の罰からの救い)
2. 進行中の救い—聖化(罪の力からの救い)
3. 最終的な救い—称賛(罪ある存在からの救い)

9:8「近所の人々」この奇跡の証言をしたのは、目を癒されたこの人の近所の人々とこの人自身とこの人の両親であった。

9:11-12 この会話は、この生まれつき目の見えない人の癒しがすぐに霊的な救いに関連しなかったことを示している。この人の信仰はイエス・キリストとの出会いを通じて成長した。

NASB(改訂版)原典: 9: 13-17

¹³元は目が見えなかったこの人を、人々はパリサイ人たちのところにつれて行った。¹⁴イエスが泥をつくられてこの人の目を開けられたのは安息日であった。¹⁵パリサイ人たちも「どうして見えるようになったのか」とこの人に尋ねた。彼は答えた「あの方がわたしの目に泥を塗り、わたしがそれを洗うと見えるようになりました」。¹⁶そこで、あるパリサイ人たちが言った「その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから」。しかし、他の人々は言った「罪のある人が、どうしてそのようなしるしを行うことができようか」。そして彼らの間に分裂が生じた。¹⁷そこで彼らはもう一度この生まれつき目が見えなかった人に聞いた「あなたの目を開けてくれたその人をどう思うか」。「その方は預言者です」と彼は言った。

9: 13「人々」 これは近所の人々を指すに違いない。

9: 14「イエスが泥をつくられてこの人の目を開けられたのは安息日であった」 ユダヤ人の指導者達の伝統と掟はこの人の必要に優先した。イエスはこれらの指導者達と神学的な対話を始められるために意図的に安息日に御業をなされたのだ。

9: 17「その方は預言者です」 この章には、この生まれつき目の見えなかった人の信仰の成長が示されている。

NASB(更新した)テキスト: 9:18-23

¹⁸この人が元は目が見えなかったのに見えるようになったことをユダヤ人たちは信じなかった。そこで彼らは、見えるようになった人の両親を呼んで、¹⁹尋ねた「この人は、生まれつき目が見えなかったとあなたがたが言う、あなたがたの息子か。それなら、どうして今は見えるのか」。²⁰彼の両親は彼らに答えて言った「わたしたちはこの者がわたしたちの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています」。²¹しかし、どうして今は見えるのかは知りませんし、誰が息子の目を開けたのかも知りません。息子は大人です。息子に尋ねてください。自分のことは自分で話すでしょう」。²²彼の両親はユダヤ人たちを恐れていたのがこのように言った。誰かが自分をキリストだと告白するならその人を会堂から追放すると、ユダヤ人たちはすでに決めていたからである。²³そのために彼の両親は「息子は大人です。息子に尋ねてください」と言ったのである。

9: 22-23「誰かが自分をキリストだと告白するなら」 イエスに目を癒していただいた人の両親はこれらのユダヤ人の指導者達を恐れていた。この目の癒しにはいくつかの証人がいた。目を癒されたこの人の近所の人々とこの人自身とこの人の両親である。

特別なトピック：告白

- A. 「告白」や「職業」に対応する用語として共通して用いられるギリシャ語の語幹には *homologeō* と *exomologe* の2つの形式がある。その基本的な意味は「同じことを言う」つまり「同意する」である。
- B. この用語グループの英語訳の意味は「賞賛する」、「同意する」、「宣言する」、「公言する」、「告白する」である。
- C. この用語のグループには、「(神を)賛美する」と「罪を認める」という、一見逆の意味の2つの用法があった。
- D. 新約聖書での用法
 - 1. 「約束する」
 - 2. 「何かに同意する」
 - 3. 「賞賛する」
 - 4. 「(人、真実などに)同意する」
 - 5. 「罪を認めて(あるいは認めずに)公表する」

9: 22「... ならその人を会堂から追放する」 イエスに目を癒していただいた人の両親は明らかに破門されることを恐れていた。ラビの文学によれば、その追放期間は一週間、一ヶ月間、あるいは一生であった。これは深刻な「村八分」(仲間外れにすること)行為だった。

NASB(改訂版)原典： 9: 24-34

²⁴そこで次に彼らは、元は目の見えなかったその人を呼んで言った「神に栄光をささげなさい。我々はこの者が罪人だということを知っているのだ」。²⁵彼は答えて言った「わたしはあの方が罪人かどうかは知りません。わたしが知っているのは、以前は目が見えなかったのに今は見えるということだけです」。²⁶彼らは再び彼に言った「彼はあなたに何をしたのか。どうやってあなたの目を開けたのか」。²⁷彼は彼らに答えて言った「わたしがすでに申しあげたのに、あなたがたは聞いてくださいませんでした。それを再び聞こうとなさるのはなぜですか。あなた方もあの方の弟子になりたいわけではないでしょうに」。²⁸彼らは彼を侮辱して言った「お前は彼の弟子だが、我々はモーセの弟子だ」。²⁹我々は神がモーセに話されたことを知っている。しかしこの人について言えば、どこから来たのかを知らない」。³⁰その人は彼らに答えて言った「何とも驚くべきことです。あの方がわたしの目を開けてくださったのに、彼がどこから来たのかご存じないとは」。³¹わたしたちは神が罪人に対して耳を傾けてくださらないことを知っています。しかし、神を畏れて神のみこころを行なう人には耳を傾けてくださいます。³²生まれつき目の見えない者の目を開けたなどということは、世が始まって以来一度も聞かれたことがありません。³³もしこの方が神から来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」。³⁴彼らは彼に答えた「お前は全く罪のうちに生まれながら、我々を教えるのか」。彼らはその人を追い出した。

9: 24「神に栄光をささげなさい」これは(神への)忠実性を明言するための誓いの儀式だった。

9: 25 この人は神学を論じることを望まず、イエスに会った結果を主張した。

9: 27「あなた方もあの方の弟子になりたいわけではないでしょうに」この発言はまさしく痛烈な皮肉であり、この元は生まれつき目の見えない乞食だった人の機転を示している。

9: 28前半「お前は彼の弟子だ」この章のエピソードのどの時点でこの人が信徒になったのかはまさに疑問である。イエスが癒しを行われても、そのことでこの人はすぐにはイエスをメシアと信じなかったようだ。すぐ後でイエスはこの人に再会されたときに御自分がメシアでいらっしゃることをこの人に明かされている。このエピソードは肉体の癒しが必ずしも救いをもたらさなかったことを示している。

9: 28後半～29節 これはこの宗教指導者達が直面した困難を示している。彼らは口述伝承(タルムード)の詳細で特別な解釈をモーセが神に与えられた啓示と同一視しようとした。彼らの目は自分たちの持った神学的な偏見によって盲目にされた。彼らは人間の言い伝えの弟子だった。

9: 29「この人について言えば、どこから来たのかを知らない」イエスは父なる神のみもとから来られたが、その弟子達は盲目だったのでそのことを知らなかった。

9: 30「何とも驚くべきことです。あの方がわたしの目を開けてくださったのに、彼がどこから来たのかご存じないとは」これもこの元は生まれつき目の見えない乞食だった人の鋭い機転と痛烈な皮肉であり、パリサイ人の論理に対する反論となっている。

9: 31-33 この無学の生まれつき目の見えない人はこれらの宗教指導者よりも良い、より一貫性のある神学を提唱したのだ。

9: 34「お前は全く罪のうちに生まれながら、我々を教えるのか」ラビ主導のユダヤ教に「原罪」の概念がないのは興味深いことである。創世記3章の人類の墮落はラビ主導のユダヤ教では強調されなかった。ユダヤ人は全ての人に善悪の意図(*yetzer*)があることを主張した。これらのパリサイ人達は、この癒された人が明らかに盲目で生まれたことに示されるように罪人であることを理由に、この人の証しと論理が無効であると主張している。

「彼らはその人を追い出した」これは文字通り「彼らはその人を外につまみ出した」という意味である。この癒された人は会堂から追放され、その後会堂への出入りも礼拝への参加も許されなかったのだ。

NASB(改訂版)原典: 9: 35-41

³⁵イエスは彼らが彼を追い出したことをお聞きになると、彼を見かけられて言われた「あなたは神の子を信じるか」。³⁶彼は答えて言った「その方はどなたでしょうか。主よ、わたしがその方を信じることができますように」。³⁷イエスは彼に言われた「あなたはすでにその者を見た。あなたと話しているのがその者だ」。³⁸彼は「主よ、信じます」と言って、イエスをあがめた。³⁹イエスは言われた「わ

たしはさばきのためにこの世に来た。見えない者が見えるようになるため、そして見える者が見えない者となるためである」。⁴⁰彼と一緒にいたパリサイ人たちはこれらの事を聞いて彼に言った「我々も目が見えないのか」。⁴¹イエスは彼らに言われた「目が見えなかったなら、あなたがたには罪がなかったであろう。しかしあなたがたが『見える』と言ったので、あなた方の罪は残るのだ」。

9: 38 これは、この癒された人の救いに関していえば、この記述(エピソード)のクライマックスである。

9:39「わたしはさばきのためにこの世に来た」 イエスは贖いの目的で来られたが、イエスのお申し出を拒んだ人類は自ら自身を裁くことになった。

「見えない者が見えるようになるため、そして見える者が見えない者となるためである」 イエスは、それを見ることを選んだ全ての人々にとって世の光でいらっしゃる。

9: 41 この節は一般的な真実を言い表している。人類は自分たちが浴びている、つまりさらされている光に対して責任を負っているのだ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. この章は主に肉体の癒しについて述べているか、それとも霊的な癒しについて述べているか。肉体的な盲目について述べているか、それとも霊的な盲目について述べているか。
2. この人は生まれる前にどのような罪を犯したか。
3. この章のどの時点でこの人は救いを受け取るのか。
4. イエスはこの世を裁くために来られたのか、それとも世を救うために来られたのか。
5. 用語「人の子」の背景を説明しなさい。
6. この生まれつき目の見えなかった人がユダヤ人の指導者達の質問に対する答えの中で言った皮肉の要点を挙げなさい。

ヨハネの福音書10章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

語句の研究

NASB(更新した)テキスト: 10: 1-6

¹まことに、まことに、あなたがたに言う。羊の囲いに入るために門からでなく他の所から乗り越えて来る者は盗人であり、強盗である。²門から入る者は羊の羊飼である。³門番はその者のために門を開き、羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名を呼んで連れ出す。⁴自分の羊を皆出してしまうと、彼は羊の先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、彼について行くのである。⁵他の人にはついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである。⁶イエスは彼らにこのたとえ話をされたが、彼らは自分たちにお話しになっているのが何のことか分からなかった。

10: 1「羊の囲いに入るために門からでなく他の所から乗り越えて来る者は盗人であり、強盗である」羊飼いの中には良い羊飼いに属していない者がいることに注意しよう。ここでの問題は、神がキリストを通して自由に与えて下さるものを個人的な努力を通じて得ようとしていることである。9章に登場するパリサイ人はその良い例である。

10: 2「門から入る者は羊の羊飼である」称号「羊飼」は旧約聖書では神とメシアを共通して指す称号だった。ユダヤ人の指導者達は旧約聖書では「偽の羊飼」と呼ばれている。用語「羊飼」は用語「牧師」と関連がある。

10: 3「羊は彼の声を聞く」認識と服従は関係に基づく。

「彼は自分の羊の名を呼んで」 イエスは御自身のアイデンティティーと御人格を御存知である。羊飼いは大きな群れを管理していても、自分の動物(羊)のそれぞれにニックネームをつけていた。ユダの国の偽の羊の中からイエスが御自分の真の羊を呼び出されることは神学的な衝撃である。契約の民は真の神の人ではなかった。これは新しい契約の衝撃的なスキャンダルである。人の家系ではなく信仰が人の未来を決定するのだ。信仰は国家的ではなく個人的である。イエスに反発したユダヤ人の指導者達は神の民の一部ではなかったのだ。

「連れ出す」 これは救いだけではなく日々の導きを指す。

10: 4 これは夜に羊飼いが自分の羊の群れをいくつかの相異なる群れに分ける習慣を指しているようだ。朝になると羊飼いは自分の羊を呼び集めた。

10: 5 教会は常に偽の羊飼いに対処しなければならなかった。

10: 6「... が、彼らは... 分からなかった」 10章が9章と時間的に関連しているなら、「彼ら」とはパリサイ人を指していることになる。彼らは理解しようとしたが、理解できなかった。宗教は橋ではなく障壁となりうるのだ。

NASB(改訂版)原典: 10: 7-10

⁷そこでイエスは再び彼らに言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。わたしは羊の戸口である。⁸わたしより先に来た者はみな盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことに耳を傾けなかった。⁹わたしは戸口である。誰でもわたしを通過して入るなら、その者は救われ、出入りし、牧草を見つけるだろう。¹⁰盗人は、盗み、殺し、滅ぼすためだけにやって来る。わたしが来たのは、彼らが命を得、それを豊かに得るためである。

10: 7「わたしは羊の戸口である」 この比喩は、イエスが唯一の真の道でいらっしゃるという真理を強調している。聖書が神の自己啓示であっても、神の前に義とされる唯一の方法はキリストを信じることである。

10: 8「わたしより先に来た者はみな盗人であり、強盗である」 これは多分、偽の羊飼いについて述べた旧約聖書の箇所(イザヤ56: 9-12、エレミヤ23章、エゼキエル34章、ゼカリヤ11章を参照)に関連していると思われる。

10: 9「誰でもわたしを通過して入るなら、その者は救われ、誰でもわたしを通過して入るなら、その者は救われ、」 この文脈にも霊的な救いの概念が記されている。

10: 10「盗人」 これは偽の羊飼いの不純な動機を示している。これは悪しき者の目的も反映している。

「滅ぼす」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 破壊(*APOLLUMI*)

この用語は広範囲のセム語領域を網羅しており、「永遠の裁き」対「滅び」という神学的な

概念に関する大きな混乱を引き起こしている。その根本的な文字通りの意味は、*apo*（滅ぼすこと）、つまり *ollumi*（破壊すること）に由来する。

「わたしが来たのは、彼らが命を得、それを豊かに得るためである」この文脈ではこれは、個人的にイエスを知ることによってイエスは物質的繁栄ではなく霊的な祝福をもたらして下さることを示している。それは、この世での人生でとても多くのものを持つことではなく、真の命を知り、そして持つことである。

NASB(改訂版)原典：10: 11-18

¹¹わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために自分の命を捨てる。¹²雇い人であって、羊飼いでなく、羊を所有していない者は、狼がやって来るのを見ると羊を残して逃げる。狼は羊を奪い、羊たちを追い散らす。¹³雇い人が逃げるのは、彼が雇い人であって羊のことを心にかけしていないからである。¹⁴わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、自分の羊に知られている。¹⁵それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために自分の命を捨てる。¹⁶わたしにはこの囲いのものではない他の羊がいる。それらもわたしは連れて来なければならない、彼らはわたしの声を聞く。彼らはひとりの羊飼いを持つひとつの群れとなる。¹⁷それゆえに父はわたしを愛しておられる。わたしが再びそれを得るために自分の命を捨てるからである。¹⁸誰かがわたしからそれを取り去るのではなく、わたしが自分でそれを捨てるのである。わたしにはそれを捨てる権威があり、それを再び得る権威もある。わたしはこの掟を父から受けた」。

10: 11と14節「わたしは良い羊飼いである」これは旧約聖書においてメシアの称号だった。

10: 11「良い羊飼いは羊のために自分の命を捨てる」これはキリストの身代わりの贖いを指す。キリストは御自分からすすんで罪深い人類のために彼の命を捨てられた。真の命は、豊かな命はキリストの死によってのみ来るのだ。

10: 14「わたしは自分の羊を知っており、自分の羊に知られている」御子が父なる神を御存知で父なる神が御子を御存知であるのと同じように、イエスは御自分を信頼する人々を御存知でその人々はイエスを知っている。キリスト教とは個人的な関係である。

10: 16「私はこの倍のものでない他の羊を持って」文脈中ではこれはサマリア人あるいは異邦人の教会を指しているようだ。これはキリストを信じる全ての人々の統一について述べている。新しい契約はユダヤ人と異邦人とを結びつけるのだ。

「彼らはひとりの羊飼いを持つひとつの群れとなる」これは常に神の目標となっている。

10: 17「それゆえに父はわたしを愛しておられる」御子が御自分の人生を捨てられることを強制されなかったのと同じように、父なる神は御子をお与えになることを強制されなかった。これは、神が人類を服従させるためにイエスをお与えになったと解釈されるべきではない。

「わたしが再びそれを得るために自分の命を捨てるからである」これは復活を意味する。通常、新約聖書では、御子の復活はいけにえを父なる神が受け入れられたことを示す。しかし、ここでは復活におけるイエス御自身の御力が主張されている。

10: 18「私には権威がある」この節はイエスの御力と権威を示している。

NASB(改訂版)原典： 10: 19-21

¹⁹これらの御言葉のために、ユダヤ人たちの間に再び分裂が生じた。²⁰彼らのうち多くの者は言った「この人は悪魔に取りつかれて気が狂っている。なぜあなたがたは彼の言うことに耳を傾けるのか」。²¹その他の者たちは言った「これは悪魔に取りつかれた者の言うことではない。悪魔は盲人の目を開けることなどできないではないか」。

10: 21 生まれつき目の見えない人の癒しはメシアのしるしだった。

NASB(改訂版)原典： 10: 22-30

²²その頃、エルサレムで奉獻の祭りがあった。²³冬のことであった。イエスは神殿のソロモンの柱廊を歩いておられた。²⁴それでユダヤ人たちはイエスを取り囲んで言った「いつまであなたは我々に疑いをいだかせるのか。あなたがキリストなら、我々にはっきりと言ってほしい」。²⁵イエスは彼らに答えて言われた「わたしはあなたがたに言ったが、あなたがたは信じない。わたしがわたしの父の御名において行なうわざ、これがわたしについて証しする。²⁶あなたがたは信じない。あなたがたはわたしの羊ではないからだ。²⁷わたしの羊はわたしの声を聞く。わたしはその羊たちを知っており、羊たちはわたしに従う。²⁸わたしは羊たちに永遠の命を与える。羊たちは決して滅びることはなく、羊たちをわたしの手から奪い取る者はいない。²⁹わたしに羊たちを与えられたわたしの父は全てのものよりも偉大である。わたしの父の手から羊たちを奪い取ることができる者はいない。³⁰わたしと父とは一つである」。

10: 22「奉獻の祭り」これは現代ではハヌカとして知られている祭りである。これは12月中旬頃に行われた8日間の祭りだった。この祭りは、紀元前164年のJudas Maccabeusの軍事的勝利の後のエルサレムの神殿の再奉獻を記念する祭りだった。

「ソロモンの柱廊」これは、イエスのお教えの場であった女の庭の東側を覆う領域だった。

10: 24「...なら」事実、これらのパリサイ人はイエスがメシアでいらっしやると信じなかった。「我々にはっきりと言ってほしい」イエスはたとえ話や比喩的な言葉や曖昧な二元論的な御言葉で教えられた。神殿にいたこの群集はイエスに御自身をはっきりと顕わしてくださるよう望んだ。イエスが世におられた時代のユダヤ人はメシアが受肉された神でいらっしやることを期待しなかった。ユダヤ人はこの油そそがれた方がモーセのように働いてくださることを期待していたのだ。

10: 25「わたしがわたしの父の御名において行なうわざ、これがわたしについて証しする」 イエスは御自身の御業が御自身の御主張を証しすると主張された。

10: 28「わたしは羊たちに永遠の命を与える」 永遠の命には量・質両面の特徴がある。それは新しい世の命である。それは今、キリストへの信仰によって手に入れることができる。

「羊たちは決して滅びることはなく、羊たちをわたしの手から奪い取る者はいない」 これは信徒の安全を新約聖書の中で最も強力に述べた文の一つである。神の愛から私達を引き離すことができるのは私達自身だけであることは明らかである。確信は忍耐とバランスを取るものでなければならない。確信は三位一体の神の御性質と御業に基づくものでなければならない。継続する信仰は真の救いの証しである。

10: 29「わたしに羊たちを与えられたわたしの父は全てのものよりも偉大である」 これは父なる神の御力に基づいた信徒の確信についての素晴らしい文である。信徒の救いの希望と確信は、三位一体の神の御性質、つまり憐れみと恵みの中にあるのだ。

10: 30-33「わたしと父とは一つである。 . . ユダヤ人は再び石を拾ってイエスに投げつけようとした」 これはイエスがメシアであり神でいらっしやることを唯一力強く述べた箇所である。ユダヤ人はイエスが言われていたことを完全に理解し、それらを神への冒涇とみなした。

NASB(改訂版)原典: 10: 31-39

³¹ユダヤ人たちは再び石を拾い上げてイエスに投げつけようとした。³²イエスは彼らに答えて言われた「わたしは父から出た多くのよいわざをあなたがたに見せた。そのうちのどのわざについてあなたがたはわたしを石打ちにするのか」。³³ユダヤ人たちはイエスに答えて言った「我々があなたを石打ちにするのはよいわざのためではなく冒涇のためだ。あなたは人間でありながら自分を神としたからだ」。³⁴イエスは彼らに答えて言われた「あなたがたの律法の中に『わたしは言った、あなたがたは神々である』と書いていないだろうか。³⁵神の言葉の臨んだ人々を神々と呼んだのに(そして聖書は廃れることがあり得ない)、³⁶『わたしは神の子である』とわたしが言ったので、あなたがたは父が聖別して世に遣わされた者に関して『あなたは冒とくしている』と言うのか。³⁷わたしがわたしの父のわざを行っていないのなら、わたしを信じるのをやめなさい。³⁸しかし、わたしがそれらのわざを行なっているなら、たとえわたしを信じないとしてもそのわざを信じなさい。父がわたしの内におられ、またわたしが父の内にいることを知り、そして信じるようになるためだ」。³⁹彼らは再び彼を捕まえようとした。しかし、イエスは彼らの手をすり抜けて行かれた。

10: 31 イエスはこの極めて異常なラビの議論の中に起こった非難に対してお答えになった。

10: 32 よい(*kalos*)羊飼いは父なる神からのよい業(*kalos*)を行われる。

10: 33「冒涇のためだ」父なる神と御自分が一つでいらっしやるという御主張をユダヤ人達が正しく理解したことをイエスは御存知だった。

10: 34「あなたがたの律法の中に」 イエスは詩篇の箇所から引用されたが、それを「律法」と

呼ばれた。用語「律法」は通常はモーセの著書(トーラ)、つまり創世記から申命記までの書を指す。このことはその用語が旧約聖書全体を網羅するようにより広く用いられていることを示している。

「あなたがたは神々である」これらのユダヤ人達は、イエスが御自分を神の子であり神と共におられる方でいらっしゃるかと主張されたのでイエスを非難していた。

10: 35「(そして聖書は廃れることがあり得ない)」引用句の主張は聖書の信頼性である。イエスと使徒達は旧約聖書とその彼らなりの解釈を神の御言葉そのものとして見ていた。

10: 36 この節でイエスは父なる神が御自分を選ばれ(聖別され)て(メシアとして)遣わされたと主張されている。だからイエスには確かに「神の子」と呼ばれる権利がおありである。

10: 37 イエスの行われた奇跡は神のお働きを反映している。

10: 37と38節「... なら」イエスは父なる神の業を行われた。もしそうなら、彼らはイエスを信じ、イエスと父なる神が一つでいらっしゃることを確信するべきである。

NASB(改訂版)原典: 10: 40-42

⁴⁰イエスは再び、ヨルダンの向こうのヨハネが最初にバプテスマを施していた場所へ去って行かれ、そこに滞在された。⁴¹多くの人々がイエスのところにやって来た。彼らは言った「ヨハネは確かに何のしるしも行なわなかったが、ヨハネがこの人について言ったことは全て真実だった」。⁴²そこでは多くの人々がイエスを信じた。

10: 40 これはエリコに沿ってヨルダン川を渡った領域で、ベタニアと呼ばれる町の近くを指す。

10: 41 洗礼者ヨハネは自分の周囲で生まれていくつかの異端に対抗するためにイエスについて肯定的発言をしたようだ。

10: 42 ユダヤ人の指導者達がイエスを拒んだので、一般の人々(その土地の人々)の多くは信仰をもってイエスに応答した。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜヨハネはとても頻りに自身の比喩を混ぜているのか(例:「イエスは羊小屋の戸であり、よい羊飼いである」)。

2. ヨハネ10章についての旧約聖書の背景とは何か。
3. イエスが「御自分の命を捨てられる」ことの意義は何か。
4. なぜユダヤ人は、悪魔に取りつかれた者としてイエスを非難し続けたのか。
5. なぜイエスの御業はとても重要なのか。
6. 「信徒の安全」はどのように「聖なる者の忍耐」と関連しているか。

ヨハネの福音書11章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

神学的概要

11章の神学的重要性は次のとおりである。

1. イエスの御力と権威が引き続き示されている。
2. ラザロの死は、イエスが栄光を受けられる機会を与えられるという神の御計画の内にある。
3. イエスとマルタの対話は、マルタの大いなる告白とイエスの更なる御自身の啓示の機会となった。
4. イエスは今や永遠の命を与えられる。このことはラザロの復活に象徴される。イエスは死をも支配されたのだ。
5. この力強い奇跡を見ても信じない人々がいた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 11: 1-16

¹さて、ある人が病気であった。その人はマリアとその姉妹マルタの村であるベタニアのラザロであった。²主の両の御足に香油を塗って自分の髪でぬぐったのはこのマリアであり、病気の人はその兄弟ラザロであった。³そこで姉妹たちはイエスのみもとに人を遣わして言った「主よ、ご覧ください、あなたが愛しておられる者が病気なのです」。⁴しかしイエスはそれを聞いて言われた「この病気は

死に至るものではなく、神の栄光のためのものであり、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである。⁵イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。⁶そのため、ラザロが病気だとお聞きになったとき、イエスは御自分のおられた所に二日間留まっておられた。⁷そしてその後、イエスは弟子たちに言われた「もう一度ユデアに行こう」。⁸弟子たちはイエスに言った「ラビ、たった今ユダヤ人たちはあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこに行こうとされるのですか」。⁹イエスは答えて言われた「昼間には十二時間あるではないか。人は昼の間に歩けばつまずくことはない。この世の光を見ているからだ。¹⁰しかし、夜の間には歩けばつまずく。光がその人の内にはないからだ」。¹¹このように言われた後、イエスは弟子たちに言われた「わたしたちの友ラザロは眠りに入った。しかしわたしは行って、ラザロを眠りから覚まそう」。¹²そこで弟子たちはイエスに言った「主よ、眠りに入ったのなら、ラザロは回復するでしょう」。¹³このときイエスは御自分の死について話しておられたのだが、弟子たちはイエスが現実の眠りについて話しておられるものだと思っていた。¹⁴そこでイエスは弟子たちにはっきりと言われた「ラザロは死んだ」。¹⁵わたしは、自分がそこにいなかったことをあなた方のために喜ぶ。それはあなた方が信じるようになるためだ。それでも、ラザロのところに行こう」。¹⁶そこで、ディディモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った「わたしたちも行って、主と共に死のうではないか」。

11: 1「ある人が病気であった」 これはラザロが長期間病気だったことを意味する。

「ラザロ」 これは、「神は助けられる」つまり「神は助け主でいらっしゃる」という意味を持つヘブル語の人名「エレアゼル」である。

「ベタニア」 これは、1: 28と10: 40に登場する、ヨルダン川河畔のエリコの近くにあったベタニアとは異なる場所にあったベタニアである。このベタニアはエルサレムの約2マイル南東の、オリーブ山と同じ尾根の上にあった。これはイエスがエルサレムに滞在された間に好んで宿泊された場所であった。

「マリア」 これはヘブル語の人名「ミリアム」である。

「マルタ」 これは「女主人」を意味するアラム語の用語である。最年長であるマルタの名が最初に記されていないのは異例のことである。

11: 2「主の両の御足に香油を塗って自分の髪でぬぐったのはこのマリアであり」 この節は、このヨハネの福音書にまだ(1章からこの章のこの節までに)記されていない出来事について述べている。その出来事は12章に記されている。

特別なトピック： 聖書における油注ぎ(BDB603)

用語「油注ぎ」は、美化、客、癒し、埋葬の準備、宗教的意味、指導者(祭司、王、預言者)の任命等で用いられた。用語あるいは称号の「メシア」は「油注がれた者」を意味する。

11: 3「姉妹たちはイエスのみもとに人を遣わして言った」 彼女らは、ヨルダンに沿ったペレアに

おられたイエスのみもとにメッセージを送った。

「あなたが愛しておられる者が病氣なのです」これは、この一家とのイエスの特別な関係を示している。

11: 4「この病氣は死に至るものではなく、神の栄光のためのものであり」これは、ラザロが病氣だとイエスが御存知だったことを意味する。イエスはラザロが死ぬことを見過ごされた。それは、ラザロを死者の中からよみがえらされることによって、父なる神がイエスを通して御力を示すことができるようになさるためである。病氣や苦しきは時として神の御心である。

「神の栄光」イエスの御業は「神の栄光」を明らかにする。

「神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」病氣は父なる神と御子に栄光をもたらすことになった。ラザロが死から蘇ったことで、ユダヤ人の指導者達はますますイエスを殺そうとすることになった。

11: 6「イエスは御自分のおられた所に二日間留まっておられた」ラザロが死ぬまでイエスは留まっておられたのだ。この病氣には神の御意図があった。

11: 7「その後、イエスは弟子たちに言われた『もう一度ユデアに行こう』」以降の議論は、ユダヤ人達がイエスを石打ちにしようとしていたことを弟子達がはっきりと気付いていたことを示している。弟子達は信仰と恐れが奇妙に入り混じった感情を表している。トマスはしばしば疑い深い弟子だと思われているが、ここでは彼はイエスと共に死のうとしていた。

11: 11「わたしたちの友ラザロは眠りに入った」弟子達はイエスの御言葉を文字通りに解釈し過ぎたのでしばしばイエスを誤解した。

11:12「ラザロは回復するでしょう」ここでも弟子達はイエスの比喩的な御言葉を文字通りに解釈したのでイエスを誤解した。聖霊のお助けがなければ、弟子達はイエスの御言葉を理解できないのだ。

11: 15「わたしは、自分がそこにいなかったことをあなた方のために喜ぶ。それはあなた方が信じられるようになるためだ」イエスは、ラザロをよみがえらされたのはラザロとの友情のためでもマリアとマルタが悲嘆に暮れていたからでもなく、弟子達とユダヤの群衆の信仰を励ますためであったと主張されている。

11: 16 この節は明らかにトマスの信仰を示している。彼はイエスと共に死のうとした。人類が大いに恐れる死を超越するイエスの御力を弟子達は示していただく必要があった。

NASB(改訂版)原典: 11: 17-27

¹⁷そこでイエスは行かれて、ラザロがすでに四日間も墓の中にいるのを御覧になった。¹⁸ベタニアはエルサレムの近くで、約2マイル離れたところにあった。¹⁹大勢のユダヤ人たちがマルタとマリアのところに来て、彼女らの兄弟のことで慰めた。²⁰そのときマルタはイエスが来ておられるのを聞いて、出て行ってイエスに会った。しかしマリアは家の中にとどまっていた。²¹それでマルタはイエスに言った「主よ、あなたがここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。²²今

でもわたくしは、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを知っております」。²³イエスはマルタに言われた「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。²⁴マルタはイエスに言った「わたしはラザロが終わりの日の復活の時によみがえることを知っています」。²⁵イエスはマルタに言われた「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きるであろう」。²⁶生きていてわたしを信じる者は皆、決して死ぬことがない。あなたはこのことを信じるか」。²⁷マルタはイエスに言った「はい、主よ。わたしはあなたがキリストで、神の子で、そして世に入られる方だということを知っております」。

11: 17「ラザロがすでに四日間も墓の中にいるのを」 ラビによれば、人間の魂は肉体の近くに三日間留まるといわれていた。イエスは、ラザロが本当に死に、全てのラビの期待が外れたことを断言されるために、死の四日後まで留められた。

11: 18「約2マイル」 文字通りこれは「15ファーロング(ハロン: 8分の1マイル[約201m])」である。

11: 19「大勢のユダヤ人たちがマルタとマリアのところに来て、彼女らの兄弟のことで慰めた」 この文脈では、ユダヤ人とは単にこの家族を知っていたエルサレムの住民を指す。

11: 20「マリアは家の中にとどまっていた」 通常、ユダヤ人は床に座って喪に服した。

特別なトピック： 嘆きの儀式

イスラエルの民は、いくつかの方法で、愛する人の死に対する悲しみと個人的および集団的悔い改めの時に感じる悲しみを表明した。

1. 外套(上着)を裂く
2. 荒布を着る
3. 履物を脱ぐ
4. 頭に手を置く
5. 頭にほこりをかぶる
6. 地面に座る
7. 胸を叩く
8. 体を傷つける
9. 断食する
10. 嘆きの歌を唱う
11. 毛を剃る
12. 髭を短く切る
13. 頭や顔を覆う

11: 23-24「あなたの兄弟はよみがえるであろう」 マルタは、終わりの日の身体の復活を信じたパリサイ人達と同じような、死後の世界についての神学的な見方をしていた。イエスはユダヤ人のこ

のような理解の仕方を御自身の御力と權威の肯定に変えられた。

11: 25「イエスはマルタに言われた『わたしは復活であり、命である』」ラザロの死に直面して、マルタはラザロの復活を信じるように励まされた。この希望は父なる神とイエスの御人格と御力に根ざしている。

11: 27「『はい、主よ。わたしはあなたがキリストで、神の子で、そして世に入られる方だということを感じております』」これは、マルタがイエスを約束されたメシアとして個人的に信じるという力強い告白である。

NASB(改訂版)原典： 11： 28-29

²⁸こう言って、マルタは自分の姉妹マリアを呼びに行き、秘かに言った「先生がここにおられ、あなたを呼んでおられます」。²⁹マリアはこれを聞くと急いで立ち上がり、イエスのみもとに行った。

11: 28「先生」ラビは女性に教えを説くことはなかったが、イエスは頻繁に女性に教えを説かれた。

特別なトピック： 聖書に登場する女性達

I. 旧約聖書

- A. 文化的に女性は財産と見なされた
- B. 实际的に成熟していた
- C. 指導的役割にあった女性(モーセの姉のミアム、預言者デボラ、女王エステル)

II. 新約聖書

- A. ユダヤ教とギリシャ・ローマ世界では、女性は文化的に権利や特権のあまりない第二級市民だった。
- B. 指導的役割にあった女性(エリサベツとマリア、アンナ、リディア、フェベ、プリスキラ)

NASB(改訂版)原典： 11: 30-37

³⁰イエスはまだ村に入っておられず、マルタとお会いになった場所におられた。³¹マリアの家でマリアと共にいて慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見ると、墓に行き行って泣くつもりなのだと思います、マリアについて行った。³²マリアはイエスがおられる所に来て、イエスを見かけると、イエスの御足のもとにひれ伏してイエスに言った「主よ、あなたがここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」。³³マリアが泣き、マリアと共に来たユダヤ人たちも泣いているのを御覧になると、イエスは霊において大きく御心を動かされ、そして苦悩され、³⁴言われた「あなたがたはラザロの亡骸をどこに置いたのか」。彼らは言った「主よ、来て御覧ください」。³⁵イエスは涙を流された。³⁶するとユダヤ人たちは言った「見なさい、ラザロにどれほどの愛情を抱いておられたかを」。³⁷しかし彼らのうちのある者たちは言った「盲人の目を開けたこの人

が、ラザロを死から守れなかったのだろうか」。

11: 33「イエスは霊において大きく御心を動かされ、そして苦悩され、」これは文字通り「霊を吹き出された」である。イエスは真に人間の感情を持っておられ、御自分の友のためにここでその感情を示されたのだ。

11: 35「イエスは涙を流された」これは聖書の中で最も短い節である。死はこの惑星に対する神の御心ではなかった。それは人間の反逆の結果である。イエスは愛する人を失うことの痛みを感じられている。イエスは、御自分を信じる全ての人が人生において経験することを感じられているのだ。イエスは静かに個人的に涙を流された。

NASB(改訂版)原典： 11: 38-44

³⁸イエスは再び大きく御心を動かされ、墓に来られた。それは洞穴であって、その前に石が置かれていた。³⁹イエスは言われた「石を取りのけなさい」。死んだ者の姉妹マルタがイエスに言った「主よ、もう臭いがいたします。死んでから四日経ちますので」。⁴⁰イエスはマルタに言われた「信じれば神の栄光を見るところとおいたではないか」。⁴¹そこで彼らは石を取りのけた。イエスは御目を上げられて言われた「父よ、わたしに耳を傾けてくださったことに感謝します。⁴²わたしは、あなたがいつもわたしに耳を傾けてくださっていることを知っておりました。しかし、周りに立っているこの群衆のために、わたしはこのことを申しました。あなたがわたしを遣わされたことを彼らが信じるためです」。⁴³イエスはこう言われてから、大声で叫んで言われた「ラザロよ、出て来なさい」。⁴⁴死んでいた人が、覆い布で手と足を巻かれたまま出て来た。その顔も布で包まれていた。イエスは彼らに言われた「覆い布を解いてラザロを行かせなさい」。

11: 39「石を取りのけなさい」墓荒らしや動物の墓への侵入を妨ぐために、大きな石を溝に落とすことによって墓は封印されていた。

11: 40「神の栄光」神の栄光はイエスの御業で明らかにされた。

11: 41「イエスは御目を上げられて」ユダヤ人の通常の祈りの姿勢は手と目(開いて)を天に上げたものだった。

「わたしに耳を傾けてくださったこと」イエスは父なる神の御言葉を「聞かれ」、父なる神はイエスの御言葉を「聞かれ」る。イエスの御言葉を「聞く」人は永遠の命を持つ。ラザロはイエスの御声を「聞いた」ので命を取り戻した。

11: 42 これはイエスの祈りと奇跡の目的を述べている。イエスはしばしば弟子達の信仰を励ますために奇跡を行われたが、この場合にはその奇跡を見たエルサレムのユダヤ人達の内にも信仰を生むことになった。

神学的にイエスは再び御業の内に父なる神の権威と優越性を強められた。この奇跡は父なる神とイエスの親密な御関係を明らかにしている。

11: 44 遺体の埋葬の準備は、まず水で洗い、そして死臭を抑えるために香料を織り交ぜた亜麻布の帯で包むことによって行なわれた。ユダヤ人は遺体に防腐処置を施さなかったため、遺体は24時間以内に埋葬しなければならなかった。

特別なトピック： 埋葬の習慣

I. メソポタミア

- A. 適切な埋葬は死後の幸せな生活において非常に重要だった。
- B. メソポタミアの呪いの例は「地があなたの死体を受け入れることのないように」だった。

II. 旧約聖書

- A. 適切な埋葬は非常に重要だった。
- B. 埋葬は非常に迅速に行われていた。
- C. 不適切な埋葬は拒絶と罪のしるしだった。
- D. 埋葬は可能な限り故郷の地下家族納体堂で行われていた。
- E. エジプトのような防腐処置は行われなかった。人類はちりから生まれてちりに帰らなければならなかった。
- F. ラビ主導のユダヤ教では、死体の埋葬の儀式的概念と、死体への適切な敬意と扱いのバランスをとることは困難であった。

III. 新約聖書

- A. 死後の埋葬は速やかに、通常は24時間以内に行われた。ユダヤ人は魂が3日以内に肉体に戻ると信じていたので、しばしば3日間墓を監視した。
- B. 埋葬では死体は洗われ、香料を含ませた布で包まれた。
- C. 紀元1世紀のパレスチナでは、ユダヤ人とキリスト教徒の埋葬の手順や副葬品に明確な違いはなかった。

NASB(改訂版)原典： 11: 45-46

⁴⁵すると、マリアのところに来ていてイエスの行なわれたことを見た大勢のユダヤ人たちがイエスを信じた。⁴⁶しかし、彼らのうちの何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスが行なわれたことを彼らに言った。

11: 46「彼らのうちの何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスが行なわれたことを彼らに言った」このような素晴らしい教えと力強い奇跡を見聞きしても霊的盲目の者がいたことは驚くべきことである。

NASB(改訂版)原典： 11: 47-53

⁴⁷そこで、祭司長たちとパリサイ人たちは評議會を招集して言った「我々は何をしているのだ。

この人が多くのしるしを行なっているというのに。⁴⁸我々がこの人をこのまま放っておくなら、皆が彼を信じるだろう。そして、ローマ人たちがやって来て、我々の地も国民も奪い去ってしまうだろう。⁴⁹しかし、彼らのうちの一人でその年に大祭司であったカヤパが彼らに言った「あなたがたは少しも分かっていない。⁵⁰一人の人が民のために死んで国民全体が滅びないことが我々にとって益になることを考えていないのだ」。⁵¹カヤパはこれを自分の考えで言ったのではなく、その年に大祭司であったのでこのことを預言したのである。その預言とは、イエスが国民のために死ぬことになること、⁵²また、それが国民のためだけではなく、各地に散らされている神の子らを一つに集めるためでもあるということである。⁵³そこで彼らはその日以来、イエスを殺そうと計画した。

11: 47「祭司長たちとパリサイ人たちは評議會を招集して」 これはエルサレムのユダヤ人の最高評議會であったサンヘドリンを指す。3: 1の特別なトピック「サンヘドリン」を見よ。

11: 48「皆が彼を信じるだろう」 嫉妬と神学的な見解の相違はユダヤ人達のイエスへの不信と恐怖の源だった。「皆」にはサマリア人と異邦人も含まれているようだ。彼らの恐怖には政治に対するものもあった。

「ローマ人たちがやって来て、我々の地も国民も奪い去ってしまうだろう」 ローマ人の支配という政治的現実、終わりの時についてのユダヤ人の希望にとって不可欠な要素であった。彼らは、自分達をローマから救い出してくれる、旧約聖書に登場する士師のような宗教的・軍事的人物を神が送ってくださると信じていた。偽メシア達の中には、まさにこの期待に応えるためにパレスチナで反乱を開始した。イエスは、御自分の王国は一時的で政治的なものではなく霊的なものであり、未来に地上に実現することになっていると主張された。イエスは旧約聖書の預言が文字通りのユダヤの国家主義的な意味ではないものとして成就すると主張された。このためにイエスは、御自分が世におられた時代の大半のユダヤ人達によって拒絶された。

11: 49「その年に大祭司であったカヤパ」 大祭司とは元々世襲制の終身職だったが、ローマ人の征服後はオリーブ山や神殿の近くでの商売で利益を得た者達に最高の入札額で売却された。カヤパは紀元18～36年に大祭司をつとめた(紀元6～15年に大祭司をつとめたアンナスの義理の息子)。

NASB(改訂版)原典: 11: 54

⁵⁴そのためイエスはユダヤ人の間を公に歩くことはなさらず、そこから荒野に近い地方のエフラ임と呼ばれる町に去って行かれ、弟子たちと共にそこに滞在された。

11: 54「イエスはユダヤ人の間を公に歩くことはなさらず」 ヨハネの福音書では用語「公に」は通常「大胆に」という意味で用いられる。

「エフライムと呼ばれる町」 この町はサマリヤのベテルの近くにあったようだ。

NASB(改訂版)原典: 11: 55-57

⁵⁵さて、ユダヤ人の過ぎ越しの祭りが近づいていた。大勢の人が身を清めるため、過ぎ越しの祭りの前に自分たちの住むところからエルサレムに上って行った。⁵⁶彼らはイエスを探し、神殿の中で立ったまま互いに言い合った「あなた方はどう思うか。イエスは祭りに来ないつもりだろうか」。⁵⁷祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスがおられるところが分かり次第報告するように命じていた。イエスを捕えるためであった。

11:55「身を清めるため」 これは過越の祭りの準備のための浄めの儀式を指す。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜイエスはラザロの死を見過ごされたのか。
2. この奇跡は誰に向かうものであったか。
3. 復活とよみがえりの違いは何か。
4. なぜユダヤ人の指導者達はラザロがよみがえったことをとても恐れたのか。

ヨハネの福音書12章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～50節の文脈の洞察

イエスはユダヤ人の指導者達に信仰をもたらそうと何度も何度も試みられた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 12: 1-8

¹過ぎ越しの祭の六日前にイエスはベタニアに来られた。そこは、イエスが死んだ者たちの中からよみがえらされたラザロがいた所である。²そこで彼らはイエスに夕食を用意した。マルタは給仕をしていた。イエスと共に食卓に着いていた者たちの一人にラザロがいた。³マリアは非常に高価な純粋なナルドの香油一ポンドを取ってイエスの両の御足に塗り、自分の髪でイエスの両の御足をぬぐった。家の中は香油の香りでいっぱいになった。⁴そこで、弟子たちの一人でイエスを売り渡そうとしていたイスカリオテのユダが言った⁵「なぜこの香油を三百デナリで売って貧しい人々に施さなかったのか」。⁶彼がこのように言ったのは、貧しい人々のことを気にかけていたからではなく、彼が盗人であり、金箱を持っていたので、そこに入れられるものを盗んでいたからであった。⁷しかしイエスは言われた「彼女をそのままにしておきなさい。彼女はわたしの埋葬の日のためにこのことをしてくれたのだ。⁸あなたがたには、貧しい人々はいつでも一緒にいるが、わたしはいつでもいるわけではないからだ」。

12: 2「彼ら」これは、ラザロをよみがえらせたことをたたえて、イエスと弟子たちのために夕食を用意したベタニアの町の人々を指しているようだ。

12: 3「ポンド」これは、12オンスに相当するローマ帝国標準のポンドを指すラテン語の言葉だった。この高価な香料はマリアの結婚持参金だったかもしれない。多くの未婚女性はこの種の香料を入れた容器を首に掛けていた。

「非常に高価な純粋なナルドの香油一ポンド」香油自体はヒマラヤの香料の道を経由してもたらされ、非常に高価だった。

「自分の髪でイエスの両の御足をぬぐった」この香料は死体の埋葬の準備に用いられた。御自身の死が近づいていることについてのイエスのメッセージをマリアは弟子たちよりもよく理解していたに違いない。

12: 4「イスカリオテのユダ」用語「イスカリオテ」の語源は2つ考えられる。ユダ王国の都市名または「暗殺者の刀」を意味する用語である。

12: 5「三百デナリ」1デナリは兵士や労働者の一日の賃金だった。従って、これはほぼ一年の賃金に相当する。

NASB(改訂版)原典： 12: 9-11

⁹ユダヤ人の大群衆は、イエスがそこにおられるのを知ってやって来た。それはイエスを見るだけでなく、死んだ者たちの中からよみがえったラザロを見るためでもあった。¹⁰祭司長たちはラザロをも殺そうと企てた。¹¹ラザロのために大勢のユダヤ人たちが去って行き、イエスを信じたからであった。

12: 9「ユダヤ人の大群衆は、イエスがそこにおられるのを知って」通常、ユダヤ人とはイエスと対立する宗教指導者達を指すが、ここではラザロの友人あるいは彼の葬式に来ていたエルサレムの町の人々を指しているようだ。

12: 10「祭司長たちはラザロをも殺そうと企てた」彼らは証拠を消したかったのだ。彼らの動機は恐怖と嫉妬だった。彼らは、人を蘇らせるイエスの御業を単なる稀な出来事だと思ったに違いない。これらのユダヤの指導者達の盲目と偏見は、墮落した人類の闇を反映している。

NASB(改訂版)原典： 12: 12-19

¹²次の日、祭りに来ていた大群衆はイエスがエルサレムに来られると聞くと、¹³ヤシの木の枝を取ってイエスに会うために出て行き、叫び始めた「ホザナ！主の御名において来られる方、イスラエルの王に幸いあれ！」。¹⁴イエスはロバの子を見つけられて、それに座られた。こう書いてあるとおりである¹⁵「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王が来る。ロバの子に乗られて」。¹⁶弟子たちはこれらの事を初めは理解しなかったが、イエスが栄光を受けられた時、イエスについて書かれたこれらの事、そして人々がイエスにこれらの事を行なったということ

を思い出した。¹⁷イエスがラザロを墓から呼び出されて、死んだ者たちの中からよみがえらされたときにイエスと共にいた人々は、イエスについて証言し続けた。¹⁸この理由のためにも人々は来てイエスを出迎えた。イエスがこのしるしを行なわれたことを聞いたからである。¹⁹そこでパリサイ人たちは互いに言い合った「あなたがたは何も成し遂げていないではないか。見よ、世は彼を追って行ってしまった」。

12:12-19 これは、エルサレムに意気揚々とエントリーヨハネ“イエスのS バーヨハネ”です。

12: 12「祭りに来ていた大群衆」 ユダヤ人の男性には、出ることが義務づけられている3つの祭りの日があった。パレスチナの外(ディアスポラ)に住んでいたユダヤ人の生涯の願いは、エルサレムで行われる祭りに出ることだった。これらの一連の祭りの間、エルサレムには通常の人口の3~5倍の人々が集まった。

12: 13「ヤシの木の枝」 ヤシの木の枝は勝利の象徴だったようだ。ヤシの木の枝は仮庵の祭りと過越の祭りの儀式で毎年用いられていた。

「ホザナ」 この用語は「救ってください」という意味である。

12: 14「ロバの子」 ロバはイスラエルの王の軍用の乗り物だった。

12: 14-15「こう書いてあるとおりでである」 ロバの子はメシアの王権だけでなく謙虚さも表している。

12: 16「弟子たちはこれらの事を初めは理解しなかった」 イエスの昇天と五旬節の後に初めて弟子達の霊的な目が完全に開かれた。

NASB(改訂版)原典: 12: 20-26

²⁰ところで、祭りのときに礼拝のために上ってきた者たちの中にギリシャ人たちがいた。²¹これらのギリシャ人たちはガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て「イエスにお目にかかりたいのですが」と頼んだ。²²ピリポはアンデレのところに来てそのことを告げた。アンデレはピリポと共にイエスのみもとに来てそのことを告げた。²³イエスは彼らに答えて言われた「人の子が栄光を受ける時が来た。²⁴まことに、まことに、あなたがたに言う。一粒の小麦が地に落ちて死ななければ、それはそのまま残る。しかしそれが死ぬなら、多くの実を結ぶ。²⁵自分の命を愛している者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者はそれを永遠の命へと保つ。²⁶誰でもわたしに仕える者はわたしに従わなければならない。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいることになる。誰でもわたしに仕えるなら、父はその者を尊んでくださる。

12: 20「ギリシャ人たち」 これはギリシャ人を特定する用語としてではなく、異邦人の意味で用いられた。

「祭りのときに礼拝のために上ってきた者たちの中に」 これらの人々は(1)神を畏れる人々、つまり会堂の定期的な礼拝者、あるいは(2)門のところにいた改宗者、つまり公式にユダヤ

教に改宗した人々だった。

12: 21「頼んだ」 彼らはイエスと個人的に会うことを望んだ。

12: 22 十二使徒のうちでギリシャ語の名前を持っているのはピリポとアンデレの2人だけだった。多分、これらのギリシャ人が彼らに話しかけやすいと感じたのはこのためだったと思われる。

12: 23「時が来た」 使徒ヨハネは、しばしば用語「時間」をイエスのお働きの最高潮的な出来事としての磔刑と復活を指して用いていた。イエスは御自分がイスラエルの失われた羊のところに来たと言われた。イエスのメッセージは異邦人に達したのだ。

「人の子」 これは単に「人間」を意味するアラム語の成句である。しかし、ダニエル7: 13では神の意味が加えられている。これは、人間と神という2つの御性質を合わせてイエスが用いられた自称である。

「栄光を受ける」 イエスの死は常に「栄光」を指している。用語「栄光」はしばしばイエスの死と復活を指して用いられる。

12: 24「一粒の小麦が地に落ちて死ななければ」 一つの種は多くの種を生むことができる。イエスの死は多くの人々に真の命をもたらした。

12: 25「自分の命を愛している者はそれを失い」 人はキリストに信頼を置くと新しい命を与えられる。この新しい命は個人的に用いるためではなく、仕えるために与えられる神からの賜物です。信徒はこの新しい命に仕える。私達は神のしもべになることによって罪の奴隷から解放される。

NASB(改訂版)原典： 12： 27 - 36前半

²⁷「今、わたしの魂は騒ぐ。わたしは何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。だが、この理由のためにわたしはこの時に至ったのだ。²⁸父よ、あなたの御名の栄光をお示してください！」すると天から声がした「わたしはその栄光を現わした。そして再びその栄光を現わそう」。²⁹そのため、そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。「み使いが彼に話したのだ」と言う者たちもいた。³⁰イエスは答えて言われた「この声はわたしのためではなくあなた方のために来た。³¹今、この世に裁きが来た。今、この世の支配者は追い出されることになる。³²そしてわたしは、自分が世から上げられるなら、全ての人々を自分のもとへ引き寄せるだろう」。³³しかし、イエスは御自分がどんな形で死ぬことになっているかを示そうとしてこのことを言われたのである。³⁴群衆はイエスに答えて言った「律法から、キリストが永遠にとどまられることをわたしたちは聞いています。あなたが『人の子は上げられなければならない』と言われるのはどうしてですか。この『人の子』とはどなたなのですか」。³⁵そこでイエスは彼らに言われた「もう少しの間、光はあなた方と共にある。闇があなたがたに追いつけないように、自分たちのうちに光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行こうとしているのかを知らない。³⁶光の子らとなるために、自分たちのうちに

光があるうちに光を信じなさい」。

12: 27「わたしの魂は騒ぐ」これは、十字架につけられる時が近づいていることでイエスの御心の中に生まれた葛藤を表現している。

12: 28「天から声がした」マラキの時代以来、イスラエルの民は預言的な声を聞いていなかった。神の御心を確認するには、天からの声を聞かなければならなかった。

12: 31「今、この世に裁きが来た」この裁きの時は特定されていない。

「この世の支配者」これは、ヘブル語で「サタン」や「敵」として、あるいはギリシャ語で「悪魔」や「中傷する(悪口を言う)者」として知られている個人的な悪の力を指す。この者はイエスを信じる人々を非難あるいは中傷し続けることができないように天国から追い出される。

特別なトピック: 個人的悪

これはいくつかの理由でとても難しい話題である。

1. 善に対する第一の敵ではなく、人類にそれに代わるものを示して人類の不義を告発する YHWH のしもべを旧約聖書は明らかにしている。
2. 神の第一の敵である者の概念はペルシャの宗教(ゾロアスター教[拝火教])の影響を受けて聖書外典の中で発展した。これは一方でラビ主導のユダヤ教に大きな影響を与えた。
3. 新約聖書は旧約聖書の主題を、驚くほど厳密だがまた選択的なものに発展させた。

聖書神学の観点(それぞれ個別に研究また要約された聖書の各書・著者・ジャンル)から悪を研究しようとすれば実に様々な悪の側面が明らかとなる。

しかし、聖書外典による世の宗教つまり東洋の宗教の研究をもとに悪を研究しようとすれば、新約聖書がペルシャの二元論やギリシャローマの精神論に発展したということになる。

御言葉が神の権威ある言葉であることを前提として認めるなら、新約聖書の発展は進歩的な啓示とみなされなければならない。クリスチャンはユダヤの民間伝承(昔話)や英国文学(つまりダンテやミルトン)にこの概念をさらにはっきりさせるようなことをさせてはならない。啓示のこの領域には確かに謎と不明瞭さがある。神は悪の全側面と起源と目的を明らかにされようとしているのではなく、悪の敗北を明らかにされているのである。

旧約聖書では用語サタン(BDB966)つまり告発者は3つのグループと関連があるようだ。

1. 人間の告発者(I サムエル 29: 4、II サムエル 19: 22、I 列王記 11: 14 と 23 節と 25 節、詩篇 109: 6)
2. 天使の告発者(民数記 22: 22-23、ゼカリヤ 3: 1)
3. 悪魔の告発者(I 歴代誌 21: 1、I 列王記 22: 21、ゼカリヤ 13: 2)

後に聖書外典で創世記3章の蛇はサタンとされ(知恵の書 2: 23-24、II エノク 31: 3を参照)、さらに後にこれはラビによる追記となる(*Sot* 9b と *Sanh.* 29a を参照)。創世記6章の「神の息子達」は I エノク 54: 6 では天使となる。それらはラビの神学では悪の起源となる。私がこのように言うのは

その神学的な正確性を主張するためではなく、その発展を示すためである。新約聖書ではこれらの旧約聖書の活動はⅡコリント 11: 3 と黙示録 12: 9 に登場する悪事を行う天使(つまりサタン)とされている。

人間の姿をとった悪の起源を旧約聖書をもとに定めることは困難あるいは不可能である(個人の価値観による)。この理由のひとつはイスラエルのゆるぎない一神教にある(Ⅰ列王記 22 章 20 ~22 節、伝道者の書 7: 14、イザヤ 45: 7、アモス 3: 6 を参照)。全ての因果関係は YHWH に帰属され、それによって神の独自性と(世界で)第一位でいらっしやることが示される(イザヤ 43: 11、44 章 6 節と 8 節と 24 節、45: 5-6 と 14 節と 18 節と 21 節と 22 節を参照)。

信頼できる情報源としては(1)ヨブ 1~2 章、サタンは「神の息子達」[つまり天使](2)イザヤ 14 章とエゼキエル 28 章、サタンの傲慢さが傲慢な近東の王[バビロンとツロ]を用いて表現されている[Ⅰテモテ 3: 6 を参照]、がある。私はこれらの情報を用いることに複雑な気持ちをしている。エゼキエルはツロの王を用いてサタンを表現するためだけでなく(エゼキエル 28: 12-16 を参照)エジプトの王を用いて善悪の知識の木を表現するためにも(エゼキエル 31 章を参照)エデンの園の比喻を用いている。しかし、イザヤ 14 章、特に 12~14 節は傲慢な天使達の反乱を表現しているようだ。神が私達にサタンの特殊な性質と起源を明らかにしたいと望んでおられるなら、この箇所はそのようにするには遠回しである。様々な契約の言葉や著者や書やジャンルのほんの一部の不明瞭な箇所を取り上げて神のパズルを解こうとする組織神学の風潮に私達は染まらぬように気をつけなければならない。

Alfred Edersheim は自著 *The Life and Times of Jesus the Messiah* の第 2 巻の補遺 XⅢ (748~763 ページ)と XⅣ (770~776 ページ) でラビ主導のユダヤ教はペルシャの二元論と悪魔研究から多大な影響を受けてきたと言っている。ラビはこの分野における真理の源としては良いものではない。イエスの教えはシナゴークの教えとは大きくかけ離れている。ラビの提唱する、シナイ山におけるモーセへの律法の授与における天使の仲介と反対の概念が、YHWH と人類の第一の敵である天使の概念への扉を開いたのだと私は思う。ペルシャの二元論(ゾロアスター教[拝火教])には善悪 2 人の最高神 *Ahkiman* と *Ormaza* がいる。この二元論はユダヤ教の YHWH とサタンの限定二元論に発展した。

新約聖書には確かに悪の蔓延に対する進歩的な啓示があるが、ラビの主張ほどには整っていない。この違いの良い例は「天の戦争」である。サタンの敗北は論理的に必要なではあるが、特別に記されていない。記されている事柄さえも黙示文学の中に隠されている(黙示録 12: 4、7 節、12~13 節を参照)。サタンは敗北し地上から追放されるが、それでも YHWH のしもべとして働く(マタイ 4: 1、ルカ 22: 31-32、Ⅰコリント 5: 5、Ⅰテモテ 1: 20 を参照)。

この分野に関しては私達は好奇心を抑えなければならない。個人を誘惑する悪の力があるが、神は唯一の方であり、人類は自らの選択に責任を負わなければならない。救いの前後には霊的戦いがある。勝利は三位一体の神にあり、三位一体の神を通して存続する。悪は負け続け、退けられることになるのだ。

「追い出されることになる」 聖書には、サタンが天から落ちる(追放される)正確な時は示されていない。

特別なトピック： 天での戦い(黙示録の注解からの抜粋)

私達はこの「天での戦い」を単に神と悪者との間の永遠の戦いと見なすべきである。この対決は竜とそれを操る者の完全な敗北によって終わることになっている。

12: 33「イエスは御自分がどんな形で死ぬことになっているかを示そうとしてこのことを言われたのである」 イエスは私達のために律法の呪いを御身に負われた。

12: 35「自分たちのうちに光があるうちに歩きなさい」 イエスは、御自分の御言葉を聞く人々にすぐにそれに応答するように促されている。イエスの地上での時は限られていた。イエスは地上での御自身の最後の週に入ろうとされていた。予め定められたイエスの時が来ていた。イエスが言われたことは、福音を聞く全ての人にとって真実である。

NASB(改訂版)原典： 12: 36後半-43

³⁶後 イエスはこれらの事を言われてから立ち去られ、彼らから身を隠された。³⁷イエスが人々の前で多くのしるしを行なわれたのに、人々はイエスを信じなかった。³⁸それは預言者イザヤの言葉が実現するためであった。イザヤはこう言った「主よ、誰がわたしたちの知らせを信じたでしょうか。誰に主のみ腕が示されたでしょうか」。³⁹この理由で彼らは信じなかった。イザヤはまたこう言ったからである⁴⁰「彼は彼らの目を見えなくし、彼らの心をかたくなにした。彼らが目で見ず、心で理解せず、立ち返らず、わたしが彼らをいやすことのないためである」。⁴¹イザヤはイエスの栄光を見たのでこのような事を言い、イエスについて語ったのである。⁴²それでも、支配者たちでさえ多くの者が彼を信じた。しかし、パリサイ人たちのために彼らはイエスについて告白しなかった。会堂から追放されることを恐れたからだ。⁴³彼らは神の賞賛よりも人の賞賛を求めたからである。

12: 37 霊的な盲目は深刻だった。この節は許されない罪を特徴づけている

12: 40「心」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック： 心

ギリシャ語の用語 *kardia* はセプトウアギンタと新約聖書で用いられ、ヘブル語の用語 *leb* を反映し、以下のような意味で用いられている。

1. 生命体の中心(人の比喩)
2. 霊的生活の中心
3. 思考生活の中心

4. 意志の中心
5. 感情の中心
6. 聖霊が働かれる唯一の場所
7. 心は人の全体を比喩的に指している。

12: 42「それでも、支配者たちでさえ多くの者が彼を信じた」 イエスのメッセージは実を結んだ。

NASB(改訂版)原典: 12: 44-50

⁴⁴イエスは叫んで言われた「わたしを信じる者は、わたしではなくわたしを遣わした方を信じている。⁴⁵わたしを見る者はわたしを遣わした方を見ている。⁴⁶わたしは光として世に来ている。それはわたしを信じる者が闇の中にとどまらないようにするためだ。⁴⁷わたしの言葉を聞いたのに信じないとしても、わたしはその者を裁かない。わたしは世を裁くためではなく世を救うために来たからだ。⁴⁸わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者には、その者を裁く方がおられる。わたしの話したその言葉が、終わりの日にその者を裁くだろう。⁴⁹わたしは自分から話しているのではなく、わたしを遣わされ、わたしが何を言うべきか、また何を話すべきかについてわたしに掟を与えられた父御自身から話しているのである。⁵⁰わたしは父の掟が永遠の命だということを知っている。だからわたしは、ちょうど父がわたしに話されたように話すのである」。

12: 44「わたしを信じる者は、わたしではなくわたしを遣わした方を信じている」 信仰の目的は究極的には父なる神である。御子を知ることは父なる神を知ることである。

12: 45 イエスを見ることは神を見ることなのだ。

12: 46 創世記3章以降、世は闇の中にある。

12: 47「わたしの言葉を聞いたのに信じないとしても」 継続的な従順は、信仰による神との個人的な関係が続いていることのしるしである。安心は、従順と忍耐に変わった(変わりつつある)生活に基づく。

12: 47-48「わたしは世を裁くためではなく世を救うために来たからだ」 当初、イエスは世を贖うために来られたが、イエスが来られたという事実自体によって人類は決心を迫られることになる。イエスを拒めば人類は自身を裁くことになるのである。

12: 49-50 イエスは御自身の権威ではなく神の権威によって話された。

12:50「父の掟が永遠の命だということ」 ヨハネの福音書では「掟」が単数形でも複数形でも用いられているが、そのことは解釈上重要ではない。

特別なトピック: ヨハネの著書における「掟」の用法

1. かつてはモーセの律法の意味で用いられていた。
2. 父なる神からイエスへ
 - a. 御自身の贖いの生贄に対する支配
 - b. 父なる神のイエスへの愛
 - c. イエスは父なる神の戒めに従われた。
3. イエスから信徒へ
 - a. イエスの愛に留まること
 - b. 互いを愛し合うこと
 - c. 父なる神の戒めを守ること
4. 父なる神から信徒へ
 - a. イエスを信じること
 - b. 互いに愛し合うこと

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ラザロの姉妹マリアはなぜイエスの御足に香油を塗ったのか。
2. マタイとマルコとヨハネはなぜこの出来事についてわずかに相異なる記述をしたのか。
3. ヤシの枝を持ってイエスを出迎えた群衆および詩篇118篇からの引用の重要性は何か。
4. なぜイエスは、御自分と話したいというギリシャ人の求めにとても御心を動かされたのか。
5. なぜイエスの御魂はとても騒いだのか。
6. 「信じる」をヨハネがなぜいくつかの意味で用いたのかを説明しなさい。

ヨハネの福音書13章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

13: 1-38の文脈の洞察

ヨハネの福音書13章は最後の受難週の記述で始まる。ヨハネは主の晩餐については記さず、その夜の二階部屋での対話だけを記している。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 13: 1-11

¹さて、過ぎ越しの祭りの前に、イエスはこの世から父のみもとへ向かう御自分の時が来たことを悟られ、世にいた御自分の人々をこよなく愛された。²夕食の間に悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心にイエスを裏切る考えを入れていた。³イエスは、父が全てのものを御自分の手にゆだねられたこと、そして御自分が神から出て来られて神のみもとに行こうとされていることを悟られ、⁴夕食の席から立たれ、上着をわきに置かれ、手ぬぐいを取られて御自分の腰に巻かれた。⁵それから、たらいに水を汲まれて、弟子たちの足を洗われ、腰に巻かれた手ぬぐいでふき始められた。⁶そして、シモン・ペテロのところに来られた。ペテロはイエスに言った「主よ、わたしの足をお洗いになるのですか」。⁷イエスは彼に答えて言われた「わたしがしていることがあなたには今は分からないが、後で理解するだろう」。⁸ペテロはイエスに言った「わたしの足を洗うことなど、決してなさらないでください」イエスは答えて言われた「わたしが洗わないなら、あなたはわたしと何の関係もない」。⁹シモン・ペテロはイエスに言っ

た「主よ、足だけでなく、手も頭もお洗い下さい」。¹⁰イエスはペテロに言われた「体を洗った者は自分の足だけを洗えばよい。全身が清いからだ。あなたがたは清いが、皆が清いわけではない」。¹¹イエスは御自分を裏切ろうとしている者が誰かを御存知だったので、「あなたがたの皆が清いわけではない」と言われたのである。

13: 1「イエスは御自分の時が来たことを悟られ」 イエスは、12使徒と共におられた時から、父なる神との特別な御関係を理解しておられた。

「こよなく愛された」これは十字架上での人類のためのイエスの贖いの御業を指す。

13: 2「夕食の間に」これは多分

1. 夕食後に
2. 最初の祝福の杯を受け、手を洗った後に
3. 三回目の祝福の杯を受けた後に

という意味であると思われる。

特別なトピック： 紀元1世紀のユダヤ教における過ぎ越しの儀式の式次第

- A. 祈る
- B. 一杯の葡萄酒を飲む
- C. 招待主が手を洗い、全員にたらいを回す
- D. 苦いハーブをつけ汁に浸す
- E. 子羊と主菜
- F. 祈り、苦いハーブをつけ汁に浸す(第二の浸漬)
- G. 二杯目の葡萄酒を飲み、子供達と質疑応答
- H. ハレルの詩篇113～114篇を歌い、祈る
- I. 司会が手を洗った後、パンに浸した葡萄酒を一人一人に配る
- J. 全員が満腹するまで食べる。最後に子羊の肉一きれを食べる
- K. 手を洗った後、三杯目の葡萄酒を飲む
- L. ハレルの詩篇115～118篇を歌う
- M. 王国の到来を示す四杯目の葡萄酒を飲む

多くの人は主の晩餐が「K.」で始まると信じている。

「悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心にイエスを裏切る考えを入れていた」 イエスはユダについて初めから知っておられた。

13: 10「体を洗った者」 イエスは贖いについて比喩的に話されている。ペテロは体を洗ってもらったが、神との親密な交わりを維持するためには悔い改め続ける必要がある。この文脈はまた、イエスがユダの裏切りについて話されているとも考えられる。従ってこの沐浴について

の比喻はペテロの体と使徒のグループの両方を指す。

「あなたがたは清いが、皆が清いわけではない」「あなたがた」とは、ユダを除く弟子達の一団を指す。「清い」とは弟子達が受け入れているイエスのメッセージを指す。清い方イエスを信じ、信頼し、信仰の対象とし、受け入れたので弟子達は「清い」のである。

NASB(改訂版)原典: 13: 12-20

¹²弟子たちの足を洗われた後、イエスは上着を身に着けられ、再び食卓に座られてから弟子たちに言われた「わたしがあなた方にしたことが分かるか。¹³あなたがたはわたしを『先生』と、また『主』と呼ぶ。あなたがたがそのように言うのは正しい。わたしはそのような者だからだ。¹⁴だから、主であり先生であるわたしがあなたがたの足を洗ったのなら、あなたがたも互いの足を洗いあうべきだ。¹⁵わたしがあなたがたに模範を与えたのは、わたしがあなたがたにしたのと同じことをあなたがたがすべきだからだ。¹⁶まことに、まことに、あなたがたに言う。召使いはその主人より偉大ではなく、遣わされた者はその者を遣わした者より偉大ではない。¹⁷あなたがたがこれらのことを知っているなら、それらのことを行なうときにあなたがたは幸いである。¹⁸わたしはあなたがた全てについて話しているのではない。わたしは自分が選んだ者たちを知っている。だがそれは『わたしのパンを食べる者がわたしに向かってかかとを上げた』という御言葉が成就するためなのだ。¹⁹今から、それが起きる前にあなたがたに言う。それが起きる時に、わたしが「わたしはある」という者であることをあなたがたが信じるようになるためだ。²⁰まことに、まことに、あなたがたに言う。わたしが遣わす者を受け入れる者はわたしを受け入れるのであり、わたしを受け入れる者はわたしを遣わされた方を受け入れるのである」。

13: 12-20 6～10節とは対照的に、ここではイエスは謙虚さの例として御自身の御業について述べられている。誰が最も偉大かについて使徒達は議論していた。この文脈ではイエスは奴隷の業を行われ、それが何を意味しているかとその適用方法について説明されている。

13: 17「あなたがたがこれらのことを知っているなら、それらのことを行なうときにあなたがたは幸いである」 目標は知識ではなく、キリストのような生活である。

13: 18 これはユダを指している。まず、この聖句は詩篇41: 9からの引用である。東洋では一緒に食事することは友情と約束のしるしであり、このことはユダの罪を強調している。近東では、他者に自分の足の底を見せることは軽蔑のしるしだった。

NASB(改訂版)原典: 13:21-30

²¹イエスはこのことを言われると、霊において苦しまれ、証してこう言われた「まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがたのうち一人がわたしを裏切ろうとしている」。²²弟子たちはイエスが誰について話しておられるのかとうろたえて、互いに見つめ合い始めた。²³弟子の一人で、イエスが愛しておられた者が、イエスの御胸にもたれかかっていた。²⁴それで、シモン・ペテロはその弟

子に合図して言った「主が誰について話しておられるのか教えてくれ」。²⁵その弟子はイエスの御胸にもたれかかりながら尋ねた「主よ、それは誰ですか」。²⁶イエスは答えて言われた「わたしがこのパン切れを浸して与えるのがその者だ」。そこでイエスはパン切れを浸して、それをシモン・イスカリオテの子ユダに与えられた。²⁷イエスが浸したパン切れを与えられると、サタンがユダの中に入った。イエスはユダに言われた「あなたのすることを早くしなさい」。²⁸食卓に着いている者は誰も、なぜイエスがユダにこのことを言われたのかを知らなかった。²⁹というのは、彼らのうちのある者たちは、ユダがお金の箱を持っていたので、イエスは彼に「祭りのためにわたしたちが必要とする物を買いなさい」とか、貧しい人々に何かを与えるようになどと言われたのだと思っていたからである。³⁰それで、浸したパン切れを受け取ると、ユダはすぐに出て行った。夜のことであった。

13: 21「**霊において苦しまれ**」 ユダの裏切りにイエスはとても動揺された。イエスはユダを、霊的強さを理由に弟子として選ばれたが、それは決して実を結ぶことはなかった。

13: 22 側近の(12人の)弟子達は、ある予定された計画によって自分達が裏切り者となるかもしれないと恐れていた。神の御業は人間の自由意志を妨げないが、その(自由意志に従った行動の)結果を強調し確定するのだ。

13: 23「**イエスが愛しておられた者**」 これはヨハネ自身を指しているようだ。

13: 25 この文脈は紀元1世紀のパレスチナの典型的な食事の作法を反映している。弟子たちは、丈の低い馬蹄形のテーブルに一列に席について、左肘にもたれかかり、足を後ろに向けて右の手で食べた。ヨハネはイエスの右に、ユダはイエスの左(名誉の位置)に座った。

13: 26「**わたしがこのパン切れを浸して与えるのがその者だ**」 これは名誉のしるしであった。浸したパン切れとは苦しいハーブと漬け汁の料理であった。

「**イスカリオテ**」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: イスカリオテ

ユダは数年間、主イエスのみもとで御言葉を聞き、御業を見て、主イエスと交わったが、明らかに信仰によるイエスとの個人的な関係は持たなかった。ペテロはユダが受けたのと同じくらいの強い誘惑を受けたが、その結果は大きく異なるものとなった。

13: 29「**ユダがお金の箱を持っていたので**」 ユダは使徒団のお金を管理していた。

NASB(改訂版)原典: 13: 31-35

³¹出て行かれると、イエスは言われた「今や、人の子は栄光を受け、神は子において栄光を受けられた。³²神が子において栄光を受けられたのなら、神は御自身において子にも栄光を与えられ、すぐに子に栄光をお与えになる。³³子らよ、わたしはもうしばらくの間あなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを探すだろう。『わたしが行こうとしている所にあなた方は来る

ことができない』とユダヤ人たちに言ったその通りに、わたしはあなた方にも言う。³⁴わたしは新しい掟をあなたがたに与える。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵あなたがたが互いに愛し合うなら、これによって全ての人は、あなたがたがわたしの弟子だということを知るだろう。

13: 33「わたしが行こうとしている所にあなた方は来ることができない」 イエスの死と復活の歓喜はイエスとイエスの信徒を結びつけた。

13: 35「これによって全ての人は、あなたがたがわたしの弟子だということを知るだろう」 愛はサタンが真似できない特徴の一つである。信徒達は愛によって特徴づけられるべきである。

NASB(改訂版)原典: 13: 36-38

³⁶シモン・ペテロはイエスに言った「主よ、どこへ行かれるのですか」。イエスは答えて言われた「わたしが行こうとしている所に、今はあなたはついて来ることができないが、後について来るだろう」。³⁷ペテロはイエスに言った「主よ、なぜ今わたしはあなたについて行けないのですか。わたしはあなたのために自分の命を捨てるつもりです」。³⁸イエスは彼に答えて言われた「あなたはわたしのために自分の命を捨てるのか。まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがわたしを三度知らないと言うまで、おんどりは鳴かないだろう。

13: 38「あなたはわたしを三度知らないと言うまで、おんどりは鳴かないだろう」 これはローマの雄鶏に違いない。ユダヤ人は都市を神聖な地と考えていたので、都市の中で動物を飼わなかった。このため、裕福な人々の多くはオリーブ山上の城壁の外側に庭園(肥料を必要とした)を持っていた。ゲッセマネの園はそのような庭園の一つだった。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜヨハネは本当の主の晩餐を記録していないのか。
2. なぜイエスは弟子達の足を洗われたのか。私達はお互いの足を洗う必要があるのか。
3. なぜイエスはユダを御自分の弟子に選ばれたのか。
4. 人はどのようにして自分が真のクリスチャンであることを知ることができるか。

ヨハネの福音書14章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

ヨハネ14: 1-31の背景

ヨハネ14章でイエスは「助け主」、つまり聖霊について議論されている。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 14: 1-7

¹「あなたがたは心を騒がせてはいけない。神を信じ、わたしをも信じなさい。²わたしの父の家にはたくさんの住みかがある。そうでなかったなら、わたしはあなたがたに言っただろう。わたしはあなたがたのために場所を用意しに行く。³わたしは行ってあなたがたのために場所を用意したら、再び来てあなたがたをわたしのところに迎える。わたしのいる所にあなたがたもいるようになるためだ。⁴わたしの行こうとしている所をあなた方は知っており、わたしの行こうとしている道も知っている」。⁵トマスがイエスに言った「主よ、わたしたちはあなたがどこへ行こうとしておられるのか知りません。わたしたちはどうしてあなたが行こうとしておられる道を知ることができるでしょうか」。⁶イエスはトマスに言われた「わたしは道であり真理であり命である。わたしを通してでなければ、誰も父のみもとに来ることはない。⁷あなたがたはわたしを知っていたなら父をも知っていただろう。今あなたがたは父を知っており、父を見ている」。

14: 1「... してはいけない」 イエスがこの世を去られるというコメントは使徒達に大きな不安

を抱かせた。

「心」 イエスはイスカリオテのユダ以外の11人全員に話されていた。

「神を信じ、わたしをも信じなさい」 信仰は継続し習慣となる。

14: 2「わたしの父の家には」 旧約聖書では用語「家」は幕屋や神殿の意味で用いられている。しかし、この文脈ではこの用語は明らかに神の家族の住む所、つまり神の神殿の中で神とともに住む場所を意味している。

特別なトピック： 死者はどこにいるのか

旧約聖書によれば、全ての人間は死後に *Sheol* に行く。*Sheol* とは死あるいは墓を指す用語で、神の裁き(火)の関連語であり、旧約聖書においては、薄暗く喜びのない存在であった。新約聖書ではヘブル語の用語 *Sheol* はギリシャ語の用語 *Hades* (見えない世界の意味)に訳される。*Hades* とは死を指す用語で、しばしば永久的な処罰の場所を意味する用語 *Gehenna* の類似語とされる。

14:6「わたしは道である」 イエスは、御自分が神に至る唯一の道であったこと、そして今もそうであることを強調されている。

NASB(改訂版)原典： 14: 8-14

⁸ピリポはイエスに言った「主よ、わたしたちに父をお示してください。わたしたちにとってはそれで十分です」。⁹イエスはピリポに言われた「こんなに長い間わたしはあなたがたと共にいたのに、ピリポ、あなたはわたしを知るようにならなかったのか。わたしを見た者は父を見たのだ。どうしてあなたは『父を示してください』などと言えるのか。¹⁰わたしが父のうちにおり、父がわたしのうちにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに言うことはわたしが自分から話しているのではなく、わたしのうちに住まわれる父が御自分のわざを行なっておられるのである。¹¹わたしが父のうちにおり、父がわたしのうちにおられるというわたしの言葉を信じなさい。そうでなければ、業そのもののために信じなさい。¹²まことに、まことに、あなたがたに言う。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざをも行なうだろう。しかも、それより大きなわざを行なうだろう。わたしが父のみもとへ行こうとしているからだ。¹³あなたがたがわたしの名において求めることは何でも、わたしはそれを行なう。父が子において栄光をお受けになるためだ。¹⁴あなたがたがわたしの名において何かを求めるなら、わたしはそれを行なう。

14: 8「ピリポはイエスに言った」 明らかにピリポは(1)モーセやイザヤやエゼキエルの見たような神の幻(神の顕現)を求めていたか、あるいは(2)イエスの御言葉を完全に誤解していた。

特別なトピック： 効果的な祈り

A. 三位一体の神との個人的な関係に関連する祈り

1. 父なる神の御心に関連する祈り
2. イエスにつながる祈り
3. イエスの御名において祈る
4. 聖霊において祈る
 - a. エペソ6:18 分
 - b. ジュード20

B. 個人的な動機に関連する祈り

1. 動揺しないこと
2. 不適當な要求
3. わがままな要求

C. 個人の選択に関連する祈り

1. 忍耐
2. 家庭内不和
3. 罪
 - a. 節篇66:18
 - b. イザヤ59:1-2
 - c. イザヤ64:7

全ての祈りは答えられるが、全ての祈りが効果的なのではない。祈りは双方向の関係である。

特別なトピック： 主の御名

これは三位一体の神の教会内での個人的御臨在と活動力を述べた、新約聖書の一般的な聖句である。それは魔法の呪文ではなく、神の御性質の現れである。

しばしばこの聖句は主イエスを指す(ピリピ 2: 11 を参照)。

1. 洗礼の際のイエスへの信仰告白のとき(ローマ 10: 9-13、使徒行伝 2: 38、8: 12 と 16 節、10: 48、19: 5、22: 16、I コリント 1: 13 と 15 節、ヤコブ 2: 7 を参照)
2. 悪魔払いの儀式で(マタイ 7: 22、マルコ 9: 38、ルカ 9: 49、10: 17、使徒行伝 19: 13 を参照)
3. いやしの時に(使徒行伝 3: 6 と 16 節、4: 10、9: 34、ヤコブ 5: 14 を参照)
4. 伝道の働きの際に(マタイ 10: 42、18: 5、ルカ 9: 48 を参照)
5. 教会指導の時に(マタイ 18: 15-20 を参照)
6. 異邦人への説教の間に(ルカ 24: 47、使徒行伝 9: 15、15: 17、ローマ 1: 5 を参照)
7. 祈りの中で(ヨハネ 14: 13-14、15: 2 と 16 節、16: 23、I コリント 1: 2 を参照)
8. キリスト教を指す言葉(使徒行伝 26: 9、I コリント 1: 10、II テモテ 2: 19、ヤコブ 2: 7、I ペ

テロ 4: 14 を参照)

私達が宣教者、伝道師、助け手、いやし手、悪魔払いの祈禱師等として何をしようと、私達は神の御性質、御力、備え—つまり神の御名に基づいてそれをしているのだ。

14: 14「あなたがたがわたしの名において何かを求めるなら」 通常、信徒は聖霊において御子を通して父なる神に祈るように奨励されている。

NASB(改訂版)原典: 14: 15-17

¹⁵あなたがたはわたしを愛するなら、わたしの掟を守りなさい。¹⁶わたしは父にお願いしよう。そうすれば父は新たな助け手を与えてくださり、その方が永遠にあなたがたと共にいるようにして下さるだろう。¹⁷この方は真理の霊であり、世はこの方を見ることも知ることもないので受け入れることができない。あなたがたはこの方を知っている。この方があなた方と共におられ、あなたがたのうちにおられることになるからだ。

14: 15「あなたがたはわたしを愛するなら、わたしの掟を守りなさい」 キリストにある神への愛は従順によって表わされる。従順は真の回心の証拠である。

14: 16「新たな助け手」 聖霊は「もう一人のイエス」と呼ばれる。

特別なトピック: イエスと聖霊

聖霊と御子の御業の間には流動性がある。聖霊は「もう一人のイエス」と呼ばれる。聖霊は「イエスの霊」と呼ばれることがある。イエスも聖霊もともに「真実」、「代弁者」、「聖なる方」と呼ばれ、信徒の内に住まわれる。

「その方が永遠にあなたがたと共にいる」 聖霊の御業とは信徒の内にイエスの命を明らかにすることである。

特別なトピック: パウロの *Kosmos*(世界)の使用

パウロは用語 *kosmos* をいくつかの意味で用いている。

1. 全ての創造された秩序(ローマ 1: 20、エペソ 1: 4、I コリント 3: 22、8: 4 と 5 節を参照)
2. この惑星(II コリント 1: 17、エペソ 1: 10、コロサイ 1: 20、I テモテ 1: 15、3: 16、6: 7 を参照)
3. 人類(1: 27-28、4: 9 と 13 節、ローマ 3: 6 と 19 節、11: 15、II コリント 5: 19、コロサイ 1: 6 を参照)
4. 神から離れて組織され機能する人類(1: 20-21、2: 12、3: 19、11: 32、ガラテヤ 4: 3、エペソ 2: 2 と 12 節、ピリピ 2: 15、コロサイ 2: 8 と 20-24 節を参照)。これはヨハネの用法と非常によく似ている(I ヨハネ 2: 15-17)。

5. 現代の世界構造(7: 29-31、ガラテヤ 6: 14 を参照、パウロがユダヤの社会構造について述べたピリピ 3: 4-9 と類似)

ある意味でこれらは重複していて、各用法を分類するのは難しい。この用語は、パウロの思想の多くがそうであるように、予め定められた定義によってではなく直前の文脈によって定義されなければならない。パウロの術語は流動的であった(James Stewart 著 *A Man in Christ* を参照)。彼は組織神学を建て上げようとしていたのではなく、キリストを(世に)示したのだ。彼は全てを変えたのだ!

「この方があなた方と共におられ」 父なる神は御子の内におられ、聖霊は信徒の内におられ、信徒は御子の内にいる。

NASB(改訂版)原典: 14: 18-24

¹⁸わたしはあなたがたを孤児にはしない。わたしはあなたがたのところに来る。¹⁹もうしばらくすると世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見ることになる。わたしが生きているのであなた方も生きるようになるからだ。²⁰その日には、わたしが自分の父のうちにおり、あなたがたがわたしのうちにおり、わたしがあなたがたのうちにいることを、あなたがたは知るだろう。²¹わたしの掟を受け入れてそれを守る人はわたしを愛する人である。わたしを愛する人はわたしの父に愛されるだろう。そして、わたしはその人を愛し、その人に自分を明らかにするだろう」。²²(イスカリオテではない方の)ユダがイエスに言った「主よ、わたしたちに御自分を明らかにしようとしておられるのに世にはそうしようとされないとは、何が起きているのですか」。²³イエスは彼に言われた「わたしを愛するなら、その人はわたしの言葉を守るだろう。わたしの父はわたしを愛され、わたしたちはその方のもとに行き、その方と共に住むだろう。²⁴わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものである」。

14: 20 「その日には」 この聖句は通常は終末論の意味(以下の特別なトピックを見よ)で用いられているが、ここではイエスが復活された後にお姿を現されたこと、あるいは五旬節で聖霊が満ちあふれたことを指していると思われる。

特別なトピック: その日

神はその時に罪に対して御業を行われることになっているが、心と行いを変える人々に対しては悔い改めと赦しの日を備えられている。神の持つておられる、贖いと回復という目的はその時に達成されることになっているのだ。

14: 21「その人に自分を明らかにするだろう」 これは(1)イエスが復活後にお姿を現わされるこ

と、あるいは(2)信徒の内にキリストを明らかにして形造るために聖霊を送られることを指している。

14: 22「(イスカリオテではない方の)ユダ」これはタダイのもう一つの名前だった。

NASB(改訂版)原典: 14: 25-31

²⁵「これらのことを、わたしはあなたがたと共にいる間に、あなたがたに言ってきた。²⁶しかし、助言者、すなわち聖霊、父がわたしの名において遣わされる方は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したことの全てを思い出させてくださるだろう。²⁷わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和をあなたがたに与える。世が与えるのとは異なるようにして与えよう。あなたがたは心を騒がせたり恐れしたりしてはならない。²⁸あなたがたは『わたしは去って行くが、あなた方のところに戻って来る』とわたしが言ったのを聞いた。わたしを愛するなら、あなたがたは『わたしは父のもとに行こうとしている』とわたしが言ったことで喜ぶはずだ。父はわたしより偉大な方だからだ。²⁹今わたしはそれが起きる前にあなた方に言ってきた。それが起きる時にあなた方が信じるためだ。³⁰わたしはもうあなた方と多くは話さないだろう。世の支配者がやって来るからだ。その者はわたしをどのようににもすることはできない。³¹しかし、わたしが父を愛していることを世が知るために、父がわたしに命じられた通りにわたしは行なう。立ちなさい。ここから出て行こう」。

14: 25「これらのこと」これは二階部屋でのお教えを指しているに違いない。

14: 26「聖霊」この用語は三位一体の概念を一語で指している。

特別なトピック: 三位一体

一つの文脈と一緒に述べられている三位一体の3人のお方全員の御業に注意しなさい。用語「三位一体」は Tertullian によって最初に用いられ、聖書用語ではないが、その概念はどこにも見られる。

A. 福音書

1. マタイ 3: 16-17、28: 19(および並列文)
2. ヨハネ 14: 26

B. 使徒行伝—使徒行伝 2: 32-33、38-39 節

C. パウロ

1. ローマ 1: 4-5、5: 1 と 5 節、8: 1-4 と 8-10 節
2. I コリント 2: 8-10、12: 4-6
3. II コリント 1: 21、13: 14
4. ガラテヤ 4: 4-6
5. エペソ 1: 3-14、17 節、2: 18、3: 14-17、4: 4-6

- 6. I テサロニケ 1: 2-5
- 7. II テサロニケ 2: 13
- 8. テトス 3: 4-6
- D. ペテロ— I ペテロ 1: 2
- E. ユダ—ユダ 20-21 節

神の複数形は旧約聖書の中に暗示されている。

- A. 神の複数形の使用
 - 1. 名前 *Elohim* は複数形であるが、神を指して用いられるときには常に単数形動詞を伴う。
 - 2. 創世記 1: 26-27 と 3: 22 と 11: 7 の「われわれ」
- B. 主の天使は神の可視的代表であった。
 - 1. 創世記 16: 7-13、22: 11-15、31: 11 と 13 節、48: 15-16
 - 2. 出エジプト 3: 2 と 4 節、13: 21、14: 19
 - 3. 士師記 2: 1、6: 22-23、13: 3-22
 - 4. ゼカリヤ 3: 1-2
- C. 神と聖霊は分かれている、創世記 1: 1-2、詩篇 104: 30、イザヤ 63: 9-11、エゼキエル 37 章 13-14 節
- D. 神 (YHWH) とメシア (*Adon*) は分かれている、詩篇 45: 6-7、110: 1、ゼカリヤ 2: 8-11、10 章 9-12 節
- E. メシアと聖霊は分かれている、ゼカリヤ 12: 10
- F. 3人のお方全員はイザヤ 48: 16 と 61: 1 で述べられている。

イエスの神性と聖霊の御人格は、厳格で一神教徒の初期信徒達にとって問題となった。

- 1. Tertullian—御子は父なる神に次ぐ地位のお方であるとした。
- 2. Origen—御子と聖霊の神性は父なる神の神性に次ぐものであるとした。
- 3. Arius—御子と聖霊の神性を否定した。
- 4. 君主論—父なるただお一人の神、御子、聖霊の順に連続的に(お姿を)現されると信じた。

三位一体は聖書的な資料の情報に基づいて歴史的に発展した明確な表現である。

- 1. イエスの完全な神性が父なる神の神性と等しいことは紀元 325 年にニケーアの公会議で承認された。
- 2. 聖霊の完全な御人格と神性が父なる神および御子の神性と等しいことはコンスタンチノーブルの公会議(紀元 381 年)で承認された。
- 3. 三位一体の原理はアウグスティヌスの著書 *De Trinitate* に全て表現されている。

ここに真の謎がある。しかし新約聖書は3人の永遠なるお方達の中にある神性は一つであることを認めているようだ。

特別なトピック： 聖霊の御人格

旧約聖書では「神の霊」(つまり *ruach*) は YHWH の御意志を達成する力であったが、それが人格を持つ(つまり旧約聖書の一神教主義)ことは示されていない。しかし、新約聖書には聖霊の御人格の全てが記されている。

1. 聖霊は冒瀆されることがある(マタイ 12: 31、マルコ 3: 29 を参照)
2. 聖霊は教えられる(ルカ 12: 12、ヨハネ 14: 26 を参照)
3. 聖霊は弁護される(ヨハネ 15: 26 を参照)
4. 聖霊は確信と導きを与えられる(ヨハネ 16: 7-15 を参照)
5. 聖霊は「... でいらっしやる方」(つまり *hos*) と呼ばれる(エペソ 1: 14 を参照)
6. 聖霊は悲しまれることがある(エペソ 4: 30 を参照)
7. 聖霊は消されることがある(I テサロニケ 5: 19 を参照)

三位一体説を述べた聖書箇所も3つの御人格について述べている。

1. マタイ 28: 19
2. II コリント 13: 14
3. I ペテロ 1: 2

聖霊は人の活動に関与される。

1. 使徒行伝 15: 28
2. ローマ 8: 26
3. I コリント 12: 11
4. エペソ 4: 30

使徒行伝の冒頭では聖霊の役割が強調されている。ペンテコステは聖霊のお働きの始まりではなく、新しいお働きの始まりであった。イエスは常に聖霊を伴われた。聖霊のバプテスマは聖霊のお働きの始まりではなく、新しいお働きの始まりであった。ルカは新たに効果的な伝道の働きを始めるために教会を備えた。イエスは常に父なる神の愛の中心であられ、聖霊は常に父なる神の愛を受け取るための有効な手段であられる。そして神のお姿に似せて造られた全ての人類の赦しと回復が目標なのだ。

14: 27「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和をあなたがたに与える」 信徒の平和は、状況ではなくイエスのお約束と御臨在に基づく心の安らかさに関係する。

特別なトピック: キリスト教と平和

このギリシャ語の用語は元々「壊れたものをつなぎ合わせる」という意味を持つ。新約聖書では平和について3つのことが述べられている。

1. キリストを通した神と私達の間での平和の客観的側面
2. 私達が神の前に義とされることの主観的側面
3. 神がユダヤ人信徒と異邦人をキリストを通して一つの新しい体に統合されること

14: 30「世の支配者」 これは今や地にはびこるサタンを指す。エペソの2:2、“王子空気のカ”)、おそらく、イエスは、サタン(参照1:27)の到来とユダのままを見た.12:31スペシャルトピックを参照してください。

「その者はわたしをどのようににもすることはできない」 これは、サタンがイエスを非難する根拠は何もないということを意味する。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 1節に基づいて有神論と理神論とキリスト教の違いを説明しなさい。
2. 6節に見られる3つの名詞に関する旧約聖書の背景を説明しなさい。
3. 13節だけで祈りの神学を構成することはできるか。
4. 聖霊の主な目的(失われた人と救われた人の両方について)は何か。
5. サタンは神の御心の内にいるか。

ヨハネの福音書15章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

ヨハネ15: 1-27の文脈の洞察

この章は信徒に神の愛という大きな励ましを与えるているが、重大な警告でもある。この章の段落の切れ目は不明確であり、同じ主題が何度も繰り返されている。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 15: 1-11

「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父はぶどう園の園丁でいらっしやる。²わたしのうちにある、実を結ばない枝を父はすべて取り除かれる。父は、実を結ぶ枝を全て、それがもっと実を結ぶようにするために刈り込まれる。³わたしがあなたがたに話してきた言葉によって、あなたがたはすでにきれいに刈り込まれている。⁴わたしのうちにとどまりなさい。そうすればわたしはあなたがたのうちにとどまる。枝がぶどうの木につながっていなければ自分では実を生み出すことができないように、あなたがたもわたしのうちにとどまっていなければ実を生み出すことはできない。⁵わたしはブドウの木であり、あなたがたはその枝である。わたしのうちにとどまり、わたしもそのうちにとどまっている者はたくさんの実を生み出す。あなたがたはわたしを離れては何もできないからだ。⁶わたしのうちにとどまらないならその者は枝のように切り捨てられて枯れる。そして集められて火の中に投げ込まれ、燃やされる。⁷あなたがたがわたしのうちにとどまり、わたしの言葉があなた方のうちにとどまるなら、自分たちの望

むことを何でも求めなさい。そうすればあなたがたにそのことが果たされるだろう。⁸あなたがたが多くの実を生み出し、そのことによってあなたがたがわたしの弟子となること、このことによってわたしの父は栄光をお受けになる。⁹父がわたしを愛してこられたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛のうちにとどまりなさい。¹⁰あなたがたがわたしのおきてを守るなら、あなたがたはわたしの愛のうちにとどまるだろう。それはちょうど、わたしが父のおきてを守り、父の愛のうちにとどまっているのと同じである。¹¹わたしがあなたがたにこれらのことを話してきたのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにとどまり、あなたがたの喜びが満ちるようになるためである。

15: 1「私はまことのぶどうの木であり」 ここでイエスは御自身について「わたしは『ある』」とおっしゃっている。旧約聖書ではぶどうはイスラエルの象徴だった。イエスは御自身を理想的なイスラエル人であると断言されている。

「わたしの父はぶどう園の園丁でいらっしゃる」 ここでもイエスは父なる神との親密な御関係と御自分が父なる神の御心に従われていることを断言されている。

15: 2「わたしのうちにある、実を結ばない枝を父はすべて取り除かれる」 発芽ではなく結実が救いの証しである。この文脈はイエスがイスカリオテのユダの裏切りあるいは偽の弟子について話されていたことを暗示している。

「父は、実を結ぶ枝を全て、それがもっと実を結ぶようにするために刈り込まれる」 これは文字通り「清め」である。

15: 3「あなたがたはすでにきれいに刈り込まれている」 この文脈全体には真の弟子の証しが述べられている。

15: 5「わたしのうちにとどまり、わたしもそのうちにとどまっている者はたくさんの実を生み出す」 継続的な(神との)交わり(個人的な信仰の関係)は継続的な結実の源である。

15: 6「わたしのうちにとどまらないならその者は枝のように切り捨てられて枯れる」 これはイスカリオテのユダと、多分(一部の)イスラエルの民を指しているようだ。そうでなければそれは偽の信仰を指しているに違いない。

「火」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック： 火

聖書では火は正と負の両方の意味を持つ。正の意味は暖かさ、調理、浄め、聖さ、神の主導権、神の権限、保護であり、負の意味は火傷、破壊、怒り、処罰、偽の終末論的しるしである。罪に対する神のお怒りは火を用いた比喻、例えば怒りの炎、火災の吐出、永遠の火、終わりの時の裁きなどで表現される。聖書における火の例えは文脈に応じて祝福にも呪いにもなりうる。

15: 8「わたしの父は栄光をお受けになる」 信者がキリストのように生活することは神に栄光をもたらし、彼らが真の弟子であることの証しとなる。

15: 11「あなたがたの喜びが満ちるようになるためである」 信者はイエスの喜びを受け取らなければならない。喜びは真の弟子のもう一つの証しである。この世には痛みや危機があるが、キリストにあっては喜び、つまり完全な喜び、言い換えればイエスの喜びがある。

NASB(改訂版)原典: 15: 12-17

¹²「わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたが互いに愛し合うこと、これがわたしのおきてである。¹³人がその友のために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない。¹⁴わたしがあなたがたに命じることを行なうなら、あなたがたはわたしの友である。¹⁵もはやわたしはあなたがたを召使いとは呼ばない。召使いはその主人が行なうことを知らないからだ。しかし、わたしはあなたがたを友と呼ぶ。わたしの父から聞いたことの全てを、わたしはあなたがたに知らせたからだ。¹⁶あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなた方を選んで任命し、あなたがたが行って実を結びそしてあなたがたの実が残るようにしたのだ。それはあなたがたがわたしの名において父に求めることは何でも父があなた方に与えてくださるようになるためだ。¹⁷あなたがたが互いに愛し合うこと、これがわたしがあなた方に命じることである。

15: 12「あなたがたが互いに愛し合うこと」 愛は霊の実である。愛は感情ではなく行いである。

「わたしがあなたがたを愛したように」 これは多分十字架を比喩的に指していると思われる。

NASB(改訂版)原典: 15: 18-25

¹⁸世があなたがたを憎んでも、世はあなたがたを憎む前にわたしを憎んだことをあなたがたは知っている。¹⁹あなたがたが世のものであったなら、世はそれ自身のもを愛するだろう。しかしあなたがたは世のものではないので、わたしはあなたがたを世から選び出した。このために世はあなたがたを憎むのだ。²⁰『召使いはその主人より偉大ではない』とわたしがあなたがたに言った言葉を覚えておきなさい。世の人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するだろう。彼らがわたしの言葉を守ったなら、あなたがたの言葉も守るだろう。²¹だが彼らはわたしの名のためにあなたがたに対してこれら全てのことを行なうだろう。彼らはわたしを遣わされた方を知らないからだ。²²わたしが来て彼らに話さなかったら、彼らには罪がなかっただろう。しかし今、彼らには自分たちの罪のための言い訳がない。²³わたしを憎む者はわたしの父をも憎む。²⁴他の誰も行わなかったわざをわたしが彼らの間で行なわなかったら、彼らには罪がなかっただろう。しかし今、彼らはわたしもわたしの父をも見て憎んでいるのだ。²⁵しかし、彼らがこのことをしたのは、彼らの律法に書いてある『彼らは理由なくわたしを憎んだ』という言葉が成就するためなのだ。

15: 18「世はあなたがたを憎む前にわたしを憎んだ」 信徒はキリストの愛にあって1つであり、キリストの迫害にあって一つである。キリストと一つになることは平和も喜びも迫害も、あるいは死でさえももたらすのだ。

NASB(改訂版)原典: 15: 26-27

²⁶「わたしが父のみもとからあなたがたのところに遣わそうとしている助け主、すなわち父のみもとから真理の霊が来られるとき、その方はわたしについて証しされるだろう。²⁷そしてあなたがたも、はじめからわたしと共にいたのだから証しするだろう。

15: 26「わたしが... あなたがたのところに遣わそうとしている助け主、... が来られるとき」 父なる神も御子も聖霊を送られる。贖いの御業は三位一体の神の全ての御人格が関与されるのだ。

「真理の霊」これは、父なる神を明らかにされる聖霊の意味で用いられている。

「その方はわたしについて証しされるだろう」 聖霊の御業とはイエスとイエスのお教えを証しすることである。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 「とどまること」は何に関係するか。
2. どのようにして信徒はとどまることを止めるのか。どのようにして信徒は実を結ばなくなるのか。
3. 真の弟子の証しを挙げなさい。
4. 苦難がキリスト教徒の定めなら、それは現代の私達に何を語るか。
5. 16節を自分の言葉で説明しなさい。

ヨハネの福音書16章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

ヨハネ16: 1-33の文脈の洞察

文章上の文脈は15: 18から16: 4前半まで続く。章の分割は神の啓示によるものではなく、ずっと後の時代に追加や段落付けや大文字表記や句読点付けや節の分割がなされた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 16: 1-4

「わたしがこれらのことをあなたがたに話してきたのは、あなたがたがつかまづかないようにするためである。²彼らはあなた方を会堂から追い出すだろう。しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕をささげたのだと思う時が来ようとしている。³彼らは父もわたしも知らないの、これらの事を行なうことになる。⁴しかし、わたしはこれらのことをあなたがたに言ってきた。彼らの時が来るときに、わたしがそのことについてあなたがたに言ったことをあなたがたが思い出すようにするためだ。わたしはこれらのことをはじめからはあなたがたに言わなかった。わたしがあなたがたと共にいたからだ」。

16: 2「彼らはあなた方を会堂から追い出すだろう」これは、ユダヤ教からの破門を指す。「あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕をささげたのだと思う時が来ようとしている」これはまさにユダヤ人の指導者たちの考えである。

NASB(改訂版)原典: 16: 5-11

⁵しかし今、わたしは自分を遣わされた方のもとに行こうとしている。それでも、あなたがたのうちの誰も『どこに行こうとされているのですか』とは尋ねない。⁶わたしがこれらのことをあなたがたに言ってきたために、悲しみがあなたがたの心を満たしている。⁷それでもわたしはあなたがたに真実を言う。わたしが去って行くことはあなたがたの益になるのだ。それは、わたしが去って行かなければ助け主はあなたがたのところに来ないが、わたしが行けばわたしはその方をあなたがたに遣わすことになるからだ。⁸その方は来られると、罪について、義について、また裁きについて、世を責められるだろう。⁹罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからだ。¹⁰義についてというのは、わたしが自分の父のみもとに行こうとしており、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからだ。¹¹裁きについてというのは、世の支配者が裁かれたからだ。

16: 7「わたしが去って行くことはあなたがたの益になるのだ」 聖霊が来られることによって神のさらなる御業の新しい世が始まることになる。

NASB(改訂版)原典: 16: 12-15

¹²「わたしにはあなたがたに言うべきことがたくさんあるが、あなたがたは今それに耐えられない。¹³しかしその方、すなわち真理の霊が来られるときには、その方はあなたがたをあらゆる真理に導かれるだろう。その方は御自分から語られるのではなく、何でも自分がお聞きになることを語られることになるからだ。その方はあなたがたにこれから起ころうとしていることを明らかにされるだろう。¹⁴その方はわたしの栄光を現わされるだろう。その方はわたしのものを受けられて、あなたがたにそれを明らかにされるからだ。¹⁵父が持つておられるものはすべてわたしのものである。それでわたしは、その方がわたしのものを受けられ、それをあなたがたに明らかにされることになると言ったのだ。

16: 12「あなたがたは今それに耐えられない」 使徒達は、復活後にイエスがお姿を現わされ、五旬節で聖霊が降臨されて満ちられるまで、多くのことを理解しなかった。

特別なトピック: 啓蒙

神は過去に、人類に御自身を明らかにされた。神学では、これは啓示と呼ばれている。神は御自分の民が御自分の言葉を理解できるように御自分の霊を送られた。神学では、これは啓蒙と呼ばれている。

16: 14-15「その方はわたしの栄光を現わされるだろう。その方はわたしのものを受けられて、あなたがたにそれを明らかにされるからだ」 聖霊の主な御業は救世主イエスをあがめ、そしてイエスについて説明されることである。聖霊は決して御自身が栄光を受けようとはなさらず、常

にイエスの栄光を現わされる。

NASB(改訂版)原典: 16: 16-24

¹⁶「しばらくするとあなたがたはもはやわたしを見なくなる。またしばらくするとあなたがたはわたしを見ることになる」。 ¹⁷そこで弟子たちの何人かは互いに言い合った「『しばらくするとあなたがたはわたしを見なくなり、またしばらくするとあなたがたはわたしを見ることになる』とか『わたしは父のもとに行くからだ』と主は言われるが、これは何のことだろう」。 ¹⁸そこで彼らは言った「『しばらくすると』と主は言われるが、これは何のことだろう。我々は主の言われることが分からない」。 ¹⁹そこでイエスは、弟子たちが御自分に尋ねたがっているのに気づかれて彼らに言われた「あなた方は互いに、『しばらくするとあなたがたはわたしを見なくなり、またしばらくするとあなたがたはわたしを見ることになる』とわたしが言ったこのことについて尋ね合っているのか。 ²⁰まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがたは泣き悲しむが、世は喜ぶだろう。あなたがたは悲しみ嘆くが、あなたがたの悲嘆は喜びに変えられることになる。 ²¹女は子を産むとき、自分の時が来たことで痛みを覚える。しかし子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれたという喜びのために、もはやその痛みを覚えていない。 ²²だからあなたがたも、今は嘆き悲しみがあるが、わたしが再びあなたがたを見ることになるので、あなたがたの心は喜び、そしてその喜びをあなたがたから取り去る者はいないだろう。 ²³その日にはあなたがたはわたしに何も尋ねることはないだろう。まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがたがわたしの名において父に何かを求めるなら、父はそれをあなた方に与えてくださる。 ²⁴今まであなたがたはわたしの名において何も求めたことがない。求めなさい。そうすればあなたがたは受けるだろう。それはあなた方の喜びが満たされるようになるためだ。

16: 23「その日」これは一般に新しい世の到来に関連するもう一つのヘブライ語の慣用句である。

NASB(改訂版)原典: 16: 25-28

²⁵これらのことをわたしはあなたがたにたとえで話してきた。しかし、わたしがもはやあなたがたにたとえで話すのではなく、父についてはっきりと言うことになる時が来ようとしている。 ²⁶その日にはあなたがたはわたしの名によって求めることになる。そしてわたしはあなたがたに、わたしがあなたがたの代わりに父に願うことになるとは言わない。 ²⁷父御自身があなたがたを愛しておられるからだ。それは、あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のみもとから出たことを信じているからだ。 ²⁸わたしは父のみもとから出て世に来ている。わたしは再び世を去り、父のみもとに行こうとしている」。

16:27「それは、あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のみもとから出たことを信じているか

らだ」愛とイエスへの信仰は父なる神との交わりの場を設ける。

NASB(改訂版)原典: 16: 29-33

²⁹弟子たちは言った「主よ。今あなたははっきりと話しておられ、何のたとえも話されていません。³⁰今わたしたちはあなたがすべてのことを御存知で、誰もあなたに質問する必要のないことが分かっています。このことによって、わたしたちはあなたが神のみもとから来られたということ信じます」。³¹イエスは彼らに答えて言われた「あなた方は今は信じているのか。³²見よ、あなたがたが皆自分自身の故郷に散らされてわたしをひとりにする時が来ようとしている。いや、すでに来ている。それでも、わたしはひとりではない。父がわたしと共におられるからだ。³³わたしにあってあなたがたに平和があるように、わたしはあなたがたにこれらのことを話してきた。世にあってあなた方には苦しみがあるが、元気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。

16: 33「わたしにあってあなたがたに平和があるように」 客観的平和と主観的平和はともにキリストのうちに見出され維持される。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 15章と16章の関係は何か。
2. 5節に関連して、私達はどのように13:36を理解するか。
3. 失われた世界に対する聖霊のお働きとは何か。
4. 信徒に対する聖霊のお働きとは何か。
5. 26～27節はなぜ現代の教派の傾向を理解するうえで必要な、とても重要な真理なのか。

ヨハネの福音書17章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～26節の文脈の洞察

この章には、御自身と弟子達と未来の信徒達のためのイエスの大祭司としての祈りが述べられている。この祈りは記録にあるイエスの祈りの中で最も長い。同じ主題が何度も繰り返されているのでこの章の分割は困難である。この章では聖霊について述べられていない。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 17: 1-5

¹イエスはこれらのことを言われてから、御目を天に上げられて言われた「父よ、時が来ました。あなたの子の栄光を現わしてください。あなたの子もあなたの栄光を現わすためにです。²それは、あなたが子に全ての肉なる者に対する権威を与えてくださり、子があなたのゆだねられた者全てに永遠の命を与えることになるのと同じようにです。³唯一のまことの神であるあなたとあなたが遣わされたイエス・キリストを彼らが知るようになること、これが永遠の命です。⁴わたしはあなたがわたしに行なうように与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。⁵今、父よ、世が存在する前にわたしがあなたのみもとで持っていた栄光を、御前でわたしにお与えください。

17: 1「時が来ました」 イエスは御自身のお働きの目的と時機を知っておられた。

特別なトピック： 選び

選びは素晴らしい教義である。しかしそれは情実(えこひいき)への召しではなく、他者の救いのための道であり道具であり手段なのだ。旧約聖書ではこの用語は主に奉仕について用いられたが、新約聖書ではそれは主に奉仕によってもたらされる救いについて用いられている。聖書は神の主権と人類の自由意志の間の明らかな矛盾に決して妥協せず、両者についてはっきり述べているのだ。この聖書的な緊張の良い例はローマ9章の神の主権による選びとローマ10章の人類の応答の必要(10: 11 と 13 節を参照)であろう。

この神学的な緊張の本質はエペソ 1: 4 に見られる。イエスは神に選ばれたお方であり、全ての人が彼によって選ばれたのは確かなことである(Karl Barth)。墮落した人類の必要に対する神の「はい(了解しました)」はイエスである(Karl Barth)。エペソ 1: 4 はまた、予め定められた運命の最終が天国ではなく聖き(キリストらしき)であることを主張することによってこの問題を明らかにすることを助けている。私たちはしばしば福音の恩恵に魅了されて責任を忘れることがあるのだ。神の召し(選び)は時間と永遠のためにあるのだ。

教義は他の真理とも関連をもつようになるが、それは単なる無関係の真理との関連のようにではない。それは星座と一つの星との関係によく似ている。神の真理は西洋の文献にではなく東洋の文献に現れている。対極的な(逆説的な)2つの教義上の真理(超自然的な神対宇宙遍在的な神。例:安全対忍耐、父なる神と対等のイエス対父なる神の従者のイエス、クリスチャンの自由対契約の相手に対するクリスチャンの責任、等)の間の緊張を私達は取り除いてはいけない。

「契約」の神学的概念は(常に主導権を取られ綱領をつくられる)神の主権と人類からの義務的に始められ継続する悔い改めと信仰の応答(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)とを結び付ける。逆説の一方だけを信じて他方を軽視して御言葉を解釈しないように注意しなさい。あなたの好きな教義や神学体系だけを主張することのないようにしなさい。

特別なトピック： 一神教

聖書的な一神教の特徴は

1. 神はただお1人の独特な方でいらっしゃる。
2. 神は人でいらっしゃる。
3. 神は倫理的でいらっしゃる。
4. 神は交わりのために御自身のお姿に似せて人類を造られた。
5. 神は3つの永遠の御人格をお持ちである。

特別なトピック： ヨハネの著書における「真実」(用語)

1. 父なる神
 - A. 神は真実で信頼に値する方でいらっしゃる。

- B. 神の道は真実である。
 - C. 神の裁きは真実である。
 - D. 神のお言葉は真実である。
2. 神の御子
- A. 御子は真理であり真実でいらっしゃる。
 - B. 御子の証しは真実である。

NASB(改訂版)原典: 17: 6-19

⁶「あなたが世から選び出してわたしに与えてくださった者たちに、わたしはあなたの御名を明らかにしてきました。彼らはあなたのものであり、あなたは彼らをわたしに与えてくださり、彼らはあなたの御言葉を守ってきました。⁷今彼らは、あなたがわたしに与えてくださった全てのことがあなたから出たことを知るようになりました。⁸それは、あなたがわたしに与えてくださった御言葉をわたしが彼らに与えてきたからです。そして、彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたのみもとから来たことをはっきりと理解し、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。⁹わたしは彼らのためにお願いします。わたしは世のためにではなく、あなたがわたしに与えてくださった者たちのためにお願いします。彼らはあなたのもものだからです。¹⁰わたしのものは全てあなたのものであり、あなたのもものは全てわたしのものです。そしてわたしはそれらにあって栄光を受けています。¹¹わたしはもはや世にいませんが、彼ら自体は世にあります。そして、わたしはあなたのもとに行きます。聖なる父よ、あなたがわたしに与えてくださったあなたの御名にあって彼らを守ってください。それは、わたしたちが一つであるように彼らも一つになるためです。¹²わたしが彼らと共に世にいた間、わたしはあなたの御名において彼らを守りました。あなたがわたしに与えてくださった者たちをわたしは守ってきました。そのため、滅びの子を除いては彼らのうちのだれも失われませんでした。それは聖書が成就するためでした。¹³しかし今、わたしはあなたのもとに行きます。わたしが世にあってこれらのことを話すのは、彼らが自分たちの内に満ちるようになるわたしの喜びを持つためです。¹⁴わたしは彼らにあなたの御言葉を与えてきました。世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないのと同じように、彼らも世のものではないからです。¹⁵彼らを世から取り去るのではなく、彼らを悪い者から守ってくださるようにならなければなりません。¹⁶わたしが世のものでないのと同じように、彼らも世のものではありません。¹⁷真理のうちに彼らを聖別してください。あなたの御言葉は真理です。¹⁸あなたがわたしを世に遣わされたのと同じように、わたしも彼らを世に遣わしました。¹⁹わたしは彼らのために自分を聖別します。彼ら自身も真理のうちに聖別されるようになるためです」。

17: 9「わたしは彼らのためにお願いします」 イエスは私達の仲介者であり支持者でいらっしゃる。

特別なトピック： 神聖な

旧約聖書では用語「神聖な」は物事、場所、時間、そして人における神の御臨在に関連している。新約聖書には、イエスは罪のない方で、神のものであり神に似た方でいらっしゃるの、神聖で義なる方でいらっしゃる」と記されている。

17: 12「滅びの子」 これは明らかにイスカリオテのユダを指している。

NASB(改訂版)原典： 17: 20-24

²⁰「わたしはこれらの者たちのためだけではなく、彼らの言葉を通してわたしを信じる者たちのためにもお願いします。²¹父なるあなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるのと同じように彼らが皆一つとなるように、また彼らもあなたの内にいるようにして下さい。それは、あなたがわたしを遣わされたことを世が信じることができるようにするためです。²²あなたがわたしに与えられた栄光をわたしは彼らに与えてきました。それは、わたしたちが一つであるのと同じように彼らが一つとなることができるようにするためです。²³わたしは彼らの内におり、あなたはわたしの内におられます。それは彼らが完全に一つとなることができるようにするためであり、あなたがわたしを遣わされたこと、そしてあなたがわたしを愛してこられたのと同じようにあなたが彼らを通しておられることを世が知るようになるためです。²⁴父よ、あなたがわたしに与えられた彼らもわたしがいるところに共にいることをわたしは願います。それは、あなたがわたしに与えられた栄光を彼らが見ることができるようにするためです。なぜなら、世が形造られる前にあなたがわたしを愛しておられたからです」。

17: 21「それは、あなたがわたしを遣わされたことを世が信じることができるようにするためです」一致の目的は福音伝道である。

NASB(改訂版)原典： 17: 25-26

²⁵義なる父よ、世はあなたを知りませんでした、わたしはあなたを知っており、これらの者たちはあなたがわたしを遣わされたことを知っています。²⁶わたしはあなたの御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせるつもりです。それは、あなたのわたしへの愛が彼らの内にあり、わたしが彼らの内にいるようにするためです」。

17: 25「わたしはあなたを知っており」イエスは神についての最高で最も正確な情報源である。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そ

して聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜこの祈りは神学的にとても重要なのか。
2. (イスカリオテの)ユダは恵みに与ることのできなかつた信徒なのか。
3. 私達の一致の目的は何か。
4. イエスが世のできる前からおられたということはなぜ重要なのか。
5. この文脈において重要な用語を定義しなさい。
 - A. 「栄光を与える」
 - B. 「与える」
 - C. 「知る」
 - D. 「送る」
 - E. 「名前」
 - F. 「世」

ヨハネの福音書18章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

18: 1-40 の文脈の洞察

使徒ヨハネはゲッセマネでのイエスの御苦難を省略している。この章での出来事の記録順序は共観福音書群とは多少異なっている。この不一致は目撃証言の性質や著者の神学的な目的に起因すると思われる。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 18: 1-11

¹イエスはこれらのことを話されてから、弟子たちと一緒にキドロンの谷間の上の方に行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちと一緒にその園に入られた。²イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。そこでイエスがしばしば弟子たちとお会いになっていたからである。³そこでユダは、祭司長とパリサイ人たちが遣わしたローマの歩兵隊と下役たちを連れてその場所にやって来た。彼らは提灯と松明と武器を手にしていた。⁴イエスは御自分の身に起こることを全て知っておられたので、進み出られて彼らに言われた「誰を捜しているのか」。⁵彼らはイエスに答えて言った「ナザレのイエスだ」。イエスは彼らに言われた「わたしがイエスだ」。そのとき、イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒に立っていた。⁶イエスが彼らに「わたしがイエスだ」と言われたとき、彼らは後ずさりして地に倒れた。⁷そこでイエスは再び彼らに「誰を捜しているのか」とお尋ねになった。彼らは「ナザレのイエスだ」と言った。⁸イエスは答えて言われた「『わたしがイエスだ』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、これらの人々は去らせなさい」。⁹それは「あ

あなたがわたしに与えてくださった人をわたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの御言葉が成就するためであった。¹⁰シモン・ペテロは剣を持っていたので、それを鞘から抜いて大祭司のしもべに打ちかかり、その者の右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。¹¹イエスはペテロに言われた「剣を鞘に収めなさい。父がわたしにお与えになった杯を、わたしは飲むべきではないか」。

18: 1「園」 この章にはゲッセマネでのイエスの御苦悩が全く記されておらず、代わりに園でのイエスの逮捕という出来事が記されている。この園でイエスは好んで休息された。イエスは明らかにこの世での御生涯の最後の週をここで過ごされた。

特別なトピック: 選びおよび予め定められた運命と神学的バランスの必要

選びは素晴らしい教義である。しかしそれは情実(えこひいき)への召しではなく、他者の救いのための道であり道具であり手段なのだ。旧約聖書ではこの用語は主に奉仕について用いられたが、新約聖書ではそれは主に奉仕によってもたらされる救いについて用いられている。聖書は神の主権と人類の自由意志の間の明らかな矛盾に決して妥協せず、両者についてはっきり述べているのだ。この聖書的な緊張の良い例はローマ9章の神の主権による選びとローマ10章の人類の応答の必要(10: 11 と 13 節を参照)であろう。

この神学的な緊張の本質はエペソ 1: 4 に見られる。イエスは神に選ばれたお方であり、全ての人が彼によって選ばれたのは確かなことである(Karl Barth)。墮落した人類の必要に対する神の「はい(了解しました)」はイエスである(Karl Barth)。エペソ 1: 4 はまた、予め定められた運命の最終が天国ではなく聖さ(キリストらしさ)であることを主張することによってこの問題を明らかにすることを助けている。私たちはしばしば福音の恩恵に魅了されて責任を忘れることがあるのだ。神の召し(選び)は時間と永遠のためにあるのだ。

教義は他の真理とも関連をもつようになるが、それは単なる無関係の真理との関連のようにではない。それは星座と一つの星との関係によく似ている。神の真理は西洋の文献にではなく東洋の文献に現れている。対極的な(逆説的な)2つの教義上の真理(超自然的な神対宇宙遍在的な神。例:安全対忍耐、父なる神と対等のイエス対父なる神の従者のイエス、クリスチャンの自由対契約の相手に対するクリスチャンの責任、等)の間の緊張を私達は取り除いてはいけない。

「契約」の神学的概念は(常に主導権を取られ綱領をつくれる)神の主権と人類からの義務的に始められ継続する悔い改めと信仰の応答(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)とを結び付ける。逆説の一方だけを信じて他方を軽視して御言葉を解釈しないように注意しなさい。あなたの好きな教義や神学体系だけを主張することのないようにしなさい。

特別なトピック: ナザレのイエス

新約聖書ではイエスについて述べるためにいくつかの相異なるギリシャ語の用語が用いられて

いる。

A. 新約聖書で用いられている用語

1. ナザレ

ガリラヤの都市(ルカ1: 26、2: 4と39節と51節、4: 16、使徒行伝10: 38を参照)。この都市は同時代の文献には登場せず、後の時代の碑文にその名が見られる。

イエスにとって、ナザレ出身であると言われることはほめ言葉ではなかった(ヨハネ1: 46を参照)。この地の名が含まれる、イエスの十字架の上のしるしはユダヤ人の軽蔑のしるしだった。

2. *Nazarenos* -これも地理上の位置を指しているように思われる(ルカ 4: 34、24: 19を参照)

3. *Nazoraïos* -ある都市を指しているように思われるが、ヘブライ語でメシアを意味する用語「(英字表記で)Branch」(*netzer*、イザヤ4: 2、11: 1、53: 2、エレミヤ23: 5、33: 15、ゼカリヤ3: 8、6: 12、新約聖書では黙示録22: 16を参照)についての言葉遊びとも考えられる。ルカはこの用語を18: 37と使徒行伝2: 22、3: 6、4: 10、6: 14、22: 8、24: 5、26: 9でイエスを指して用いている。

4. 上記の3.に関して、「誓いにより聖別された人」という意味の*nazir* が用いられている。

B. 新約聖書以外の歴史的な用法

1. 「ナザレ人」とはユダヤ人(キリストが来られる以前)の異端グループ(アラム語の *nasorayya*)を示す。

2. 「ナザレ人」はユダヤ人の共同体においてキリストの信者達を言い表すために用いられていた用語(使徒行伝24: 5と14節および28: 22の *nosri* を参照)であった。

3. 「ナザレ人」はシリア(アラム)の諸教会の信徒達を示す一般的な用語になった。「クリスチャン」はギリシャの諸教会において信徒達を示すために用いられていた。

4. エルサレム陥落後のある時、パリサイ派はヤムニアにおいて再編成され、シナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)と教会の間の正式な分離を扇動した。キリスト教徒に対するある種の呪いの文言の一例が、*Berakoth* 28b-29aの「18祝福」に見られる。この書では信徒が「ナザレ人」と呼ばれている。

「ナザレ人と異端が一瞬で消えてしまいますように。これらの者達は生命の本から消され、忠実な者達などと記されるべきではありません。」

5. 殉教者ユスティヌスは自著 *Dialogue* 126: 1で用語「ナザレ人」を用いた。彼はイザヤ書の中の *netzer* をイエスを指す用語として用いた。

C. 著者の意見

「ヨシュア」にヘブル語でいくつかの異なる綴りがあるように、この用語(ナザレ)が旧約聖書では聞き慣れないものであると知っているにもかかわらず、この用語にとっても多くの綴りがあることに私は驚いている。以下の事柄を理由に私はこの用語の正確な意味を不明なままにしている。

1. メシアを意味する用語(英字表記で)Branch(*netzer*)と類似の用語*nazir* (誓いにより聖別

された人)との密接な関係

2. ガリラヤの負の意味
3. ガリラヤの都市ナザレの(存在等の)同時代の証拠がほとんどあるいは全くない
4. この用語は終末論的な意味で悪魔の口から出たものである(つまり「あなたは私たちを滅ぼすために来たのか」)

この用語群の研究に関する文献で十分な内容を持つものとしては、Colin Brown編*New International Dictionary of New Testament Theology* 第2巻346ページとRaymond E. Brown著*Birth* の209～213ページおよび223～225ページを見よ。

18: 6「彼らは後ずさりして地に倒れた」これは畏敬の念ではなく恐怖を意味する。

18: 11「杯」これは通常、人の運命を否定的な意味で象徴するものとして旧約聖書で用いられている比喻である。ここでの「杯」の用いられ方は、共観福音書群におけるゲッセマネでのイエスの御苦悩の記述に見られる「杯」とは大きく異なる。

NASB(改訂版)原典: 18: 12-14

¹²そこでローマの歩兵隊の兵士たちと隊長およびユダヤ人の下役たちはイエスを捕えて縛り、¹³最初にイエスをアンナスのところに連れていった。アンナスが、その年の大祭司であったカイアフアの義父であったからである。¹⁴一人の人が民の代わりに死ぬ方が好都合であるとユダヤ人たちに助言したのはカイアフアであった。

18: 14「カイアフア」カイアフアは無意識にイエスの死を予言していたのだ。

NASB(改訂版)原典: 18: 15-18

¹⁵シモン・ペテロがイエスに従おうとしたので、他にも一人の弟子がペテロと一緒にいった。その弟子は大祭司の知人であったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷に入った。¹⁶しかし、ペテロは門の外に立っていた。そこで、大祭司の知人であったそのもう一人の弟子は出て来て門番に話し、ペテロを中に入れた。¹⁷門番をしていたしもべの少女はペテロに言った「あなたもこの人の弟子の一人ではありませんか」。その弟子は言った「わたしは違う」。¹⁸しもべたちと下役たちはそこに立っていたが、寒かったので暖まろうと炭火を起こしてその火にあたった。ペテロも彼らの中において、立って火にあたり体を暖めた。

18: 15「その弟子は大祭司の知人であった」用語「知人」は「親友」を意味していると思われる。

NASB(改訂版)原典: 18: 19-24

¹⁹大祭司はイエスに、弟子たちやお教えについて尋ねた。²⁰イエスは大祭司に答えて言われた「わたしは世に公然と話した。わたしはいつも、全てのユダヤ人が集まる会堂や神殿で教えた。わたしが秘かに話したことは何もない。²¹なぜわたしに尋ねるのか。わたしが何を話したかは、わたしの話を聞いた人々に尋ねるがよい。その人々はわたしが話したことを知っている」。²²イエスがこう言われると、近くに立っていた下役の一人がイエスを打って言った「大祭司に向かってそんな返事の仕方をするとは何事か」。²³イエスはその下役に答えて言われた「わたしが間違っただけのことなら、その言葉の間違いを証明しなさい。わたしが言ったことが正しいなら、なぜわたしを打つのか」。²⁴そこでアンナスはイエスを縛ったまま大祭司カイアファのもとに送った。

18: 22「近くに立っていた下役の一人がイエスを打って言った」 この用語「打つ」は元々「叩く」あるいは「鞭で打つ」という意味だったが、後に「開いた手(平手)で打つ」という意味になった。

NASB(改訂版)原典: 18: 25-27

²⁵シモン・ペテロは立って火にあたっていた。彼と一緒にいた人々は彼に言った「あなたもあの人の弟子の一人ではないのか」。彼はその言葉を否定して言った「私は違う」。²⁶大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切り落とされた者の親類の者が言った「園であの人と一緒にいるのをわたしに見られたではないか」。²⁷ペテロは再びその言葉を否定した。するとすぐに鶏が鳴いた。

18: 26「園であの人と一緒にいるのをわたしに見られたではないか」 17節と25節の最初の2つの質問とは異なり、この質問は「はい」という答えを期待している。

NASB(改訂版)原典: 18: 28-32

²⁸その後、彼らはイエスをカイアファのもとから総督官邸に連れていった。それは明け方であった。彼ら自身は汚れずに過越の食事をしたかったので総督官邸に入らなかった。²⁹そこでピラトは出て来て彼らに言った「どのような罪でこの男を訴えるのか」。³⁰彼らは答えて言った「この男が罪を犯さなかったら、あなたのもとに連れては来ません」。³¹ピラトは彼らに言った「あなたがたがこの男を引き取って、あなたがたの律法に基づいて裁くがよい」。ユダヤ人たちはピラトに言った「わたしたちには人に死を言い渡すことは許されていないのです」。³²それは、御自分がどのような死を遂げようとしておられるかを示そうとしてイエスの言われた御言葉が成就するためであった。

18: 28「総督官邸に」 これはローマ総督のエルサレム滞在中の公邸を指すラテン語の用語である。

特別なトピック: 総督の護衛兵

総督の護衛には、皇帝の護衛をも務めうるほどのエリート兵士団があたっていた。

特別なトピック: ポンテオ・ピラト

I. 人物

- A. 出生の地および時期は不明である。
- B. ローマ社会の上流階級の出身である。
- C. 結婚していたが、不嫡出の子もいた。
- D. (総督になる)以前の職歴は不明である。

II. 人格

冷酷非情な独裁者とも優柔不断な執政官ともいわれている。

III. 運命

- A. ティベリウス帝の死(紀元37年)の直後に召喚され、ローマに到着した。
- B. 再任されなかった。
- C. この後の人生は不明である。

NASB(改訂版)原典: 18: 33-38前半

³³そこでピラトは総督官邸に再び入り、イエスを呼び出して言った「あなたはユダヤ人の王なのか」。

³⁴イエスは答えて言われた「あなたは自分の考えでそう言うのか、それとも他の人が私についてあなたにそう言ったのか」。³⁵ピラトは答えて言った「わたしはユダヤ人ではないではないか。あなたの同胞と祭司長たちがわたしにあなたを引き渡したのだ。あなたは何をしたというのだ」。³⁶イエスは答えて言われた「わたしの国はこの世のものではない。わたしの国がこの世のものなら、わたしがユダヤ人に引き渡されないようにわたしのしもべたちが戦ったことだろう。しかし、現実にはわたしの国はこの世のものではない」。³⁷そこでピラトはイエスに言った「それでは、あなたは王なのか」。イエスは答えて言われた「わたしが王だとはあなたが言っていることである。真理を証しすること、このために私は生まれ、世に来たのだ。真理にある人は皆わたしの声を聞く」。^{38前}ピラトはイエスに言った「真理とは何か」。

18: 35 最初の質問は「いいえ」という答えを期待している。ピラトはユダヤ人の宗教に対する軽蔑の意を表現している。

18: 37「そこでピラトはイエスに言った『それでは、あなたは王なのか』」これは、イエスと霊的な王国に対するこの地上の権力の象徴(ローマ)に対する究極の皮肉であった。この質問は「はい」という答えを期待している。

NASB(改訂版)原典: 18: 38後半-40

^{38後}ピラトはこう言ってから再びユダヤ人の前に出て言った「わたしはこの人に何の罪も見出せない」。³⁹過ぎ越しの祭りには誰か一人をあなたがたのために釈放することが慣例になっている。あなたがたはあのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」。⁴⁰すると彼らは再び叫んで言った「この男で

はなく、バラバを」。バラバは強盗であった。

18: 40「すると彼らは再び叫んで言った『この男ではなく、バラバを』」 バラバが明らかに狂信者の集団の一員であったこと、そして「バラバ」という名が「父の子」を意味することは皮肉である。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜイエスは、そこでユダが御自分を見つけることになると知っておられた場所に行かれたのか。
2. なぜヨハネはゲッセマネでのイエスの御苦悩を記さなかったのか。
3. なぜサンヘドリンはピラトのところにイエスを連れていったのか。
4. 記された出来事の時系列順がヨハネの福音書と共観福音書群の間でとても異なっているのはなぜか。
5. なぜヨハネはピラトがイエスを釈放しようとしたことを記したのか。

ヨハネの福音書19章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 19: 1-7

¹そこでピラトはイエスを引き取ってむち打った。²兵士たちはいばらで冠を編んでイエスの頭に載せ、イエスに紫の衣を着せた。³そして、イエスのみもとに来て「ユダヤ人の王、万歳！」と言ったり、イエスの御顔を平手打ちにしたりし始めた。⁴ピラトは再び出て来てユダヤ人たちに言った「見よ、わたしはあの人をあなたがたのところに連れて来る。わたしがあの人に何の罪も見出さないことをあなたがたが知るためだ」。⁵そこでイエスはいばらの冠と紫の衣をお召しになって出て来られた。ピラトはユダヤ人たちに言った「見よ、この人だ！」⁶すると祭司長たちと下役たちはイエスを見て叫んで言った「はりつけにしろ！ はりつけにしろ！」ピラトは彼らに言った「あなたがた自身でこの人を引き取ってはりつけにするがよい。わたしはこの人に何の罪も見出さないからだ」。⁷ユダヤ人たちはピラトに答えて言った「わたしたちには律法がありません。わたしたちの律法によればこの者は死ぬべきです。自分を神の子としたからです」。

19: 3「イエスのみもとに来て」明らかに兵士達はかわるがわるこのようにしたのだ。このあざけりは特定の人物のイエスにとってよりも一般のユダヤ人にとってより大きな侮辱だった。多分ピラトはこのあざけりがイエスへの同情を引き起こすことを望んだのだろうが、そうはならなかった。

NASB(改訂版)原典： 19: 8-12

⁸それでピラトはこの言葉を聞いてますます恐れた。⁹ピラトは再び総督官邸の中に入ってイエスに言った「あなたはどこから来たのか」。しかしイエスは何もお答えにならなかった。¹⁰そこでピラトはイエスに言った「あなたはわたしに何も言わないのか。わたしにはあなたを釈放する権限があり、あなたをはりつけにする権限もあることをあなたは知らないのか」。¹¹イエスは答えて言われた「上から与えられたのでなければ、あなたはわたしに対して何の権限もないだろう。このために、わたしをあなたに引き渡した者にはもっと大きな罪がある」。¹²これを聞いてピラトはイエスを釈放しようとしたが、ユダヤ人たちは叫んで言った「あなたがこの人を釈放するなら、あなたはもはやカエサルの友ではない！自分を王とする者は皆、カエサルに逆らっているのだ」。

19: 12「あなたがこの人を釈放するなら、あなたはもはやカエサルの友ではない！」 成句「カエサルの友」はローマ皇帝から与えられた敬称を反映する慣用句である。カエサルはローマ皇帝の称号であり、ユリウス・カエサルに由来し、アウグストゥスによって採用された。

NASB(改訂版)原典： 19: 13-16

¹³ピラトはこれらの言葉を聞くとイエスを連れ出し、「敷石」、つまりヘブライ語で「ガバタ」と呼ばれる場所で裁きの席に着いた。¹⁴それは過ぎ越しの準備の日で、第六の時の頃であった。ピラトはユダヤ人たちに言った「見よ、あなたがたの王だ！」。¹⁵すると彼らは叫んで言った「殺せ！殺せ！はりつけにしろ！」。ピラトは彼らに言った「わたしがあなたがたの王をはりつけにするのか」。祭司長たちは答えて言った「わたしたちにはカエサルのほかに王はありません」。¹⁶そこでピラトは彼をはりつけにするために彼らに引き渡した。

19:15「祭司長たちは答えて言った『わたしたちにはカエサルのほかに王はありません』」 これらのユダヤ人の指導者達はイエスを告発するというまさに冒涇の罪を犯していた。

NASB(改訂版)原典： 19: 17-22

¹⁷そして彼らはイエスを連れ出した。イエスは御自分の十字架を背負われ、「どくろの場所」と呼ばれる場所、つまりヘブライ語で「ゴルゴタ」と呼ばれる場所へと出て行かれた。¹⁸その場所で彼らはイエスを十字架につけた。そしてイエスと共に二人の男を、イエスの両側で十字架につけた。¹⁹ピラトはまた罪状書きを書いて、十字架の上に付けた。それには「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書かれていた。²⁰それで大勢のユダヤ人たちがこの罪状書きを読んだ。それは、イエスが十字架につけられた場所が町に近かったからであり、その罪状書きがヘブル語とラテン語とギリシャ語で書かれていたからであった。²¹ユダヤ人の祭司長たちはピラトに言った「『ユダヤ人の王』と書かず、『この者は「わたしはユダヤ人の王だ」と言った』と書い

てください」。²²ピラトは答えて言った「わたしが書いたことは、わたしが書いたのだ」。

19: 17「『どくろの場所』と呼ばれる場所、つまりヘブライ語で『ゴルゴタ』と呼ばれる場所」この言葉の正確な意味は不明である。都市の外壁の外によく知られている公開処刑の場所でイエスは殺されたのだ。

NASB(改訂版)原典: 19: 23-25前半

²³兵士たちはイエスを十字架につけたとき、イエスの外衣を取って四つに分け、それぞれの兵士たちが一つずつ手にした。また上衣も取った。その上衣は縫い目がなく、一枚の布として織られたものであった。²⁴そこで兵士たちは互いに言い合った「これは裂いたりしないで、誰のものにするかくじを引こう」。それは「彼らは互いにわたしの外衣を分けた。わたしの外衣のために彼らはいくじを引いた」という御言葉が成就するためであった。^{25前半}そこで兵士たちはこのようにした。

19: 23「その上衣は縫い目がなく、一枚の布として織られたものであった」これは神学的意義を持っていると思われる。このような上衣は珍しく、また高価であった。それを身につけるのは大祭司であったからだ。これは、大祭司であり新しい律法の贈り主でいらっしゃるイエスを指していると考えられる。

NASB(改訂版)原典: 19: 25後半-27

^{25後半}イエスの十字架のそばには、イエスの母、イエスの母の姉妹、クロパスの妻マリア、そしてマグダラのマリアが立っていた。²⁶イエスは、御自分の母と、御自分が愛しておられた弟子がそばに立っているのを御覧になると、御自分の母に言われた「女よ、見なさい、あなたの子です！」²⁷次にその弟子に言った「見よ、あなたの母だ！」その時から、その弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

19: 25「イエスの十字架のそばには、イエスの母、イエスの母の姉妹、クロパスの妻マリア、そしてマグダラのマリアが立っていた」イエスの母マリアの姉妹の名は、マルコ15: 40と16: 1によればサロメである。

特別なトピック: イエスに従った女達

マグダラのマリア

ヨハナ(ヘロデのしもべであったクザの妻)

スサンナ

ヤコブとヨセフの母マリア

ゼベダイの息子達の母
小ヤコブとヨセの母マリア
サロメ
ガリラヤから同行した女性たち
イエスの母マリア
イエスの母マリアの姉妹
クロパスのマリア

NASB(改訂版)原典： 19: 28-30

²⁸この後、イエスは全ての事が終わったことと御言葉が成就したことを悟られて、言われた「わたしは渇く」。²⁹そこに酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。そこで彼らは酸いぶどう酒をたっぷり含ませた海綿をヒソブに付け、それをイエスの口元に持って行った。³⁰イエスはその酸いぶどう酒を受けられると「終わった！」と言われた。そして頭を垂れて御自分の霊を引き渡された。

19: 29「そこに酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった」 この「酸いぶどう酒」とは安価なぶどう酒であり、兵士達および十字架につけられた人のために用意されていたようだ。

NASB(改訂版)原典： 19: 31-37

³¹その日は準備の日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体が十字架の上に残らないように、十字架につけられた者たちの足を折って取り降ろすことをピラトに求めた(安息日が特別な日であったからである)。³²そこで兵士たちは来て、イエスと共にはりつけにされた者ともう一人の足を折った。³³しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられたのを見て、御足を折ることはしなかった。³⁴しかし、兵士たちの一人がイエスのわき腹を槍で突き刺した。するとすぐに血と水が流れ出た。³⁵見た者が証したのであり、その証言は真実である。その者は自分が真実を告げていることを知っている。それはあなた方が信じるためである。³⁶というのは、これらの事が起きたのは「彼の骨が折られることはないだろう」という御言葉が成就するためであったからである。³⁷また別の御言葉には「彼らは自分たちが突き刺した者を見上げるだろう」とある。

19: 31「安息日に遺体が十字架の上に残らないように」 儀式、特に過ぎ越しのとても神聖な安息日に死体が地を汚すことをユダヤ人は非常に心配した。

NASB(改訂版)原典： 19: 38-42

³⁸これらの事の後、イエスの弟子であったがユダヤ人たちを恐れてそのことを秘密にしていた

アリマタヤのヨセフが、イエスの体を取り降ろさせてくれるようにピラトに求めた。ピラトはそれを許可した。そこでヨセフは行って、イエスの御遺体を取り降ろした。³⁹夜に最初にイエスのもとに来たニコデモも、没薬と沈香とを混ぜた物を百ポンドほどの重さで持って来た。⁴⁰こうして彼らはイエスの御遺体を引き取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従って御遺体を香料と共に亜麻布で巻いた。⁴¹さて、イエスが十字架につけられた場所には園があり、その園にはまだ誰も葬られたことのない新しい墓があった。⁴²そこで、その日がユダヤ人の準備の日であったことと、その墓が近かったことから、彼らはイエスをそこに葬った。

19: 38-39「ヨセフ．．．ニコデモ」 これら二人の裕福で有力なサンヘドリンのメンバーは、この深刻で危険な時に公の場に出た、イエスの秘密の弟子だった。

19: 39「没薬と沈香とを混ぜた物を百ポンドほどの重さで持って来た」 これは紀元1世紀のユダヤ人が埋葬で伝統的に用いた香料である。その使用量はやや大げさであった。

特別なトピック: 埋葬用香料

没薬(アラビアの木が分泌する香りの良い樹液)

沈香(香りの良い木)

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜ兵士達はイエスをむち打ちあげたのか。
2. ピラトがイエスを釈放しようと繰り返し試みたことの意義は何か。
3. 15節のユダヤ人祭司の発言はなぜ非常に驚くべきものだったのか。
4. イエスの磔刑の記述が福音書によって異なるのはなぜか。
5. 申命記21: 23はどのようにイエスの磔刑と関連しているか。

ヨハネの福音書20章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

イエスが14~17章で使徒達になされた全ての約束は最初の復活の日曜日の夕方に成就した。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 20: 1-10

¹さて、週の初めの日に、マグダラのマリアは朝早く、まだ暗いうちに墓にやって来た。そして、墓から石が取りのけられているのを見た。²そこでマリアは、シモン・ペテロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行き、彼らに言った「人々が主を墓から取り去ってしまいました。わたしたちには主の御遺体をどこに置いたのか分かりません」。³そこでペテロともう一人の弟子は出て行って墓に向かった。⁴彼ら二人は一緒に走っていた。もう一人の弟子はペテロを追い越して、最初に墓に着いた。⁵この弟子が身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置かれているのが見えたが、中には入らなかった。⁶シモン・ペテロもその弟子の後に来て、墓の中に入った。ペテロは亜麻布がそこに置かれているのを見た。⁷また、イエスの御顔を覆っていた布が、巻かれていた亜麻布と共に置かれておらず、巻かれたまま別の場所に置かれているのを見た。⁸すると、最初に墓に来たもう一人の弟子も中に入り、これを見て信じた。⁹というのは、イエスが死んだ者たちの中からよみがえられなければならないという御言葉を彼らはまだ理解していなかったからである。¹⁰そこでこれらの弟子たちは自分たちの家に戻っていった。

20: 1「週の初めの日に」これは、過ぎ越しの祭りの週の聖なる安息日の第一日である日曜日であり、神殿で最初の実が捧げられる日であった。イエスは死者の最初の実でいらっしやった。

20: 2「人々が主を墓から取り去ってしまいました」 マリアのいう「人々」とはユダヤ人の指導者達であると思われる。

「わたしたち」 これはマグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメとヨハンナとその他の女性達を指す。

20: 5「身をかがめて」 この期間の墓の入り口は高さが約3～4フィートと低かった。人がその洞窟状つまり洞穴状の墓に入るにはかがむ必要があった。

「中をのぞくと」 これは文字通り「目を細めて見る」である。この弟子がこのようにしたのは朝の光と墓の中の薄暗さとが対照的であったからである。

20: 10 彼らはガリラヤに戻って行ったか、あるいはエルサレムの自分達の住所に行ったと思われる。

NASB(改訂版)原典： 20: 11-18

¹¹しかし、マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見た。¹²そしてマリアは、イエスの御遺体が横たえられていた所に、白い衣を着た二人の御使いが、一人はイエスの頭のところに、もう一人はイエスの御足のところに座っているのを見た。¹³御使いたちはマリアに言った「女よ、なぜ泣いているのか」。マリアは御使いたちに言った「人々がわたしの主を取り去ってしまい、どこに置いたのか分からないのです」。¹⁴マリアはこう言うと振り向いて、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスだとは分からなかった。¹⁵イエスはマリアに言われた「女よ、なぜ泣いているのか。だれを探しているのか」。イエスを庭師だと思って、マリアはイエスに言った「だんな様、あなたが主を運び去って行かれたのでしたら、どこに置かれたのかお教えてください。わたしが主を引き取ります」。¹⁶イエスはマリアに言われた「マリアよ！」。彼女は振り向いてヘブル語でイエスに言った「ラボニ！」(これは「先生」という意味である)。¹⁷イエスはマリアに言われた「わたしに触ってはいけない。わたしはまだ、わたしの父のもとに上っていないからだ。わたしの兄弟たちのところに行って『わたしは、わたしの父でありあなたがたの父である方、わたしの神でありあなたがたの神である方のみもとに上ろうとしている』と告げなさい」。¹⁸マグダラのマリアは行って「わたしは主を見ました」と言い、また主が自分にこれらのことを言われたと弟子たちに告げた。

20: 16「マリア... ラボニ」 マリアは文字通りミリアムである。これら2つの用語はアラム語である。

特別なトピック： イエスの復活後の御出現

イエスは御自分が確かに復活されたことを示すために人々に御自身を現わされた。

1. 墓にいた女
2. 11人の弟子達
3. シモン
4. 二人の男
5. 弟子達
6. マグダラのマリア
7. 10人の弟子達
8. 11人の弟子達
9. 7人の弟子達
10. ケファ(ペテロ)
11. 12人(使徒)
12. 500人の兄弟達
13. ヤコブ(地上でのイエスの家族)
14. すべての使徒達
15. パウロ

明らかにこれらのいくつかは同じ出会いを指している。イエスは御自分が生きておられることを確信してほしいと彼らに思われたのだ。

20: 17「わたしはまだ、わたしの父のもとに上っていないからだ」 イエスが天に昇られたのは、復活されてから40日後であった。

NASB(改訂版)原典： 20: 19-23

¹⁹その日、すなわち週のはじめの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。するとイエスが来られて彼らの真ん中に立たれ、彼らに言われた「あなたがたに平和があるように」。²⁰こう言われて、イエスは御自分の両手とわき腹をお見せになった。すると弟子たちは主を見て喜んだ。²¹イエスは再び彼らに言われた「あなたがたに平和があるように。父がわたしを遣わされたのと同じように、わたしもあなた方を遣わす」。²²こう言われてから、イエスは彼らの上に息を吹きかけて言われた「聖霊を受けなさい。²³あなたがたが誰かの罪を許すなら、その人の罪は許されている。あなたがたが誰かの罪を許さないなら、その人の罪は許されないまま残る」。

20:19「その日、... の夕方」 ユダヤ人の時間は黄昏(たそがれ)に始まり、黄昏(たそがれ)に終わる。

「週のはじめの日」 私達の時代の月曜日のように、日曜日は週の最初の日であった。この日はイエスの復活を記念して教会に集まる日となった。

「弟子たち」この場にトマスはおらず、11人の使徒達のうちの彼以外の10人の弟子達はいた。

NASB(改訂版)原典: 20: 24-25

²⁴しかし、十二人の弟子たちのうちの一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときには彼らと共にいなかった。²⁵そこで、他の弟子たちはトマスに言った「わたしたちは主を見た！」しかしトマスは言った「主の御手に釘のあとを見てその釘のあとに自分の指を差し入れ、主のわき腹に自分の手を入れてみなければわたしは信じない」。

20: 24「しかし、十二人の弟子たちのうちの一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときには彼らと共にいなかった」「ディディモ」とはギリシャ語で「双子」を意味する。

「あと」以下の特別なトピックを参照してください。

特別なトピック: 型 (*Tupos*)

問題は様々な用法を持つ用語 *tupos* である。

1. Moulton と Milligan 共著 *The vocabulary of the Greek New Testament* の 165 ページ
 - a. 型
 - b. 計画
 - c. 文章の形式あるいは様式
 - d. 法令あるいは布告
 - e. 宣告あるいは判決
 - f. 癒しの神への捧げ物としての模範的人体
 - g. 法律の規範を強化する意味で用いられる動詞
2. Louw と Nida 共著 *Greek-English Lexicon* 第二巻 249 ページ
 - a. (傷の)跡(ヨハネ 20: 25 を参照)
 - b. 姿(使徒行伝 7: 43 を参照)
 - c. 型(ヘブル 8: 5 を参照)
 - d. 模範(I コリント 10: 6、ピリピ 3: 17 を参照)
 - e. 原型(ローマ 5: 14 を参照)
 - f. 種類(使徒行伝 23: 25 を参照)
 - g. 内容(使徒行伝 23: 25 を参照)
3. Harold K. Moulton 著 *The Analytical Greek Lexicon Revised* の 441 ページ
 - a. (精神的)打撃、印象、しるし(ヨハネ 20: 25 を参照)
 - b. 輪郭
 - c. 姿(使徒行伝 7: 43 を参照)

- d. 形態、機構(ローマ 6: 17 を参照)
- e. 型、意図(使徒行伝 23: 25 を参照)
- f. 像、相方(I コリント 10: 6 を参照)
- g. 予想図、予型(ローマ 5: 14、I コリント 10: 11 を参照)
- h. 型の様式(使徒行伝 7: 44、ヘブル 8: 5 を参照)
- i. 道徳的模範(ピリピ 3: 17、I テサロニケ 1: 7、II テサロニケ 3: 9、I テモテ 4: 12、I ペテロ 5: 3 を参照)

この文脈では上記の i. が最も近い意味であるようだ。福音は教義であり生活様式に影響するものである。キリストにある救いという無償の恵みはまたキリストのように生きることも要求するのだ。

NASB(改訂版)原典： 20: 26-29

²⁶八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと共にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスは来られて弟子たちの真ん中に立たれて言われた「あなたがたに平和があるように」。²⁷そしてイエスはトマスに言われた「あなたの指をここに伸ばし、わたしの両手を見なさい。あなたの手をここに伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」。²⁸トマスはイエスに答えて言った「わたしの主、わたしの神よ!」。²⁹イエスは彼に言われた「あなたはわたしを見て信じたのか。見ないで信じる者は幸いである」。

20: 26「八日後」 これは一週間を意味するヘブライ語の慣用句である。これも日曜日の夕方であった。

NASB(改訂版)原典： 20: 30-31

³⁰このほかにもイエスは弟子たちの前でたくさんのおしるしを行なわれたが、それらはこの書には書かれていない。³¹しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストでいらっしゃるということをあなたがたが信じるためであり、信じることによってあなたがたがイエスの御名において命を持つようになるためである。

20: 30 30節と31節は明らかにこの福音書の主題とその書かれた目的を言い表している。この福音書は伝道の書なのだ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 誰が墓に来たのか。それはいつか。なぜか。
2. なぜ弟子たちはイエスの復活を予想していなかったのか。誰かがそれを予想したのか。
3. なぜマリアはイエスに気付かなかったのか。
4. なぜイエスは御自分に執着しないようにマリアに言われたのか。
5. あなた自身の言葉で22～23節を説明しなさい。
6. トマスは疑い深い人だといえるか。
7. 用語「信じる」を、私達の時代に理解されているようにではなく、イエスが世におられた時代に理解されていた通りに定義しなさい。

ヨハネの福音書21章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～25節の文脈の洞察

ヨハネの福音書は20:31で終わっているように見えるので、21章を付け加えることについて多くの議論がなされてきた。しかし、21章を省略したギリシア語写本は存在しない。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 21: 1-3

¹これらのことの後、イエスはティベリアス湖のほとりで再び御自身を弟子たちに現わされた。イエスが御自身を現わされた次第はこのようである。²シモン・ペテロ、ディディモスと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、そしてゼベダイの子らと他にも二人の弟子たちが一緒にいた。³シモン・ペテロが自分と一緒にいた者たちに言った「わたしは漁に行く」。彼らはペテロに言った「わたしたちもあなたと共にいこう」。すぐに彼らは出て行き、小舟に乗り込んだ。その夜は何も捕れなかった。

21:1 「ティベリアス湖」 ティベリアスはガリラヤ地方のローマの行政府であった。この貯水池は「ガリラヤ湖」あるいは「ゲネサレ湖」、旧約聖書では「キネレト湖」の名でも知られている。

NASB(改訂版)原典: 21: 4-8

⁴夜が明けようとしていた頃、イエスが浜辺に立っておられたが、弟子たちはそれがイエスだと

分からなかった。⁵そこでイエスは弟子たちに言われた「子らよ、何か食べる物があるか」。弟子たちはイエスに「ありません」と答えた。⁶イエスは弟子たちに言われた「網を舟の右側に打ちなさい。そうすればとれるはずだ」。そこで弟子たちは網を打った。すると、あまりにも多くの魚が網にかかったので、彼らは網を引き上げることができなかった。⁷イエスが愛しておられた弟子がペテロに言った「主だ」。シモン・ペテロは「主だ」と聞くと、(裸だったので)自分の上着をまとい湖に飛び込んだ。⁸しかし、他の弟子たちは、陸から二百ペキスほどしか離れていなかったの、魚のたくさんかかった網を引いて小舟で戻って来た。

21:5「何か食べる物があるか」 原文および英語訳では「魚」と記されているが、日本語訳では多くが「食べ物」と記されているので本注解でもそれに倣った。一般に用語「魚」はパンと一緒に食べるあらゆる種類の食べ物を指すが、この文脈では「魚」の意味で用いられている。この質問は「いいえ」の答えを期待している。

NASB(改訂版)原典: 21: 9-14

⁹弟子たちは陸に上がると、炭火が起こしてあり、その上に魚とパンがあるのを見た。¹⁰イエスは彼らに言われた「今獲った魚を少し持って来なさい」。¹¹シモン・ペテロは舟に乗り込んで、百五十三匹の大きな魚でいっぱい網を陸に引き寄せた。それほど多くの魚が網にかかっていたのに、網は裂けていなかった。¹²イエスは彼らに言われた「来て朝食をとりなさい」。弟子たちは誰も「あなたはどなたですか」とあえて尋ねる者はいなかった。主だと分かっていたからである。¹³イエスは来られてパンを手にとられ、弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。¹⁴イエスが死んだ者たちの中からよみがえられた後に弟子たちに御自身を現わされたのは、これが三度目であった。

21: 11「それほど多くの魚が網にかかっていたのに、網は裂けていなかった」 これは通常の見撃証言であるとともに暗喩的な奇跡でもある。

NASB(改訂版)原典: 21: 15-19

¹⁵弟子たちが朝食を終えると、イエスはシモン・ペテロに言われた「ヨハネの子シモン、あなたはこれ以上にわたしを愛しているか」。ペテロはイエスに言った「はい、主よ。わたしがあなたを愛していることをあなたは御存知です」。イエスはペテロに言われた「わたしの羊たちを飼いなさい」。¹⁶また二度目にイエスはペテロに言われた「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛しているか」。ペテロはイエスに言った「はい、主よ。わたしがあなたを愛していることをあなたは御存知です」。イエスはペテロに言われた「わたしの羊たちを飼いなさい」。¹⁷三度目にイエスはペテロに言われた「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛しているか」。ペテロはイエスが三度も「あなたはわたしを愛しているか」と言われたので悲しんだ。ペテロはイエスに言った「主よ、あなたはすべてのことを御存知です。わたしがあなたを愛していることをあなた

は御存知です」。イエスは彼に言った、「わたしの羊たちを飼いなさい。¹⁸まことに、まことに、あなたに言う。あなたは若かったとき、自分で服を着て、自分の行きたい所に歩いて行った。しかし年を取ると、あなたは両手を伸ばし、他の人があなたに服を着せ、あなたが行きたくない所にあなたを連れて行くだろう」。¹⁹イエスがこう言われたのは、ペテロがどのような死に方で神の栄光を現わすことになるかを示されるためであった。こう言われてからイエスは言われた「わたしに従いなさい！」。

21: 17「主よ、あなたはすべてのことを御存知です」 ペテロは語るよりもはるか前から学んでいる。彼は良い神学を表現している。

21: 19「わたしに従いなさい」 これはペテロの指導者への召しの更新と再確認に関連する。

NASB(改訂版)原典： 21: 20-23

²⁰ペテロは振り向いて、イエスが愛しておられた一人の弟子がついて来るのを見た。この弟子はあの晩餐でイエスの御胸にもたれて「主よ、あなたを裏切ろうとしているのは誰ですか」と言った者でもあった。²¹この弟子を見てペテロはイエスに言った「主よ、この人はどうですか」。²²イエスはペテロに言った「わたしが来るまでその人が生きていることをわたしが望むとしても、それがあなたと何の関係があるのか。わたしに従いなさい！」。²³そこで、その弟子は死なないだろうというこのうわさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスはその弟子が死なないだろうと言われたのではなく、「わたしが来るまでその人が生きていることをわたしが望むとしても、それがあなた何の関係があるのか」と言われたのである。

21: 22「イエスはペテロに言った『わたしが来るまでその人が生きていることをわたしが望むとしても、それがあなたと何の関係があるのか』」 私達は自分達自身の賜物と働きについて考えるべきであり、神が他の人々について計画なさっているものには関心を持つべきではないことを覚えておかなければならない。

NASB(改訂版)原典： 21: 24

²⁴この者が、これらのことについて証しし、これらのことを書いた弟子であり、わたしたちはその証しが真実であることを知っている。

21: 24「わたしたちはその証しが真実であることを知っている」 他の人々がヨハネによる福音書の真理を肯定しようとしているのは明らかである。この「人々」とは多分エペソ人の長老を指していると思われる。

NASB(改訂版)原典： 21: 25

25 イエスがなされたことはこの他にもたくさんあるが、それらが全て書かれたなら、この世そのものでさえも、その書かれた書を収めることはできないだろうとわたしは思う。

21: 25 この福音書の著者はこの節を(写本あるいは訳本に)含めるかどうかについて(書記あるいは訳者に)選択権を与えている。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ヨハネ21章はどのようにルカ5章と似ているか。
2. 弟子達はなぜすぐにイエスに気付かなかったのか。
3. イエスが愛された弟子は誰か。
4. なぜイエスはペテロに三回も御自分への愛についての質問をなされたのか。
5. イエスは御自分の再来の時までにヨハネが生きていることを主張されたか。
6. 24節は誰を指しているか。
7. 25節は原文か。

ヨハネの手紙第一

ヨハネの手紙第一への導入

この書の独自性

- A. ヨハネの手紙第一は、「本社からの激励のオフィスメモ」(社内書簡)的な性質を持つ限りでは個人の書簡ではない。
1. 慣習的な挨拶(誰から誰へ)がない。
 2. 個人向けの挨拶や締めくくりのメッセージがない。
- B. この書には個人名が記されていない。これは極めて珍しいことである。新約聖書の諸書のうちで著者名が記されていないのはヘブル人への手紙とヨハネの手紙第一だけである。しかし、教会内部の偽教師達に関する問題に現状で直面している信徒達に宛ててこの手紙が書かれたことは明らかである。
- C. この手紙は力強い神学教書である。
1. イエスの中心性
 - a. 完全なる神であられ、そして完全なる人であられる方
 - b. (偽教師達の説く)神秘的な体験や秘密の知識ではなく、イエス・キリストへの信仰によって救いがもたらされる。
 2. 信徒の生活様式に求められること
 - a. 兄弟愛
 - b. 従順
 - c. 墮落した世のしくみの拒絶
 3. ナザレのイエスを通して永遠の救いがもたらされるという確信(「知る」が 27 回用いられている)
 4. 偽教師達の見分け方
- D. この手紙のコイネギリシャ語は新約聖書の中の書のうちで最も洗練度が低いが、この手紙ほどにイエス・キリストの深遠で永遠の真理の奥深さへと読者をいざなう書は他にない。
- E. ヨハネの手紙第一はヨハネの福音書の前置きの手紙として書かれたのかもしれない。紀元1世紀に出現したグノーシス派と呼ばれる異端はこの両書を背景に誕生した。ヨハネの福音書は福音伝道の勧めとして書かれたが、ヨハネの手紙第一は信徒に宛てて書かれた。
- 有名な注解者の Westcott は、ヨハネの福音書はイエスの神性を肯定的に述べ、ヨハネの手紙第一はイエスの人間性を肯定的に述べていると主張している。
- A. ヨハネはこの手紙を陰陽両面の(二元論的な)用語を用いて書いている。これは死海文書とグノーシス派の偽教師の特徴である。ヨハネの手紙第一の文章構造中に見られる二元論は言語(光対闇)にも文体(否定的な記述の後の肯定的な記述)にも表れている。これは縦の二元論(『上から』対『下から』)を用いたヨハネの福音書とは異なる。

- B. ヨハネが複数の主題を繰り返し用いているので、ヨハネの手紙第一の要約はとても難しい。この書は複数種の反復模様を一緒に織り込んだ真理のつづれ織りのような書である (Bill Hendricks 著 *Tapestries of Truth, The Letters of John* を参照)。

著者

- A. ヨハネの手紙第一の著者が誰かについての議論は、ヨハネの著作集、つまり福音書とヨハネの手紙第一から第三および黙示録の著者が誰かについての議論の一部である。

- B. 2つの根本的な見解がある。

1. 伝統的見解

- a. 伝統的見解とは、初期教会の教父達の間で統一見解となっている、イエスの最愛の使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたという見解である。

- b. 初期教会における、使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたことの証拠のまとめ

(1) ローマのクレメンスは紀元 90 年に書いた自著でヨハネの手紙第一について暗示している。

(2) スミルナのポリカルポスは自著 *Philippians 7* (紀元 110~140 年に書いた) でヨハネの手紙第一を引用した。

(3) 殉教者ユスティヌスは自著 *Dialogue* の 123 章 9 節 (紀元 150~160 年に書いた) でヨハネの手紙第一を引用した。

(4) ヨハネの手紙第一を暗示している書

(a) アンテオケのイグナティウスの著書 (書かれた時期は不明だが、紀元 100 年代初頭と言われている)

(b) ヒエラポリスのパピアス (紀元 50~60 年の間に生まれ、紀元 155 年頃に殉教した) の著書

(5) リヨンのイレネウス (紀元 130~202 年存命) は使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたとした。初期教会の時代の護教論者で、異端を非難する書を 50 作も書いたテルトゥリアヌスはしばしばヨハネの手紙第一を引用した。

(6) 使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたとした初期教会の時代の書には他にもアレキサンドリアのクレメンスとオリゲネスとディオニュシウスの著書やムラトリー断片 (紀元 180~200 年編纂) あるいはエウセビウスの著書 (紀元 3 世紀に書かれた)。

(7) Jerome (紀元 4 世紀後半に存命) は使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたことを断言したが、そのことが自分の生きた時代に一部の人々から否定されたことを認めた。

(8) 紀元 392~428 年にアンテオケの主教であったモプスエスティアのテオドリウスは使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたことを否定した。

- c. 使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたのなら、私達は使徒ヨハネについて何を知っているか。
 - (1) 使徒ヨハネはゼベダイとサロメの息子であった。
 - (2) 使徒ヨハネは兄弟のヤコブとともにガリラヤ湖で漁師をしていた(多分数隻の小船を持っていた)。
 - (3) 使徒ヨハネの母親がイエスの母マリアの姉妹であった(ヨハネ 19: 25 とマルコ 15 章 20 節を参照)と信じている者もいる。
 - (4) (a) 使用人を雇っていた(マルコ 1: 20 を参照)
 - (b) 数隻の小船を持っていた
 - (c) エルサレムに家を持っていた(マタイ 20: 20 を参照)

ので、使徒ヨハネが裕福であったことは明らかである。
 - (5) 使徒ヨハネはエルサレムの大祭司の家に入入りしていたが、このことは使徒ヨハネが著名な人物の一人であったこと(ヨハネ 18: 15-16)を示している。
 - (6) イエスの母マリアを献身的に世話したヨハネがヨハネの手紙第一を書いたとされた。
- d. 初期教会の伝統的見解の全てにおいて、使徒ヨハネは他の全ての使徒よりも長生きし、イエスの母マリアがエルサレムで死んだ後に小アジアへ移って、その地域で最大の都市エフェソスに定住したという証言がなされている。使徒ヨハネはこの都市からパトモス島(海岸から少し離れたところにあった)に追放されたが、後に釈放されてエフェソスに戻った(エウセビウスがポリカルポスとパピアスとイレネウスの著書から引用した記述によれば)。

2. 現代の学者達の見解

- a. 現代の学者の大多数がヨハネの全ての著書の間類似性、特に成句と語彙と文法形式が似ていることを認めている。このことの良い例は、これらの著書の特徴であった明確な対比、例えば命と死、真理と誤りである。これと同じはっきりとした対比はこの時代に書かれた他書、例えば死海文書や初期グノーシス主義者の著書に見られる。
- b. 使徒ヨハネが書いたと伝統的に見なされている5つの書の間内部関係については諸説ある。著者は1人だという説もあれば、2人あるいは3人だという説もある。最も確からしい見解は、たとえヨハネの弟子数名によって書かれたとしても、ヨハネの著書は全て一人の人物の思想の産物だという意見であると思われる。
- c. 私は個人的には、老使徒ヨハネがエフェソスでの自らの働きを終える頃に5つの書全てを書いたのだと信じている。

書かれた年代

明らかにこれは著者の特定と関係がある。

- A. 使徒ヨハネがこれらの手紙、特にヨハネの手紙第一を書いたのなら、この手紙が書かれたのは紀元1世紀末のいつかということになる。この時期にはグノーシス主義者の偽神学者や哲学者が台頭してきたのでこの見解は年代的に符合するし、老人が若い信徒達に語りかけているように思われる、ヨハネの手紙第一の中の用語(「子たちよ」)とも符合すると思われる。イエスが十字架に架かれた後にヨハネは68年も生きたとJeromeは言っている。このことはこの伝説と符合すると思われる。
- B. ヨハネの手紙第一は紀元85年から95年の間に書かれ、ヨハネの福音書は紀元95年までに書かれたとA. T. Robertsonは考えている。
- C. *The New International Commentary Series on I John* の著者I. Howard Marshallはヨハネの手紙第一の書かれた年代を紀元60年から100年としており、この見解は現代の学者達の見解に近く、この推定年代をもとにすればヨハネの著書群の書かれた年代を推定できるようになるかもしれないと主張している。

宛先

- A. 伝説によれば、エフェソスを主要都市とする小アジアのローマ帝国の属州に宛ててこの書は書かれた。
- B. この手紙は(コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙と同様に)、偽教師達、特にキリストの人間性を否定し神性を肯定する、キリスト仮現説を信じるグノーシス主義者達の問題に直面していた小アジアの特定の教会群に宛てて書き送られたようだ。
- C. アウグスティヌス(紀元4世紀)はこの手紙がパルティア人(バビロン)に宛てて書き送られたと言っている。彼の見解はカシオドリウス(紀元6世紀初頭)に支持された。これは多分、Ⅱヨハネ1章の聖句「選ばれた婦人」とⅠペテロ5:13の聖句「バビロンにいる婦人」との混同から生じた見解だと思われる。
- D. 紀元180~200年にローマで編纂された、初期教会の時代の新約聖書の正典リストであるムラトリー断片によれば、この手紙は「ヨハネの仲間の弟子達と司教達への勧告の後に」書かれた。

異端

- A. この手紙自体は明らかにある種の誤りの教え(1:6以降の「わたしたちが...と言いながら~するなら」および2:9と4:20の「...と言いながら~する者」を参照)への応答である。
- B. ヨハネの手紙第一の文中にある証拠から私達は異端の根本的教義のいくつかを学ぶことができる。
 1. イエス・キリストの受肉の否定
 2. 救いにおけるイエス・キリストの中心性の否定
 3. 信徒にふさわしい生活様式の欠如

4. 知識(しばしば神秘)の強調

5. 排他主義への傾倒

C. 紀元1世紀の歴史的背景

紀元1世紀のローマ世界は東洋と西洋の宗教の入り混じる時代にあった。ギリシャとローマの神殿の神々は評判が悪かった。神秘的な宗教は神との個人的関係と秘密の知識を強調するものであったのでとても盛んであった。世俗的なギリシャ哲学が盛んであった。この折衷的宗教の世界にキリスト教信仰の排他主義(イエスだけが神への道である。ヨハネ 14: 6 を参照)が入った。異端の正確な背景が何であれ、そのことはキリスト教の見せかけの排他主義をもっともらしく見せてギリシャ・ローマのより多くの聴衆に知的に受け入れられるようにする試みであった。

D. 使徒ヨハネがこの手紙の中で述べていると思われるグノーシス主義者のグループ

1. 初期グノーシス主義

- a. 紀元1世紀の初期グノーシス主義の根本的教義は、霊と悪の間の存在論的(永遠の)二元論の強調であったと思われる。霊(崇高なる神)は善で物質は本質的に悪であると考えられた。この対比はプラトン主義における理想と現実、天と地、見えないものと見えるものの対比と似ている。この教義には、救いに必要とされる秘密の知識(魂が天使の諸階層[*aeons*]を通して崇高なる神の御許へ行けるようにするためのパスワードつまり秘密の暗号)の過度の強調も見られる。
- b. 明らかにヨハネの手紙第一の(書かれた)背景の中にあつたと思われる初期グノーシス主義には2つのタイプがあつた。

(1)キリスト仮現説に基づくグノーシス主義

物質が悪であることを理由にイエスの真の人間性を否定する。

(2)コリントのグノーシス主義

崇高なる神と悪なる物質の間にある多数の *aeons* つまり天使の諸階層の一つとしてキリストを位置づける。この「キリストの霊」はイエスが洗礼を受けられたときに人間イエスの内に住まれ、イエスが十字架に架かれる前にイエスから離れられた。

- (3)これら2つのグループには禁欲主義(ある物を体が欲するなら、その物は悪であるという思想)を貫く者達もいれば二律背反主義(ある物を体が欲するなら、その物を他者に与えよという思想)を貫く者達もいた。紀元1世紀に発展したグノーシス主義の思想体系は記録が残っていない。紀元2世紀半ばまで記録に残されなかったのだ。「グノーシス主義」についてさらに知りたいなら、

(a) Hans Jonas 著 *The Gnostic Religion* (Beacon Press 刊)

(b) Elaine Pagels 著 *The Gnostic Gospels* (Random House 刊)

を読みなさい。

2. イグナティウスは自著 *to the Smyrnaeans* の4～5章で、使徒ヨハネがこの手紙の中で述べていると思われるもう一つのグノーシス主義者のグループを示唆している。そのグループはイエス・キリストの受肉を否定し、二律背反的な生活様式を貫いていた。
3. しかし、可能性は低いですが、使徒ヨハネがこの手紙の中で述べていると思われるもう一つのグノーシス主義者にアンテオケのメアンデリウスがいる。この人物はイレネウス著 *Against Heresies* の23章に登場することで知られている。彼はサマリア人シモンの追従者で秘密の知識の弁護者であった。

E. 現代の異端

1. この異端の本質は、人々がキリスト教の真理を他の思想体系と混合しようとするときに、現代の私達に示される。
2. この異端の本質は、人々が個人的関係の排除と生活様式を通じた信仰を目指す「正しい」教義を強調するときに、現代の私達に示される。
3. この異端の本質は、人々がキリスト教を排他的な知識に転換するときに、現代の私達に示される。
4. この異端の本質は、人々が禁欲主義や二律背反主義に傾倒するときに、現代の私達に示される。

書かれた目的

A. 信徒のための実践的意図

1. 喜びを与える(1: 4を参照)
2. 神の御心にかなう生活を送るように励ます(1: 7を参照)
3. キリストにある救いの確信を与える(5: 13を参照)
4. 互いに愛し合い、世を愛さないように命令(忠告)する

B. 信徒のために教義を説く意図

1. イエスの神性と人間性を区別して考えるという誤りに対する反論
2. 神の御心にかなう生活を欠いた知識偏重主義を霊性と区別して考えるという誤りに対する反論
3. 人は他者との関わりを断つことで救われうるという誤りに対する反論

第一読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)その聖書の書全体を一通り読みなさい。書全体の中心テーマを

あなた自身の言葉で述べなさい。

1. 書全体のテーマ
2. 文学(ジャンル)のタイプ

第二読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

その聖書の書全体をもう一度一通り読みなさい。主題を要約し、その主題を一文で表現しなさい。

1. 第一の文章単位の主題
2. 第二の文章単位の主題
3. 第三の文章単位の主題
4. 第四の文章単位の主題
5. (以下同様)

ヨハネの手紙第一 1: 1~2: 2

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

*神の啓示により行うことではないとはいえ、段落分割は原著者の意図を理解し従うために重要なことである。各現代語訳聖書は第一章を分割し要約している。各訳聖書はトピックを独自の方法で要約している。(聖書の)原文を読むときにはどの訳の聖書が主題と聖句分割について自分が理解したことと合うかを自分自身に問いなさい。

各章をまず読んで、そしてその主題(段落)を明らかにしなければならない。それから自分が理解したことを現代語訳聖書の間で比較しなさい。原著者の論理と主張に従うことによって彼(原著者)の意図を理解するときのみ私達は本当に聖書を理解できるのである。原著者だけが神の啓示を受けている—読者には(聖書の)メッセージを変えたりあるいは修正する権利はない。聖書の読者には神の啓示の示す真理を自分の(生きている)時代と生活に適用する責任があるのだ。

全ての専門用語と略語の完全な説明は補遺1、2、3、そして4にあることを忘れてはならない。

*神の啓示により行うことではないとはいえ、段落分割は原著者の意図を理解し従うために重要なことである。各現代語訳聖書は第一章を分割し要約している。各訳聖書はトピックを独自の方法で要約している。(聖書の)原文を読むときにはどの訳の聖書が主題と聖句分割について自分が理解したことと合うかを自分自身に問いなさい。

各章をまず読んで、そしてその主題(段落)を明らかにしなければならない。それから自分が理解したことを現代語訳聖書の間で比較しなさい。原著者の論理と主張に従うことによって彼(原著者)の意図を理解するときのみ私達は本当に聖書を理解できるのである。原著者だけが神の啓示を受けている—読者には(聖書の)メッセージを変えたりあるいは修正する権利はない。聖書の読者には神の啓示の示す真理を自分の(生きている)時代と生活に適用する責任があるのだ。

全ての専門用語と略語の完全な説明は補遺1、2、3、そして4にあることを忘れてはならない。

神学的背景

この段落は、創世記1: 1に関連するヨハネの福音書の序文に関連している。しかし、ここではこの段落はイエスの公的なお働きの始まりを指している。この段落で強調されていることは、イエスキリストの完全な人間性とナザレのイエスの神性である。

統語法

A. 1~4節

1. 1~3節前半はギリシャ語写本では一つの文である。
2. 主要な動詞「宣言する」は3節にある。そこでは使徒の説教の内容が強調されている。
3. 1節には、強調のために前方に配置されている、4つの関係句がある。
 - a. 「最初からあったもの」
 - b. 「私達が聞いたもの」

- c. 「私達が見たもの」
 - d. 「私達が見て、手で触れたもの」
4. 2節にはキリストの受肉に関する内容が記されており、写本によっては括弧がつけられているようだ。その節は文法的にとても特異に見えるので注意を引いているのだ。
 5. 3節と4節は、ヨハネの使徒としての交わりと喜びの宣言の目的が述べられている。使徒の目撃証言の記録は初期教会において正典化の基準の一つであった。
 6. 1節における動詞時制の流れに注意しよう。
 - a. 未完了形(すでにおられた)
 - b. 完了形、完了形(真理にとどまる)
 - c. アオリスト、アオリスト(特別な事例)
- B. 1: 5~2: 2
1. 1: 5~2: 2に見られる代名詞は非常に曖昧であるが、5節以外の節に見られるほとんど全ての代名詞は父なる神を指していると私は思う。
 2. 全ての条件節は潜在的な行為について述べている第三種条件文である。
 3. 「罪」に関する動詞の時制では現在形とアオリストの間に、また名詞「罪」の単数形と複数形の間には神学的に大きな変化が見られる。

異端

- A. 異端の偽りの主張は1: 6と8節と10節および2: 4と6節と9節に見られる。
- B. 5~10節は、神に従うこと(倫理学)と神を知ること(神学)とを切り離すという神学的な試みに関連している。それは過度のグノーシス主義的な知識偏重を表している。神を知る人々は自分達の生活様式の中に神の御性質を現わすようになる。
- C. 1: 8~2: 2は3: 6-9とバランスを保っているに違いない。それらは表裏一体である。それらは多分二種類の相異なる偽りに対する反論であると思われる。
 1. 神学的偽り(罪はない)
 2. 道徳的偽り(罪は問題ではない)
- D. Iヨハネ2: 1-2は、罪の過度の軽視(二律背反主義)およびクリスチャンの裁き偏重主義や文化的な律法主義や禁欲主義という反復する問題の間にバランスを保とうという試みである。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 1: 1-4

「はじめからあったもの、わたしたちが聞いたもの、わたしたちの目で見えたもの、わたしたちが見て自分たちの手で触れたもの、すなわち命の言葉に関すること²(そしてその命は現わされました)をわたしたちはあなたがたに知らせます。御父と共にあり、わたしたちに現わされた永遠の命を、わ

たしたちは見て証しし、そして知らせているのです。³わたしたちは見聞きしたこともあなたがたに知らせます。それはあなたがたもわたしたちと交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは御父との交わりであり、御子イエス・キリストとの交わりなのです。⁴わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

1: 1「はじめから」これは明らかに創世記1章とヨハネの福音書1章を暗示しているが、ここではイエスの初期のお働きを指している。

特別なトピック：ヨハネ1章とIヨハネ1章との比較

ヨハネの福音書/ヨハネの手紙第一

はじめに(1: 1)/はじめから(1: 1と2節)

言葉(*logos*) (1: 1)/言葉(*logos*) (1: 1)

命(1: 4)/命(1: 1と2節)

イエスの光(1: 4)/神の光(1: 5)

現れた光(1: 4)/現れた光(1: 5)

闇(1: 5)/闇(1: 5)

光の証し(1: 6-8)/光の証し(1: 3と5節)

神のもとに来た人類(1: 7と12~13節)/神のもとに来た人類(1: 3)

神の栄光を見る(1: 14)/神の栄光を見る(1: 1-3)

特別なトピック： *KOINŌNIA*

用語「交わり」(*koinonia*)には次のような意味がある。

1. ある人との親密な交際
 - a. 御子と(Iヨハネ 1: 6、Iコリント 1: 9を参照)
 - b. 聖霊と(IIコリント 13: 13、ピリピ 2: 1を参照)
 - c. 父なる神と御子と(Iヨハネ 1: 3を参照)
 - d. 他の契約の兄弟姉妹と(Iヨハネ 1: 7、使徒 2: 42、ガラテヤ 2: 9、ピレモン 17節を参照)
2. 物あるいはグループとの親密な交際
 - a. 福音と(ピリピ 1: 5、ピレモン 6節を参照)
 - b. キリストの血と(Iコリント 10: 16を参照)
 - c. 暗闇とではなく(IIコリント 6: 14を参照)
 - d. 苦難と(ピリピ 3: 10と4: 14、Iペテロ 4: 13を参照)
3. 気前よく与えられる贈り物(ローマ 12: 13と15: 26、IIコリント 8: 4と9: 13、ピリピ 4: 15、ヘブル 13: 16を参照)
4. 神と人とその兄弟姉妹との交わりを回復させる、キリストを通した神の恵みの賜物

これは、縦の関係(創造主と人)によってもたらされる横の関係(人と人)をはっきりと言い表している。それはまたクリスチャン共同体の必要と喜びを強調する。動詞の時制はこの共同体を持つという経験の始まりと継続を強調する(1: 3[2回]と6節と7節を参照)。キリスト教は共同体なのだ。

特別なトピック:キリスト教は共同体である

- A. パウロとペテロは用語「教会」を複数形でたえている。
 - 1. 体
 - 2. 広野
 - 3. 建物
- B. 用語「聖なる者」は常に複数形である。
- C. マルティン・ルターの宗教改革では「信徒の聖職」が真に聖書的ではないことが強調されている。それは信徒達の聖職である。
- D. 信徒はそれぞれ共通の益となるような賜物を与えられている。
- E. 協力することによってのみ神の人々は有意となる。働きは共同でなされるのだ。

NASB(改訂版)原典: 1: 5-2: 2

⁵わたしたちが神から聞いており、あなたがたに知らせることとは、神は光であって、神の内には少しも闇がないということです。⁶もし、自分が神と交わりを持っていると言いながら闇の中を歩むなら、わたしたちは偽りを言っており、真理を行っていません。⁷しかし、神御自身が光の中におられるのと同じようにわたしたちが光の中を歩むなら、わたしたちは互いに交わりを持ち、御子イエス・キリストの血がわたしたちをあらゆる罪から清めてくださるのです。⁸もし自分には罪がないと言うなら、わたしたちは自分を欺いており、真理はわたしたちの内にありません。⁹もしわたしたちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、わたしたちの罪を許し、わたしたちをあらゆる不義から清めてくださいます。¹⁰もし自分は罪を犯したことがないと言うなら、わたしたちは神を偽りにするのであり、神の言葉はわたしたちの内にありません。

^{2:1}わたしの子らよ、わたしがこれらのことをあなたがたに書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。誰かが罪を犯しても、わたしたちには御父のもとに弁護者、すなわち義なるイエス・キリストがおられます。²この方こそ、わたしたちの罪のため、いや、わたしたちの罪のためだけではなく、全世界の罪のための贖いのいけにえです。

1: 6「神と交わりを持っている」異端は、交わりは知識だけに基づくと主張した。これはプラトンに起源を持つギリシャ哲学の特徴であった。しかし、使徒ヨハネは、信徒はキリストのように生きなければならぬと主張している。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜヨハネは、五感に関連するとても多くの動詞を使っているのか。
2. 7節と9節に見られる、犠牲に関連する用語を挙げなさい。
3. ヨハネが対決している異端の信仰を説明しなさい。
4. どのように9節はグノーシス派と信者に関連しているか。
5. 用語「告白」について言い表し、定義しなさい。

ヨハネの手紙第一2: 3-27

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

2: 3-27の文脈の洞察

- A. 同じ主題が繰り返されているので、ヨハネの手紙第一の要約はとても難しい。しかし、大半の解説者達は1章の主題、つまり神との交わりの正負両面の特徴が2章でも続いていることに同意している。
- B. 1章と2章の間には(文章)構造上の言い換えが見られる。(その文章上の技法によって)ヨハネはグノーシス派の偽りの主張とは対照的なメッセージを述べているのだ。
1章「わたしたちが... と言うなら」
2章「... と言う者は」
- C. この文脈には真の信徒を表すいくつかの試練あるいは証拠が挙げられている。
 1. (最初に、そして継続的に)罪を告白する意思
 2. 生活様式を通した従順
 3. 生活様式を通した愛
 4. 悪に対する勝利
 5. 世を捨てること
 6. 忍耐
 7. 正しい教義
- D. 特別な神学的概念

1. 「終わりの時」
2. 「反キリスト」
3. 「あなたにとどまる」

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 2: 3-6

³わたしたちが神のおきてを守るなら、これによってわたしたちは自分たちが神を知っているということが分かります。⁴「神を知っている」と言いながら神のおきてを守らない者は、偽り者であって、真理はその人の内にありません。⁵しかし、誰でも神の御言葉を守っている者は、まことにその人の内には神の愛が全うされています。これによってわたしたちは自分たちが神の内にいることが分かります。⁶自分が彼の内にとどまっていると言う者は、イエスが歩まれた通りに自らも歩まなければなりません。

2: 4「神を知っている」と言いながら神のおきてを守らない者」これは偽教師達を指している。偽教師は(自分達が)神を知っていると主張していたが、神のように生活することから救いを切り離そうとしていた。彼らは聖化と義認を切り離そうとしていたのだ。

NASB(改訂版)原典: 2: 7-11

⁷愛する者たち、わたしがあなたがたに書き送るのは新しいおきてではなく、あなたがたがはじめから受けていた古いおきてです。古いおきてとは、あなたがたがすでに聞いてきた言葉です。⁸それでも、わたしは新しいおきてをあなたがたに書き送ります。そのおきては、神においてもあなたがたにおいても真実です。闇が去って、すでに真の光が輝いているからです。⁹自分は光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎む者は、今なお闇の中にいるのです。¹⁰自分の兄弟を愛する者は光の中にとどまっており、その人の内にはつまずきのもとがありません。¹¹しかし、自分の兄弟を憎む者は闇の中において、闇の中を歩んでおり、自分がどこへ行くようにしているのかを知りません。闇がその人の目を見えなくしたからです。

2: 7「愛する者たち」ヨハネは自分の著書の読者をしばしば愛情に関する用語で呼んだ。

2: 10「自分の兄弟を愛する者は光の中にとどまっており」愛は信者の救いおよび真理と光との個人的関係ならびに知識である。これは新しいが、しかし古くからある掟である。

特別なトピック: ヨハネの著書における「とどまること」

ヨハネの福音書には父なる神と御子イエスの間の特別な御関係が記されている。それは従順と平等性に基づく相互の親密さである。この福音書全般を通して、イエスは父なる神の言われることをお聞きになり、父なる神がなさることを御覧になってその通りに行われると言

われている。イエスは御自分の思われる通りのことではなく、父なる神の御心の通りに行なわれるのである。

2: 11「しかし、自分の兄弟を憎む者は闇の中にいて、闇の中を歩んでおり」 嫌悪は不信仰のしるしである。

NASB(改訂版)原典: 2: 12-14

¹²子らよ、わたしがあなたがたに書き送るのは、あなたがたの罪がイエスの御名によって赦されているからです。¹³父たちよ、わたしがあなたがたに書き送るのは、はじめからおられる方をあなたがたが知っているからです。若者たちよ、わたしがあなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。¹⁴子らよ、わたしがあなたがたに書き送るのは、あなたがたが御父を知っているからです。父たちよ、わたしがあなたがたに書き送るのは、はじめからおられる方をあなたがたが知っているからです。若者たちよ、わたしがあなた方に書き送るのは、あなたがたが強く、神の御言葉があなたがたの内にとどまっており、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

2: 14「あなたがたが御父を知っているからです」「知る」の聖書概念には、親密な個人的な関係というヘブライ語の意味と「～についての事実」というギリシャ語の概念が含まれる。

特別なトピック: 知る(申命記を論理的枠組みとして用いたヘブル語の用語研究)

ヘブル語の用語「知る」(BDB393)は *Qal* の中でいくつかの意味(セム語領域)を持つ。

1. 善悪を理解する—創世記 3: 22、申命記 1: 39、イザヤ 7: 14-15、ヨナ 4: 11
2. 理解によって知る—申命記 9: 2 と 3 節と 6 節、18: 21
3. 経験によって知る—申命記 3: 19、4: 35、8: 2 と 3 節と 5 節、11: 2、20: 20、31: 13、ヨシュア 23 章 14 節
4. 考える—申命記 4: 39、11: 2、29: 16
5. 個人的に知る
 - a. 人—創世記 29: 5、出エジプト 1: 8、申命記 22: 2、33: 9
 - b. 神—申命記 11: 28、13: 2 と 6 節と 13 節、28: 64、29: 26、32: 17
 - c. YHWH—申命記 4: 35 と 39 節、7: 9、29: 6、イザヤ 1: 3、56: 10-11
 - d. 性的に—創世記 4: 1 と 17 節と 25 節、24: 16、38: 26
6. 学んだ技術あるいは知識—イザヤ 29: 11 と 12 節、アモス 5: 16
7. 賢くなる—申命記 29: 4、箴言 1: 2、4: 1、イザヤ 29: 24
8. 神の知識
 - a. モーセの—申命記 34: 10

b. イスラエルの—申命記 31: 21 と 27 節と 29 節

「あなたがたが強く」彼ら(この手紙を読む信徒達)の強さは神の御言葉にとどまっていることに基づくことに注意しよう。

NASB(改訂版)原典: 2: 15-17

¹⁵世も世にあるものも愛してはいけません。世を愛する者がいるなら、御父の愛はその人の内にありません。¹⁶すべて世にあるもの、肉の欲と目の欲、そして生活の奢りは、御父から出るのではなく、世から出るからです。¹⁷世も世にある欲も過ぎ去って行きます。しかし、神の御心を行なう者は永遠に生き続けます。

2:15「愛してはいけません」世の愛はグノーシス主義の偽教師のあるグループの特徴である。「世」新約聖書ではこの用語は、(1)実在の惑星(地球)あるいは創造された宇宙と(2)神から離れて組織され機能する人間社会という2つの異なった意味で用いられている。前者は最初に造られたものを指し、後者は墮落した被造物を指す。

特別なトピック: 人間の政府

政府とは有意の要求に応えるために人類が自身で組織した団体である。人間は社会的な存在なのだ。家族や部族や国家は共同体である。神は秩序が無秩序よりも好ましいと思われ、御自分の民の中に秩序があることを望まれた。政府のいかなる形態または構造も聖書の中で弁護されてはいない。民主主義も資本主義も聖書の真理ではない。信徒は自分の属するいかなる政府体系においても適切に行動するべきである。

2: 17「世も世にある欲も過ぎ去って行きます」これはユダヤの2つの世に関連している。新しい来たるべき世が来ようとしている。罪と反逆の古い世は過ぎ去ろうとしている。

特別なトピック: この世と来るべき世

旧約聖書の預言者達は未来を現在の延長だと見ていた。彼らにとって未来は地理的なイスラエルの回復となるはずのものである。しかし、彼らはそれを新しい世とも見ていた(イザヤ 65: 17 と 66: 22 を参照)。アブラハムの子孫による(エジプト脱出後にも)相次ぐ意図的な YHWH の拒絶によって新たなパラダイム(理論的枠組み)がユダヤの聖書外典的黙示文学(例えば I エノク、IV エズラ、II バルク)の中に生まれた。これらの書から2つの世、つまりサタンに支配される現在の悪い世と、聖霊が支配なさり救世主(しばしば大いなる戦士と呼ばれる)によって始められる来るべき義の世の区別が始まった。

神学のこの分野(終末論)には明らかに進展が見られる。神学者達はこれを「進歩的」黙示と呼

ぶ。新約聖書は、これは2つの世という新しい宇宙の現実(つまり時間二元論)であると主張している。

<u>イエス</u>	<u>パウロ</u>	<u>ヘブル人への手紙</u>
マタイ 12: 32	ローマ 12: 2	1: 2
マタイ 13: 22 と 29 節	I コリント 1: 20、2: 6 と 8 節、3: 18	6: 5
マルコ 10: 30	II コリント 4: 4	11: 3
ルカ 16: 8	ガラテヤ 1: 4	
ルカ 18: 30	エペソ 1: 21、2: 1 と 7 節、6: 12	
ルカ 20: 34-35	I テモテ 6: 17	
	II テモテ 4: 10	
	テトス 2: 12	

新約聖書の神学では、ユダヤ教徒のいうこれら2つの世は、救世主が2度来られるという予期せぬ過度の預言のために重複している。イエスの受肉は新しい世の始まりについての旧約聖書の預言(ダニエル 2: 44-45)を成就させた。しかし、旧約聖書はまた、イエスが裁き主そして征服者として来られるとも見ている。というのは、イエスは最初は卑しく従順な(ゼカリヤ 9: 9 を参照) 苦難の奴隷(イザヤ 53 章とゼカリヤ 12:10 を参照)として来られたからである。イエスは旧約聖書の預言の通りに権威をもって来られるだろう(黙示録 19 章を参照)。この2段階の成就是神の王国の存在(開始)を実現させたが、実際に実現するのは未来である(完了していない)。これが新約聖書の、すでに実現しているのだがまだ私達は見ていないという主張である。

NASB(改訂版)原典: 2: 18-25

¹⁸子らよ、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが以前から聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。これによって、わたしたちは今が終わりの時であることが分かります。¹⁹彼らはわたしたちから去って行きました。彼らはもともとわたしたちの間ではなかったのです。もしわたしたちの間なら、彼らはわたしたちと共にとどまったはずですが、しかし彼らは去って行きました。それは、彼らが皆わたしたちの間ではないことが示されるためだったのです。²⁰あなたがたは聖なる方から油を注がれているので、皆が真理を知っています。²¹わたしがあなたがたに書いているのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っていて、偽りが真理に属していないことを知っているからです。²²偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくて誰でしょう。御父と御子を否定する者、これこそ反キリストです。²³御子を否定する者は誰でも御父とは結ばれていません。御子を公に言い表す者は父にも結ばれている。²⁴あなたがたがはじめから聞いていたことがあなたがたの内にとどまっているようにしなさい。あなたがたがはじめから聞いていたことがあなたがたの内にとどまるなら、あなたがたも御子の内に、また御父の内にとどまるでしょう。²⁵これこそ、御子御自身がわたしたちになされた約束、すなわち永遠の命です。

2: 19「彼らはわたしたちから去って行きました。彼らはもともとわたしたちの間ではなかったのです」これはまさしく、現実の教会にある偽りの教えや偽教師の例である。真理と愛と忍耐に欠けていることは彼らが信徒ではないことの証しである。

特別なトピック： 聖なる方

「聖なる方」とは、父なる神、御子なる神、霊なる神を指す。

NASB(改訂版)原典： 2: 26-27

²⁶あなたがたを惑わそうとしている者たちに関して、わたしはあなたがたにこれらの事を書きました。²⁷神から受けた油注ぎがあなたがたの内にとどまっているので、あなたがたは誰かに教えてもらう必要はありません。神の油注ぎがあなたがたにすべてのことについて教え、またそれが真実であって偽りではないように、そしてそれがあなたがたに教えている通りに、あなたがたは御子の内にとどまることになります。

2: 26「あなたがたを惑わそうとしている者たち」 どの世にも詐欺師がいる。これらの者達はしばしばキリスト教の集会に出席し、そしてはびこっている誠実な宗教家である。

2: 27「神の油注ぎがあなたがたにすべてのことについて教え、またそれが真実であって偽りではないように」 これは霊的真理を指す。全ての信徒には自分の良心を導いてくださる聖霊がおられる。私達は、真理と倫理の分野における聖霊の優しいお導きに敏感でなければならない。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 偽教師の信条について述べなさい。
2. それによって自分達が真に贖われたことを私達を知ることで証しを挙げなさい。
3. 習慣的な罪および単独の罪の行為との間の関係を説明しなさい。
4. 聖なる者の忍耐と信徒の安心との間の関係を説明しなさい。
5. 人類の3つの敵を挙げ、定義しなさい。

ヨハネの手紙第一 2: 28～3: 24

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. 2章ではグノーシス主義の偽教師達(特に、イエスの人間性を否定しキリスト仮現説を信じるグノーシス派)について述べられている。
- B. 3章では、救い(義認)を倫理および道徳(聖化)と切り離して説いた偽教師についての議論が続いている。3章もより直接的な信徒への呼びかけとなっている。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 2: 28-3: 3

^{2:28}さて、子らよ、御子の内にとどまりなさい。そうすれば、御子が現われるときにわたしたちは確信を持つことができ、御子が来られるときに御前で恥じ入ることがありません。²⁹御子が義なる方だと知っているなら、義を行なう者も皆御子から生まれた者であることもあなたがたは知っているのです。^{3:1}御父がどれほど大きな愛をわたしたちに与えられて、わたしたちが神の子と呼ばれるようにしてくださったかを見なさい。世がわたしたちを知らないのは、世が御父を知らなかったからです。²愛する者たち、今やわたしたちは神の子ですが、自分たちがどのようになるのかはまだ明らかにされていません。しかし、御子が現われるとき、わたしたちが御子に似た者となることは知っています。なぜなら、御子のありのままのお姿を見ることになるからです。³この希望を御子の上に置く者は皆、御子が清い方でいらっしゃると同じように、自らを清くします。

2:28「わたしたちは確信を持つことができ」 確信とは、信徒がイエス・キリストの福音について持つ知識とそれに置く信頼に基づく現行の生活様式である。

「御子が来られるとき」 これはキリストの再来を指す。

特別なトピック: キリストの再来を意味する新約聖書の用語

人類が(救い主および裁き主としての)イエスに会うことになっている、イエスの再来の特定の日 はパウロの著書の中で幾通りもの表現で終末論的に強調されている。

1. 「主イエス・キリストの日」(I コリント 1: 8 を参照)
2. 「主の日」(I コリント 5: 5、I テサロニケ 5: 2、II テサロニケ 2: 2 を参照)
3. 「主イエスの日」(I コリント 5: 5、II コリント 1: 14 を参照)
4. 「イエス・キリストの日」(ピリピ 1: 6 を参照)
5. 「キリストの日」(ピリピ 1: 10、2: 16 を参照)
6. 「人の子の日」(ルカ 17: 24 を参照)
7. 「人の子が現れる日」(ルカ 17: 30 を参照)
8. 「わたしたちの主イエス・キリストの現れ」(I コリント 1: 7 を参照)
9. 「主イエスが天から現れる日」(II テサロニケ 1: 7 を参照)
10. 「主イエスが来られるときに御前で」(I テサロニケ 2: 19 を参照)

新訳聖書の著者達がイエスの再来について述べる方法は少なくとも4通りある。

1. *epiphania* (語源的にはないが) 神学的に「栄光」と関連のある、まばゆいほどの明るさについて述べている。II テモテ 1: 10 とテス 2: 11 および 3: 4 ではこの用語はイエスが初めて来られたとき(つまり受肉)とイエスの再来について述べている。II テサロニケ 4: 8 ではこの用語は、I テモテ 6: 14 とII テモテ 4: 1 および 8 節とテス 2: 13 にあるイエスの再来を意味する3つの主要な用語全てを含めて用いられている。
2. *parousia* 臨在を意味し、本来は王の訪問について述べる用語である。この用語は新訳聖書の中で最も広く用いられている(マタイ 24: 3、27 節、37 節、39 節、I コリント 15: 23、I テサロニケ 2: 19、3: 13、4: 15、5: 23、II テサロニケ 2: 1 と 8 節、ヤコブ 5: 7 と 8 節、II ペテロ 1: 6、3: 4 と 12 節、I ヨハネ 2: 28 を参照)。
3. *apokalupsis* (つまり *apocalypsis*) イエスの再来の目的が明らかにされることを意味する。これは新訳聖書の最後の書の名である(ルカ 17: 30、I コリント 1: 7、II テサロニケ 1: 7、I ペテロ 1: 7、4: 13 を参照)。
4. *phaneroo* 光のもとに持ってきてはっきりと示し明らかにすることを意味する用語である。この用語は新訳聖書の中で神の啓示の数多くの内容を意味する語としてしばしば用いられている。この用語は *epiphania* と同様に、イエスが初めて来られたとき(I ペテロ 1: 20、I ヨハネ 1: 2、3: 5 と 8 節、4: 9 を参照)とイエスの再来(マタイ 24: 30、コロサイ 3: 4、I ペテロ 5: 4、I ヨハネ 2: 28、3: 2 を参照)について述べている。

5. 「来訪」を意味するとても一般的な用語 *erchomai* もキリストの再来を意味する用語として時々用いられる(マタイ 16: 27-28、23: 39、24: 30、25: 31、使徒行伝 1: 10-11、I コリント 11 章 26 節、黙示録 1: 7 と 8 節を参照)。
6. この用語はまた、旧訳聖書で神の祝福(復活)と裁きの日を意味する聖句「主の日」(I テサロニケ 5: 2 を参照)とともに用いられる。

新訳聖書は全般的に旧訳聖書の世界観の範囲内で書かれており、以下に示すような事柄を主張している。

- a. 現在の悪と反逆の世
- b. 来るべき義の世
- c. 救い主(聖別された方)の御業を通して聖霊のお働きによってもたらされる世

新訳聖書の著者達がイスラエルの期待を少し修正しているのが、進歩的啓示の神学的仮定が必要となる。救い主の軍事的で国家(イスラエル)的な御臨在の代わりに2度の御臨在がある。最初の御臨在はナザレのイエスが母マリアの胎に宿り誕生されたことによる神の受肉である。イザヤ53章にあるように軍人でも裁判官でもない「苦難のしもべ」として、またゼカリヤ 9: 9 にあるようにロバ(軍用馬や大型のラバではない)の子の背におとなしくお乗りになってイエスは来られた。最初の御臨在によって新しい救い主の世、つまり地上の神の王国が始められた。ある意味で神の王国はここにあるが、しかしもちろん別の意味ではまだはるかにほど遠い。ある意味で、まだ見ぬ、未だはっきりとはしないユダヤの2つの世をだぶらせているのは、旧訳聖書に由来するこの2度の御臨在の間の緊張である。事実、この2度の御臨在は YHWH のなされた全人類を救うという約束を強調している(創世記 3: 15、12: 3、出エジプト 19: 5、預言者達[特にイザヤとヨナ]の説教を参照)。

預言者達の大半が最初の御臨在について述べているので、教会は旧訳聖書の預言の成就を待ってはいない(*How to Read The Bible For All Its Worth* の 165~166 ページを参照)。信徒が期待しているのは、復活された王の王であり主の主である方が来られることであり、待ちに待った義の新しい世が天国と同じように(マタイ 6: 10 を参照)地上に歴史的に実現することである。旧訳聖書の預言にある御臨在は不正確なのではなく未完成なのである。預言者達が YHWH の御力と權威において預言した通りにイエスは再来されることになっているのだ。

イエスの再来は聖書の用語ではないが、その概念は新訳聖書全体の世界観と要旨である。神はそれを確かに予定されている。神と神のお姿に似せて造られた人類の交わりは回復されることになっている。悪は裁かれ取り除かれることになっている。神の目的は台なしになることはないし、ありえないのだ。

特別なトピック： 義

「義」は非常に重要なトピックであるので、聖書研究者はこの概念について個人的に深く研究しなければならない。

旧約聖書では神の御性質は「公平な」つまり「義である」(BDB841)と表現されている。メソポタミアの言語での用語はそれ自体が、壁や塀の水平度を測る建築用具として用いられた、川岸に生える葦に由来する。神は御自身の御性質の比喩的な表現に用いられるためにこの用語を選ばれた。神は万物を評価するためのものさし(定規)でいらっしやる。この概念は神の義とともに裁きにおける神の権限をも言い表している。

人は神のお姿に似せて創造された(創世記 1: 26-27、5: 1 と 3 節、9: 6 を参照)。人類は神との交わりのために創造された。全ての被造物は神と人類の交わりの舞台あるいは背景である。神は御自分の最高の被造物である人類に、御自分を知り、愛し、御自分に仕え、御自分のようになってほしいと願っておられるのだ！人類の忠誠心は試され(創世記3章を参照)、そして最初の夫婦はその試練に失敗した。このことは神と人類の関係の破綻につながった(創世記3章とローマ 5 章 12~21 節を参照)。

神はその(御自分と人類の)交わりを修復かつ回復すると約束された(創世記 3: 15 を参照)。神はこのことを御自分の御意志と御自分の御子を通してされる。人類は神との不和を解消することができなかった(ローマ 1: 18~3: 20 を参照)。

(人類の)墮落後、(関係の)回復への神の第一の段階は、御自分の招きと、人類の悔い改めによる忠実で従順な応答に基づく契約の概念であった。墮落のために人類は適切な行動がとれなくなった(ローマ 3: 21-31 とガラテヤ3章を参照)。神御自身は、契約を破った人類との関係回復において主導権をとられなければならなかった。神は以下に示すことによってこのことをされた。

1. キリストの御業を通して人類を義とすると宣言する(つまり法廷の義)
2. キリストの御業を通した義を人類に自由に与える(つまり帰属される義)
3. 義(つまりキリストのようであること、神のお姿の回復)を生む霊を人類の内に住まわせるように備える

しかし神は契約的な応答を要求された。神は宣言され(つまり自由に与えられ)備えられたが、人類は以下に示すことによって応答しまた応答し続けなければならなかった。

1. 悔い改め
2. 信仰
3. 生活様式における従順
4. 忍耐

従って、義は神と御自分の最高の被造物との契約的で相互的な行為である。神の御性質とキリストの御業と聖霊のお持ちの能力に基づいて、各人は個人的かつ継続的に適切な応答をしなければならない。その概念は「信仰による義認」と呼ばれている。その概念は、これらの用語の中ではなく福音の中に現われている。それは、ギリシャ語の用語「義」を様々な形で 100 回以上も用いたパウロによって最初に定義された。

訓練された教師であるパウロは、用語 *dikaioisune* を、ギリシャ語の文献由来の用語ではなくセプトゥアギンタの中で用いられた用語 *SDQ* のヘブル語的意味で用いている。ギリシャ語の文献

ではこの用語は神と社会の期待にかなった者と関係がある。ヘブル語的意味ではそれは常に契約用語を構成する。YHWHは公正で、倫理的で、道徳的な神である。神はご自分の人々にご自分の性質を反映してほしいと思っておられる。救われた人類は新しく生まれたものとなる。この新しさによって、神に従う新しい生活に入る(ローマカトリック教会の義認の中心)。イスラエルは神政国家なので、俗(社会の規範)と聖(神の御意志)の間に明確な境界線はない。この違いは、英語で「正義」(社会に関係)と「義」(宗教に関係)と訳されているヘブル語とギリシャ語の用語で表現されている。

イエスの福音(良い知らせ)は、墮落した人類と神との交わりが回復されるということである。これは父なる神の愛と慈みと恵み、御子のご生涯と死と復活、聖霊の福音へのご説得とお導きによって達成されてきた。義認は神の自由なご行為であるが、それは神への忠実さにつながるものでなければならない(福音の自由性を強調する宗教改革運動家達の見解と、愛と神への忠実さに基づく生活への変化を強調するローマカトリック教会の見解の両方を反映するアウグスティヌスの見解)。宗教改革運動家達にとって、用語「神の義」は目的所有格(つまり、罪深い人類が神に受け入れられるようにする行為[立場上の聖別])であり、一方ローマカトリック教会にとってそれは主格所有格、つまりより神に似たものとなる過程(経験的かつ進歩的聖別)である。現実にはそれは確かにそれら両方だ！！

私の見解では、聖書全般、特に創世記4章から黙示録20章までは神による、エデンの園でかつ行なわれていたご自分と人類との交わりの回復の記録である。聖書は地上という設定での神と人類との交わりについて書き始められ、同じ設定で書き終わられている(黙示録21-22章を参照)。神のお姿とご目的は回復されることになっているのだ！

上述の議論を立証するために、ギリシャ語の語群で描写された、特に選んだ下記の新約聖書の聖句に注目しなさい。

- A. 神は義なるお方である(しばしば、裁く方としての神に関係する)
 - 1. ローマ 3: 26
 - 2. IIテサロニケ 1: 5-6
 - 3. IIテモテ 4: 8
 - 4. 黙示録 16: 5
- B. イエスは義なるお方である
 - 1. 使徒行伝 3: 14、7: 52、22: 14(メシアの肩書)
 - 2. マタイ 27: 19
 - 3. Iヨハネ 2: 1と29節、3: 7
- C. 神の被造物に対するご意志は正しい
 - 1. レビ記 19: 2
 - 2. マタイ 5: 48(5: 17-20を参照)
- D. 神が義を与えられ造られる目的
 - 1. ローマ 3: 21-31

2. ローマ4章
 3. ローマ 5: 6-11
 4. ガラテヤ 3: 6-14
 5. 神により与えられる
 - a. ローマ 3: 24、6: 23
 - b. I コリント 1: 30
 - c. エペソ 2: 8-9
 6. 信仰により受ける
 - a. ローマ 1: 17、3: 22 と 24 節、4: 3 と 5 節と 13 節、9: 30、10: 4 と 6 節と 10 節
 - b. I コリント 5: 21
 7. 御子の御業を通して
 - a. ローマ 5: 21-31
 - b. II コリント 5: 21
 - c. ピリピ 2: 6-11
- E. 神のご意志は、ご自分に従う者達が義となることである。
1. マタイ 5: 3-48、7: 24-27
 2. ローマ 2: 13、5: 1-5、6: 1-23
 3. II コリント 6: 14
 4. I テモテ 6: 11
 5. II テモテ 2: 22、3: 16
 6. I ヨハネ 3: 7
 7. I ペテロ 2:24
- F. 神は義によって世界を裁くおつもりである
1. 使徒行伝 17: 31
 2. II テモテ 4: 8

義は神のご性質であり、キリストを通して罪深い人類に自由に与えられる。それは

- A. 神の布告
- B. 神の賜物
- C. キリストの御業

である。しかしそれはまた、精力的かつ断固として追い求められなければならない義なる状態になる過程でもある。それはいつの日かキリストの再来されるときに完成する予定である。神との交わりは救いのときに回復されるが、生涯を通じて深まり、そして死つまりキリストの再臨のときに顔と顔を見合わせた出会いとなるのだ！

ここに IVP の *Dictionary of Paul and His Letters* からのよい引用を示す。

「カルヴァンはルターよりもはっきりと神の義の关系的側面を強調している。神の義についての

ルターの見解は無罪評決という一面を含むようだ。カルヴァンは、神の義を私達に伝え知らせることの素晴らしい本質を強調している」(834 ページ)。

私の見解では信者と神の関係には3つの局面がある：

- A. 福音は一人の人物である(東方教会とカルヴァンが強調)
- B. 福音は真理である(アウグスティヌスとルターが強調)
- C. 福音は変化した生活である(カトリックが強調)

それらは全て正しく、健康的で健全な聖書的キリスト教の中になければならないことである。もしどれかひとつが強調あるいは軽視されれば問題が起こる。

私達はイエスを歓迎しなければならない！

私達は福音を信じなければならない！

私達はキリストのようになることを追い求めなければならない！

特別なトピック：新約聖書に記された人の救いの証し

それはイエスにある新しい契約(エレミヤ31: 31-34とエゼキエル36: 22-38を参照)に基づく。

1. 人の行いや従順に対する報酬あるいは単なる信条ではなく、父なる神の御性質(ヨハネ 3: 16を参照)と御子の御業(Ⅱコリント5: 21を参照)そして聖霊のお働き(ローマ8: 14-16を参照)
2. 賜物(ローマ3: 24、6: 23、エペソ2: 5と8~9節を参照)
3. 新しい命であり、新しい世界観(ヤコブの手紙とヨハネの手紙第一を参照)
4. 知識(福音)と交わり(イエスにあり、イエスに対する信仰)と新しい生活様式(聖霊のお導きによるキリストらしさ)のどれか一つではなく、3つ全て

3: 3「御子が清い方でいらっしゃるのと同じように、自らを清くします」清さは重要である。私達は聖化の過程に協力しなければならない。

3: 4-10の文脈の洞察

この段落は、完全な聖化と時々呼ばれている、信徒の完全主義および信徒が罪を犯し続けていることとの間の論争の中心となってきた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典： 3: 4-10

⁴罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは法に背くことです。⁵御子が現われたのはわたしたちの罪を取り除くためであることを、あなたがたは知っています。御子の内には罪がありません。⁶御子の内にとどまっている人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たことがなく、知っ

でもいません。⁷子らよ、誰にも惑わされてはなりません。義を行なう人は、御子が義なる方でいらつしやるのと同じように、義なる人です。⁸罪を犯す者は悪魔に属しています。悪魔ははじめから罪を犯しているからです。悪魔の業をうち砕くこと、このために神の御子は現われたのです。⁹神から生まれた者は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にとどまっているからです。この人は罪を犯すことができません。この人が神から生まれたからです。¹⁰このことによって、神の子らと悪魔の子らの違いは明らかです。義を行なわない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同じです。

3: 5「御子の内には罪がありません」 イエス・キリストに罪のないことは、イエスが私達の身代わりに贖いのいけにえとなられたことの根本である。

特別なトピック: 聖化

罪人は悔い改めと信仰によってイエスに立ち返る時に瞬間的に義とされ聖くなると新約聖書は主張している。これは彼らにとってキリストと結ばれた新たな地位である。キリストの義は彼らに帰属する(ローマ4章を参照)。彼らは義なる聖なる者と宣言された(裁き主としての神の御業)。

しかし新約聖書は信徒に聖くあり続けること、つまり聖化され続けることも求めている。それはイエス・キリストの成し遂げられた御業に基づく神学的地位であるとともに、日々の生活においてキリストのような態度をとり、キリストのような行いをするようにとの召しでもある。救いが無償の恵みであり全てを犠牲にする生活様式であるのと同じように、聖化もまたそのようなものなのである。

最初の応答

使徒行伝 20: 23、29: 40

ローマ 15: 16

I コリント 1: 2-3、6: 11

II テサロニケ 2: 13

ヘブル 2: 11、10: 10 と 14 節、13: 12

I ペテロ 1: 12

キリストのようであり続けること

ローマ 6: 19

II コリント 7: 1

エペソ 1: 4、2: 10

I テサロニケ 3: 13、4: 3-4、7 節、
5: 23

I テモテ 2: 15

II テモテ 2: 21

ヘブル 12: 14

I ペテロ 1: 15-16

253

3: 7「誰にも惑わされてはなりません」 偽教師の存在はヨハネの手紙第一全体、特に1: 7-10 と3: 4-10の正しい神学的理解のために必要な歴史的背景となりうる。

「神の子」 以下の特別なトピックを見よ。

262

特別なトピック： 神の御子

これは新約聖書に見られる、イエスに対する主要な称号の一つである。イエスの用いられた自称「人の子」は、ダニエル7: 13-14に由来する神的な意味を持っている。

NASB(改訂版)原典： 3: 11-12

¹¹というのは、わたしたちが互いに愛し合うべきこと、これがあなたがたがはじめから聞いている教えだからです。¹²カインのようであってはなりません。彼は悪い者に属して、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。それは自分の行いが悪く、自分の兄弟の行いが正しかったからです。

3: 11「わたしたちが互いに愛し合うべきこと」 これは、信徒が、自分が本当に贖われていることを知るうえで証しとなる。

NASB(改訂版)原典： 3: 13-22

¹³兄弟たち、世があなたがたを憎むとしても驚いてはなりません。¹⁴わたしたちは自分たちが死から命へと移ったことを知っています。わたしたちは兄弟たちを愛しているからです。自分の兄弟を愛さない者は死の内にとどまっています。¹⁵自分の兄弟を憎む者は皆、人殺しです。人殺しは皆、自分の内に永遠の命をとどめていないことをあなたがたは知っています。¹⁶御子がわたしたちのために御自分の命を捨ててくださったこと、このことによってわたしたちは愛を知っています。ですから、わたしたちも自分の兄弟たちのために自分の命を捨てるべきです。¹⁷しかし、世の富がありながら、必要を覚えている自分の兄弟を見て心を閉ざすなら、どうして神の愛がその人の内にとどまるでしょうか。¹⁸子らよ、言葉や舌だけによらず、行ないと真理とによって愛そうではありませんか。¹⁹このことによってわたしたちは自分たちが真理に属していることを知り、神の御前で安心できるのです。²⁰自分たちの心がわたしたちを責めても、神はわたしたちの心よりも大いなる方です。いらっしやって、全ての事を御存知だからです。²¹愛する者たちよ、自分の心がわたしたちを責めないなら、わたしたちは神の御前で確信を持ち、²²自分たちが求めることは何でも神から受けます。わたしたちが神のおきてを守り、神の御目に喜ばれることを行なっているからです。

3: 14「死から命へと移った」 死から命へと移ったことの証しの一つは、私達が互いに愛し合うことである。

特別なトピック： 無制限の、しかし限られた祈り

効果的な祈りにおいて重要なことは、キリストに倣う生き方をすることである。これが、イエスの御名において祈ることの意味することである。

NASB(改訂版)原典： 3: 23-24

²³わたしたちが御子イエス・キリストの御名を信じ、神がわたしたちに命じられた通りに互いに愛し合うこと、これがその方のおきてです。²⁴神のおきてを守っている人は神の内にとどまっており、神はその人の内にとどまっておられます。神がわたしたちに与えてくださった霊によって、わたしたちは神がわたしたちの内にとどまっていることを知るのである。

3: 24「神のおきてを守っている人は神の内にとどまっており」従順はとどまることに関連している。愛は、私達が神の内におられ、神が私達の内におられることの証しである。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 11～24節の統一テーマは何か(I ヨハネ2: 7-11を参照)。
2. 16節と17節の関係を説明しなさい。私達の命を捨てることは、必要を覚えている私達の兄弟を助けることとどのように比較されるか。
3. 19～20節は神の裁きの厳しさを強調しているか、それとも私達の恐れを鎮める神の大いなる憐れみを強調しているか。
4. 22節に見られる、祈りに関するヨハネの記述はどのように私達の日常体験と関連があるか。
5. 信徒が罪を認めて告白する必要性をヨハネが一見逆説的に強調していることと、罪のない完全さとはどのように妥協しうるか。
6. ヨハネはなぜ生活様式をととも強調しているのか。
7. 「再び生まれること」に関連する神学的真理を説明しなさい。
8. この段落はどのように信徒の日常生活に関連しているか。

ヨハネの手紙第一4章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

4: 1-21の文脈の洞察

- A. ヨハネの手紙第一4章は、神の代弁者と自称する人々を信徒が査定し立証する方法について特記した文章単位である。この章は、反キリストと呼ばれる偽預言者達、欺こうと試みる人々、そして特別な霊的真理の知識を主張する人々に関連している。初期教会の時代の信徒達の苦境を完全に理解するためには、彼らの多くが神を代弁すると主張していたことを認識しなければならない。
- B. ヨハネの手紙第一には同じ主題が繰り返されているので要約がとても難しい。4章では特にそうである。
- C. 使徒ヨハネは、偽教師と戦うために、そして真の信徒を励ますためにヨハネの手紙第一を書いた。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 4: 1-6

¹愛する者たちよ、全ての霊を信じてはなりません。まずそれらの霊が神に属するものかどうかを試しなさい。多くの偽預言者が世に出ているからです。²これによってあなたがたは神の霊を知ります。イエス・キリストが肉において来られたことを告白する霊は皆、神から来ています。³イエス・キリストが肉において来られたことを告白しない霊は皆、神から来たものではありません。これは

反キリストの霊であり、来ているとあなたがたが聞いていた者です。今やそれはすでに世にいるのです。⁴子らよ、あなたがたは神から来た者で、それらの者たちに打ち勝ったのです。あなたがたの内におられる方は世の内にいる者より大いなる方だからです。⁵それらの者たちは世に属しているので世について語り、世は彼らの言うことを聞きます。⁶わたしたちは神に属しています。神を知る人はわたしたちの言うことを聞きます。神に属していない者はわたしたちの言うことを聞きません。これによってわたしたちは真理の霊と偽りの霊を知ります。

4:1「信じてはなりません」明らかに偽教師達は、自分達が神の代弁者であること、そして神からの特別な啓示を持っていることを主張していた。

特別なトピック: クリスチャンは互いに裁きあうべきか

この問題は2通りの方法で取り扱われなければならない。

1. 信徒は互いに裁きあわないように勧められている(マタイ 7: 1-5、ルカ 6: 37 と 42 節、ローマ 2: 1-11、ヤコブ 4: 11-12 を参照)。
2. 信徒は指導者を評価するように勧められている(マタイ 7: 6 と 15~16 節、I コリント 14: 29、I テサロニケ 5: 21、I テモテ 3: 1-13、I ヨハネ 4: 1-6 を参照)。
正しい評価のためのいくつかの基準が手助けとなりうる。
1. 評価は承認の目的のためのものであるべきである(I ヨハネ 4: 1 を参照—肯定的な見方の「吟味」)。
2. 評価は謙遜さと寛容さをもって行なわれるべきである(ガラテヤ 6: 1 を参照)
3. 評価は個人的な好みの問題に注目して行なわれるべきではない(ローマ 14: 1-23、I コリント 8: 1-13、10: 23-33 を参照)
4. 評価は教会内あるいは社会の中で「批判されることのない」指導者を見出すためのものである(I テモテ3章を参照)

「全ての霊」ここでの「霊」は人間の意味で用いられている。これは神からのメッセージを指していると思われる。異端は教会内から来る。偽教師達は自分達が神の代弁者であると主張していた。使徒ヨハネは、人間の言葉と行いの背後に2つの霊的な存在、つまり神と悪魔がいることを主張している。

「まずそれらの霊が神に属するものかどうかを試しなさい」最悪のことが証明されるまでは、信徒は他者の最善を考えなければならない。

特別なトピック: 「試練」を意味するギリシャ語の用語とその意味

ある目的で誰かを試すことという概念を表すギリシャ語の用語は2つのグループに分けられる。

1. *Dokimazo*、*Dokimion*、*Dokimasia*

この用語は火による物(比喩的に人)の真贋性試験を意味する冶金学用語である。火によって純粋な金属が露わにされ不純物が焼き払われる(つまり製錬される)。この物理的過程は神またはサタンあるいは人間が他者を試みることを意味する強意の熟語となった。この用語は他者に受け入れられる目的での試みという肯定的な意味でのみ用いられる。

この用語が新約聖書の中で試みの意味で用いられている例:

1. 雄牛—ルカ 14: 19
2. 私達自身— I コリント 11: 28
3. 私達の信仰—ヤコブ 1: 3
4. 神さえも—ヘブル 3: 9

これらの試みの結果は良いものと予想された(ローマ 1: 28、14: 22、16: 10、II コリント 10: 18、13: 3、ピリピ 2: 27、I ペテロ 1: 7を参照)ので、この用語は試みられる人が以下のようになるという意味を持つ。

- a. 価値ある人となる
- b. 良い人となる
- c. 真のクリスチャンになる
- d. 価値ある人となる
- e. 名誉ある人となる

2. *Peirazo, Peirasmus*

この用語はしばしばあら探し(欠点の探索)あるいは拒絶の目的で試みることを意味する。この用語はしばしばイエスが荒野で遭遇された誘惑の意味で用いられる。

- a. この用語はイエスをつまづかせようとする試みを意味する(マタイ 4: 1、16: 10、19: 3、22: 18と35節、マルコ 1: 13、ルカ 4: 38、ヘブル 2: 18を参照)。
- b. この用語(*peirazon*)はサタンの呼称として用いられる(マタイ 4: 3、I テサロニケ 3: 5を参照)。
- c. この用語はイエスによって神(マタイ 14: 7、ルカ 4: 12を参照)[あるいはキリスト(I コリント 10: 9を参照)]を試みないようという私達への警告として用いられる。この用語はまた、墮落に至ることを行わせる試みを意味する(使徒行伝 9: 20、20: 21、ヘブル 11: 29を参照)。この用語は信徒の遭遇する誘惑と試練の意味で用いられる(I コリント 7: 5、10: 9と13節、ガラテヤ 6: 1、I テサロニケ 3: 5、ヘブル 2: 18、ヤコブ 1: 2、13節、14節、I ペテロ 4: 12、II ペテロ 2: 9を参照)。神は人類の3つの敵(世、肉、悪魔)を通して特別な時と場所を示される。

4: 2「イエス・キリストが肉において来られたことを告白する霊は皆、神から来ています」これは、使徒ヨハネがこの書において対決している偽教師達(グノーシス主義者達)を吟味するうえで不可欠な教義である。

NASB(改訂版)原典： 4: 7-14

⁷愛する者たちよ、わたしたちは互いに愛し合おうではありませんか。愛は神から来るからです。愛する者は皆、神から生まれており、神を知っています。⁸愛さない者は神を知りません。神は愛だからです。⁹神がそのひとり子を世に遣わされて、わたしたちが御子を通して生きるようにしてくださったこと、このことによって神の愛はわたしたちの内に示されました。¹⁰わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛され、御自分の御子をわたしたちの罪のためのいけにえとして遣わされたこと、このことに愛があるのです。¹¹愛する者たちよ、神がそれほどにわたしたちを愛してくださったのなら、わたしたちも互いに愛し合うべきです。¹²いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うなら、神はわたしたちの内にとどまれ、神の愛がわたしたちの内にも全うされるのです。¹³このことによってわたしたちは、自分たちが神の内にとどまり、神がわたしたちの内にとどまられることを知るのである。それは、神がわたしたちに御自分の霊を与えてくださったからです。¹⁴わたしたちは御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見て証しています。

4: 7「愛は神から来るからです」 愛の源は人間の人間愛や憐れみや感情ではなく神である。

4: 14「御父が御子を世の救い主として遣わされたこと」 父なる神が御子なる神を世に遣わされたという事実は、霊(善)と物質(悪)の間に二元論を仮想するグノーシス主義的偽教師達の主張に対する反論である。また、父なる神が救いの手段としてイエスを用いることを選ばれたという事実は、天使の諸階層に関連する特別な秘密の知識を通して救いが得られるという、グノーシス主義の偽の教えに対する反論である。

NASB(改訂版)原典： 4: 15-21

¹⁵イエスが神の子であることを告白する人は皆、神がその人の内にとどまっておられ、その人は神の内にとどまっています。¹⁶神がわたしたちに抱いておられる愛をわたしたちは知っており、信じています。神は愛です。愛の内にとどまる者は神の内にとどまっておられ、神はその人の内にとどまっておられます。¹⁷このことによって愛はわたしたちの内にも全うされています。それは、わたしたちが裁きの日に確信を持つことができるようにするためです。この世ではわたしたちも御子イエスと同じようだからです。¹⁸愛には恐れがありません。完全な愛は恐れを締め出します。恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。¹⁹わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。²⁰「神を愛している」と言いながら自分の兄弟を憎む者がいるなら、その者は偽り者です。目に見える自分の兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができないからです。²¹神を愛する者は自分の兄弟をも愛するべきであるという、このおきてをわたしたちは神から受けているのです。

特別なトピック: ボブの伝道についての偏見

私はこの点について偏見があることを読者の皆さんに認めなければならない。私の組織神学はカルヴァン主義や天啓的史観(訳者注: 神の摂理によって歴史がつくられるという考え)ではなく、大いなる召命による伝道主義である(マタイ 28: 18-20、ルカ 24: 46-47、使徒行伝 1: 8 を参照)。神は全ての人、つまり御自身のお姿に似せて造られた全ての人(創世記 1: 26-27 を参照)を救う永遠の計画を持っておられた(創世記 3: 15 と 12: 3、出エジプト 19: 5-6、エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 18章と 36: 22-39、使徒行伝 2: 23 と 3: 18 と 4: 28 と 13: 29、ローマ 3: 9-18、19-20 節、21-31 を参照)と私は信じている。契約群はキリストの中で統一される(ガラテヤ 3: 28-29 とコロサイ 3: 11 を参照)。イエスは神の秘密であり、隠されていたが今や明らかにされた(エペソ 2: 11-3: 13 を参照)のだ！イスラエルの福音ではなく新約聖書の福音が聖句において重要である。

この予備知識が私の聖書解釈の全てのもとになっている。私は聖書を全て通読した！これは確かに偏見(解釈者全員が持っている！)であるが、しかし聖句から得られる情報に基づいた仮定である。

4: 16「神は愛です」この重要な真理は繰り返し述べられる。

4:21 この節はこの章の要約である。愛は真の信徒の偽らざる証しである。憎しみは悪しき者の子の証しである。偽教師達は群集の内に分割と紛争を引き起こしていた。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 真のキリスト教を見極める三つの事柄を挙げなさい。
2. どのようにすれば真の神の代弁者を知ることができるか。
3. 真理の源を2つ挙げなさい。
4. 称号「世の救い主」の重要性は何か。
5. 偽り者(偽の信徒)を明らかにする行いを挙げなさい。

ヨハネの手紙第一5章

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 5: 1-4

¹イエスがキリストであることを信じる人は皆、神から生まれた人です。御父を愛する人は皆、その方からお生まれになった御子を愛しています。²わたしたちが神を愛し、神のおきてを守ること、これによってわたしたちは自分たちが神の子らを愛していることを知ります。³わたしたちが神のおきてを守ること、これが神の愛だからです。そのおきては難しいものではありません。⁴神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。わたしたちの信仰、これが世に打ち勝つ勝利なのです。

5:4「勝利」 信徒はであり、キリストが世に勝利されたことにおいて、またそれを通して、信徒は勝利者であり、そして勝利者であり続ける。

NASB(改訂版)原典: 5: 5-12

⁵世に打ち勝った者とは、イエスが神の子であることを信じる者以外のだれでしょう。⁶この方こそ水と血によって来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とをもって来られたのです。証言するのは霊です。霊は真理だからです。⁷証言する者が三人います。すなわち⁸霊、水、血であり、三者は一致しています。⁹人の証言を受け入れるとしても、神の証言のほうが偉大です。その方がご自分のみ子に関して証言されたこと、それが神の証言だからです。¹⁰神のみ子を信じる者は自分の内にこの証言を持っています。神を信じない者は、その方を偽り者としています。神が

ご自分のみ子に関して与えられた証言を信じなかったからです。¹¹その証言とは、神がわたしたちに永遠の命を与えられたこと、そして、この命がそのみ子の内にあるということです。¹²御子を持っている者はその命を持っています。神のみ子を持っていない者はその命を持っていません。

5:5「イエスは神の息子である」この節は明らかに詩4 に記載されている私たちの信仰の内容を、定義しています。私たちの勝利はどちらも完全に人間と完全に神(：4:1-6 参照)であるイエスキリスト、私たちの専門職/信頼の告白です。：神の(2)子(詩1)；神の(3)息子(詩5,10)と(4)生活(参照信者は、イエスが(1)救世主(詩1)であることを断言することに注意してください1:02、5:20)。動詞に接続されているすべてのhoti の句をリストヨハネ2:23、で特別なトピックを参照してください”と信じて。”

「神の息子」に特別なトピックを参照してください3:8.

5:6「これが来たものです」これは偽教師が拒否されましたどちらも化身(両方男性と神としてイエス)と彼の犠牲の死を、強調詞である。

「水と血によって」と”血”は彼の肉体的な死を参照している：それは”水が”イエス”物理的な出生(ヨハネ3:1-9参照)を参照していることだ。真の人類のグノーシス主義の偽教師”イエスの拒絶”の文脈において、これら二つの経験は、要約し、彼の人間性を明らかにする。グノーシス主義の偽教師に関連するその他のオプションは、”水が”イエスのバプテスマを指すです。彼らは”キリストの精神が”彼の洗礼(水)でman イエスに来て、人間イエスの死の前にクロス(NASB 試験聖書の血液、SEEA良い要約、頁1835 年)に残っていると主張。三つ目の選択肢は、イエスの死へのフレーズを関連付けることです。注ぎ出すために：槍は、”血と水”(ヨハネ19:34 参照)が原因。偽教師は、減価償却、イエスの身代わりの、身代わりの死を持つことができます。

「それは証明して精神です」聖霊の役割は、福音を明らかにすることです。(：ヨハネ16:7-15 参照)、彼は信者で、キリストを、罪の受刑者キリストにつながる、キリストにbaptizes、及び形成する三位一体のその部です。精神は常にキリストの証人ではなく、自自身(参照：ヨハネ15:26)。

「精神が真実だ」(ヨハネ、15:26、16:13、私ヨハネ4:6 ヨハネ夜02:17 参照)。ヨハネ6:55 および17:03 で特別なトピックを参照してください。

5:7 詩6,7、および8 は、開始および終了するなど、英語の翻訳のいくつかの混乱がある。というKJV で発見さ詩7 の部”天に、父、単語や聖霊、そしてこれらの3 つが一つであるが、”の新約聖書三大古代アンシャル体ギリシア語写本で発見されて いません。または、また原稿のビザンチン様式の家族インチそれは、わずか4 月下旬極小の写本に表示されます。

1. MS 61 世紀の日付の16 ミリ秒、
2. MS 88 通路は、後で手で余白に挿入されている12 世紀の日付のミリ秒、
3. MS 629 第十四または15 世紀の日付のミリ秒
4. MS 635 通路は、後で手で余白に挿入されている11 世紀の日付のミリ秒、

この節は、三位一体上でも、その教義上の論争では、初期の教父のいずれによっても引用されて いません。それ一後期ラテン語写本の家族(sixto -クレメンタイン)を除くすべての古代のパーヨハ

ネには存在しない。それは、古いラテン語やジェロームのウルガタではありません。それは、広告 385 年に亡くなったスペインの異端者 priscillian、で論文に最初に表示されます。それは 5 世紀に北アフリカとイタリアのラテン父親が引用している。この節は、単に私がヨハネの元のインスピレーションワードの一部ではありません。唯一の神（一神教）のが、3 つの個人的な症状（父、息子、そして精神）との聖書の教義は、この節の拒絶反応の影響を受けません。それは聖書の単語“三位一体を、”決して使用しないことは事実であるが、多くの聖書の一節は、一緒に行動する神格のすべての三人で話す。

1. イエスの洗礼（マタイ3:16-17）で
2. 大宣教命令（マタイ28:19）
3. 精神が（ヨハネ14:26）送信
4. ペトロのペンテコステ説教（言行録2:33-34）
5. 肉体と精神のパウロの議論（ローマ8:7-10）
6. 精神的なギフトのパウロの議論（I コリント12:4-6）
7. パウロの旅行計画（II コリント1:21-22）
8. パウロの祝福（II コリント13:14）
9. 間の膨満感のパウロの議論（ガラテヤ4:4-6）
10. 父親への称賛のパウロの祈り（エフェソ1:3-14）
11. 前者疎外パウロ“異邦人の議論”（エフェソ2:18）
12. 神の一体性のパウロの議論（エフェソ4:4-6）
13. 神の優しさのパウロの議論（テトス3:4-6）
14. ペトロの紹介（I ペトロ1:2）

ヨハネ14:26 三位一体の特別トピックを参照してください。

5:8「精神と水と血と3 人が一致している」旧約聖書二、三人の証人が問題（参照：申命5:6、19:15）を確認するために必要とされた。ここで、イエスの生涯の歴史的な出来事は彼の完全な人間性と神の証人として与えられる。この節で、“水”と“血”と一緒に再び言及されている“精神。”用語“水”と“血”は詩6 に記載されている。降順鳩のため“精神が”イエスのバプテスマを参照する場合があります。これらの3 つのそれぞれが表す正確な歴史的隠喩についての若干の意見の相違がある。彼らは真の人間性偽教師“イエスの拒絶”に関連付ける必要があります。

5:9「場合」これはが著者の視点から、あるいは彼の文学的的目的のために真であると仮定される最初のクラスである。教会ヨハネは彼らは明らかにグノーシス主義の教師の説教や授業を聞いていたので、混乱していたために書いていた。

「我々は、男性の証言を受信した場合は、神の証言が大きい」この神の証言、コンテキストで、を指します

1. 聖霊の証人
2. イエスの地上の生と死への使徒証人（例えば、1:1-3）

「彼は彼の息子に関して証言していること」これは集大成の状態になると変わらぬ状態になってい

る過去の行動を意味する完全なアクティブな指標である。(ヨハネ5:32,37、8:18 マタイ17:5 参照) や聖句の両方の記録(すなわち彼の変貌:これは、イエスのバプテスマ(マタイ3:17 参照)で、神の声の確約を参照する場合があります、福音書)。ヨハネ1:8 でイエスの証人:特殊なトピックを参照してください。

5:10「彼自身の証言を持っている」それは二つの方法でこのフレーズを解釈することが可能です。

1. 信者の精神の主観的な内部証人(参照:ローマ8:16)
2. 福音の真実(参照:黙示録6:10、12:17、7:10)

ヨハネ1:8 でイエスの証人:特殊なトピックを参照してください。

「彼を嘘つきてきた」これは別の完全なアクティブな指標である。彼らは神嘘つき作るの:(詩12 参照)イエスについての使徒的証言を拒否する者は神を拒絶する。

「彼は信じていないので」これは、改心していないの定住条件を強調している別の完璧なアクティブな指標である。

5:11-12「神は私たちに永遠の命を与えている」これは過去の行為のことを話すまたは行為を完了したことを示しである。永遠の命は(ヨハネ3:16 参照)ヨハネ5:3 に定義されています。一部のインスタンスでフレーズは、を指しますイエス自身(参照:1:2、5:20)、他の人にそれは神(参照:2:25 ヨハネ10:28; 5:11)からの贈り物を介して受信され、キリストへの信仰(参照:5:13;ヨハネ3:16)。一つは息子の個人的な信仰なしで父との交わりにすることはできません！

NASB(改訂版)原典: 5: 13-15

¹³わたしがこれらの事を、神のみ子の名を信じているあなた方に書き送ったのは、自分たちが永遠の命を持っていることをあなた方が知るようになるため、また、神のみ子の名を信じ続けるようになるためです。¹⁴もしわたしたちがその方のご意志に従って何かを求めるなら、その方はわたしたちに耳を傾けてくださるといふこと、これがわたしたちがその方に対して抱いている大胆さです。¹⁵そして、自分たちの求めることは何でもその方が耳を傾けてくださることをわたしたちが知っているのであれば、自分たちがその方に求めたその請願をわたしたちがすでに受けていることも知っているのです。

5:13「名前を信じている」これは継続的な信念を強調詞、ある。これは(カバラ、神の名前に基づいてユダヤ神秘主義のような)名前の魔法や神秘的な使い方ではありませんが、人の代わりとして、名前の旧約聖書使用。ヨハネ2:23 に特別なトピックを参照してください。

「あなたが知っているかもしれない」自の救いの保証が重要な概念です。これは完全なアクティブ仮定法(笈田はフォームで完璧ですが、現在のように翻訳される)である、と私はヨハネの頻りに述べられた目的。ギリシャの同義語が存在する(笈田ginōskō)“知っている。”それは保証はすべての信者の遺産であることは明らかである翻訳される文字/説教で使用されている！そのため、ローカルな状況と文化的なコンテキストの現在保証されていない真の信者が存在することもまた明らかです。この節は、ヨハネの福音(20:31 参照)の終値に神学的に似ています。私ヨハネ(5:13-20)

の開閉状況は、信者が知っている7 つのことを示します。福音の真理についての知識は、キリストの個人的な信仰と組み合わせた世界観を、提供する保証の基盤となります。

1. 信者は永遠の生命(詩13、笈田、完全なアクティブな仮定法)を持っている
2. 神は(詩15、笈田、完全なアクティブを示す)の信者の祈りを聞く
3. 神の答えの信者の祈り(詩14、笈田、完全なアクティブを示す)
4. 信者は神(詩18、笈田、完全なアクティブを示す)で生まれている
5. 信者は(外の)神(詩19、笈田、完全なアクティブを示す)のものである
6. 信者は、メシアが来て、彼らに理解(詩20、笈田、完全なアクティブを示す)を与えている知っている
7. 信者は真のものを知っている-父や息子(詩20 ginōskō、現在アクティブな仮定法)のどちらか

特別なトピック： 保証

- A. クリスマスは彼らが保存されるのかを知ることができますか？私ヨハネは(I ヨハネ5:13 参照)、つのテストまたは証拠を持っています。
1. 教義(信念)(詩1,5,10、2:18-25、4:1-6,14-16; 5:11-12)
 2. ライフスタイル(服従)(詩2 月3 日; 2:3-6; 3:1-10; 5:18)
 3. 比較なし(愛)(VV、2-3、2:7-11、3:11-18、4:7-12、16-21)
- B. 保証は、宗派の問題となっています
1. 神の選挙でヨハネカルバンベースの保証。彼は、我々はこの生活の中で特定のなることはないと言った。
 2. 宗教的な経験上ヨハネウェズリーベースの保証。彼は我々が知られている罪の上に生きる能力を持っていると信じていた。
 3. ローマカトリック教徒と権威ある教会でのキリストの基本保証の教会。いずれかの所属するグループは、保証の鍵となります。
 4. 聖書の約束で最も福音の基本保証には、信者の生活の中で精神のフルーツにリンク(ガラテヤ5:22-23 参照)。
- C. 私は落ちた人類の主な保証は、三位一体の神の文字にリンクされていると思う
1. 父の愛の神
 - a. ヨハネ3:16; 10:28-29
 - b. ローマ8:31-39
 - c. エフェソ2:5,8-9
 - d. ピリピ人への1:6
 - e. I ペトロ1:3-5
 - f. ヨハネ4:7-21
 2. 神の息子の行動
 - a. 当社に代わって死亡

- 1) 言行録2:23
 - 2) ローマ5:6-11
 - 3) IIコリント5:21
 - 4) 私はヨハネ2:2; 4:9-10
 - b. 高い聖職者の祈り(ヨハネ17:12)
 - c. 継続的なとりなし
 - 1) ローマ8:34
 - 2) ヘブライの7:25
 - 3) Iヨハネ2:1
3. 神の精神の省
- a. 呼び出し(ヨハネ6:44,65)
 - b. シーリング
 - 1) IIコリント1:22、5:5
 - 2) エフェソ1:13-14; 4:3
 - c. 保証する
 - 1) ローマ8:16-17
 - 2) 私ヨハネ5:7-13
- D. しかし、人間は神の約束を提供(初期段階だけでなく継続的に)に応答する必要があります
- 1. 信者は、イエス(信仰)を通して罪(悔い改め)から、神にオンにする必要があります
 - a. マルコ1:15
 - b. 言行録3:16,19; 20:21
 - 2. 信者は、キリストにある神の申し出を受ける必要があります
 - a. ヨハネ1:12、3:16
 - b. ローマ5:1(と類推10:9-13 で)
 - c. エフェソ2:5,8-9
 - 3. 信者は信仰に続く必要があります
 - a. マルコ1:13
 - b. Iコリント15:2
 - c. ガラテヤ6:9
 - d. ヘブライの3:14
 - e. IIペトロ1:10
 - f. ユダ20 から21
 - g. 啓示2:2-3,7,10,17,19,25-26; 3:5,10,11,21
 - 4. 信者は、3つのテストに直面
 - a. 教義(詩1,5,10、2:18-25; 4:1-6,14-16)
 - b. ライフスタイル(詩2月3日; 2:3-6; 3:1-10)

c. 社会 (VV、2-3、2:7-11、3:11-18、4:7-12、16-21)

E. 保証は困難ですので、

1. 多くの場合、信者は、聖書で約束されない一定の経験を求める
2. 多くの場合、信者は完全に福音を理解していない
3. (9:27、I テモテ1:19-20、II テモテ4:10、私は I ペトロ1:8-11 I コリント3:10-15 参照) 多くの場合、信者が故意に罪を継続
4. 特定の性格のタイプ(すなわち、完璧主義者も)、神の無条件の受諾との愛を受け入れることはできない
5. (7:21-23、マルコ4:14-20、私 I ペトロ2:19-20;私ヨハネ2:18-19 マタイ13:3-23 参照) 聖書には偽の職業の例がある

5:14「我々は彼の前に持っている自信は」これは、再発のテーマ(、3:21;4:172:28 参照)です。(:ヘブライ4:16 参照)、それは神に近づいて、私たちが持っている大胆さや自由を表現しています。ヨハネ7:4 に特別なトピックを参照してください。

「場合は」これは番目のクラス条件付きである潜在的なアクションを意味します。

「我々は彼の意志にしたがってものを尋ね」ヨハネのステートメントは、懇願の神への信奉者の能力の無制限のようです。どのように一祈りは真の信者の別の証拠が何であるかの。(:、マタイ6:10、マルコ14:36 3:22 参照)しかしながら、さらなる検査で、我々は、その祈りが私たちの意志を求めるが、私たちの生活の中で、神のご意志を求めるされていません実現。3:22 で充実したノートを参照してください。特殊なトピックについては: 神の意志は、ヨハネ4:34 を参照してください。3:22 に祈り、無制限のまだ限定: 特殊なトピックを参照してください。

特別なトピック: とりなしの祈り

I. 導入

- A. 祈りためイエスの例で有意である
 1. 個人的な祈り、マルコ1:35、ルカ3:21、六:12、9:29; 22:31-46
 2. 寺のクレンジング、マタイ21:13、マルコ11:17、ルカ19:46
 3. モデルの祈り、マタイ6:5-13;ルカ11:2-4
- B. 祈りは具体的な行動に、現在喜んで、そして私たちの祈りを通して、当社に代わって他の人に行動することができる個人的な、思いやりのある神の私たちの信念を入れている。
- C. 神は個人的に彼自身が多くの野で彼の子供たちの祈りに基づいて行動に限定している(:ヤコブ4:2 参照)
- D. 祈りの主要な目的は、三位一体の神との交わりと:間です。
- E. 祈りの範囲は何か信者にかかわる人です。我々は、思考や懸念が戻ったとしてもう一度信じて、または何度も何度も、一度祈ることができる。
- F. 祈りは、いくつかの要素を含むことができる

1. 三位一体の神の賞賛と崇拜
 2. 彼の存在のための神への感謝、フェローシップ、および規定
 3. 過去と現在の両方の私たちの罪深さを告白、
 4. 私達の感知されたニーズや欲望の請願
 5. 私達が父の前に他人のニーズを保持する仲裁
- G. とりなしの祈りは謎です。神は、我々は我々が行うよりもはるかに祈る人のためにそれらの、まだ私たちの祈りが頻繁に変更、応答、または必要性に影響を与えるだけでなく、自身で、それらのが大好き。

II. 聖書の材料

A. 旧約聖書

1. とりなしの祈りのいくつかの例：
 - a. アブラハムは、ソドム、創世18:22FF のために懇願
 - b. イスラエルのモーセの祈り
 - (1) 出エジプト5:22-23
 - (2) 出エジプト32:31 FF
 - (3) 申命5:5
 - (4) 申命9:18,25 FF
 - c. イスラエルのためのサムエル祈る。
 - (1) I サムエル7:5-6,8-9
 - (2) I サムエル12:16-23
 - (3) I サムエル15:11
 - d. 彼の子供のためのデイヴィッド、II サムエル12:16-18
2. 神が執り成すを探して、イザヤ59:16
3. 知られて、告白されていない罪や悔悟の態度は私たちの祈りに影響を与える
 - a. ネヘミヤ篇66:18
 - b. 箴言28:9
 - c. イザヤ59:1-2; 64:7

B. 新約聖書

1. 息子と精神の仲裁の省
 - a. イエス
 - (1) ローマ8:34
 - (2) ヘブライの7:25
 - (3) I ヨハネ2:1
 - b. 聖霊、ローマ8:26-27
2. パウロのとりなしの省
 - a. ユダヤ人のための祈り

(1) ローマ9:1FF

(2) ローマ10:1

b. 教会のための祈り

(1) ローマ1:9

(2) エフェソ1:16

(3) ピリピ¹1:3-4,9

(4) コロサイ1:3,9

(5) I テサロニケ1:2-3

(6) II テサロニケ1:11

(7) II テモテへ1:3

(8) ファイレモン、詩4

c. パウロは彼のために祈るために教会を依頼

(1) ローマ15:30

(2) II コリント1:11

(3) エフェソ6:19

(4) コロサイ4:3

(5) I テサロニケ5:25

(6) II テサロニケ3:1

3. 教会の仲裁の省

a. お互いのために祈る

(1) エフェソ6:18

(2) I テモテへ2:1

(3) ヤコブ5:16

b. 特別なグループのために要求された祈り

(1) 我々の敵、マタイ5:44

(2) キリスト教の労働者、ヘブライの13:18

(3) 定規、I テモテへ2:2

(4) 病氣、ヤコブ5:13-16

(5) 私ヨハネ5:16

III. 答え祈りのための条件

A. キリストとの精神に私たちの関係

1. ヨハネ15:7、彼に遵守

2. 彼の名前で、ヨハネ14:13,14、3:16; 16:23-24

3. ユダ20、精神、エフェソ6:18 に

4. 神の意志によると、マタイ6:10、私ヨハネ3:22; 5:14-15

B. 動機

1. マタイ21:22 を揺らめくはなく、ヤコブ1:6-7
2. 謙遜と悔い改め、ルカ18:9-14
3. ヤコブ4:3 間違って求め
4. 利己主義、ヤコブ4:2-3

C. 側面

1. 忍耐力
 - a. ルカ18:1-8
 - b. コロサイ4:2
2. 尋ねるに
 - a. マタイ7:7-8
 - b. ルカ11:5-13
 - c. ヤコブ1:5
3. 自宅での不和、I ペトロ3:7
4. 既知の罪からの自由
 - a. ネヘミヤ篇66:18
 - b. 箴言28:9
 - c. イザヤ59:1-2
 - d. イザヤ64:7

IV. 神学的結論

- A. どのような特権.どのような機会.どのような義務と責任
- B. イエスは私たちの例です.精神は私たちのガイドです.父親は熱心に待っています.
- C. それはあなた、あなたの家族、友人、そして世界を変えることができます これは作者の視点から

5:15「場合」あるいは彼の文学的的目的のために真であると仮定されるファーストクラスのただしとを示すとともに、新約聖書、頁243 ロバートソン、単語の絵を参照)である.これは珍しい条件文です.

1. それは代わりにのを持っています (I テサロニケ3:8 言行録8:31 参照)、
2. それは、条件付き番目のクラスのための通常の文法構造である仮定法(すなわち)に接続されている
3. 詩14 と16 の第三のクラス条件付きのがあります
4. キリスト教の祈りの神学は、神の意志(詩14)

「我々は知っている」とイエスの名前(詩13)にリンクこれは詩14 と平行になる存在、として翻訳、別の完璧なアクティブな指標である.それは父が聞くと彼の子供に応答することを信者の保証です.

NASB(改訂版)原典: 5: 16-17

¹⁶もしだれかが、死に至らない罪を犯している自分の兄弟を見るなら、その人は求めなさい。そうすれば神はその人に、死に至らない罪を犯す者のために命を与えられるでしょう。死に至る罪があります。これについては、わたしは願うようには言いません。¹⁷不義はすべて罪です。しかし、死に至らない罪もあります。

5:16「場合」これは潜在的な行動を意味する条件付きの番目のクラスである。16 節は、私たちの仲間のキリスト教徒のために祈るために私達の必要性を強調(参照:ガラテヤ6:01;ヤコブ 5:13-18)と思われる偽教師(参照に関連するいくつかの提案範囲内では(ない死に至る罪のために)、II ペトロ2)。

「弟は死に至らない罪を犯して見ている」ヨハネは、罪のいくつかのカテゴリに記載されている。他の信者といくつかは、神と自の(1)フェローシップに関連し、(2)フェローシップ;世界と(3)フェローシップ。究極の罪はイエスキリストの信頼/信仰/信仰の拒絶反応です。これは究極の死に至る罪です！彼のキリスト教の教義の重量コナーズは言う:

「これは、しかし、教義や教義を受け入れるために拒否の意味での不信仰を意味するものではありません。その光はイエスキリストに具現され、特にとして、道徳的、霊的な 光の不信仰の拒絶です。それは、キリストで行われた彼自身の神の最終的な啓示です。この拒絶が確定し、故意になったとき、それは次のようになります。死に至る罪(I ヨハネ5:13-17)。それは、このように道徳的な自殺になる。それは、自の霊的な目を入れている。それは悟り度の高い接続を除いて行わ読み出した。それは意図的、故意、悪意のある拒絶反応です。キリストの神の啓示として、彼はそのような啓示であることを知る。それは意図的に(頁135 から136)“白、黒を呼んでいる。”

特別なトピック: 死に至る罪とは何か？

A. 解釈学の考慮事項

1. 識別は、私の歴史的な設定に関連付ける必要がありますヨハネ教会のグノーシス主義の偽教師の
 - a. 存在(参照:2:19,26、3:7、II ヨハネ7)
 - (1) “ケリントス派の人”グノーシス派は、人間イエスが洗礼で、キリストの精神を受け取ったことを教えているキリストの精神は、クロス(:5:6-8 参照)に彼の死の前に左
 - (2) グノーシス派は、イエスが神の精神ではなく、真の人間(:1:1-3 参照)であることを教えた
 - (3) 第2世紀の書物で明らかにグノーシス主義は、人間の体についての2 つの異なるビューを反映 救いは、心に真実を明らかだったので
 - (a) に示すように、人体は精神的な領域には無関係だった。したがって、それは希望どんなそれは可能性があります。これらは、しばしば、律法主義者や放蕩グノ

ーシス派と呼ばれています。

(b) 他のグループは、体が(すなわち、ギリシア思想)本質的に悪だったので、どんな身体の欲望を排除すべきであると結論づけた。これらは、禁欲的なグノーシス派と呼ばれています。

b. 偽教師が(参照:2:19)教会を去ったが、その影響力はないがあった！

2. 適切な身証明書は、一冊の本の文学コンテキストに関連付ける必要があります

a. I ヨハネは、偽の教育に対抗し、真の信者を確保するために書かれた

b. 二つの目的は、真の信者のテストで見ることができます。

(1) 教義上の

(a) イエスは真に人間だった(参照:1:1-3; 4:14)

(b) イエスは真の神(参照:1:2; 5:20)

(c) 人間は罪深いと聖なる神(:1:6,10 参照)に責任がある

(d) は、人間もまた、神と右に赦さと作られています

I. イエスの死(参照:1:7、2:1-2、3:16、4:9-10,14; 5:6-8)

II. イエスへの信仰(参照:1:9、3:23、4:15、5:1,4-5,10-12,13)

(2) 実用的(ポジティブ)

(a) 生活習慣のしつけ(参照:2:3-5; 3:22,24; 5:2-3)

(b) ライフスタイルの愛(2:10; 3:11,14,18,23,4:7,11-12,16-18,21)

(c) ライフスタイル(罪、参照されない:1:7、2:6,29、3:6-9、5:18)悪に対する

(d) ライフスタイルの勝利(参照:2:13,14、4:4、5:4)(2:14:10参照)

(e) 彼の言葉は、それらの遵守

(f) 彼らは精神を(4:4-6,13 3:24 参照)がある

(g) 答えの祈り(CF 5:14-15)

(3) 実用的(ネガティブ)

(a) はライフスタイルの罪(参照:3:8-10)

(b) のライフスタイルの憎悪(参照:2:9,11; 3:15; 4:20)

(c) 生活習慣の不服従(参照:2:4、3:4)

(d) の世界を愛して(2:15-16 参照)

(e) (4:2-3; 5:10-12 2:22-23 参照、父と息子を拒否する)キリストを否定する

3. 適切な身証明書は、関連するテキスト内の特定の項目(:5:16-17 参照)にリンクする必要があります

a. 詩16 の言葉“弟は”死と死に至る罪を犯しているものと一流ではない罪を犯し、それらの両方に関係があるのですか？

b. 犯罪者は、教会のメンバー(:2:19 参照)に一度でしたか？

c. の原文の意味は何です:“罪”

(1) 何の記事か？

(2) 動詞のアオリストアクティブ仮定法と条件付番目のクラスとして“見て”？

- d. どうやってキリスト教の祈りができます(参照:ヤコブ5:15-16)はの個人的な良心の呵責なしに別のものに永遠の命“ZC”を“復元”？
- e. どのように詩17 は罪の種類(死に至るまで、ではない死に至るまで)に関係があるのですか？

B. 神学的な問題

1. インタプリタは、このテキストをリンクしようとする必要があります
 - a. 福音書の“許し難い”罪
 - b. ヘブライの6 と10 の“一回外”の罪だけでなく、ヘブライの6 と10 の不信仰のユダヤ人;(マルコ3:2-29 マタイ12:22-37 参照)私の文脈ヨハネはイエスの日のパリサイ人の許し難い罪に平行に思えます.すべての3 つのグループが(パリサイ人、懐疑的なユダヤ人、とグノーシス主義の偽教師)ははっきりと福音を聞いたが、イエスキリストを信頼することを拒否した.
2. 近代的な宗派の質問は、このテキストを表示するには、神学的なグリッドにすべきですか？福音主義は、キリスト教の経験の始まりを強調しすぎると真の信仰のの証拠を無視している.私たちの現代の神学的な質問は、一世紀のキリスト教徒に衝撃を与えただろう選択された聖書の“証拠-テキスト”と我々自身の論理的な控除や教派の 偏見に基づいてwewant“確実.私たちの神学的な質問、グリッド、そして独特のは私たち自身の不安を反映している.我々は聖書が提供するより多くの情報のをしたい、私たちの体系的神学は、論理的な、西部、特定の教義の聖典と織りのいくつかの小さな塊を取るように！マタイ7 とマルコ7 のイエスの言葉は、初期の教会のための十なでした！(；ヨハネ8:31-59 マタイ13:10-23 参照)イエスは弟子、長期的なライフスタイルの信仰ではなく、短期的な感情的な信仰を探します.キリスト教IsNot 演算隔離された過去の行為が、継続的な悔い改め、信仰、服従、そして忍耐.キリスト教はチケットではない天国に、過去に購入し、また火災保険は、利己的、のライフスタイルから一つを保護するために取り出し！
3. 死に至る罪は肉体的な死や永遠の死を指しているのでしょうか？この文脈でのヨハネ“Zc”の使用は、“コントラストが永遠の死を指す意味.それは、神が罪の子供(肉体的な死)家を取ることが可能ですか？こ の文脈の意味は、(1)仲間の信者の祈りと犯罪者の(2)個人の悔い改めは、信者を復元するために組み合わせることですが、彼 らはその後信じるコミュニティで非難をもたらすライフスタイル、多結果に続ける場合この生活から“早すぎる”または早期の物理的な出発(参照:評論 家はノーマンガイスラーとトマスhowe、頁541 で頼むとき)

「神は彼が生命を与えるためになる」ここに神学と字句の問題は、用語“命”(ZO”)の意味です.通常、ヨハネでの執筆、これは永遠の命を指しますが、この文脈では(すなわち、非常にヤ

コブのような健康や許しへの復帰を意味するように思われる“ヤコブ5:13-15”の“保存”を使用).のために祈った人は強く信者を意味する“兄弟”(彼の読者のための言葉のヨハネの独自の使用による)と呼ばれています.

5:17 すべての罪は重大ですが、すべての罪は、悔い改めによって赦されることができる(初期、参照:マルコ1:15、言行録20:21、続いて、参照:Iヨハネ1:9)との罪を除き、キリストへの信仰不信仰!

NASB(改訂版)原典: 5: 18-20

¹⁸わたしたちは、すべて神から生まれた者は罪を犯すことがなく、むしろ神から生まれた方がその人を守ってくださり、悪い者はその人に触れることがないことを知っています。¹⁹わたしたちは自分が神に属しており、全世界が悪い者の力のうちに置かれていることを知っています。²⁰わたしたちは、神のみ子が来て、わたしたちが真実な方を知るための理解力を与えてくださったことを知っています。そして、わたしたちは真実な方の内に、その方のみ子イエス・キリストの内にはいます。この方こそ真実の神、また永遠の命です。

5:18 「我々は知っている」2番目の段落のノートを参照してください5:13.

「神の罪から生まれた誰もが」これは完璧な受動詞ではありません。これは3:6 と人生の黒と白のアサーションの特性を観測しているです。(マタイ7 参照)律法主義偽教師のライフスタイルは、彼らの邪悪な心を明らかにする!ヨハネは、偽教師の2種類のアドレッシングされた。と単純に罪を無関係作られた別のグループ(参照:ここ3:4-10と):罪の関与を(1:8-2:1 参照)拒否ひとつ。罪は、最初に自白し、実存的に避けなければならない。罪は、問題、問題、および継続的に問題が(:5:21 参照)です。

ブルースメッツガー、ギリシャ語新約聖書のテキスト解説(頁718)原稿の変動が筆耕が呼ばれる“神の誕生”というフレーズを考えたものに基づいていると主張している。

1. イエスは-その後オートンは(A、B のベストフィット
2. 信者-その後はベストフィット(!C、)

UBS4 は#1 の“B”格付けを(ほぼ確実)になります。

「神の生まれた彼は、彼を保つ」最初の動詞は、外部のエージェント(ローマ8:11 すなわち、精神参照)によって達成完成した行為を意味するアオリスト受動詞である。これは化身を指します。第二動詞は“彼”(オートン)とpresentactive 示している。これは文字通り、“神から生まれ、誰も彼を維持し続けています”これは信者のキリストの継続的な維持を指します。この翻訳は、* a と b の古代ギリシャ語アンシャル体原稿を以下の*。この解釈は英語の翻訳NASB、RSV、およびNIV に含まれています。原稿!とaceauton は別の代名詞を持って、神によって生まれたのいずれかが彼自身を維持するにも責任を持っていることを意味する)(“自自身を保つ”。ここで使用される動詞は、他の場所でイエスの使用されていません。“生まれた”。再帰の概念は、3:3 及び5:21 で信者のために使用されます。これは英語の翻訳KJV とASV が続い

ている。

NASB 「と悪も彼には触れることがない」

NKJV 「邪悪な彼には触れることがない」

NRSV 「悪の一つは、それらに触れていない」

TEV 「悪の一つは、それらを傷つけることはできない」

NJB 「悪の一つは彼の上に保持しない」

これは邪悪な一継続できないことを意味する現在の中央の指標である“彼のホールドを敷設。”ヨハネの著作におけるこの用語の唯一の他の使用は、彼の福音で8:17 です。それは、キリスト教徒が誘惑されていることを聖書と経験から明らかです。このフレーズの意味についての三大理論がありました。

1. 信者は法律違反(正当化)に基づいて、邪悪な一つの非難から解放さ
2. 私たちにとってイエス祈る(参照:I ヨハネ2:1、ルカ22:32-33)
3. 彼は私たちの生活の中で神の証言を阻止できますが、:(ローマ8:31-39 参照)とサタンは私たちから私たちの救いをもぎ取ることはできない おそらく、詩16 から17 に基づいて、早期にこの世界から信者を取る！

5:19「我々は神のものであることを知っている」これは自信を持って信仰の保証、キリストイエスの信者の世界観である。(参照:4:6)他のすべてのこの素晴らしい真実に基づいている(参照:詩13) 5:13 でノートを参照してください。

「全世界が邪悪な一つの力にあると」これは現在の中央(証人)を示す(参照です。14:30; 16:11、II コリント4:4、エフェソ2:2、6 ヨハネ12:31: :12)。(2)サタンの反乱;これは(1)アダムの罪によって実現されたと罪~(3)各個人の個人的な選択。

5:20「我々は知っている」5:13 の第二段落で完全なノートを参照してください。

「神の息子が来ている」この示すが、神の息子の化身を肯定する。人間の体と神は物質の邪悪さをアサートグノーシス主義の偽教師にとって大きな問題でした。

「私たちは理解与えている」これは別の完全なアクティブな指標である。イエスキリストではなく、グノーシス主義の偽教師は、神に必要な洞察を提供しています。イエスは完全に彼の人生の意味、彼の教え、彼の行動、彼の死と彼の復活で父を明らかにした！彼は神の生きている単語であり、誰も彼から離れて父のみもとに来ることはありません(参照:;私ヨハネ5:10-12 ヨハネ14:6)。

「我々は真である彼にあり、彼の息子イエスキリストにこれは真の神であり、真の彼の永遠の命」最初のフレーズは父(6:55 とヨハネ17:03 で特別なトピックを参照)が、2 番目のフレーズに掲げる者を神のことです

「真の神は」識別が困難です。文脈でそれはまた、父親を参照しているようですが、神学、それは息子を参照することができます。文法的な曖昧さは、それはヨハネの著作の中でそう頻繁にあるように、意図的かもしれない、一対一の息子でなければならない父親のように(参照:詩12)。(、7:28、8:26 ヨハネ3:33 参照)父と息子の両方の神と真度(真実は)意図した神学的

な推力があります。新約聖書ナザレのイエスの完全な神をアサートしません。(参照:ヨハネ 1:1,18; 20:28、フィリッポ2:06、テトス2:13、およびヘブライ1:8)しかし、グノーシス主義の教師が持っているでしょうまた、イエスの神を(少なくとも神の精神の留置で)確認した。

NASB(改訂版)原典: 5: 21

²¹子らよ、偶像から身を守りなさい。

5:21

NASB 「偶像からガード自身」

NKJV、NRSV 「偶像から身を保つ」

TEV 「偽りの神からあなたたち自身の安全を守る！」

NJB 「偽りの神々に対して用心する」

これは不可欠、強調の一般的な真実です。彼らは既にイエスキリストを楽しんでいる、(参照:; I ペトロ1:5 エフェソ1:4):これは聖化のキリスト教徒“積極的な参加(3:3 参照)を指します。長期的偶像、死海文書がこの用語を使用するため、偽教師の教えやライフスタイルに関連する、またはどちらかで(ここと旧約黙示録9:20 で聖書引用符で、ヨハネの著作の中で二回しか使用されています) “罪、“用語”偶像”と”罪”の意味は同義かもしれません。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 彼らはキリストにある信者を保証する三大テストを挙げなさい。
2. 用語”水”と”血”は詩6 と8 で何を参照してくださいか？
3. 我々はキリスト教徒であることを知ることができますか？知っていない一部のキリスト教徒はありますか？
4. 死に至る罪は何ですか？それは、信者してコミットすることができますか？
5. それは神の保持力や誘惑から私たちを提供する私たち自身の努力ですか。

ヨハネの手紙第二

簡単な緒言

ヨハネの手紙第二は明らかにヨハネの手紙第一のメッセージと文体に関連している。これらは多分同じ著者によってほぼ同時期に書かれたと思われる。それは定まった形式で一枚のパピルス紙に収まるように書かれた、紀元1世紀の私的な手紙の典型である。

ヨハネの手紙第一がいくつかの教会に(そしてある意味で全ての教会に)宛てて書き送られたのと同じように、ヨハネの手紙第二は1つの地域教会とその指導者(しかし、新約聖書の大半の私的な手紙と同様に、この手紙は全ての教会で読まれていた)に宛てて書き送られた。この手紙は紀元1世紀の小アジア(トルコ)の教会の実体をよく示している。

第一読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)その聖書の書全体を一通り読みなさい。書全体の中心テーマをあなた自身の言葉で述べなさい。

1. 書全体のテーマ
2. 文学(ジャンル)のタイプ

第二読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

その聖書の書全体をもう一度一通り読みなさい。主題を要約し、その主題を一文で表現しなさい。

1. 第一の文章単位の主題
2. 第二の文章単位の主題
3. 第三の文章単位の主題
4. 第四の文章単位の主題
5. (以下同様)

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 1-3節

¹長老から、選ばれた婦人と彼女の子供たち、すなわち、わたしが真実に愛しており、わたしだけではなく、真理を知っているすべての者たちも愛している者たちへ。²それは、わたしたちのうちにとどまっている真理のためであり、その真理は永遠にわたしたちと共にあるでしょう。³父なる神から、また父のみ子である主イエス・キリストから、恵みとあわれみと平和が、真理と愛のうちにわたしたちと共にあるでしょう。

節 1「長老」 このタイトルはIIとIIIのヨハネの両方の作成者を識別するために使用されます。それは聖書の意味の多彩なバリエーションをそろえています。

使徒ヨハネの著作は、さまざまな方法で著者の名称を示す。

1. 福音書は、不可解なフレーズ“最愛の弟子”を使用しています
2. 最初の文字は匿名です。
3. 2番目と3番目の文字は、タイトル“長老”がある

4. 黙示録は、終末論的な執筆のため珍しく、“しもべヨハネ”として著者が一覧表示されます。これらの記述の著作者に関する評論家や学者の間で多くの議論がなされている。彼らはすべての多くの言語と文体の類似点と相違点を持っている。この点で、すべての聖書の教師によって受け入れられる何の説明もありません。私はそれらすべてのヨハネ使徒の原作者を肯定するが、これは感動的な問題解釈学の問題であり、ではない。実際には聖書の究極の著者は、神の霊です。それは信頼できる啓示ですが、現代人は、ちょうどその書面またはコンパイルの文学的プロセスを知っているか理解していない。

特別なトピック: 長老

1. 天使のような評議会(参照:イザヤ24:23)を構成する神の天使たちのために使用.この同じ用語が黙示録の天使のような生き物が使用されます(参照: 4:4,10; 5:5,6,8,11,14; 7:11,13; 11:16; 14:3; 19:4).
2. 旧約聖書の部族指導者({UT2 zaqen{UT3)を使用(参照: 出エジプト 3:16; 民数 11:16). (参照のことマタイ9:23;26:57)後の新約聖書のこの言葉は、サンヘドリンのユダヤ人の高等裁判所を構成していたエルサレムの指導者たちのグループに適用されます.イエスの日にこの七十メンバーボディが破損している聖職者によって制御されていました.
3. 新約聖書の教会のローカルリーダーの使用.それは3つの同義の単語のいずれか(20:17,28の行為牧師、監督、そして長老参照タイタス1:5,7)であった.ペテロとヨハネは(IIヨハネ1; IIIヨハネ1参照のことペテロ5:1)リーダーシップのグループで自自身を含むようにそれを使用.
4. リーダーシップを必ずしも教会の高齢の男性、(タイタス2:02参照のこと私はティム5:1)で使用される.

「選ばれた女性と彼女の子供たち」このタイトルについて多くの議論がありました.多くは、これはギリシャ語の女性(アタナシウス)から、エレクトまたは選択した(アレクサンドリアのクレメント)またはギリシャ語から、エレクトのいずれかを名前の女性に書き込まれたアサートすることを試みましたが、私はこれが次のような理由で教会を参照していることをジェロームに同意する.

1. 教会のためのギリシャ語は女性です(節 1)
2. LXXに“エレクトは、”人の体を指し(I参照:2:9)
3. これは、キリストの花嫁としての教会を参照する場合があります(参照: エフェソ 5:25-32; Re節 19:7-8; 21:2)
4. この教会は子供たちと呼ばれるメンバーがあります(参照: 節 13)
5. この教会は別の地元の教会を参照すると思われる姉妹を持っています(参照: 節 13)
6. 4,5,13、VVの複数形. 6,8,10,12)
7. 5:13

「誰」それはどちらか女性らしい“女性、”またはニューターである“子どもたち”にリンクアップするためのものなので、これは男性複数形の代名詞であることは驚くべきことである.私はそれが象徴として語句をマークするのヨハネの方法だったと思う.

「私は愛する」ヨハネは福音書と黙示録にagapaōと同義phileōを使用していますが、I、II、およびIIIのヨハネに彼が唯一(参照VV3,5,6..Iヨハネ3:18)を使用します.

「真実」真実はしばしば繰り返されるテーマ(参照VV.1 [回]、2,3,4)です. VVのフレーズ“この授業”. 9[回]と10と同義である“真実.”この言葉は、おそらく私のヨハネのように、この小さな手紙(参照VV.4,7-10)で明らかな地元の異端強調されています.“真実”は次の3つのいずれかを参照することができます:ヨハネの(1)聖霊(参照14:17)、(2)イエスキリストご自身が(参照:ヨハネ8:32、14:6)、(3福音の)コンテンツ(参照:Iヨハネ3:23). 6:55および17:03で特殊なトピックを参照してください.

節2「私達の遵守」これは、信者を記述するためにヨハネの好きな言葉の一つのPRESE新約聖書

能動詞である、“遵守。”2:10で特集を参照してください。これは、留置聖霊(.;または息子、ロム8:9-10参照されたい8:09ロム)を参照しているようだ。トリニティのすべての人にももの/信者から/(参照:ヨハネ14:23)と遵守。

「永遠に私達となる」真実には遵守し、永遠にすべての信者に残ります。保証の何が強力な明！私のヨハネ5:13で特集を参照してください。真実は、福音の人と福音のメッセージでもあります。愛、神への愛、仲間の契約の兄弟/姉妹への愛、そして失われた世界への愛でこの“真実”は常に問題(参照:ヨハネ4:7-21)。特集を参照してください:フォーエバーヨハネ6:58;.6:51,58;8:35,51、10:28に11:26、12:34、13:08、2:16、“永遠に”(参照:ヨハネ4:14”の:代に”文字通りです。私ヨハネ2:17)。

節3「グレース、慈悲、と平和は」これは2つの点を除いて、最初の世紀のギリシャ文字に典型的な入門書です。最初に、それは少しそれが一意にキリスト教のようにカスタマイズされている。“挨拶”のギリシャ語は です。それが意味するカリス、に変更されている“恵み”を、この導入は私のティム、田園書簡に非常に似ている。1:02、IIティム。1:02、そこの二つは、用語はガラテヤ人への手紙とテサロニケ人へのパウロの冒頭で繰り返されます。第二に、通常の文法的な構造は、祈りですか、健康を願う。しかし、IIヨハネは真実のステートメント、望ましい聖なる結果を神に立っての約束です。これらの用語の間に意図的な順序や関係がある場合、神学的に一つ疑問に思う。グレースと慈悲が落ちた人類にキリストを通して自由な救いをもたらす神の文字を反映している。平和は神の贈り物の受信者を反映している。信者は、完全な変換が発生します。秋には救いのリストアは、まず、そう余りに、人間生活のあらゆる側面に影響を与えたとして位置を通過(他力本願)、その後、留置精神で有効になって世界観の根本的な変化によって、これはプログレッシブ(プログレッシブ神聖化)をもたらす。人類の神のイメージ(参照:創世1:26-27)が復元されます！他の可能性は偽教師の光の中でこれらの3つの用語の必要性にも関する。彼らは“恵み”と“慈悲”を疑問視し、全てがもたらした“平和を。”これは(C I elee)これは“慈悲”の使用のみであることに留意することも興味のある点であるヨハネの著作のすべての。“グレース”(カリス)1:14,16,17の福音書で、ここでしか使用され、ヨハネの黙示録(22:21参照のこと1:4)される。ジェローム聖書の解説では、これらの3つの用語は、旧約聖書契約の接続(→412)があるという事実に言及している。新約聖書の作家は(ルーク除く)コイナーギリシャ語で書いて、ヘブライ語の思想家だった。多くの新約聖書の語彙のは、セプトウアギンタの起源を持っています。

「父なる神からそしてイエスキリストから」両方の名詞は文法的に対等な立場でそれらを置く前置詞(パラ)を持っている。これはイエスキリストの完全な神を主張する文法的方法でした。

「父の息子」私ヨハネの継続的な重点は1つが 2(参照:ヨハネの息子がなくても父を持つことができないということです。23;4:15、5:10)。偽教師は、神とのユニークで特別な関係を主張したが、神学減価人と息子の仕事。ヨハネは、イエスが父の(1)完全な啓示と父に(2)の唯一の方法(参照:ヨハネ14:6)であることを何度も何度も繰り返します。

NASB(改訂版)原典: 4-6節

⁴わたしたちが父から命じられたとおりに、あなたの子供たちの何人かが真理のうちを歩んでいる

のを知って、わたしは大いに喜んでいます。⁵婦人よ、わたしは今あなたに頼みます。新しいおきてをあなたに書き送るわけではなく、わたしたちがはじめから持っていたおきてなのですが、わたしたちが互いに愛し合うことです。⁶彼のおきてに従って歩むべきこと、それが愛です。あなた方がはじめから聞いていたとおりに、あなた方がそのうちを歩むべきこと、それがおきてです。

節4「私はとてもうれしかった」これが示すアオリストのパッシブ(証人)である。おそらく兄は、その旅行のメンバーの一部からこの教会について聞いた。

「真実で歩くあなたの子供のいくつかを見つけるために」これは次のいずれかを意味します

1. 信心深い、教会のいくつかの愛の生活(参照IIヨハネ3-4)
2. いくつか道に迷って率いていた会衆の中で異端の存在を認めるの方法

「私たちは、父から何をすべき命令を受けていると同じように」 15:12;私ヨハネ3:11; - 4:7,11これは、(参照ヨハネ13:34-35イエスは彼らを愛したとしても、お互いを愛するように命令を与えることを指しているアオリストACTIVE示している12,21)。

節5「私たちは初めからあった」これは、イエスの教えの始まり(3:11参照のこと私ヨハネ2:7,24)を参照している不完全なACTIVE示している。命令の内容は“お互いへの愛”(参照V.5)として再確認し、(参照:V.7)“肉が来たようにイエスキリストを認め”ています。それは、内容、個人やライフスタイルになっている点に注意。

「私たちはお互いを愛している」これは、存在する活性仮定法(この節の最後の動詞はそのまま、歩いて)である。それはと愛情を表さないように異端の特徴であった。これは、1つは彼がクリスチャンであることがわかる方法については、ヨハネの3つのテストの最初の形成。私はヨハネの本の中でこれらの3つのテストは、次のとおりです。愛、ライフスタイル、および教義。これらの3つのテストはIIヨハネで繰り返されている。

1. 愛(参照:V.5; Iヨハネ2:7-11、3:11-18、4:7-12,16-21;5:1-2)
2. 服従(参照:V.6;私ヨハネ2:3-6;3:1-10;5:2-3)
3. 教義上のコンテンツ(参照:V.7;私ヨハネ1:1 ffは、2:18-25、4:1-6,14-16.5:1,5,10)

節6「これは愛です」愛は(agape)だけではなく、感じ、継続的な(現在形)アクションです。愛はすべての真の信者の“記号”(ギャル5:22、私ヨハネ4:7-21参照のこと私コリント13)です。

「初めから」私ヨハネ1:1にある注意を参照してください。私は言葉がイエスの公共省の初めへの参照として私、ヨハネとIIヨハネで使用されていると思う。

「それの中を歩く」キリスト教は、初期のコミットメントとライフスタイルの変化(参照:Iヨハネ2:6)です。私たちのライフスタイルは、私たちは保存されませんが、(参照エペソ.2:8-9と2:10)私たちが救われていることを確認していません。

NASB(改訂版)原典: 7-11節

⁷多くの欺く者たちが世に入って来ているからです。それは、イエス・キリストが肉体で来られたことを告白しない者たちです。これこそ欺く者また反キリストです。⁸わたしたちが、自分たちの成し遂

げてきた事柄を失うことなく、豊かな報いを受けられるよう、自分に気を付けなさい。⁹だれでも罪を犯してキリストの教えにとどまっていけないものは、神を持っていません。その教えにとどまっている者は、父もみ子も持っています。¹⁰だれかがあなた方のところに来ても、この教えを持っていないなら、彼をあなた方の家に迎え入れてはならず、彼を歓迎してもなりません。¹¹彼を歓迎する者は、彼の悪い業に加わっているからです。

節 7「多くの詐欺師のために」 単語“詐欺師は”私たちは英語の用語を取得、そこからギリシャ語の単語の計画”、から来ている”地球を。”古代世界では天体の動きをマップし(zodiak)検討した。星は安定したパターンに収まるが、いくつかの星は(すなわち、惑星)不規則に移動する。古代人は、それらの”ワンダラーズ”と呼ばれるこれは真実からさまよう人々に比喩的に開発これらの偽教師は、単に誠実に間違っているか福音の無知な人々をミスリードされない。ヨハネの著作の中で明確な光に対してパリサイ人と偽教師の反乱の両方は、彼らが受けている。彼らの反乱が”許し難い罪”または”死に至る罪”(ヨハネ5:16のノートを参照)として特徴づけられるのはこのためです。悲劇は、彼らはまた、破壊するために、それらに従うように他人を引き起こしたということです。新約聖書は、明らかな虚偽の教師が大きな問題を(24:11,24、マルコ1:22、ヨハネの二:26、3:07、4:01参照のことマタイ7:15)に表示し、原因となることが明らかになった。

「世に出てきた」 ここに世界は単に私たちの物理的な惑星です。これらの偽教師は、キリスト教の教会を離れています(参照:ヨハネ2:19)または、彼らは宣教師の割り当て(参照IIIヨハネ)にあります。

「承認しない人々」 これは、キリストに公共職業と信仰の告白を意味する言葉homologeō、です。ヨハネ9:22-23で告白:特別トピックを参照してください。

「肉に来るようにイエスキリスト」 これらの詐欺師は、キリストの人物についての彼らの誤った教えに続ける。この節は、彼らがイエスの完全な人間性(私ティム3:16参照のことヨハネ1:14)に関連し、特にとして、私ヨハネ4:1-6の”霊をテストする”への訓戒を繰り返します。グノーシス主義は、永遠の”精神”との間の二元論(神)と”問題”(肉を)確認した。そのために、イエスは完全に神と完全に人間であることができなかった。

初期のグノーシス主義の思想の中で少なくとも二つの神学的な流れをされているようです。

1. イエスの人間性(Docetic)の拒否、彼は精神人間のように見えた、しかしだ
2. キリストは十字架で死んだ拒否すること、彼が十字架上で死ぬ前にこのグループには、(ケリントス派の人)”キリストの精神が”彼の洗礼で人間イエスに来たことを主張し、彼を残したそれは現在形、”肉に来るが、”ケリントス派の人グノーシス主義を拒絶するのヨハネの方法である可能性がある。私はヨハネ4:1-6はDoceticグノーシス主義を拒否する彼の方法です。

「これは詐欺師と反キリストです」 私ヨハネ2:18にが複数の”反キリスト”との区別(参照:ヨハネ2:19)はヨハネの日に来ていたし、彼らが教会を去った”反キリストは、”であるが、(IIテサロニケ2の”無法状態の男”を参照)、将来に予測されている。しかし、この節では、は私ヨハネ2:18-25ののように、使用されています。

節8 「自を見る」これは、存在する活性が不可欠です。それは言葉は悪に対する警告のために比喩的に使用される、(blepo)“を参照してください”なのは(参照: マタイ24:4; マルコ夜一:05、ルーク9:08、13:40行為、私はコリント8:09、10 :12;ギャル5:12;ヘブル12:25)。ため信者は目の肥えたエラ一の原因である

1. 彼らは福音を知っている
2. 彼らは精神を持っている
3. 彼らはキリストとの継続的な交わりを持つ

NASB 「というあなたは私たちが達成したものを失うことはありません」

NKJV 「私たちはこれらのことは、紛失しないようにして私たちがのために働いた」

NRSV 「したがって、私たちが働いているのか、紛失しないようにして」

TEV 「ように、私たちが働いているのか失うことはありません」

NJB 「または、すべての私たちの仕事が失われます」

第一の代名詞に関連したこの節のギリシア語写本のバリエーションがあります:それは“あなた”(NASB、NRSV、TEV)または“私たち”(NKJV)すべきですか? UBS4テキストは対処信者が使徒の証言によって、それらを与えられた福音の目標を達成できない可能性が意味する”、あなたを”サポートしています。

「それは全体の報酬を受け取る可能性があること」これが福音の彼らの受信を指すアオリストの仮定法です。仮定法’ S不測の事態は、彼らの救いとは関係ないですが、それらを通じて、成熟と福音の拡大(参照: I それら. 9:27; 15:10,14,58; II それら. 6:1; 事態. 2:2; フィリッポ 2:16; I福音の. 2:1; 3:5).

節 9

NASB 「行き過ぎだとキリストの教えに従うことはありません誰も」

NKJV 「誰がとキリストの教義に従うことはありません」

NRSV 「キリストの教えに従うことはありません誰も」

TEV 「誰がキリストの教えに残っていない場合は」

NJB 「キリストの教えに滞在していませんが、誰もがそれを超えて」

まず、PASの否定的な使い方に注目してください。福音の招待状には”、すべて”にすることですが、残念ながらそうでも異端の可能性もあります。この潜在的な異端は、2に存在する活性詞によって特徴付けられる:”超えて”と”を遵守していません。”最初の偽教師たちは、目撃者の使徒を超えた高度な真実を持っていた意味するための標語をされている可能性があります。”超えて行くには”信者は彼らの変わらぬ真理の言葉(3:7、Iヨハネ2:14、負のヨハネ5:38に、私ヨハネ1:10参照のことヨハネ8:31)によって特徴付けられる。ヨハネ6:64でヨハネ8:31で忍耐と背教の特集を参照してください。店頭 属格 は”キリストの”を参照することが

1. キリストの教え
2. キリストについての教え
3. ヨハネの一般的な二重の意味

多くのと漠然とです！唯一のコンテキストは、ここで、多くの場合、意図した意味を決定することができますが、それらは重複しています。

「神を持っていない」“キリストの教え”とv2の“真実”は平行である。偽教師とその追隨者は{UT1 {UT2 報酬を(参照V.8)はありません。彼らは精神的に失われ、神との父を持っているので、一つは息子を持っている必要がない(参照: I ヨハネ 5:10-12)。動詞の使用は、“あり”(二回、{Uに存在する活性を示す)神とは、ここで見つけると私のヨハネ2:23.される

節10「もし」これは条件文{UT5 であるは作者の視点から、あるいは彼の文学{U 目的のために真であると仮定。偽教師が来る！

「家に彼を受け取っていない」これはに存在する活性が不可欠ですは負粒子とこれは、しばしば意味するプロセスにおける行為の停止(文脈が決定する必要があります)。福音の12:13;私ティム3:02、タイタス1:08;ヘブル01:02私はペット4 は“家は”(参照マタイ25:35キリスト教のおもてなしを参照することが..私コー16:19;大佐4:15、9またはIIIヨハネ5-6)が、文脈でそれはおそらく家の教会(参照Romの16:05に話をする旅行する大臣を招いてのことですフィレモン2)。

「彼に挨拶を与えていない」これは負粒子と別の に存在する活性が不可欠 です..識別されないこれと自“いわゆるクリスチャン.”交わりの任意のヒントを承認(参照:V.11)と誤解される可能性があります。この文では、今日に適用することが非常に困難です。非常に多くのクレームがキリスト教徒であるため。まだ彼らと共有する試みで私たちは心を込めて会話に魅力的でなければなりません。それでも、キリスト教の指導者たちは、異端を持つ任意の識別用心しなければなりません。これは、もちろん、キリスト教の宗派には適用されません!

NASB(改訂版)原典: 12-13節

¹²あなた方に書き送る事柄は多くありますが、紙とインクでそうしたいとは思いません。むしろ、わたしはあなた方のところに行って、面と向かって話すことを望んでいます。わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。¹³あなた方の選ばれた姉妹たちの子供たちがあなた方によろしくと言っています。アーメン。

節 12「多くの事があなたに書かなければならない」これはIIIヨハネ13から14のエンディングに似ています。これは、目的の 仮定法迂(目的の節に示すである“あなたの喜びは完全行うことができる不測の事態)。これは、ヨハネ(参照の共通のテーマだった ヨハネ3:29、3:11、04:24、17:13、私ヨハネ1:4)。

この喜びは基づいていた

1. 教師の存在
2. 彼がもたらしたこと真理の知識

ヨハネは愛と従順の継続的な徒歩で対4で彼の“喜び”を述べた。

節13 対 V.のような13この節、1は、姉妹教会とそのメンバーの話をする比喩的な言語を使用しています。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ヨハネの手紙第二で繰り返されている、ヨハネの手紙第一に見られる3つの試練を挙げなさい。
 - a.
 - b.
 - c.
2. 女性にや教会に書かれたこの手紙はありますか？
3. どのようにして異端の会衆に存在していたことがこの短い手紙から知っていますか？
4. 詐欺師とvの反キリストは、誰または何です ？
5. 節10と11のおもてなしを表示するために新約聖書の任務に反するものであり、私たちの敵にさえ好きですか？

ヨハネの手紙第三

第一読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)その聖書の書全体を一通り読みなさい。書全体の中心テーマをあなた自身の言葉で述べなさい。

1. 書全体のテーマ
2. 文学(ジャンル)のタイプ

第二読書サイクル(v ページを見よ)

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

その聖書の書全体をもう一度一通り読みなさい。主題を要約し、その主題を一文で表現しなさい。

1. 第一の文章単位の主題
2. 第二の文章単位の主題
3. 第三の文章単位の主題
4. 第四の文章単位の主題
5. (以下同様)

第三読書サイクル(v ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

ヨハネの手紙第三の文脈の洞察

緒言

- A. この短い手紙はヨハネの手紙第二よりも少し短いのでヨハネの手紙第三と呼ばれている。ヨハネの手紙第二と第三は、紀元1世紀の終わりを迎えようとしていた地域教会、多分小アジアのローマ帝国の属州にあった教会群に対する平等なメッセージであると私は確信する。
- B. ヨハネの手紙第二は異端つまり巡回説教者達の問題を論じ、ヨハネの手紙第三は巡回説教を行う信徒達を助けるようにとの勧告の手紙となっている。
- C. ヨハネの手紙第三には3つの人名が特記されている。
 1. ガイオ(初期教会において神の御心に適う生き方をした人)
 - a. 聖書の他の箇所にはガイオという名の人物が3人登場する。マケドニアのガイオ(使徒行伝 19: 29)とデルベのガイオ(使徒行伝 20: 4)とコリントのガイオ(ローマ 16: 23 と I コリント 1: 14)である。
 - b. 「使徒名簿」の名で知られる書には、ヨハネの手紙第三に登場するガイオが使徒ヨハネの指名で就任したペルガモンの司教という役職で記載されている。
 2. ディオトレフェス(初期教会において神の御心に適う生き方をせずに問題の種となった人)
 - a. 新約聖書の中でこの人物の名が登場するのはこの書だけである。彼の名は「ゼウスの庇護を受けた者」という意味のとても珍しい名である。「ゼウス」は「旅人の守り神」であるのに、その神の名にちなんだ名を持つ者が旅人を迫害していたというのは何とも皮肉なことである。
 - b. ディオトレフェスの行状は 9~10 節に暴露されている。
 3. デメトリオ(ヨハネの手紙を持ってこの地域教会を訪れた人)
 - a. 明らかにこの人物は伝道旅行団の一員であり、エフェソスにいた使徒ヨハネからの手紙を持ってこの地域教会を訪れた人である。
 - b. 「使徒名簿」と呼ばれる伝統的な書には、デメトリオが使徒ヨハネの指名で就任したフィラデルフィアの司教という役職で記載されている。
- A. 初期教会は巡回説教者(教師・福音伝道者)の評価・援助方法について議論を重ねた。
The Didache or The Teaching of the Twelve Apostles と呼ばれる、紀元2世紀初頭の信徒の記した初期の非正典的書にはこれらの(巡回説教者[教師・福音伝道者]の評価・援助方法の)指針が記されている。

第6章—教師・使徒・預言者について

「従って、誰であれ、来て以前から言われてきたこれらのことの全てを教えてください

受け入れなさい。しかし、その教師自身が心変わりして、他の教義によってこれらのことの全てを無にするようなことを教えるなら、その教師の言うことを聞き入れてはならない。だが、その教師が主の義と知識とを増し加えるように教えてくれるなら、その教師を主として受け入れなさい。しかし、使徒と預言者については、伝える福音の程度に応じてこのようにしなさい。あなたがたのところに来る使徒は誰でも主として受け入れなさい。しかしその使徒は1日以上とどまるべきではない。だが必要なら2日泊めてあげなさい。しかし3日以上とどまるなら、その使徒は偽預言者である。だからその使徒が去っていくまでは、泊まるまでの間にパン以外のものを与えないようにしなさい。金銭を要求するなら、その使徒は偽預言者である」(380 ページ)。

第12章—信徒の受け入れ

「しかし、誰であれ聖霊によって発言する者は金銭あるいはその他のものを与えなさい。そうでないならその者の言うことを聞き入れてはならない。だが、必要を覚えている他者のために何かくれるように言っているなら、誰もその者を裁かないようにしなさい。

しかし、主の御名によって来る者は誰でも受け入れなさい。後になってその者がそのような者であることがわかるだろう。というのは、その者は物事の分別のある者だろうからである。来る者が旅人なら、できるだけのことをして助けてあげなさい。しかし、その者があなたがたのところにとどまるつもりがないなら、必要であれば2~3日泊めてあげてよいが、それ以上はとどまらせるべきではない。だが、その者があなたがたのところにとどまるつもりなら、その者が職人ならば食べていくために働かせなさい。しかし、その者が無職なら、信徒としてのあなたがたの理解度に応じてその者の世話をしやり、その者が怠惰な生活を送らないようにしてやりなさい。だが、その者がそのようにする(あなたがたの世話を受ける)つもりがないなら、その者はキリストの悪口を言いふらす者である。そのような者を避けるように注意しなさい」(381 ページ)。

語句の研究

NASB(改訂版)原典: 1節

¹長老から、愛する者、わたしが真実に愛しているガイオへ。

節 1 “先輩”用語長老は用語“牧師”と“司教”と同義である(参照: Titus 1:5,7; 言行録 20:17,28)。IIヨハネ節1の完全な注意を参照してください。

「最愛」このヨハネ文字特徴は(参照私はヨハネ 2: 7; 3: 2 21; 4: 1 7、11;III ヨハネ 1,2,5,11)は、福音の啓示の信者のためとしてのタイトルが見つかりませんが、

「ガイウス」ガイウスがこの地元の教会の牧師かどうか多く議論をされています。このわずかな量の使用できる情報を独断的な記載を行うは難しいです。ため「教会」と「彼ら」が記載されている 9 対、それ 1 つの家の教会の指導者だったとガイウスは非常に近く、もう一つの家の教会の指導者だったこの純粋な憶測です可能です。

「人は**真実の愛**」愛と真実一緒はヨハネの手紙（参照 II ヨハネ 1,2,3,4;III ヨハネ 1,3,4,8,12).真実は、

1. に聖なる精神（ヨハネ 14: 17を参照）を参照できます
2. イエスキ リストの息子（ヨハネ 8: 32参照; 14: 6）
3. 福音の内容（参照ヨハネ 2: 2; 3: 23）

NASB(改訂版)原典：2-4節

²愛する者よ、あなたの魂が栄えているのと同じように、あなたがすべてのことにおいて栄え、また健康であるようにと祈っています。³兄弟たちが来て、あなたが真理のうちを歩んでいるとおりに、あなたの真実について証言してくれた時、わたしは大いに喜んだからです。⁴わたしには、自分の子供たちが真理のうちを歩んでいると聞くこと以上に大きな喜びはありません。

節 2 「私は祈る」 これは典型的なギリシャ文字開始をです。それは祈り・希望の受信者の繁栄と健康のためです。それは、愛する人に挨拶する方法でした。これは 証拠のテキストとして、「健康のための富の福音」使用できませんので、現代のアメリカの人気。ゴードン料（カリスマ的な学者）、病気、健康、富の福音を参照してください。私の意見が癒しに私のノート ジェームズ 5 オンライン www.freebiblecommentary.org してください。

「**すべての点で可能性が繁栄、健康であること**」これは、典型的な開会の祈りグレコの世界では、最初の世紀です。それは「健康、富と繁栄」説教者 の証拠-本文するものだった。聖書のテキストのコンテキストから削除したり何かを主張する使用することができます。テキスト今日それ自身の日に決して意味こと を意味することはできません。唯一の促された人は、元の著者です。私たちにする必要があります彼の考えに従う、独自差し挟んでいない ！

「**魂**」この用語(魂)がある。ほぼ同義です彼らの人間性や自己の本質を参照してくださいに使用されます。これには、男(体、魂、精神)の離の一部には参照されません。人間を統一(参照 創 2: 7)であります。私たちの魂です。私たちが は、魂を必要はありません。

節 3 「はとでも嬉しかった」(II ヨハネ 4; を参照ピリピ 4: 10).

「**来た**と証言」これらの両方のは、

1. メンバーこの教会定期的エフェソス旅したし、ヨハネに報告を意味する動詞定形いる宣教師を返す報告されてガイウス寛大さ
2. おそらくヨハネ、老人、ことができる旅行簡単に、しかし彼は、条件教会成長聞くのが大好き。

「**実際にはこの句ウォーキング**」です「光の中を歩くには」神学的並列（参照：私はヨハネ 1: 7).キリスト教は主に、信条、儀式、または結合するには、教育機関がイエス・キリストとの関係に住んでいたことが人生にありません。初期の教会は、最初「道」と呼ばれた（行為を参照 9: 2、19: 9 23; 24: 22).真実は、知的財産権(コンテンツ)だけでなく(最初に神との関係別の 1 つの愛のキリストを通して)です。特別なトピック ヨハネで真実を参照してください 6: 55 17: 3.

節 4 「私の子どもたちが」これは(参照:ヨハネの2:12,13,18,28、3:7,18、4:04、5:21)ヨハネの手紙

の一般的な呼称である。ここで強調は、(1)ヨハネの使徒的權威や、彼は大臣の彼の最後の日々を過ごした小アジア(トルコ西部)、のローマ県の教会とクリスチャンのための愛情の (2)ヨハネの言葉になります。

NASB(改訂版)原典: 5-8節

⁵愛する者よ、あなたは、兄弟たち、それもよそから来た人たちのために成し遂げているすべてのことにおいて忠実な働きをしています。⁶彼らは集会の前でああなたの愛について証言しました。あなたは彼らを神のふさわしい仕方です。旅に送り出すのがよいことです。⁷彼らはみ名のために、異邦人たちからは何も受けずに出かけたからです。⁸それゆえに、わたしたちはこうした者たちを受け入れるべきです。わたしたちが真理のための仲間の働き人となるためです。

節5「を忠実に動作(動)」ガイウスこれら行為はまったく逆である 節 9-10 の のアクションの。

「特別なトピック: 信じて、信頼、信頼および誠実ヨハネ 1: 7 とヨハネ 1: 14.

「何を達成で」これは関係代名詞eanとはアオリスト中間仮定法果たされての見通しと条件を表現です。ガイウス・宣教師にあらゆる機会とあらゆる方法で旅行を助けていた。

「特に知らない人は、ときに」教会をされている必要があり、歓迎、これらの遍歴のキリスト教の宣教師を支えるが、ローカル状況のため、ガイウスだけで人彼は何もまた知っていたが、提供して、と知っていたイエス・キリストを愛してこれら同胞を助けるだった。

節6「教会の前にあなたの愛に証言している対」明らかに初期エフェソスの教会には宣教師レポート:間の企業の礼拝の中にいた。

特別なトピック: 教会 (EKKLESIA)

このギリシャ語、ekklesiaは、二つの“外の”言葉、そしてからのものである”と呼ばれる、“そのため、用語は、神と呼ばれるアウトのものを意味する。初期の教会は、世俗的な使用からこの単語を取り(参照:言行録19:32,39,41) とするため、イスラエルの“会衆”のためのこの用語のセプトウアギンタの使用の(Qahal, BDB874, 参照: Num. 16:3; 20:4). 彼らは神の旧約聖書の人々の継続として自自身のためにそれを使用。彼らは、新しいイスラエルいた(参照:ローマ 2:28-29; Gal. 6:16; I Pet. 2:5,9; Re節 1:6), 神の世界的使命を果たす(参照:創世 3:15; 12:3; 出エジプト 19:5-6; マタイ 28:18-20; ルカ 24:47; 言行録 1:8).

この言葉は、福音書と使徒のいくつかの感覚で使用されています。

1. 世俗的なタウンミーティングは、19:32,39,41
2. 使徒。キリスト、マタイの神の普遍的な人々。4:18とエペソ人への手紙
3. キリストにある信者のローカル会衆、マタイ18:17、行為 5:11(これらの節 のエルサレムの教会)
4. イスラエルの人々が集合的に、スティーブンの説教
5. で、7:38行為。この地域の神の人々、行為8:03 (ユダヤパレスチナ)

「あなたがうまくいくだらう」これは、(：10:33を使徒参照)“お願い”のためにエジプトのパピルス(モールトンとミリガン、ギリシャ語聖書の語彙を参照)に見られるギリシャ語イディオムである。

「彼らの方法でそれらを送るために」これは、のために祈り、そして旅行の宣教師(参照のニーズを供給する、装備するための技術的なイディオムです：03:03使徒、ROMを15:24、私コー、04:06；IIコリント.1:16、テス3:13)。

「神にふさわしい方法で」これは重要な、愛、豊かな方法で意味する(参照：大佐1:10；私はテサロニケ2:12)。(エペソ4:01参照)の信者は、彼らが提供ふさわしい方法で福音の労働者を治療するためです。

節7

NASB、REB 「彼らは出て行った」

NKJV 「彼らが行ったり来たり」

NRSV 「彼らが定めた」

TEV、NJB 「彼らは彼らの旅が始まった」

この非常に一般的な動詞が

1. のために使用されます。私ヨハネ2:19
2. に教会を離れる偽教師。偽預言者はヨハネの4:01
3. で世界に外出。多くの詐欺師は、IIヨハネ対7
4. で世界に外出。IIIヨハネ、V. 7に(世界に)出て行く真のローマ教皇の証人

NASB “完全に名前のために”

NKJV “名前のために”

NRSV “彼の名前のために”

TEV “キリストのために”

NJB “名前のために”

これはイエスキリストの人と仕事のために立って、“名前”の例です。信者は彼の名前(：3：18；ロム10:09。私コー12：03；参照のことヨハネ1:12フィル2:9-11)を信じるように、彼らはその名をゆるさされている(ヨハネの第2の手紙。：13)、彼らはまた、彼の名前のために行動する(参照：マタイ10：22、24:9、マルコ13:13、ルカ21:12,17、ヨハネ15:21、20:31；行為4:17、5：41；9:14、ROM 1:05、私はペット4:14,16；牧師2:3)。

NASB 「異邦人からは何も受け入れていない」

NKJV 「異邦人から何も取っていない」

NRSV 「非信者からの支援を受け入れていない」

TEV 「不信心者からの助けを受け入れることなく」

NJB 「何のために非信者に依存することなく」

このフレーズはずっとマタイで12～イエスの言葉のように、彼の提供のために神を信頼してこれらの目撃者を指します。10:5-15とルーク10:4-7で七十人。これは、異教徒や不信心者への言及とし

で“異邦人”の後半に最初の世紀の使用です(参照:マタイ5:47、私はペト2:12; 4:3).信者たちは福音の作業をサポートすることです！一つは彼の心を明らかにするのに役立ちます誰.

ヨハネの日に多くの旅行教師はお金と名声のために教えた.神の教師/説教者/伝道者ではない彼らの言葉のために助けられることもあったが、ためにかれらの主の使命と、彼らが犠牲的にインテリ関与していた

節 8「私たち すべき」これは、しばしば繰り返し、道徳的な訓戒である(ヨハネ 13: 14参照; 19: 7;私はヨハネ 2: 6;3: 16;4: 11).用語 opheilō文字通り金融債務のことを意味しますが、義務はまたは誰かにお世話になった比喩的に使用するようになった.

「このような男性をサポートするには」おもてなしが初期の教会の重要な任務(マタイ 25: 35; 参照:地元の旅館のほとんどの嘆かわしい道徳的な条件のためだったローマ 12: 13;私は Tim. 3: 2;5: 10;テス 1:8;ヘブル 13: 2;I Pet. 4: 9).

「は仲間の労働者は、真実をできるように」信者宣教師として彼らの信仰と真実自仕事に関与しています.これは、福音主義です！与えるキリスト教の新約聖書 ガイドライン 2 コリント 8-9. します.

NASB(改訂版)原典: 9-10節

⁹わたしは集会に書き送りましたが、彼らの間で第一人者になりたがっているディオトレフェスが、わたしたちの言うことを受け入れません。¹⁰それで、わたしが行くなら、彼の業に注意を呼びかけようと思います。彼は悪意のある言葉でわたしたちを不当に非難し、そのことで満足せずに、自分が兄弟たちを受け入れず、そうしようとする者たちを禁じて、集会から追い出しています。

節9「何かを教会に書いた」この I または II ヨハネまたは失われた文字参照してください可能性があります;すべての確率では II ヨハネを指します。「特別なトピック: 教会 (Ekklesia) で 6 対. **「最初にそれらの間で愛する」**これは、現在の活動的な詞.これは、複合項「愛」(phileō)、「第 1 位を保持するには」あり (prōeuō.ここだけ、新約聖書 では、使用されますが、2 番目大佐 1: 18 でキリストの最高ランクの用語です.この男最初記録された「パワー ブローカー」または「教会主任」です彼は、牧師や重要な素人だけだったかどうかは知っているされません.ただし、これは彼の動機を示します.このような自己中心主義の個々のすべての年齢で、教会に存在されている！彼はまた、グノーシス主義だったかどうか不確かな、無言ですが可能です.ジェームズダン、新約聖書の中の統一と多様性、頁の例としてデオテレペスを見て“初期カトリズム”

特に、ヨハネの個人主義がPastorals(頁の 129f、上記のように明らかな傾向を制度化する一種の抗議として正確に理解することは非常にもっともらしくしている392、..、参照.再びヘブルと啓示 - 31.2、3).(41の上方を参照してください) - 何かがすでに明らかにイグナチオの初期のカトリック(エペソ、20.2.“不死の薬”)で確立されている sacramentalism の種類に反対する場合同様に、使徒ヨハネの書物は思える.すべての最も魅力的な“長老”IIIヨハネ9Fのデオテレペス上での攻撃です.彼は訪問キリスト教徒への歓迎を拒否することができただけでなく、彼を越えて人々彼はま

た“教会からぎわ”:デオテレペスが、少なくともこの教会の制御で 明らかになった.デオテレペス、換言すれば、君主司教の権限で行動していた(参照:イグナチオ、エペソ、6.1、Trall、7.2、Smyrn、8.1f)、そしてそれが目に反対した

「私たちの言う受け付けない」 だけでした ヨハネの使徒の権限を拒否するが、彼は使徒ポリシーを拒否しても彼の復讐をそれらの人に従うと積極的に関与していた !

節10「場合」これは潜在的な行動を意味する第三のクラスの条件文である.

「彼の行為に注意をコールします」ヨハネ望んでいる明らかにこの人間動機 (9(動) 参照) とアクションを記述する (節 10 を参照):

1. NASB -“不当私たち邪悪な言葉で非難”
NKJV -“私たちに対して悪意のある言 でベラベラ”
NRSV -“当社に対して冤罪を広めて”
TEV -“彼は私と彼が語る嘘について述べひどいこと”
NJB -“彼は私たちに不利を循環している邪悪です発”
2. “彼自身の兄弟を受信しない”
3. “彼はそうする希望者を禁止しています”
4. “彼は教会から彼らを出している”

この男は、注目したいし、スポットライトを誰とでも共有しません.彼はまた誰も反対は、または、彼に反対する可能性があります、教会から削除します.

「それらの教会を置く」ヨハネは、この同じ強力な動詞 が使用されます 9: 34、35 人はイエスを治癒盲目の男のシナゴークの破門されています.また、ヨハネ12:31で追い出され、サタンのために使用されます.

NASB(改訂版)原典: 11-12節

¹¹愛する者よ、悪いことではなく、善いことを見倣いなさい。善を行なう者は神に属しています。悪を行なう者は神を見たことはありません。¹²デメトリウスには、すべての人と真理そのものからの証言があります。いやそれどころか、わたしたちも証言しており、あなたは、わたしたちの証言が真実であることを知っています。

節11「悪いことはまねしないでください」これは多くの場合、プロセス内で行為を停止する意味現在の中央(証人)が不可欠です.私たちは、このギリシャ語の単語(mimeomai)から“模倣する”英語の用語を取得します.私たちは慎重に私たちの ロールモデルを選択する必要があります.彼らは、教会の成熟したキリスト教の人になるはず(参照IIテサロニケ3:7,9;ヘブル6: 12; 13:7).ディミートリアスが良い例です、デオテレペスは悪い例です.

「善行をして 1 つの神である」ヨハネの手紙は1つが彼らがキリスト教のかを知ることでできる3つのテストを持っている.これは服従のテスト(; 3:4-10、5:18、IIヨハネ6参照のこと私はヨハネ 2:3-6,28-29)を指します. (1)教義(節 3-4)及び(2)愛(節 1-2,6):他の二つの試験への当てつ

けもあります。

「悪のない、神を見ていない」偽教師は、密接に神を知っていると主張したが神を恐れぬと愛のない生活を送っていました。これは、救いは断言する知的真実だと信じたが、日常生活に何の関係もなかった律法主義者、放蕩グノーシス派を反映している。

節 12「ディミートリアスは良い証言を受けている」これは、完璧なのパツプの示しています。これは本当にについて III ヨハネ ガイウスに配信している可能性があります、宣教師デメトリオス、ガイウス ヨハネから勧告の手紙をするようです。その他の文字は、新約聖書 の推奨事項の参照機能 18: 27;ローマ 16: 1;私はコリ16: 3;II コリ 3: 1;8: 16-24;大佐 4: 10.

「と真理そのものから」真実（ヨハネで特別なトピックを参照してください 6: 55 17: 3）ディミートリアスの良い証言する別の証人としての象徴です。

「私たちの証言が事実だと知っている」ヨハネはキリストに彼自身の信頼できる目撃者をアサートしている(ヨハネを参照 19: 35; 21: 24).

NASB(改訂版)原典： 13-14節前半

¹³わたしにはあなたに書き送る事柄が多くありますが、インクとペンで書く気にはなれません。

^{14前半}むしろ、わたしは間もなくあなたに会うことを望んでいます。そうすれば、わたしたちは面と向かって話せるでしょう。

節13 これは、II ヨハネ 12 に非常に似ています。

NASB(改訂版)原典： 14節後半

^{14後半}あなたに平安がありますように。こちらの友人たちがあなたによろしくと言っています。そちらの友人たちに名ざしでよろしく。

節14「平和にする」これは、明らかにユダヤ料理のイディオムへの参照をシャローム（ルカ 10: 5 を参照）です。「こんにちは」とか「さようなら。」を意味することができます。それは問題のない場合だけではなく、神の恵みの存在を表します。これらは、復活されたキリストの最初の単語上の弟子の部屋（ヨハネ 20: 19、21、26 を参照）。両方ポール（一・22 6: 23参照）とペトロ（参照：私は Pet. 5: 14）この使用終了祈りと神の人々 のため。

「名前」これは個々に、個人的に、そして暖かくするためのイディオムです。それはエジプトのパピルスにしばしば使用されました。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ（優先事項）を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ガイオとディオトレフェスが互いに対立していた理由については多くの理論が立てられてきた。提唱されてきた理論は
 - a. 神学的理由
 - b. 社会的理由
 - c. 教会(聖職者)に関する理由
 - d. 道徳的理由によるものであった。これらの理由のそれぞれと、それらがヨハネの手紙第三とどのような関係があるかを説明しなさい。
2. ヨハネの手紙第二とヨハネの手紙第三はどのように関連しているか？
3. ヨハネの手紙第一に見られ、ヨハネの手紙第二とヨハネの手紙第三で繰り返されている、信徒の確信を導くための3つの試みを挙げなさい。

補遺1

ギリシャ語の文法構造の簡単な定義

コイネギリシャ語はしばしばヘレニズム(アレクサンドロス大王の時代以降の古代ギリシャ世界)ギリシャ語と呼ばれ、アレクサンドロス大王の遠征(紀元前336~323年)以降約800年間(紀元前3世紀~紀元5世紀)にわたって地中海世界の共通(公用)言語であった。それは単なる簡略化された古代ギリシャ語ではなく、多くの意味でより新しい形のギリシャ語であり、古代近東世界ならびに地中海世界の第二共通(公用)言語となった。

新約聖書のギリシャ語はある意味で独特だが、それは多分、ルカとヘブル人への手紙の著者を除くその言語の使用者が主にアラム語を用いていたからだろう。だから彼らの文体はアラム語の熟語と(文法等の)構造形態の影響を受けていた。また、彼らは新約聖書と同じくコイネギリシャ語で書かれたセプトゥアギンタ(旧約聖書のギリシャ語訳)を読み、また引用していた。しかしセプトゥアギンタはギリシャ語を母語としないユダヤ人学者達によっても書かれている。

新約聖書の文体に厳密な文法構造をあてはめることはできないということを覚えておくべきである。新約聖書の文体は独特だが、(1)セプトゥアギンタ(2)Josephusの著作物のようなユダヤ人の書いた書物(3)エジプトで発見されたパピルスではとても一般的である。では私達はどのように新約聖書の文体の文法構造を解明すべきだろうか。

一般のコイネギリシャ語と新約聖書のコイネギリシャ語の文法的特徴は流動的である。多くの意味でその当時は文法の簡略化が盛んな時代であった。文脈は私達にとって大きな助けとなるだろう。より大きな文脈において単語群だけが意味をもつならば、文法構造は(1)著者特有の文体と(2)特定の文脈をもとに理解されうる。ギリシャ語の様式と構造を厳密に定義することはできない。

コイネギリシャ語は主として動詞中心の言語であった。解釈においてはしばしば動詞の型と形が重要となる。主節の大半においては冒頭に動詞が現れているが、これは動詞が他の品詞より優先されることを示している。ギリシャ語動詞の解釈においては3種類の情報に注目しなければならない。3種類の情報とは(1)時制と態と法が本質的に強調している事柄[語形論つまり形態論](2)特定の動詞の基本的意味[辞書編集法、辞書学](3)文脈の流れ(統語法)である。

I. 時制

A. 時制つまり相は動詞と完了した行為あるいは完了していない行為との関係を取り扱う。これはしばしば「完了時制」あるいは「未完了時制」と呼ばれる。

1. 完了時制は行為の存在に注目する。何かが起こったということ以外に詳しいことは分かっていないのだ。その行為の始まりと継続あるいは最高潮については述べられていない。
2. 未完了時制は行為の継続過程に注目する。それは連続行為や持続行為や継続行為などの用語で表現される。

B. 時制は著者がその行為を進行中のものとしてどのように見るかによって分類されうる。

1. それは起こった＝アオリスト
2. それは起こり、結果が伴った＝完了形
3. それは過去に起こり、結果が伴っていたが、今は起こっていない＝過去完了形
4. それは起こっている＝現在形
5. それは起こっていた＝未完了形
6. それは起こることになっている＝未来形

これらの時制がどのように解釈の助けとなるかの具体例としては用語「救う」が挙げられる。その語はその過程と最高潮とを示すためにいくつかの時制で用いられた。

1. アオリスト—「救った」(ローマ 8: 24 を参照)
2. 完了形—「救われ、その結果が伴い続けている」(エペソ 2: 5 と 8 節を参照)
3. 現在形—「救われている」(I コリント 1: 18、15: 2 を参照)
4. 未来形—「救われることになっている」(ローマ 5: 9、10 節、10: 9 を参照)

C. 動詞の時制に注目して、解釈を試みる者は原著者が自身(の行為)を表現するのに特定の時制を選択した理由を探る。標準的な「飾りのない」時制はアオリストであった。それは通常の「不特定の」、「限定されていない」、「他と区別されていない」動詞形であった。それは文脈が特定しているに違いない様々な動詞形で用いられる。それは単に何が起こったかを述べている。過去に関する時制は直説法の中でのみ表現される。他の時制が用いられたとしても、より特別な何かが強調されていた。それらの時制とは何だろうか。

1. 完了時制。これは結果を伴う完了した行為について述べる。ある意味でそれはアオリストと現在時制の結合したものであった。通常は付随する結果あるいは行為の完了に注目する(例:エペソ 2: 5 と 8 節「あなたがたは救われ、そして救われ続けているのです」)。
2. 過去完了時制。これは付随する結果の発生が終わっていることを除けば完了時制と似ている。例:ヨハネ 18: 16「ペテロは扉の外に立っていた」
3. 現在時制。これは未完結つまり未完了の行為について述べる。通常は出来事の継続に注目する。例: I ヨハネ 3: 6 と 9 節「神に結ばれている者は誰も罪を犯し続けることはありません」「神の子となった者は誰も罪を犯し続けることはありません」
4. 未完了時制。この時制と現在時制との関係は完了時制と過去完了時制との関係に似ている。未完了時制は、起こっていたが今は終わった未完結の行為つまり過去における行為の始まりについて述べている。例:マタイ 3: 5「そこでエルサレム全土から人々が出て彼のもとに集まり始めた」
5. 未来時制。これは通常は未来の時間枠に組込まれる行為について述べている。それは現実の出来事よりはむしろその出来事が起こる可能性に注目する。それはしばしばその出来事が起こる確実性について述べる。例:マタイ 5: 4-9「... は幸いである。彼らは...」

II. 態

A. 態はその動詞の行為とその主語との関係を表す。

- B. 能動態はその主語がその動詞の行為を行っていることを普通に、予想されたように、強動的にではなく言い表す方法であった。
- C. 受動態はその主語が部外者によって行なわれたその動詞の行為を受けていたことを意味している。その行為を行う部外者はギリシャ語訳の新約聖書では以下に示すような前置詞と格で示された。
1. 奪格の *hupo* で示される当事者(マタイ 1: 22、使徒行伝 22: 30 を参照)
 2. 奪格の *dia* で示される、間接的に関与している者(マタイ 1: 22 を参照)
 3. 通常、助格(具格)の *en* で示される物事
 4. 助格(具格)のみで示される人あるいは物事
- D. 中間態はその主語がその動詞の行為を生みだし、またその動詞の行為に直接関係することを意味している。それはしばしば高位の人物に関する事柄の態と呼ばれる。この文法構造はある意味で節あるいは文の主語を強調している。この文法構造は英語には見られない。ギリシャ語では様々な意味つまり訳がありうる。この動詞形には例えば以下に示すようなものがある。
1. 再帰動詞—主語自体の直接的行為。例: マタイ 27: 5「首をつって死んだ」
 2. 強意(強調)の動詞—主語がそれ自体の行為を生み出す。例: II コリント 11: 14「サタン自身が光の天使を装うのです」
 3. 相補的動詞—2つの主語の相互作用。例: マタイ 26: 4「彼らは相談し合った」

III. 法

- A. コイネギリシャ語には4つの法がある。それらは動詞と現実との関係を、少なくとも著者自身の心の中で示している。それらの法は広い意味で2通りに区分される。ひとつは現実を示すグループ(直説法)であり、もうひとつは可能性を示すグループ(仮定法、命令法、願望法)である。
- B. 直説法は起こった行為あるいは起こっていた行為を少なくとも著者の心の中で表現する通常の法であった。それはギリシャ語にだけ見られる法であり、特定の時を表現しているが、ここでもその特質は二次的なものである。
- C. 仮定法は起こりうる未来の行為を表現した。何かはまだ起こっていなかったが、そうなる(起こる)可能性はあった。それは未来形直説法ではとても一般的であった。それとの違いは、仮定法はある程度の疑わしさを表現しているということであった。英語ではこれはしばしば用語“could”、“would”、“may”、“might”で表現されている。
- D. 願望法は論理的に実現可能な願望を表現した。それは仮定法よりもさらに一步現実から進んだ行為を表現する法と考えられた。願望法はある条件の下での可能性を表現した。願望法は新約聖書では稀であった。それが最も頻繁に用いられているのはパウロの有名な聖句「決してそうではない」(KJV、「神が禁じられている」)であり、15回も用いられている(ローマ 3: 4 と 6 節と 31 節、6: 2 と 15 節、7: 7 と 13 節、9: 14、11: 1 と 11 節、I コリント 6: 15、ガラテヤ 2: 17、3: 21、6: 14 を参照)。他の例はルカ 1: 38、20: 16、使徒行伝 8: 20、I テサロニケ 3

章 11 節に見られる。

- E. 命令法は実行可能な命令を強調したが、話者の意図が強調された。それは意志的な可能性のみを主張し、他者の選択を条件とする。祈りと第三者の要求には命令法の特別な用法がある。これらの命令は新約聖書では現在時制とアオリスト時制にのみ見られる。
 - F. 分詞をもうひとつの型の法に区分する文法もある。それらはギリシャ語訳の新約聖書ではとても一般的であり、通常は形容動詞と定義されている。それらは関連する主動詞と関連づけて訳される。分詞には様々な訳が可能である。いくつかの英訳聖書を参照すべきである。ここでは Baker 社刊 *The Bible in Twenty Six Translations* が大きな助けとなる。
 - G. アオリスト能動態直説法は出来事を普通に、つまり「特定せずに」記述する方法である。他のいかなる時制と態と法もこれほどには原著者の伝えなかった特別な解釈上の重要性を持たなかった。
- IV. ギリシャ語に馴染みのない人には以下の学習の手引きが必要な情報を与えてくれるだろう。
- A. Barbara&Timothy Friberg 著 *Analytical Greek New Testament*、Grand Rapid の Baker 社から 1988 年刊
 - B. Alfred Marshall 著 *Interlinear Greek-English New Testament*、Grand Rapid の Zondervan 社から 1976 年刊
 - C. William D. Mounce 著 *The Analytical Lexicon to the Greek New Testament*、Grand Rapid の Zondervan 社から 1993 年刊
 - D. Ray Summers 著 *Essentials of Greek New Testament*、Nashville の Broadman 社から 1950 年刊
 - E. Illinois 州 Chicago の Moody 聖書学院の学界公認のコイネギリシャ語のコースが受講可能である。

V. 名詞

- A. 統語論的には名詞は格によって分類される。格は名詞の語尾が屈折(変化)した形であり、動詞と文の他の要素との関係を示すものであった。コイネギリシャ語では格の機能の多くは前置詞で示された。格が様々な関係を明らかにしたので、前置詞はこれらの考える機能をよりはっきりと区別できるようにした。
- B. ギリシャ語の格は以下の8種類に分類される。
 1. 主格は命名に用いられ、通常は文あるいは節の主語であった。それはまた、動詞「～である」や「～になる」と連結させて叙述的な名詞あるいは形容詞に用いられた。
 2. 属格(所有格)は記述に用いられ、通常は関連する語の属性つまり特質に帰属された。それは質問「どの」の答えとなった。それはしばしば英語の前置詞“of”を用いて表現された。
 3. 奪格は属格と同じ語尾変化形を用いたが、離脱を表現するのに用いられた。それはしばしば時間、空間、源、起源、程度上の一点からの離脱を述べた。それはしばしば英語の前置詞“from”を用いて表現された。
 4. 与格は個人的な事柄を表現するのに用いられた。これは肯定的な事柄も否定的な事柄も

述べていたようだ。しばしばこれは間接目的語であった。それはしばしば英語の前置詞“to”を用いて表現された。

5. 所格(位置格)は奪格と同じ語尾変化形を用いたが、空間、時間上の位置あるいは論理的限界を表現するのに用いられた。それはしばしば英語の前置詞“in”、“on”、“at”、“among”、“during”、“by”、“upon”、“beside”を用いて表現された。
6. 助格(具格)は奪格および所格と同じ語尾変化形を用いた。それは手段あるいは提携を表現した。それはしばしば英語の前置詞“by”あるいは“with”を用いて表現された。
7. 対格は行為の完結を表現するのに用いられた。それは限界を表現した。それは主に直接目的語として用いられた。それは質問「どの程度」の答えとなった。
8. 呼格は直接的発言に用いられた。

VI. 接続詞と接続語

- A. とても多くの接続詞があるので、ギリシャ語は非常に正確な言語である。それら接続詞は思想(節、文、段落)を連結する。それらはあまりにも多数(多種類)あるので、それらが(見当たらないこと(連辞[接続詞])はしばしば聖書解釈上重要なことである。事実、これらの接続詞と接続語は著者の思想の方向を示している。それらはしばしば、著者が伝えようとしていることとは正確には何かを見定めるうえで重要である。
- B. ここにそれらの(ギリシャ語の)接続詞と接続語およびそれらの意味を挙げる(この情報は主に H. E. Dana と Julius K. Mantey 共著 *A Manual Grammar of the Greek New Testament* から少しずつ集めた)。

1. 時間接続詞

- a. *epei*、*epeide*、*hopote*、*hos*、*hote*、*hotan* (仮定法)—「～の時」
- b. *hoes* —「～の間」
- c. *hotan*、*epan* (仮定法)—「～の時はいつでも」
- d. *hoes*、*achri*、*mechri* (仮定法)—「～まで」
- e. *priv* (不定詞)—「～の前に」
- f. *hos* —「～以来」、「～の時」、「～と同時に」

2. 論理接続詞

- a. 目的
 - (1) *hina* (仮定法)、*hopos* (仮定法)、*hos* —「～するために」、「～のために」
 - (2) *hoste* (分節的対格不定詞)—「～のために」
 - (3) *pros* (分節的対格不定詞)または *eis* (分節的対格不定詞)—「～のために」
- b. 結果(目的と結果の文法形の間には密接な関係がある)
 - (1) *hoste* (不定詞。これが最も一般的である)—「～して...」、「そして～」
 - (2) *hiva* (仮定法)—「そして～」
 - (3) *ara* —「そして～」
- c. 原因あるいは理由

(1) *gar* (原因/影響あるいは理由/結論) — 「～から」、「～ので」

(2) *dioti*、*hotiy* — 「～ので」

(3) *epei*、*epeide*、*hos* — 「～から」

(4) *dia* (対格を伴う)と *dia* (分節的不定詞を伴う) — 「～ので」

d. 推論

(1) *ara*、*poinun*、*hoste* — 「だから」

(2) *dio* (最強の推論接続詞)「そのために」、「したがって」、「だから」

(3) *oun* — 「だから」、「それで」、「そして」、「その結果」

(4) *toinoun* — 「その結果」

e. 反意あるいは対比

(1) *alla* (強い反意接続詞) — 「しかし」、「～以外は」

(2) *de* — 「しかし」、「しかしながら」、「だが」、「一方」

(3) *kai* — 「しかし」

(4) *mentoi*、*oun* — 「しかしながら」

(5) *plen* — 「それにもかかわらず」(主にルカの福音書で)

(6) *oun* — 「しかしながら」

f. 比較

(1) *hos*、*kathos* (比較節を導く)

(2) *kata* (複合語で。*katho*、*kathoti*、*kathosper*、*kathaper*)

(3) *hosos* (ヘブル人への手紙で)

(4) *e* — 「～より」

g. 継続あるいは連続

(1) *de* — 「そして」、「さて」

(2) *kai* — 「そして」

(3) *tei* — 「そして」

(4) *hina*、*oun* — 「そして」

(5) *oun* — 「そして」(ヨハネの福音書で)

3. 強調用法

a. *alla* — 「確かに」、「本当に」、「事実」

b. *ara* — 「事実」、「確かに」、「現実に」

c. *gar* — 「しかし現実に」、「確かに」、「事実」

d. *de* — 「事実」

e. *ean* — 「～さえ」

f. *kai* — 「～さえ」、「確かに」、「現実に」

g. *mentoi* — 「事実」

h. *oun* — 「現実に」、「まさにそのとおり」

VII. 条件文

- A. 条件文は1つ以上の条件節を含む文である。この文法構造は、主動詞の行為が起こる、あるいは起こらない条件、理由、原因を示すので解釈の助けとなる。条件文には4つの型がある。それらは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した文を願望だけを述べた文に変換している。
- B. 第一種条件文は「もし～」で表現されているとはいえ、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した行為あるいは存在を表現している。いくつかの文脈ではそれは「～だから」と訳されているようだ(マタイ 4: 3、ローマ 8: 31 を参照)。しかし、これは全ての第一種条件文が現実(事実、真実)に忠実であるという意味ではない。しばしばそれらは主張を強調したり誤りを明らかにするのに用いられた(マタイ 12: 27 を参照)。
- C. 第二種条件文はしばしば「事実と反対のこと」と呼ばれる。それは事実には忠実ではないことを強調している。例を挙げよう。
1. 「この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どのような者が分かるはずだ。」(ルカ 7: 39)
 2. 「あなたたちはモーセを信じたのであればわたしをも信じたはずである。」(ヨハネ 5: 46)
 3. 「もし今なお人の気に入られようとしているなら、わたしはキリストのしもべではありません」(ガラテヤ 1: 10)
- D. 第三種条件文は起こり得る未来の行為を述べる。それはしばしばその行為の起こる可能性について断言する。それは通常は偶然性を暗示する。主動詞の行為は「もし～」節の行為に付随する。例えば I ヨハネ 1: 6-10、2: 4 と 6 節と 9 節と 15 節と 20 節と 21 節と 24 節と 29 節、3: 21、4: 20、5: 14 と 16 節。
- E. 第四種条件文は可能性を最も排除した事柄を述べた文である。それは新約聖書では稀である。事実、条件文の両部分(「もし～」節と従属節)が定義に合っているような完全な第四種条件文はない。部分的な第四種条件文の例は I ペテロ 3: 14 の冒頭の節(「もし～」節)である。結論の節(従属節)が部分的に第四種条件文となっている文の例は使徒行伝 8: 31 である。

VIII. 禁止

- A. me 分詞のついた現在形直説法動詞はしばしば(排他的にではなく)すでに進行している行為の停止を強調している。例えば「地上に富を蓄えてはいけません。…」(マタイ 6: 19)、「自分の生活のことで思いわずらってはいけません。…」(マタイ 6: 25)、「あなたがたの体を不義の道具として罪に任せてはなりません。…」(ローマ 6: 13)、「神の聖霊に逆らってはいけません。…」(エペソ 4: 30)、「酒に酔いしれてはなりません。…」(エペソ 5: 18)。
- B. me 分詞のついたアオリスト仮定法動詞は「ある行為をし始めてはならない」という強調である。例えば「…だと思っははいけません」(マタイ 5: 17)、「…で思いわずらってはいけません。…」(マタイ 6: 31)、「…を恥じてはなりません」(II テモテ 1: 8)。
- C. 仮定法を伴う二重否定はとても強調的な否定である。それは「決して、絶対に…ない」ある

いは「いかなる状況下でも...ない」のように表現される。例えば「その人は決して死ぬことがない」(ヨハネ 8: 51)、「わたしは決して...しません」(I コリント 8: 13)。

IX. 冠詞

A. コイネギリシャ語では限定冠詞「その」は英語の限定冠詞 the と同様の用法を持っていた。その基本的機能は「指示詞」としての機能、つまり語や名や句に注目させることであった。その用法は新約聖書では著者により異なる。この限定冠詞には以下のような機能もあったようである。

1. 指示代名詞のような対照用品詞としての機能
2. 予め導入された主語つまり人物を示すしとしての機能
3. 連結動詞のある文中で主語をはっきりさせる手段としての機能。例えば「神は霊である」(ヨハネ 4: 24)、「神は光である」(I ヨハネ 1: 5)、「神は愛である」(4: 8 と 16 節)

B. コイネギリシャ語には英語の不定冠詞 a と an のような不定冠詞がなかった。不定冠詞がないことは以下のようなことを意味したようである。

1. 物事の特徴あるいは特質が注目される
2. 物事の範疇が注目される

C. 新約聖書の著者によって冠詞の用法は様々である。

X. ギリシャ語の新約聖書における強調の様式

A. 強調の様式は新約聖書の著者によって様々である。最も堅実で形式的な著者はルカとヘブル人への手紙の著者である。

B. 以前に述べたように、アオリスト能動態直説法は標準的で不特定のものを強調したが、他のいかなる時制と態と法もこれほどの解釈上の重要性を持たなかった。これはアオリスト能動態直説法が文法的な重要性を持って用いられることが稀であったという意味ではない(例: ローマ 6: 10[2回])。

C. コイネギリシャ語の語順

1. コイネギリシャ語は英語と同じように語順によらない語尾屈折(語尾変化)の言語であった。従って著者は通常予想される語順を変化させて以下のようなことを示していたようだ。

- a. 著者が読者に示したかったこと
- b. 読者を驚かせていたであろう著者の思想
- c. 著者が深く感動したこと

2. ギリシャ語の通常の語順は未解決の問題である。しかし、予想される通常の語順は

- a. 連結動詞の場合
 - (1) 動詞
 - (2) 主語
 - (3) 補語
- b. 他動詞の場合

- (1)動詞
- (2)主語
- (3)目的語
- (4)間接目的語
- (5)前置詞句
- c. 名詞句の場合
 - (1)名詞
 - (2)修飾語
 - (3)前置詞句

となる。

3. 語順は聖書解釈上きわめて重要である。例えば

- a. 「彼らは友好のしるしとしてわたしとバルナバに右手を差し出しました」 聖句「友好のしるしとして右手を」は分割されて、その重要性を示すために文頭に置かれている(ガラテヤ 2: 9)。
- b. 「キリストとともに」は文頭に置かれた。キリストの死は中央に置かれた(ガラテヤ 2 章 20 節)。
- c. 「それは少しずつ多くのしかたで」(ヘブル 1: 1)は文頭に置かれた。対比されているのは神がどのように御自身を現わされたかということであり、啓示の内容ではない。

D. 通常、ある程度の強調は以下に示すような文筆技法によって示される。

- 1. 動詞の語尾屈折(変化)形の中にすでにある代名詞の反復。例:「わたしは、わたし自身は、いつもあなたがたとともにいる. . .」(マタイ 28: 20)
- 2. 存在が予想される接続詞あるいは語・句・節・文をつなぐその他の品詞の不在。これは連辞[接続詞]省略(「非拘束」と呼ばれる。接続用品詞の存在が予想されたので、その不在は注意を引くことになる。例:
 - a. 主イエス・キリストが山上の説教で語られた幸福に関する章句、マタイ 5: 3 以降(列記による強調)
 - b. ヨハネ 14: 1(新しいトピック)
 - c. ローマ 9: 1(新しい章)
 - d. II コリント 12: 20(列記による強調)
- 3. 文脈中にある語句の反復。例:「神の栄光のために」(エペソ 1: 6 と 12 節と 14 節)。この聖句は三位一体の神のお一人お一人の御業を示すために用いられた。
- 4. 熟語あるいは用語間の言葉(音)遊びの使用
 - a. 婉曲語法—(口に出して言うことが)禁止されている主題を他の用語で置きかえる。例えば死は「眠り」(ヨハネ 11: 11-14)に、男性生殖器は「足」(ルツ 3: 7-8、I サムエル 24: 3)に置きかえられている。

b. 遠回しな表現—神の御名を他の用語で置きかえる。例えば「天の御国」(マタイ 3: 21)、「天からの声」(マタイ 3: 17)。

c. 比喩的表現

- (1) ありえない誇張(マタイ 3: 9、5: 29-30、19: 24)
- (2) 穏やかな口調で述べられた極端な発言(マタイ 3: 5、使徒行伝 2: 36)
- (3) 擬人化(I コリント 15: 55)
- (4) 皮肉(ガラテヤ 5: 12)
- (5) 韻文[ピリピ 2: 6-11]
- (6) 語間の音遊び

(a)「教会」

- (i)「教会」(エペソ 3: 21)
- (ii)「召し」(エペソ 4: 1 と 4 節)
- (iii)「召された」(エペソ 4: 1 と 4 節)

(b)「自由な」

- (i)「自由な女」(ガラテヤ 4: 31)
- (ii)「自由」(ガラテヤ 5: 1)
- (iii)「自由な」(ガラテヤ 5: 1)

e. 熟語的言葉—通常は文化的な言葉と特定の言葉

- (1)「食物」の比喩的使用(ヨハネ 4: 31-34)
- (2)「神殿」の比喩的使用(ヨハネ 2: 19、マタイ 26: 61)
- (3) 思いやりを意味するヘブル語の熟語と「憎む」(創世記 29: 31、申命記 21: 15、ルカ 14: 36、ヨハネ 12: 25、ローマ 9: 13)
- (4)「全ての」対「多くの」。イザヤ 53: 6(「全ての」)および 53: 11 と 12 節(「多くの」)を比較せよ。これらの用語はローマ 5: 18 と 19 節に見られるものと同義語である。

5. 一語の用語の代わりに一組の聖句を用いること。例:「主イエス・キリスト」

6. *autos* の特別用法

- a. 冠詞(限定用法)が付いているときは「同じ」と訳される。
- b. 冠詞(叙述用法)が付いていないときは強意の再帰代名詞—「彼自身」、「彼女自身」、「それ自身」として訳される。

E. ギリシャ語を母語としない聖書研究者は以下に示すいくつかの方法で強調を見分けることができる。

1. 解釈用の辞書とギリシャ語—英語聖書(隔行にギリシャ語と英語で書かれた聖書)の使用
2. 英訳聖書群、特に様々な翻訳理論の比較。例:「逐語」訳(KJV、N KJV、ASV、NASB、RSV、NRSV)と”dynamic equivalent”訳(Williams、NIV、NEB、REB、JB、NJB、TEV)の比較。ここでは Baker 社刊の *The Bible in Twenty-Six Translations* が大きな助けとなるだろう。
3. Joseph Bryant Rotherham 著 *The Emphasized Bible* (Kregel 社の 1994 年刊)の使用

4. 文字通り忠実に訳された聖書の使用

a. 1901 年刊の *The American Standard Version*

b. Robert Young 著 *Young's Literal Translations of the Bible* (Guardian Press の 1976 年刊)

文法の研究は退屈だが正しい解釈のためには必要である。これらの簡単な定義と注解と実例はギリシャ語を母語としない人々にこの巻の文法解説を用いるよう勧める意図がある。確かにこれらの定義は簡略化されすぎている。それらは教義の理解のためだけにではなく新約聖書の統語法のより深い理解のための布石として用いられるべきである。読者がこれらの定義によっても他の学習参考書、例えば新約聖書の専門的解説書を理解できるようになることを望む。

私達は聖書の文脈中に見られる情報に基づいて自らの解釈を裏付けることができなければならぬ。文法は解釈を裏付ける証拠となる事柄(複数)の中で最も助けとなるもののひとつである。他の証拠物件には歴史的背景、文脈、現代用語の用法、言い換え文などが含まれる。

補遺2 原典批評

この主題はこの注解書に見られる御言葉を解説する方法とみなされるだろう。以下に示す資料が用いられることになる。

I. 英訳聖書の御言葉

- A. 旧約聖書
- B. 新約聖書

II. 「原典批評」とも呼ばれる「軽い批評」の問題と理論の簡単な説明

III. さらなる読解のための推奨文献

I. 英訳聖書の御言葉

A. 旧約聖書

1. マソラ聖書(MT)—このヘブル語の子音字で綴られた聖書は紀元 100 年にラビ(ユダヤ教の指導者)の Aquiba により書かれた。母音記号、アクセント(抑揚)、行間のコメント、句読点、そしてその他の文法上の記号は紀元6世紀から9世紀にかけて付け加えられた。その付け加えの仕事はマソラ編集者として知られるユダヤ教の学者によってなされた。彼らを用いた原文体はミシュナ、タルムード、タルガム、ペシッタ聖書、ウルガタ聖書に見られるものと同じであった。
2. セプトゥアギンタ(LXX)—伝説によればセプトゥアギンタはエジプト王プトレマイオス2世(紀元前 285~246 年)の後援のもとにアレキサンドリア図書館において70日間にわたって70名のユダヤ教の学者によって編纂された。その翻訳(ギリシャ語訳)はおそらくアレキサンドリア在住のユダヤ教の指導者の求めによるものであろう。この伝説は「アリストテレス書簡」に由来する。LXX はその大半がラビ(ユダヤ教の指導者)の Aquiba の聖書(MT)に由来するヘブル語聖書の様々な伝統に基づいている。
3. 死海文書(DSS)—死海文書は古代ローマ帝国でいう紀元前の時代(紀元前 200 年~紀元 70 年)に「エセネ派」と呼ばれるユダヤ教の分派によって書かれた。死海周辺の数箇所で見発見されたヘブル語の原典は MT や LXX 以降の様々なヘブル語聖書群の特徴を示している。
4. これらの聖書の比較が解釈においてどのように旧約聖書の理解の助けとなっているかの特別な例
 - a. LXX は翻訳者と研究者が MT を理解する際の助けとなっている。
 - (1)イザヤ 52: 14 は LXX では「それほどに、**彼**は多くの民を驚かせるであろう」
 - (2)イザヤ 52: 14 は MT では「それほどに、**あなたは**多くの民を驚かせた」
 - (3)LXX ではイザヤ 52: 15 中の代名詞がはっきりと示されている。
 - (a) LXX では「それほどに彼は多くの民を驚かせるであろう」

(b) MT では「それほどに彼は多くの民を驚かせた」

b. DSS は翻訳者と研究者が MT を理解する際の助けとなっている。

(1) イザヤ 21: 8 は DSS では「そこで見張りは叫んだ。『見張り台の上に私は立ち. . . 』」

(2) イザヤ 21: 8 は MT では「そして私は獅子のように叫ぶ。わが主よ、私は一日中見張り台の上に立ち. . . 」

c. LXX と DSS はイザヤ 53: 11 の内容を明確に理解する際の助けとなっている。

(1) LXX と DSS では「自らの魂の苦しみの後に彼は光を見て満足するだろう」

(2) MT では「彼は自らの魂の苦しみの. . . を見て満足するだろう」

B. 新約聖書

1. ギリシャ語訳の新約聖書は完全なものと部分的なものを問わず 5300 件以上が現存している。約 85 件はパピルスに書かれており、268 件は全て大文字(アンシアル体)で書かれた原典である。後に紀元9世紀頃に流状書体(小文字体)が発達した。書物の形をとるギリシャ語の原典は約 2700 件ある。日課表(聖句集)と呼ばれ、礼拝に用いられた聖句のリストも約 2100 ほど現存している。
2. 部分的なものを含めて、パピルスに書かれた新約聖書のギリシャ語訳原典が美術館に約 85 件収められている。紀元2世紀に書かれたとされるものもあるが、大半は紀元3世紀あるいは4世紀に書かれたとされている。これらの MSS の中に新約聖書全体が記されているものはない。これらが新約聖書の最古の写本であるからというだけで異本が少ないと断言することはできない。これらの多くは局所的に用いられるために手早く書き写された。その過程において注意は払われなかった。従ってそれらには多くの異本が存在する。
3. Codex Sinaiticus はヘブル語の文字^א(アレフ)つまり(01)で知られ、Tischendorf によりシナイ山の聖 Catherine 修道院で発見された。紀元4世紀に書かれたとされ、旧約聖書の LXX とギリシャ語訳の新約聖書が収められている。「アレキサンドリア原典」タイプの聖書である。
4. Codex Alexandrinus は「A」つまり(02)で知られ、エジプトのアレキサンドリアで発見された紀元5世紀のギリシャ語原典である。
5. Codex Vaticanus は「B」つまり(03)で知られる。ローマのパチカン図書館で発見され、紀元4世紀中頃に書かれたとされている。旧約聖書の LXX とギリシャ語訳の新約聖書が収められている。「アレキサンドリア原典」タイプの聖書である。
6. Codex Ephraemi は「C」つまり(04)で知られ、一部が破損した紀元5世紀のギリシャ語原典である。
7. Codex Bezae は「D」つまり(05)で知られる紀元5世紀あるいは6世紀のギリシャ語原典である。いわゆる「西洋聖書」の代表である。付け加えられた事柄が多く、欽定訳聖書の編纂時に原典として使用されたギリシャ語訳聖書である。
8. 新約聖書の MSS はそれぞれ特徴を持つ3つ、あるいは可能であれば4つのグループに分けられる。
 - a. エジプトのアレキサンドリア原典

- (1) P⁷⁵、P⁶⁶(紀元前 200 年頃)。福音書群が収められている。
- (2) P⁴⁶(紀元前 225 年頃)。パウロの書簡群が収められている。
- (3) P⁷²(紀元前 225 年～250 年頃)。ペテロの書簡群とユダの手紙が収められている。
- (4) Codex B(紀元前 325 年頃)。Vaticanus と呼ばれ、旧・新約聖書全体が収められている。
- (5) このタイプの聖書からの Origen 引用
- (6) この聖書タイプの見られる他の MSS としては、C、L、W、33 がある。

b. 北アフリカの西洋聖書

- (1) 北アフリカの教父 Tertullian と Cyprian および古代ラテン語訳聖書からの引用
- (2) Irenaeus からの引用
- (3) Tatian と古代シリア語訳聖書からの引用
- (4) Codex D 「Bezae」はこの聖書タイプに倣っている。

c. コンスタンティノーブルの東ビザンティン聖書

- (1) この聖書タイプは 5300 件の MSS の 80% 以上に反映されている。
- (2) シリアのアンテオケの教父 Cappadoceans と Chrysostom と Therodoret による引用
- (3) Codex A。福音書群中のみ
- (4) Codex E(紀元8世紀)。新約聖書全体が収められている。

d. 4つめの考えられるタイプはパレスティナの「シーザー原典」である。

- (1) 主にマルコの福音書中にのみ見られる。
- (2) これの原典として使用されたのは P⁴⁵ と W である。

II. 「原典批評」とも呼ばれる「軽い批評」の問題と理論

A. 異本はどのようにして生まれたのか

1. 偶然の発生(発生の大多数を占める)

- a. 手で書き写す際の見落とし。類似する2つの語の読み取りを後回しにして、その2つの語の間にある全ての語を見落としてしまうこと(類似語誘因脱落)。
 - (1) 2文字の語あるいは句の見落とし(重字脱落)
 - (2) ギリシャ語原典の句あるいは行を誤って繰り返し書き写してしまうこと(重複誤写)

- b. 口述筆記によって書き写す際に聞き違いで綴りを間違えること(ギリシャ文字の η [エータ、イータ]を「イー」と聞き違えること)。このような綴りの間違いは音の似たギリシャ語の単語との意味や綴りの混同の誘因となる。

- c. 最古のギリシャ語原典には章あるいは節の分割がなく、句読点もわずかしかないかまたは全くなく、語間の分割もなかった。異なる箇所では文字と文字の間を分割して異なる語とすることは可能である。

2. 故意の(意図的な)発生

- a. 書き写される原典の文法形式の向上のために(原典の内容が)変更された。

- b. 書き写される原典と他の聖書原典との(内容の)一致を図るために(原典の内容が)変更された(言い換え文の調和)。
- c. 2つあるいはそれ以上の異本をつなぎあわせて一続きの聖書原典とするために(原典の内容が)変更された(異本合成)。
- d. 原典中に発見された問題の解決のために(原典の内容が)変更された(Iコリント 11: 27 と Iヨハネ 5: 7-8 を参照)。
- e. 原典の正しい解釈のためにある書記が行間に付け加えた、歴史的背景に関する情報を、その書記の書き写しの仕事を引き継いだ次の書記が原典の本文中に書き入れてしまったこと(ヨハネ 5: 4 を参照)。

B. 原典批評の基本原則(異本が存在する場合に本物の原典を判別するための論理的指針)

1. 最もごちない、つまり文法的に異和感のある原典が本物である可能性がある。
2. 最も短い原典が本物である可能性がある。
3. より古い原典は歴史的に(書かれた年代が)本物に近く、他の事柄も全て本物と同じであるのでより重要性が高い。
4. (他の聖書原典の発見された場所とは)地理的に離れた場所で発見された MSS は大半が本物であるといえる。
5. 教義的に弱い原典、特に異本についての神学的大議論、例えば Iヨハネ 5: 7-8 における三位一体の記述の多様性に関する原典はより本物とみなされている。
6. 他の異本の起源を最もよく説明しうる原典が本物である可能性がある。
7. 問題となるこれらの異本の様々な見解を調整するうえで助けとなる2つの引用
 - a. J. Harold Greenlee 著 *Introduction to New Testament Textual Criticism* の 68 ページには「議論が可能な原典にはクリスチャンの教義に固執しているものはない。従って新約聖書の研究者は自分が今研究している原典に神の啓示による本物の原典以上の正統性つまり教義的な強さを求めていることに気付かなければならない」とある。
 - b. W. A. Criswell 氏は *The Birmingham News* の Greg Garrison 氏との対談で自分は聖書中のいかなる啓示の言葉も信じないと、「必ずしも全ての言葉が幾世紀にもわたって現代まで翻訳者達によって明らかにされてきたわけではない」と述べている。Criswell 氏はまたこのように言っている「私は原典批評を大いに信じている。私が思うに、マルコの福音書 16章の後半は異端説である。それは神の啓示による記述ではなく、ただのでっちあげである。... それらの原典でその聖書箇所(16章)の記述を比べてみれば、マルコの福音書の結論がそのようには記されていないことに気付く。誰かがそれを付け加えたのだ...」。

SBC 無謬論者協会の代表も、「改ざん」はヨハネの福音書 5章のベテスダの池でのイエスについての記述においても明らかであると主張している。彼はまた、(イスカリオテの)ユダの自殺(マタイ 27章と使徒行伝 1章を参照)の2つの異なる記述について議論し、「それは単に自殺についての観点の違いである」と言っている。Criswell 氏

はそれに対して「それが聖書中にあるなら、それについての説明があるはずだ。そうするとユダの自殺についての記述が2つあることになる」と言っている。Criswell氏はさらにこのように言っている「原典批評はそれ自体素晴らしい科学である。それははかないものではない。それは場違いなものではない。それは壮大で中心的である...」。

Ⅲ. 原典の問題(原典批評)

A. さらなる読解のための推奨文献

1. R. H. Harrison 著 *Biblical Criticism: Historical, Literary and Textual*
2. Bruce M. Metzger 著 *The Text of the New Testament: Its Transmission, Corruption and Restroration*
3. J. Harold Greenlee 著 *Introduction to New Testament Textual Criticism*

補遺3 用語集

養子論 これはイエスと神性との関係についての古い考え方の一つである。この考え方の要旨は、イエスはあらゆる点で普通の人間であり、洗礼(マタイ3: 17、マルコ1: 11を参照)あるいは復活(ローマ1: 4を参照)の際に特別な意味で神の養子となられたということである。イエスはとても模範的な生活を送られたので、神は機会を見て(洗礼、復活)御自分の「御子」としてイエスを養子とされた(ローマ1: 4、ピリピ2: 9を参照)。これは初期教会と8世紀の少数派の意見であった。神が人となる(受肉)代わりにその逆のことが起こり、人が神となっているのだ。

神の御子でありすでにおられる神でいらっしゃるイエスが模範的な生活を送られたことに対してどのように賞賛されたかを言い表すことは難しい。もしイエスがすでに神でいらっしゃったなら、イエスはどのように賞賛されたのか。もしイエスがすでにおられる神としての栄光を受けられたなら、イエスはどのようにさらなる栄誉を受けられたのか。私達には理解が難しいが、父なる神は御自分の御意志の完全な成就という特別な意味でイエスに栄光を与えられたのである。

アレキサンドリア学派 この聖書解釈の方法は紀元2世紀にエジプトのアレキサンドリアで開発された。これはプラトンの弟子であったフィロの提唱した解釈の基本原則を用いている。これはしばしば寓話法と呼ばれる。これは宗教改革の時代まで教会内で影響力があった。その最も有力な擁護者は Origen とアウグスティヌスであった。Moises Silva 著 *Has The Church Mised The Bible?* (Academic 社が 1987 年刊)を見よ。

Alexandrinus エジプトのアレキサンドリアで発見された、この5世紀のギリシャ語原典は旧約聖書と聖書外典と新約聖書の大半から構成されている。これは現代の私達がギリシャ語の新約聖書の完全な書(マタイの福音書とヨハネの福音書とコリント人への手紙第二の一部を除く)の主な書として認めている書の一つである。この「A」と呼ばれる原典と「B」と呼ばれる原典(Vaticanus)の内容が一致する場合、これは多くの実例において大半の学者達から本物の原典とみなされる。

寓話 これは元々はアレキサンドリア学派のユダヤ教の中で生みだされ発展した聖書解釈の方法の一つである。この方法はアレキサンドリアのフィロによって普及した。この方法の主旨は聖書の歴史的背景と文脈を無視することによって読者の持つ文化あるいは哲学体系と聖句を関連づけることにある。この方法では各聖句の背後にある隠れた精神的意味が探られる。イエスがマタイ13章で、またパウロがガラテヤ4章で真理を伝えるために寓話を用いたことを認めなければならない。しかしこれ(真理を伝えるために寓話を用いたこと)は厳密には寓話の形ではなく予型論の形であった。

解釈辞典 これは新約聖書におけるギリシャ語のあらゆる形式を明らかにする研究道具の一種

である。これはギリシャ語の形式と基本的定義をギリシャ語のアルファベット順に収録したものである。これは、隔行訳との組み合わせによって、ギリシャ語を母語としない信徒が新約聖書におけるギリシャ語の文法の形式と統語法の形式を解析できるようにしている。

聖句の類似 これは、聖書の全ての書が神の啓示によって書かれ、互いに矛盾せず相補っているという見解を表現するために用いられる成句である。この前提を認めることは聖書原典の解釈において並列文を用いる際の基礎的事柄である。

不明瞭さ これは文書中に2つ以上の意味がある場合または2つ以上の事柄が同時に示されている場合に生じる不確かさを指している。ヨハネが意図的に不明瞭さ(二重定義)を用いている可能性がある。

神人同形説 「人間に関する性質を持つ」という意味を表すので、この用語は神に関して私達が用いる宗教的な言葉を表現している。この用語は人類を意味するギリシャ語の用語に由来する。この用語は、私達が神に関する事柄をまるで人間に関する事柄であるかのように言い表す用語である。神は人間に関する身体的、社会的、心理学的用語の中に表現されている(創世記 3: 8、I 列王記 22: 19-23 を参照)。もちろんこれは単なる類似である。しかし、私達を指す、人間に関する用語以外に、神に関して用いるのに適した用語はない。従って、私達が神に関して知っている事柄は、真理ではあるが限られている。

アンテオケ学派 この聖書解釈の方法は紀元3世紀のシリアのアンテオケで開発され、エジプトのアレキサンドリアで開発された寓話をもとにする方法に対抗する方法であった。この方法の要旨は聖書の歴史的意味に注目することであった。この方法では聖書が普通の人間について書かれた文学と解釈される。この学派は、キリストが2つの御性質をお持ちである(ネストリウス主義)のか、それとも1つの御性質をお持ちである(一人の人間でいらっしゃるのとともにお一人の神でいらっしゃる)のかについての論争を生んだ。この学派はローマカトリック教会から異端とみなされ、ペルシアに追放されたが、学説はわずかに重要性を持っていた。その聖書解釈上の基本原理は後にプロテスタントの古典的宗教改革者達(ルターとカルヴァン)の聖書解釈の原理となった。

対句 これはヘブル語の韻文(詩)の行間の関係について述べるために用いられる3つの叙述用語のうちの一つである。これは互いに反対の意味を持つ詩の行に関連がある(箴言 10: 1 と 15: 1 を参照)。

黙示文学 これはユダヤの主な、多分独特でさえある文学ジャンルである。これはユダヤが外部世界の勢力からの侵略と支配を受けた時代に用いられた、謎の意味不明なタイプの文学であった。この文学ではお一人の人間の姿をされた救いの神が世の出来事を創造されて支配され、そし

てイスラエルは神から特別な関心を持たれ保護されているとみなされている。この文学は神の特別な御業を通した究極の勝利を約束している。

この文学には多くの意味不明な用語が見られるのでとても象徴的で空想的な印象がある。この文学ではしばしば色、数字、映像、夢、天使の仲介、秘密の暗号となる用語、あるいは善と悪との間の明確な二元論によって真理が表現される。この文学ジャンルの例は、旧約聖書ではエゼキエル書(36~48章)、ダニエル書(7~12章)、ゼカリヤ書、新約聖書ではマタイの福音書24章、マルコの福音書13章、テサロニケ人への手紙第二の2章、黙示録である。

護教論者(護教学) これは「法的弁論」を意味するギリシャ語の語幹に由来する。これは、クリスチャンの信仰についての証拠と合理的な議論とを探索する神学の中の特殊な教義である。

A priori これは用語「前提」と本質的に同意語である。これは、真理であると仮定された、予め受け入れられた定義や原理や立場からの理由づけと関連がある。これは試されたり解析されたりすることなく受け入れられる事柄である。

アリウス主義 アリウスは紀元3世紀から4世紀初頭にかけてエジプトのアレキサンドリアの教会で長老をつとめた人物であった。彼はイエスがすでにおられた方ではあるが神ではいっしょやらない(父なる神とは同一の方ではいっしょやらない)と主張したが、これは多分箴言 8: 22-31 に基づいた見解であろう。彼は紀元 318 年から長年にわたってアレキサンドリアの主(司)教と論争を繰り広げた。アリウス主義は東方教会の公的な見解となった。紀元 325 年のニケーア公会議ではアリウス主義が非難され、御子イエスの神との同一性と神性が主張された。

アリストテレス 古代ギリシャの哲学者の一人であり、プラトンの弟子であり、アレキサンダー大王の師であった。彼の影響は現代でさえ現代の科学の多くの分野に及んでいる。これは彼が観察と分類を通して知見を強調したからである。これは科学的方法の教義の一つである。

自筆 これは聖書の原本に対してつけられる名である。これらの原本、つまり手書きの原稿は全て失なわれている。写本の写本だけが現存している。これをもとにヘブル語訳やギリシャ語訳やその他の古代語訳聖書の異本の多くが書かれた。

Bezae これは紀元6世紀のギリシャ語とラテン語の原典である。この原典の分類上の名は「D」である。この原典には福音書群と使徒行伝と一般的な使徒書簡のいくつかが収録されている。この原典の特徴は書記の付け加えた書き込みが多いことである。この原典は、欽定訳以降に伝統的に主な元本(翻訳のもとになる原典として用いられる聖書原典)として用いられているギリシャ語の原典「Textus Receptus」の元本となった。

偏見 これはある事柄あるいは見解に対する強い性向を表現するのに用いられる用語である。これは特定の事柄あるいは見解に関して公平性を保つことが不可能であるような心の態度である。これは偏った立場からの物の見方である。

聖書権威主義 この用語は非常に特別な意味で用いられている。これは原著者が自分の生きた時代の人々に語ったことの意味およびこの真理の私達の生きている時代への応用と定義されている。聖書権威主義は通常は聖書自体を私達の唯一の権威ある手引きと見る考え方と定義されている。しかし、現代の不適切な解釈を根拠として、私は聖書についてのそのような概念を、歴史的背景や文法構造に基づく教義によって解釈されるものとして限定的にとらえてきた。

正典 これは神の啓示によって書かれたと信じられている書を指して用いられる用語である。これは旧・新約聖書の両方を指している。

キリスト中心神学 これはイエスの中心性を表現するのに用いられる用語である。私はこの用語を、イエスは全ての聖なる者の主であるという概念と結びつけて考えている。旧約聖書はイエスがそのこと(イエスは全ての聖なる者の主であるということ)の成就であり最終目的でいらつしやることを指摘している(マタイ 5: 17-48)。

注解書 これは特殊な型の研究書である。これには聖書中の書の総合的な背景事項が記されている。従ってこれは聖書中の各書の意味することの説明を試みた書であるといえる。主に応用面について述べたものもあれば、より専門的に聖句を解説したものもある。これらの書は有用ではあるが、読者は自身の予備的研究を終えた後にこれらの書を読むべきである。その解説者の解釈は決して批判されることなしに受け入れられるべきではない。多くの場合、様々な神学的知見をもとにして数冊の注解書を比較することが有益となる。

コンコーダンス これは聖書研究の道具の一種である。これは旧・新約聖書中にある全ての用語のリストである。これは(1)特別な英語の用語の背後にあるヘブル語あるいはギリシャ語の用語の決定(2)同じヘブル語あるいはギリシャ語の用語が用いられている文の比較(3)同じ英語の用語に訳されている2つの相異なるヘブル語あるいはギリシャ語の用語が存在する箇所の検索(4)特定の書あるいは著者の特定の語の使用頻度の調査(5)読者が聖書中の聖句を見つける手助け(Walter Clark 著 *How to Use New Testament Greek Study Aids* の 54~55 ページ)に有用である。

死海文書 これは紀元 1947 年に死海付近で発見された、ヘブル語あるいはアラム語で書かれた一連の古代原典群である。それらの原典群は紀元 1 世紀のユダヤ教分派の経典であった。紀元 60 年代に古代ローマ帝国の支配による抑圧と暴動があったので、ユダヤ教分派の信徒はそれら

の原典群を陶器の壺に入れて密閉し、洞窟や土中の穴に隠した。それらの原典群は紀元1世紀のパレスティナの歴史背景を理解するうえで有用であり、マソラ原典が少なくとも紀元前数世紀までさかのぼる限り非常に正確であると明言している。それらの原典群は「DSS」と略記されている。

演繹法 これは一般的原理を理由付けのために特別に利用する、論理展開つまり理由付けの方法である。これは、観察により明らかとなった特定の事柄(事実)から一般的な結論(理論)を導く科学的方法を反映する帰納法の反対である。

弁証法 これは互いに矛盾あるいは逆説という緊張関係にあると思われる2つの事柄について、その2つの逆説の両方の立場を含んだ統一的な見解を見出すための理由付けの方法である。聖書の教義の多くには弁証法的な2つの事柄の対、例えば予定運命と自由意志、安全と忍耐、信仰と行い、決断力と弟子の身分、クリスチャンの自由とクリスチャンの責任、がある。

ディアスポラ これはパレスティナ在住のユダヤ人が約束の地の地理的境界外に住む他のユダヤ人を指して用いているギリシャ語の術語(専門用語)である。

Dynamic equivalent これは聖書翻訳の理論の一つである。聖書翻訳は、ある英語の用語を必ずヘブル語あるいはギリシャ語の用語にあてはめるという「逐語」対応から、元の用語あるいは成句の意味をあまり考慮せずに思想のみを翻訳する「言い換え」へと続く一連の行為と見ることができる。これらの2つの理論の間にあるのが、本物の原典(の内容)を尊重しながらも現代の文法形式や熟語に則して翻訳するという「dynamic equivalent」である。これらの翻訳理論については Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 35 ページと Robert Bratcher の *Introduction to the TEV* の中に十分な議論がある。

折衷主義 この用語は聖書批評との関連で用いられる。これは自筆の原典と内容の近い原典を様々なギリシャ語の原典から選び出す練習を指している。その選び出しの練習において、本物の原典つまり自筆の原典はいかなるグループのギリシャ語原典にも含まれないという考え方は除かれている。

聖書の自己解釈 これは聖書解釈とは反対のことである。聖書解釈が原著者の意図を「導き出す」ならば、この用語は部外者の思想あるいは意見を「導入する」ことを意味する。

語源学 これは語の本来の意味を確定しようと試みる用語研究の一分野である。これから語幹の意味や特別な用法は容易に明らかとなる。解釈においては語源よりむしろその語の現代における意味や用法が主に注目される。

聖書解釈 これはある特定の文章を解釈する練習を意味する術語(専門用語)である。これは歴史的背景や文脈や統語法や語の現代における意味をもとにして原著者の意図を理解するためにその文章が暗示する内容を「導き出す」ことを意味する。

ジャンル これは様々な文学のタイプを意味するフランス語の用語である。この用語の主な意味は様々な形をとる文章を共通の特徴を持つ範疇、例えば歴史物語、韻文(詩)、格言(ことわざ)、黙示文学、法律文書、に分類することである。

グノーシス主義 この異端説について私達が知っていることの多くは紀元2世紀に書かれた不可知論に関する書に由来している。しかし、その概念が始まったのは紀元1世紀(あるいはそれ以前)であった。

研究者の中には紀元2世紀の Valentius と Cerinthus のグノーシス主義の教義を(1)物と霊はどちらも永遠である(存在論的二元論)。物は悪であり、霊は善である。霊である神は悪い物の形成に直接関与することはできない(2)神と物の間にはエマンティオ[神からの流出物。eons。天使階層]がある。その最終つまり最下層のものは旧約聖書に見られる YHWH であり、それが宇宙(kosmos)を形造った(3)イエスは YHWH のようなエマンティオであるが、より大規模で、より真の神に近い。研究者の中にはイエスを最高位にある方だが神よりは下位で、受肉した神ではありえないとみなしている者もある(ヨハネ 1: 14 を参照)。イエスは霊的な幻影である[Iヨハネ 1: 1-3、4: 1-6 を参照](4)救いはイエスへの信仰を通してだけでなく、特別な人々だけが知る特別な知識を通して得られる。知識(パスワード)は天球を通るのに必要とされる。ユダヤの律法主義も神のもとへ近づくのに必要である、と述べている者もある。

グノーシス主義の偽教師達は2つの互いに対立する倫理体系を、つまり(1)ある人々にとっては、生活様式は救いと無関係である。それらの人々にとっては、救いと霊性は天球の天使階層(eons)を通して秘密の知識(パスワード)の中に要約される。(2)その他の人々にとっては、生活様式は救いに不可欠であると主張した。彼らは真の霊性の証拠としての禁欲生活を強調した。

聖書解釈学 これは聖書解釈の手助けとなる原理を意味する術語である。これは特別な指針と方法論の組み合わせである。聖書解釈学は通常2つの範疇、つまり一般原理と特殊原理に分かれる。これらは聖書中に見られる様々なタイプの文学に関連がある。各タイプ(ジャンル)の文学は独自の指針だけでなくいくつかの一般的仮定と解釈の手順も持っている。

強い批評 これは聖書中の特定の書の歴史的背景と文章構造に注目する聖書解釈の手順である。

熟語 この語は個々の用語の通常の意味とは無関係の特別な意味を持つ、種々の文化の中に見られる成句として用いられる。現代語の例としては「それはすごく良かった」とか「殺し文句ね」と

いう表現がある。聖書にもこの種の成句が見られる。

啓示 これは神が人類に語られている概念に与えられる名である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

帰納法 これは特定の事柄から全体的な事柄へと考えを進める論理学つまり理由付けの方法である。これは現代科学の実験的方法である。これはアリストテレスの研究方法の基礎である。

隔行訳 これは読者が自分にとって外国語である言語で書かれた聖書中の言葉の意味と構造を解析できるようにする研究道具の一種である。その聖書の元々の言語(読者にとって外国語である言語)の行のすぐ下に逐語レベルで英語訳の行が置かれている。この道具は「解釈辞典」と組み合わせるとヘブル語とギリシャ語の用語の形式と基本的定義を示すことができるようになる。

靈感 これは神が聖書の著者達に御自身の黙示を正確かつ明確に記録させることによって人類に語られる概念である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

記述のための言語 これは旧約聖書に書かれている熟語と関連させて用いられる。これは物事の五感への現れ方を通して私達の生きる世界を表現している。これは科学的な表現ではなく、そのようなこと(科学的な表現)を意図したものではなかった。

律法主義 この立場では規則や儀式が過剰に強調される。これは神に受け入れられることを目的とした規則正しい行いに依存する傾向がある。これは聖なる神と罪深い人類との契約の重要な特質を軽視して行いを重視する傾向がある。

逐語法 これはアンテオケで始まった、原典を中心にして歴史的に聖書を解釈する方法の別名である。これは、解釈では比喩的な言葉が認められていながらも実際には人の言葉の通常のよく知られた意味がもとになって解釈がなされていることを意味している。

文学ジャンル これは韻文(詩)や歴史物語のような、人が意志伝達的手段として用いる様々な方法を指している。文学タイプには全ての種類の文学に適用される一般原理に加えて各々独自の

特別な聖書解釈の手順がある。

文学単位 これは聖書中の書の思想の大きな分かれ目を指している。これはいくつかの節や段落や章で構成され得る。これはそれ自体が中心的な主題を持つまとまりである。

軽い批評 「聖書批評」を見よ。

原典 この用語はギリシャ語の新約聖書の様々な写本と関連がある。通常それらは(1)それらが書かれている紙材[パピルス、皮]または(2)書体(全て大文字あるいは流状)によって様々なタイプに分類される。それは「MS」(単数形)あるいは「MSS」(複数形)と略記されている。

マソラ聖書 これは紀元9世紀の旧約聖書のヘブル語の原典であり、ユダヤ教の学者達によって編纂され、母音記号と行外の注記が付け加えられている。これは現代の英訳の旧約聖書の正典となっている。この原典はヘブル語の MSS、特に死海文書のイザヤ書によって歴史的に正典と断定された。これは「MT」と略記されている。

換喩 これはある事物の名を用いて関連する他の事物について述べる比喩的表現である。例えば「やかんが沸いている」は現実には「やかんの中の水が沸いている」ことを意味する。

ムラトリー断片 これは新約聖書の正典目録である。これは紀元 200 年以前にローマで書かれた。これはプロテスタントの新約聖書と同じく 27 の書から構成されている。これは、古代ローマ帝国領内の諸地域の教会が4世紀の教会大会議以前に「事実上」正典を定めていたことをはっきりと示している。

自然の啓示 これは神の人への自己顕示(御自身を顕わされること)の一種である。これには自然の秩序(ローマ 1: 19-20)と道徳意識(ローマ 2: 14-15)が関係する。これは詩篇 19: 1-6 とローマ 1~2章で述べられている。これは、神が聖書に、そして究極的にナザレのイエスに特別に御自身を顕わされる特別な啓示とは異なる。

この神学的概念はクリスチャンの科学者達の間で起こっている「古い地球」運動(例えば Hugh

250

Ross の著書)によって再び強調されている。彼らはこの概念を用いて、全ての真理は神の真理であると主張している。自然は神についての知識への開かれた扉である。それは特別な啓示(聖書)とは異なる。この概念によって現代科学において自然の秩序を研究することができるようになった。これは現代西洋科学の世界を立証する素晴らしい新たな機会であると思う。

ネストリウス主義 ネストリウスは紀元5世紀のコンスタンティノーブルの総(大)司(主)教であった。

彼はシリアのアンテオケで(聖職者としての)訓練を受け、イエスが一人の人間とお一人の神の2つの性質をお持ちであると認めていた。この見解は、イエスが1つの性質をお持ちであるとするアレキサンドリアの正説を逸脱したものであった。ネストリウスの主な関心はマリアに与えられた「神の母」という称号にあった。ネストリウスはアンテオケで(聖職者としての)訓練を受けたことをアレキサンドリアの Cyril から非難され、破門された。アンテオケが歴史的背景と文法事項と文脈を手がかりに聖書の解釈を行う中心地であったのに対して、アレキサンドリアは第4の要素(寓話)を手がかりに聖書の解釈を行う中心地であった。結局、ネストリウスは聖職を剥奪されて追放された。

原著者 これは聖書の本物の著者つまり作者を指している。

パピルス これはエジプトの筆記用具の一種である。川岸に生えている葦で出来ている。ギリシャ語の新約聖書の最古の原典はこれの上に書かれた。

並列文 これは、聖書の全ての書は神から与えられたものであり、従ってそれ(聖書)自身を最も良く解釈し、逆説的な事実群を調停するものであるという概念である。これは不明瞭な文の解釈を試みる際にも有用である。これはまた、解読中の原典上の最も明確な文および手がかりとなるその他の全ての聖句を見出すのにも有用である。

言い換え これは聖書翻訳の理論の一つの名である。聖書翻訳は、ある英語の用語を必ずヘブル語あるいはギリシャ語の用語にあてはめるという「逐語」対応から、元の用語あるいは成句の意味をあまり考慮せずに思想のみを翻訳する「言い換え」へと続く一連の行為と見ることができる。これらの2つの理論の間にあるのが、本物の原典(の内容)を尊重しながらも現代の文法形式や熟語に則して翻訳するという「dynamic equivalent」である。これらの翻訳理論については Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 35 ページに十分な議論がある。

段落 これは散文中の解釈上の基本単位である。それには一つの中心的な考えとその発展とが見られる。その要旨に固執すれば多かれ少なかれ原著者の意図を見落としてしまうことになるだろう。

教区制 これは地域教会または地域文化の中に閉じ込められた偏見に関連がある。これは聖書の真理の文化を超えた性質あるいはその応用を認めない。

逆説 これは、一見矛盾しているように見え、互いに緊張状態にあるが、どちらも真実であるような事実群を指している。それらは互いに反対の立場から真実を述べることによって事実を構成している。聖書の真理の多くは逆説的な(弁証法的な)対によって表わされる。聖書の真理は単独

の星ではなく、星々が描く模様によりつくられる星座である。

プラトン 古代ギリシャの哲学者の一人であった。彼の哲学はエジプトのアレキサンドリアの学者達を通して、そして後にはアウグスティヌスを通して初期教会に大きな影響を与えた。彼は地上の万物は幻想的であり、靈的原型を単に模倣したに過ぎないと断定(仮定)した。神学者達は後にプラトンの「イデア」を靈的王国と同一視した。

前提 これは私達がある事柄について予め成している理解を指している。しばしば私達は聖書自体を調べる前に物事に対して意見や判断を成してしまう。この傾向は偏見や *a priori* 的立場や仮定や予備的理解としても知られている。

聖句引用による解釈法 これはその文章単位中の前後の文脈やより長い文脈を考慮せずに聖書の一節を引用することによって聖書を解釈する練習である。これは聖書の一節から原著者の意図を排除する行為であり、通常は聖書の権威を主張しながらも個人的見解を裏付けようと試みることを指している。

ラビ主導のユダヤ教 このユダヤ人の生活様式はバビロン脱出(紀元前 586~538 年)で始まった。司祭達の影響力が大きく、また神殿が破壊されたので、地域のシナゴーク(礼拝堂)がユダヤ人の生活の中心となった。地域におけるこれらのユダヤ人の文化と交流と礼拝と聖書研究の中心地は国家の宗教生活の中心となった。イエスの時代にはこの「書記の宗教」は司祭の宗教の対極にあった。紀元 70 年のエルサレム陥落の時、パリサイ人を中心とする書記団の見解がユダヤ人の宗教生活の方向性を支配していた。その見解の特徴は口伝の伝統(タルムード)の中に説明されているようなトーラの実践的かつ法的な解釈にある。

黙示 これは神が人類に語られている概念に与えられる名である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

セム語領域 これはある語に関連する意味の全てを指している。これはある語が様々な文脈中で表す、それぞれ異なった意味である。

セプトウアギンタ これはヘブル語の旧約聖書のギリシャ語訳本に与えられる名である。伝説によればこの原典はユダヤ教の学者 70 名がエジプトのアレキサンドリア図書館で 70 日間で編纂した。伝説にある出来事の年代は紀元前 250 年頃である(現実には完成までにおそらく 100 年以上を要

したようである)。この訳本は(1)ヘブル語のマソラ原典との比較に必要な古代の原典として用いるにふさわしい(2)紀元前3世紀および2世紀にユダヤ人がどのように旧約聖書を解釈していたかを知る手がかりとなる(3)イエスの拒絶の前にユダヤ人がメシアについてどのような理解をしていたかを知る手がかりとなる、という理由で重要である。この原典は「LXX」と略記されている。

Sinaiticus これは紀元4世紀のギリシャ語の原典である。これはドイツの学者 Tischendorf によってシナイ山の伝説の場所 Jebel Musa の聖 Catherine 修道院で発見された。この原典は「アレフ[^α]」と呼ばれるヘブル語のアルファベットの第一の文字によって分類上の名が付けられている。この原典には旧・新約聖書が全て収録されている。この原典は私達が最古のアンシアルMSSとみなしている原典の一つである。

霊化 この用語は文の歴史的ならびに文学的内容を取り除いて他の判断基準に基づいてその文を解釈するという目的で寓話(たとえ話)を用いることと同じ意味を持つ。

同義語 これは(現実には意味が互いに全く同じセム語の2つの用語はないが)意味が互いに全く同じかまたはとてもよく似ている用語群を指している。それらは互いにとても深い関係があるので一つの文の中で意味を損なうことなく置き換えが可能である。これはヘブル語の詩の対句法の3つの様式の一つにおいても用いられている。この意味でこれは詩において同じ真理を表す2つの行を指している(詩篇 103: 3 を参照)。

統語法 これは文の構造を指すギリシャ語の用語である。これはいくつかの文の断片を組み合わせることで一つの考えとして完成させる方法と関連がある。

統語 これはヘブル語の韻文(詩)のタイプと関連のある3つの用語のうちの一つである。この用語は互いに意味を増し加えるように、時に「最高潮」と呼ばれる状態となるように並んで詩を構成してゆく韻つまり行を指している。

組織神学 これは聖書中の真理を統一的かつ合理的に関連づけようと試みる解釈の場である。これは範疇(神、人、罪、救い、など)によって、単に歴史的というよりはむしろ論理的に表現されたクリスチャン神学である。

タルムード これはユダヤの口伝の伝統を集めたものの名称である。ユダヤ人はこれを神がシナイ山でモーセに口頭で与えられたものだとしている。事実、これはユダヤの教師達が長年にわたって集めた知恵であることが明らかとなっている。書物の形をとるタルムードは2つ、つまりバビロニア版と、それよりも短く未完のパレスティナ版がある。

聖書批評 これは聖書原典の研究である。本物の聖書原典は現存せず、代わりに互いに内容の異なる写本が現存しているだけであるので、聖書批評は必要である。これは異本についての説明を行い、自筆の旧・新約聖書の本来の内容に近づけようと試みている。これはしばしば「軽い批評」と呼ばれている。

Textus Receptus これは紀元 1633 年に編纂されたギリシャ語の新約聖書の Elzevir 版の名である。この聖書は少し後の時代のギリシャ語の原典およびエラスムス(紀元 1510~1535 年編纂)と Stephanus(紀元 1546~1559 年編纂)と Elzevir(紀元 1624~1678 年編纂)によるラテン語版聖書から編纂されたギリシャ語の新約聖書である。A. T. Robertson は自著 *An Introduction to the Textual Criticism of the New Testament* の 27 ページで「ビザンティン聖書は実質上 Textus Receptus である」と言っている。ビザンティン聖書は3つの古代ギリシャ語原典群(西方原典とアレキサンドリア原典とビザンティン原典)の中で最も価値が低い。幾世紀にもわたって手書きで写されたためにこの聖書には累積的な誤りが見られる。しかし、A. T. Robertson はこのようにも言っている「Textus Receptus は我々にとって十分な正確性を保った聖書である」(自著 *An Introduction to the Textual Criticism of the New Testament* の 21 ページ)。このギリシャ語の原典について行なわれた書写の伝統(特に紀元 1522 年のエラスムスのラテン語版聖書の第3版)は紀元 1611 年編纂の欽定訳において編纂の基礎となった。

トーラ これは「教え」を意味するヘブル語の用語である。これはモーセの著書(創世記から申命記まで)の公的な表題となった。これはユダヤ人にとってはヘブル語の正典のうちで最も権威ある書のグループである。

予型論 これは解釈の特殊な型である。通常これには、ある類似した象徴を用いて旧約聖書の文中で見出された新約聖書の真理が関与している。この種の聖書解釈学はアレキサンドリア学派の方法論の要点であった。この種の聖書解釈法は濫用されているので、この方法は新約聖書中に記されている特殊な事例の解釈のみに用いられるべきである。

Vaticanus これは紀元4世紀のギリシャ語の原典である。この原典はバチカン図書館で発見された。元々この原典には旧約聖書と聖書外典と新約聖書が全て収録されていた。しかし、いくつかの書(創世記、詩篇、ヘブル人への手紙、教書群、ピレモンの手紙、黙示録)が失われた。この原典は自筆の本物の原典を特定するうえでとても有用な原典である。この原典は大文字「B」によって分類上の名が付けられている。

ウルガタ聖書 これは Jerome によりラテン語に訳された聖書の訳本の名である。これはローマカトリック教会によって正式訳つまり「一般」訳聖書とされた。このラテン語訳は紀元 380 年代になされた。

知恵の書 これは古代近東地域で一般的な文学ジャンルであった(現代世界にもある)。実質上これは、幸運にも詩や諺や随筆に慣れ親しんできた新しい世代に指針を与えようという試みである。これは集団社会に対してよりも個人に対して語られる言葉である。これは歴史を暗示させるためには用いられず、人生経験と観察に基づいている。聖書ではヨブ記から雅歌までが YHWH の御臨在と礼拝を推測しているが、この宗教的世界観は全ての時代の全ての人の経験において明らかではない。

一つの文学ジャンルとしてはこれは一般的真理を述べている。しかし、この文学ジャンルを全ての特別な状況において用いることはできない。これらは必ずしも個々の状況の全てに適用されることはない一般的な記述である。

これらの賢人は敢えて人生の難問を投げかける。しばしば彼らは伝統的な宗教観に挑戦する(ヨブ記と伝道者の書)。彼らは人生の悲劇についての(問題への)安易な答えにバランスと緊張とをもたらす。

世界図と世界観 これらは対をなす用語である。これらはどちらも創造に関連する哲学的概念である。用語「世界図」は「どのように」創造されたかを指し、「世界観」は「誰が」創造したかに関連している。これらの用語は、どのように創造されたかではなく誰が創造したかを主に述べている創世記の1~2章の解釈に関連がある。

YHWH これは旧約聖書における神の契約の御名である。これは出エジプト 3: 14 で初めて登場する。これはヘブル語の用語「ある」の使役形である。ユダヤ人はこの御名を軽い気持ちで呼んでしまうことを恐れて、「主」を意味するヘブル語の用語 *Adonai* をその代わりに用いた。この契約の御名はこのようにして英語に訳された。

補遺4 学説についてのコメント

私は信仰あるいは信条に関するコメントを特には厭わない。私は聖書自体についての発言を好む。しかし私は、信仰に関するコメントが、私と面識のない人々に私の学説的見解を明らかにする方法を示すであろうことはわかっている。神学的な誤りや詐欺があまりにも多い現代において、私の神学的見解を短くまとめると以下ようになる。

1. 聖書は新・旧約ともに、神により啓示された、誤りのない、権威ある、永遠の神のお言葉である。それは超自然的導きのもとに人類によって記された神の自己啓示である。それは私達にとって、神と神のご目的についての明白な真理の源である。それはまた信仰と神の教会の実践の源である。
2. ただおひとりの、永遠で創造主で救い主でいらっしゃる神がおられる。神は全ての見えるものと見えないものの創造主でいらっしゃる。神は公平で義なる方でもいらっしゃるが、愛し慈む存在としてご自身を現わされた。神は3つの異なる人格、つまり父なる神と御子と聖霊、現実には互いに別な存在であるが本質的には同じ存在、としてご自身を現わされた。
3. 神はご自分の世界を積極的に支配しておられる。ご自分の造られたものについての永遠で不変の計画と、人間ひとりひとりに自由意志を許すという計画がある。神の知識とお許しがなければ何事も起きないが、神は天使と人間に個人的な選択をお許しになった。イエスは「父」に選ばれた方で、万物はイエスによって確実に選ばれる。神による出来事の予知は、人間が予め決めた計画とそんなに違うものではない。私達は皆、自分達の考えと行動に責任がある。
4. 人類は、神のお姿に造られて罪のないものであったにもかかわらず、神に対して反逆することを選んだ。超自然的な代理者によって誘惑されたとはいえ、アダムとエバは自分達の意図的な自己中心さに責任があった。彼らの反逆は人類と被造物に影響を与えている。私達は皆、自分達アダムと同じ境遇にあることと自分達の意図的な反逆に対して、神の慈みと恵みを必要としている。
5. 墮落した人類に、神は赦しと(ご自分との関係の)回復の手段を与えられた。神の一人子イエス・キリストは人間となられ、罪なき人生を送られ、私達の身代わりとなって死ぬことによって、人類の罪を贖われた。イエスは神との交わりの回復のための唯一の方法でいらっしゃる。イエスの成し遂げられた御業に基づく信仰を通しての手段以外に救いの手段はない。
6. 私達ひとりひとり個人的に、イエスによる神の赦しと回復のお申し出を受けなければならぬ。これはイエスを通した神のお約束を自分の意志で信じることと、自分の意志で既知の罪から離れることにより達成される。
7. 私達は皆、キリストへの信仰と罪からの悔い改めに基づいて、完全に赦され回復されている。しかし、この新しい関係の事実は、変わった、そして変わりつつある生活の中に見られる。人類についての神の最終目的は、いつの日か来る天国であるだけでなく、今私達がキリストの

ようになることでもある。本当に救われた人々は、時々罪を犯してしまうとはいえ、生涯を通じて信仰を持ち続け、悔い改め続ける。

8. 聖霊は「もう一人のイエス」でいらっしゃる。聖霊は、失われた人々をキリストのもとに導き、救われた人々がキリストのようになってゆくのを助けるために世に存在される。聖霊の賜物は救いのときに与えられる。その賜物はイエスのお体の中で分けられたイエスの命と(神の子としての)権威、そして教会である。本質的にイエスのご態度とご意志であるこれらの賜物は御霊の実によって与えられる必要がある。聖霊は聖書の時代と同じように私達の生きるこの時代にも生きておられるのだ。
9. 父なる神は、復活されたイエス・キリストに万物の裁きを任されている。イエスは全ての人を裁くために地上に戻ってこられることになっている。イエスを信じ、子羊の書にその名が記されている人々は、イエスの再来のときに永遠に栄光を受ける体を頂くことになる。彼らはイエスとともに永遠に生きるだろう。しかし、神の真理への応答を拒む人々は三位一体の神との交わりの楽しみから永遠に引き離されることになる。彼らは悪魔とその天使達とともに懲らしめられるだろう。

これは確かに完全ではないし一貫していないが、私はそれがあなた(読者各位)に、私の心にある神学的想いを伝えることを望んでいる。私はこのような言い方を好む:

「本質には統一を、外辺には自由を、万物に愛を」